

ドラゴンクエストアリア —忘却の聖少女—

朝名霧

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

一人の少女剣士アリアを主人公として、冒険をメインに描いた物語です。

歴代ドラゴンクエストの世界観などを用いて構成された『完全オリジナルストーリー』です。

タイトル横の『★』マークは挿絵付き、『◆』マークはキャラクターデータ付きです。

目次

プロローグ	1
第零話 魔天の子	3
ヴェストガル大陸編	
第一話 廻りだす運命の歯車 『★』	5
第二話 アリアはただ戦う	14
第三話 聖少女の覚醒	19
第四話 旅立ちへの試練	25
第五話 いざ、試練の塔へ	32
第六話 勝利を掴み取れ	39
第七話 グランダリオンの王女	44
第八話 ルイーダの酒場	50
第九話 アリアと王女の重なる過去	56
第十話 不穏なる洗礼の儀 『◆』	64
第十一話 現実と非情	69
第十二話 二人の魔法剣	75
第十三話 ルイの決意 『★』『◆』	82
第十四話 出発前夜	89
第十五話 これこそ王女の本領発揮	94
第十六話 船上にて	100
第十七話 生命の鼓動を再び	108
エトスン大陸編	
第十八話 新たなる気持ち	116
第十九話 ジャーレの村にて 『★』	122

第二十話	ただ、孤独を救うために	130
第二十一話	いざ、突入!	138
第二十二話	煌めく指輪 『◆』	144
第二十三話	神速の矢	149
第二十四話	交錯のミストラル	158
第二十五話	ミスティアの真意	165
第二十六話	血塗られし歴史	170
■ ■ なる存在 『★』		177
第二十七話	認められたい心	179
第二十八話	霊峰の麓街メンデイル	185
第二十九話	執念	190
第三十話	登山前夜 『◆』	196
第三十一話	いざ、霊峰ウインディアへ	201
第三十二話	暗躍する者	207
第三十三話	更に暗躍する者	212
第三十四話	火に油	218
異端の妖精族		225
第三十五話	もう一つの世界樹	231
第三十六話	救われた命	235
第三十七話	妙案	240
第三十八話	問われし覚悟	245
第三十九話	バミラン潜入 『◆』	250

プロローグ

三の種族が生きる、三の世界があった。

其は、蒼い海が澄み渡った地上界に住みし人間族。

この世界を分かつは、護られし四の源。

——大いなる地が根付きし『ヴェストガル』——

——優雅なる風と豊かな水育む『エトスン』——

——血すらも凍てつく氷と雪に覆われし『ノアニエル』——

——荒れ狂う炎と砂が舞いし『スルアース』——

其は、地の底に深くまどろむ魔界に住む魔族。

この世界を分かつは、七の本能。

——傲慢が蔓延りし『プライディア』——

——怠惰に沈み切った『スロウシア』——

——色欲が司りし『ラストティア』——

——嫉妬で塗り固められし『エンヴィア』——

——憤怒が逆巻きし『ラーシア』——

——強欲が求められし『グリーディア』——

——暴食を命じられし『グラトニア』——

其は、遙か空の彼方に浮かぶ天界に住む天竜族。

この世界、決して分かつ事なき一の理。

——悠久の彼方に浮かびし『アルデリット』——

三の世界は、『天』のとある意思の下に創られたとされ、それぞれが互いの道を歩むとして当初は期待を馳せていた。

だが、所詮は根に秘められた想いが違う種族。そんな『天』の理想は長く続く筈もなかった。

光無き世界、『魔界』の民が渦巻く怨念は底知れず、それによって巻き起こった遙か昔から続く天竜族と魔族の争いは留まる事を知らず、狭間に位置する『地上界』と人間族をも巻き込みながらも争いは続いていく。

そんな不条理な運命を背負った地上界で生きる、自らの出生と過去

を知らない一人の少女『アリア』から、物語の歯車は唐突に回り出す。彼女もまたその戦禍に巻き込まれている一人に過ぎなく、騎士生として通う魔法騎士学園ダーマから始まった一つの戦いは、心も体も実り切らない少女ながらにして巻き込まれる事になってしまった。

しかし、これこそが彼女にとって全てのきつかけとなり、いつしか世界の果てへと辿りつかせる事になるとはこの世の誰もが思っていなかった。

アリアの原点は、物心つく前に亡くしてしまった『母からの遺言』だった。

過去を忘れた少女の根底にある、一つだけ残滓として残った一片の言葉。

『いつか自分と向き合う時が来たら、世界をその目で見てほしい』と、その一言だけを母はアリアの胸に深く刻み付けていた。

アリアが母の言葉だけを頼りに旅をし、仲間と出会い、戦いを経た末に見つけるモノは何なのか。

そして全てを知った時、世界の命運とどう向き合うのか。

忘却の彼方に消え去ったアリアの記憶を求める旅が、静かに幕を開ける。

第零話 魔天の子

空の果てには竜が雄々しく羽ばたき、地の底では魔が忌まわしくうごめく。

どちらも遥か昔から相容れぬ存在として君臨しているこの世界では、幾度となく争いが繰り広げられてきた。

そしてその中でも、後に魔天戦争と呼ばれるようになった大きな戦いは『二人の子』を産み落とす事になる。

一人目は魔の血を強く受け継ぐ男の子として。

二人目は天の血を強く受け継ぐ女の子として。

二人はこれからの世を大きく変える『魔天の子』として世界の頂点に立つ事を『大魔王』は確信していた。

だがそれを産んだ『母』は違った。

呪われし運命にあるこの二人だけは決して共に寄り添うべきではないと、二人目が産まれてから5年程経ったある日、その女の子の手を引いて逃げ出したのだ。

大魔王の城から抜け出す事は叶ったものの、当然追っ手は必死だった。

大魔王曰く、あれは今後二度と生まれる事のないであろう究極の子。光り輝く巨大な宝石をみすみす逃がしてなるものかと、あの手この手を尽くして子を抱いた母を追った。

母も母で、いつか世界を崩壊させてしまうかもしれないこの子を魔の手に渡すなど絶対にさせてはなるまいと、死にもの狂いだっただ。

なんとか地の底からの手先を振り切って目的の場所へと辿り着くと、そこからは光が差し込んでいた。

母は、天と地をつなぐ唯一の希望の架け橋を見つけたのだ。

やっとの思いで光を目指して登り切り、踏み入れた大地は、とても

涼しく穏やかだった。

辺りを見回すとここは小さな島である事が分かった。そしてすぐ近くには、この地を見守る人間なのだろうか、屈強そうな装備に身を包むそれはまさしく衛兵だった。

母は気を抜けば途絶えてしまいそうな風前の灯でもあるわずかな命をかりうじて引きずり、兵士に話しかけた。

兵士は二人の姿を見るや驚いてしまった。

だが母の傍らにはまだ年端もいかない小さな子が心配そうに見守るも、もはや虫の息である様子にただならぬ事と兵士は悟ったのか、すぐさまここから一番近い別の島の小さな村にまで連れて行った。

着いた場所は、エルフが住まう小さな村だった。聖なる加護に満ち溢れ、邪な気配など微塵も感じさせなかった母は、ようやく安心することができた。

——そこまでが、母の限界だった。

やがて一人の女性に目をつけた母は、彼女もまた一人の少年の母なのであろう、純潔なエルフとして相応しい女性に母はこう託した。

『勝手極まりないのは百も承知。だけどどうか、この子を守り、一人の人間として育ててほしい。そしていつの日か自分の過去と向き合う時が来たら、どうか強く心を持って、ありのままの世界をその目で見てほしい』と。

それが母としての最期の遺言だった。

……それから時はあつという間に過ぎ去る。

幼子だった女の子は十年の時を経ると、身も心も立派に成長を遂げていた。

ヴェストガル大陸編

第一話 廻りだす運命の歯車 『★』

魔法騎士神殿学園ダーマが魔物襲撃を受けたのは、あまりに突然だった。

学園の周辺警備をする一人の兵がなんとなく遠くに見える山々の景色を眺めていた時、異変に気付いたのだ。

始めは山の頂から無数の鳥が群れをなしてこちらに向かってきている、といった認識に過ぎなかった。

だがそれは次第に影と形を大きくさせ、よくよく見ると鳥などではなく、かといって普通の動物等とは絶対に違う異形の群れ。一言で表すならば『モンスター』だった。

すぐさま警備兵は駆け足で報告に向かった。

廊下をもがきながらみつももなく走る様に、生徒や教師が何事かと振り返るがそんな事など気にしていられる余裕もない。

兵士「エマリー学園長、大変です！ ま、魔物の群れがこちらに！」
彼の表情と焦りを見た『学園長』は、事の重大さにすぐ気づいた。
エマリー「……グランダリオン帝国からの応援は？」

兵士「緊急魔法通信は送りましたが、どれだけ早く見ても日没間近だと思えます！」

彼女は部屋に添えられた時計を見た。今はまだ正午を過ぎたばかり。迎撃のみで凌いで応援を待つには少々耐え難い時間であった。

腰まで伸びた金色の髪をせわしなく靡かせながら、施設の長としての風格ある瞳を輝かせて各教師や兵に指示を飛ばす。そして、

エマリー「すぐさま封魔呪文『トラマナール』発動の準備に取り掛かるわ！」

時は、ダーマが襲撃を受けようとする数刻前にまで遡る。

この場所は人間達が住む世界、『地上界』のとある片隅に存在する一

つの学園だった。

世界からの若者が集う場所ともされ、魔法と騎士の両方の面での育成を目的とした国の管轄する育成学園である。

後に『魔天戦争』と名付けられた長きに渡って続いた天界と魔界の争いは、現代になってようやく一時の終わりを告げる。

——しかし、未だその根底には魔界の底知れぬ野望が渦巻いていとされ、地上界では穏やかさを取り戻したとは謳われつつも、その実では膠着状態が依然として続いているとも影では囁かれ、果たしてどれが真相なのかを知る者はいない。

そんな大規模な争いが起こる前から板挟みの立場に置かれてる地上においても、「自分の身は自分で護り、かつ鍛えねばと地上に明日はない」と、とある一人の人間が宣言した事から全てが始まり、後世に繋がる幾多もの戦士を今現在も輩出し続けているのが『魔法騎士学園ダーマ』であった。

時刻は間もなく正午を迎える頃。

多くの生徒や教師達が学園内を闊歩する中で、教室の一角で今現在において授業を受けている真つ最中の生徒達も当然多くいる。

一つの教室内には数十人程が集まり、己の肉体を武器にした白兵戦を主な目的とする『騎士科』の生徒。あらゆる魔法の知識を修得し、呪文の行使を目的とする『魔法科』の生徒。勿論一般の学園としての側面も持ち合わせており、一般の教養を身に着ける為に入った『普通科』の生徒が、それぞれの目指したい分野に励むべく今日もダーマの生徒は授業を受ける。

教壇に立つ教師の説明を各々熱心に聞いて書類に書き留める生徒もいれば、窓の外に目を向けて呆けている生徒もいたり、或いは授業とは全く関係のなさそうな本に読みふけてしまい、すっかり怠ける生徒もいたり十人十色だった。

当然、教師とて皆が真面目に聞いてくれるなど思ってもいない。万が一全員が集中して聞き、授業に取り組んでいる光景を目の当たりにした日には明日は槍でも振って来るのではないかと思つたとしても、別段おかしくはないだろう。

事実、結果として今日も『予想通り』になる。

教室の最も窓際の後ろから二番目の席。その場所で今なお机に突っ伏して豪快に眠り、夢の世界に旅立っている最中の、栗色の髪の『女生徒』がいたからだ。

『鋼の鎧』と呼ばれるそれは戦闘面に特化させながらも、彼女のへそを惜しみなく曝け出し柔らかな二の腕を大胆に見せる、比較的露出度の高い防具だった。

そんな教室中の男性の目を惹かせるような格好でありながらも、全く意に介す事無く『ひたすら眠る』彼女に対し、丁度その真後ろに座っていたダーマ学園の制服を着た『普通科』の女生徒も心配そうな目で見つめる。

が、当然察する筈もなく、状況は依然として変わらないまま。

その太々しいとも取れる彼女の寝姿に痺れを切らしたのか、教科書を片手に読みながらも説明をしていた男の教師が視線を合わせ、遂に歩み寄ろうとする。

——が、そこは彼女の運が勝った。終業を報せるベルが鳴り響いたのだ。

教師は悔し気に舌打ちをしながらも、早々に教室から出て行ってしまった。

そんな後ろでハラハラ見守っていた生徒の事情や教師の心情など、察しないままに清々しくうんと背伸びして起き上がる。

「やっとなら起きたのー？ 後ろの私もなんか言われないかと思ってドキドキしてたんだからー……」

「あはは、ごめんごめん。戦闘実習になるとつい張り切りすぎちゃって……。次からはちゃんと起きてるよ！」

「そのセリフももう何回目なんだかね……。じゃお昼だから私も行ってくるね」

「うん、ありがとう！」

教室を見渡すと、他の生徒達も大分外に出払っていたようだった。それと同時に腹部から『空腹のサイン』が鳴り響く事であろうやく、彼女も外に向けて歩き出す。

「食べ過ぎもよくないしなあ……。サンドイッチと他になんかあれば十分かな？」

そんな事をぼやきながらも、購買に通じる廊下を歩いていたら時だった。

「あ……。あのっ！」

突如斜め前から声をかけられた彼女は声の主に見線をやると、この学園の制服に身を包んだ女子生徒が数人立っていたのに気付いた。

「その着ている『鋼の鎧』見て、もしかしてっと思っただんですけど……。一か月前の総合武術大会で優勝した『騎士科のあの方』ですよ？ よ、よかったら……。握手してくれませんか！」

「……。え？ うん私なんかでよければ……」

頬を真っ赤に染めながらも、たどたどしく握手を求めるとは正に恋する乙女そのものであり、握手を終えた女子生徒はあまりにも紅潮しすぎて卒倒しそうな勢いだった。

「次私もお願います！ 制服着てるの見れば分かると思うんですけど、私達みんな『普通科』に所属している普通の人ばかりなんで、すっごい尊敬してるんです！」

「騎士科か魔法科に入ってる生徒じゃないと、防具の着用ができないんだもんね。……。でもさ、私も騎士科に入って四年経って卒業も近いけど、やっぱり普通が一番だなーって思うよ。じゃ、そろそろ行くね！」

背中に黄色い声援を浴びながら、半ば逃げるようにその場から立ち去る少女。その表情は嬉しさ半面、恥ずかしさ半面に満ちていた。

その後購買で人混みをかき分けながらもなんとか目的のパンを買い終える事ができた少女は、人気の比較的少ない校舎裏にまで移動し、添えられたベンチに腰掛けるとようやく一息つく事ができたのだった。

「やっぱり人気のパンは売り切れちゃってたけど……。食べられるだけ良しとしないとね」

綺麗に三角に整ったサンドイッチを両手で頬張ると、空腹が満たされる瞬間に思わず笑みが零れ、舌鼓を打つ。

「武術大会優勝に、卒業も近いなあ……。なんだか自分の事じゃないみたい」

「——残念なんだけど本当なんだよね」
もう一人の声に、はっと少女が気付く。

見上げた先にいたのは——緑色の髪をした『エルフの少年』だった。尖った耳や若干色素の薄めな肌は人間と近い雰囲気を漂わせながらも、根本的に種の異なる存在である事を窺わせる。そんな彼も手に持っていたのはごく普通のパンで、少女同様に食事をこれから済ませる所だったのだろう。

「ごめんねーお腹空いてたから先に食べちゃってるよ」

「別に気にしなくてもいいよ。そこまで気を遣われるとかえって居辛いしね」

「ありがと。……ところで、その着てる『みかわしの服』だっけ？
なんだかいつもより綺麗だね。最近お手入れでもしたの？」

「僕も同じく卒業が近いからね。水ぼらしい格好もしたくないし、一度最初から手入れし直したんだ」

「そっかあ。……ねね、ちよつと改めて聞きたい事があるんだけどいい？」

「どうしたんだい、藪から棒に」

少年もパンを口に運びもぐもぐと頬を動かしながら、勝手知ったる仲といった感じのままに、同じベンチに腰掛ける。

対する少女はというと、校舎の奥に視線を真つすぐに据えままだった。

「私、ダーマを卒業したら『ここを離れる』って前に言ったけどもさ、
……本当についてくる気なの？」

「ああ、その事ね……」

そう少女が問いただと、エルフの少年は相変わらず咀嚼しながらも少しだけ上を向いて何かを考える。

空を仰ぎ、じつと見つめる少年が何を思っているのかは少女は知る術はなかったが、パンを喉の奥に流し込むと、やがて静かに口を開く。

「まあ僕もダーマから出た後の事もあまり考えてなかったしさ。村

に戻って元の生活を送るのが無難なのかなっては今でも思ってる、けど……」

「……けど?」

「十年だよね。ある日、君が僕の村に来て知り合ってから今に至るまでね。それから色んな事があった。一緒に狩りに出かけたリ、ふざけたり、怒られたりもして」

「うん。……そうだね」

「正直『旅に出たい』だなんて最初聞いた時は正気なのかなって思ったけど、必死に強くなろうとしてる姿を間近で見ている内に、本気なんだなって最近ようやく思えて来たから……なのかな?」

「強くなるうだなんて思った事は、自分の中ではそこまで思ってたなかつたかな。ただ『お母さんの最期の言葉』の意味を考えたら、自然と自分をもっと磨かなきゃって感じて……」

「母の言葉、か……」

そこまで言うと、会話が続かなくなり二人とも押し黙ってしまった。手に持っていたパンも二人とも既に食べ終わってしまった、エルフの少年は再びどことなく空を見続けるのだった。

「……相変わらず『昔の記憶』はさっぱりなのかい?」

「うん……。『いつか自分の目で世界を見なさい』って言葉以外は何も……」

「そっか。……しかし今更だけど君も数奇というか、変わった信念を持つてるよね。いくら母親の遺言とは言っても、その一言だけでそこまで突き動かされるなんてね」

「あはは、自分でも正直おかしいとは思ってるんだけどもね。でもお母さんの言葉を思い出したり、夢に出てくる度に『やらなくちゃ』って気持ちがい膨らんじやって……」

「旅をしたっていう気持ちは、今でも変わらない?」

「——変わらない。ダーマに来た時からずっと」

少女は真つすぐな瞳で答えた。その心には一片の迷いもなく、ただ純粹にそうしたいと言う想いだけが今の少女を突き動かしていた。

そして、その決意を改めて知った少年はベンチからすつと立ち上が

ると、少女に向かって手を差し伸べる。

「じゃあさ、一人で旅するのもアレだし、僕もついていくさ」

「……え？」

少女はその手と柔らかな笑みに、ただ呆気に取られるしかなかった。そんな彼女の呆けた顔を気にする事無く更に口を開く。

「いくら戦いに関しては引けを取らないって言ったって、実際旅に出るとなると他の細かい部分は中々一人じゃカバーし切れないでしょ？ だから、僕がその辺はなんとかして上げるからさ」

「そ、そんな……！ これは私だけの問題なんだから、そこまでしてもらわなくて……！」

思いがけない彼の答えだったのか少女は無意識に立ち上がってしまいが、その後結局どうしたらいいのか分からず、ただ困惑するだけだった。

「料理得意だったっけ？ 旅に必要な道具の管理とかできる？ 旅をしたら野営だつてする事があるだろうし、全部自分一人でこなせる？ 他にも不得意な面がいっぱいあると少なくとも僕は思ってるけど？」

「それは……。全部、当たってるよ……」

「ほら、見た事か」

「——でも！ それでも、一応私達は本来アカの他人なんだからさ、そこまでしてもらおう理由が思い浮かばないっていうか……」

「理由、か。そうだねえ……」

そこまで言われてようやく少年は顎先に親指と人差し指の間をはめ込んで、何かを考え始めた。

「強いて言うなら運命？ いや、そんな大それた事じゃないか……」

『腐れ縁』ってヤツなのかな？』

「腐れ縁……？」

「そ。僕と君が知り合って10年経って、なんだかんだで今でも同じ場所にこうやって立ち続けてる『縁』。——ああそうだ、久しぶりに思い出したけど、腐れ縁以外にも『もう一つ』あったね」

「ま、まだあるの……!?!」

「村を出る前にさ、僕の母さんと君を育ててくれた『ラーナ』さんの二人に、『あの子の事を頼む』って言われたんだよね。確かに今更ここまで来てさ、用が済んだからハイサヨウナラって訳にもいかないよね」

「そんな事、頼まれてたんだ……。私全然知らなかった……。育ってきた村は同じ。けども産まれた場所は互いに違う。」

10年という歳月を経て、喜怒哀楽に満ち足りた人生を送っていたとしても、やはり少女にとってはどこか壁を感じてしまい、心の中で線を引いてしまっていたのだろう。

だがそれは結局、相手側も同じ事を思わされていたという事実でもあり、目の前の少年だけならばいざ知らず、少女を育ててくれた『ラーナ』と呼ばれる親代わりの存在や、この少年の親すらからも少女の心を見透かされるのは、至極当たり前だったのだ。

「ま、詰まる所難しく考えるよりもさ。君は旅に出る。なら僕はそれについて行く。それだけの事なんじゃないかな?」

「でも……本当に、それでいいの?」

「君はもう、君だけの命じゃない。君が死んだら悲しむ人が大勢いるんだから、その事を忘れないでほしい……。なんて、ちよつと月並み過ぎるセリフだったかな?」

「私が死んだら『悲しむ人』がいる……」

そして、少年は今一度手を強く突き出す。

少女はその手をしばらくじっと見つめていたが、——やがてその手を掴んだ。

それを見た少年は、今までで一番の笑顔で少女を迎えた。対して少女は、頬を真っ赤に染め、ずつと瞳を逸らし続けていた。

「おやおや、君でもそんな恥じらいをするんだね。長い付き合いだけど、正直その顔が見られただけでも僕は満足さ!」

「んもう! 怒るよー!?!」

二人の間にあつた見えない氷の壁が、溶け続けてこそいたが、砕く事は叶わずにいた。

それが今この瞬間を以ってようやく叶ったような、そんな二人の笑

顔だった。

「……本当にありがとう。じゃあ、これからもヨロシクね。『シオン』」

「はいはい。こちらこそね、——『アリア』」

改めて互いの名を呼び合って誓い、これからも『腐れ縁』は続いていく事を約束されたのだった。

——そしてこの瞬間、『アリア』の物語の歯車は廻りだす。

二人の温和な空気を切り裂くように、突如響き渡る不快な警鐘音。それは学園の敷地内に『何者かが侵入してしまった』事を報せるブザーやサイレンの一種なのだが、今まで二人が聞いたどれよりも明らかな非常事態を告げる『切迫した音』だったのだ。

「な、なんなの……！ 敵が近づいて来てるの!?!」

「ここからじゃよく分からないね……。ひとまず開けた場所に向かう！」

互いに頷いた二人は、今なおけたたましくなり続ける警報を背に、未知の敵を探るために走り出す。

第二話 アリアはただ戦う

あつという間にダーマの周辺を魔物の群れに包囲されてしまい、逃げる事も適わなくなってしまうていた生徒達は今やパニック状態。

外で魔法授業や実戦形式の授業を受けていた生徒達を最優先に建物内へ避難させようとするが、いかんせん突然の急襲に間に合わせる事ができない。

中にはまだ幼子から抜け出したばかりのひよつ子同然の生徒だっている。足がすぐんだり腰が抜けてしまつては、身体が思うように動かないのは当然である。

それでも死人だけは絶対に出すわけにはいかないと、教師達は必死に魔物を討ち倒して自分の使命を全うする。

そんな教師達の奮闘あつてか、何とか全体の9割は避難完了できた。

でも10割ではない。外に取り残された生徒は僅かにだが存在する。

モンスターの襲撃から運悪く逃れる事ができなかった生徒が、3人ほど中庭の片隅に追いやられてしまい、もはや絶対絶命だった。

さまよう鎧が攻撃体勢を取り、怯える子供達を手にかけてようとする。

——だめだ、やられる。死を確信した子供達はその時を待った。

……だがその時はいくら待てどもこなかった。

一人の少年が意を決して頭を上げると、その頑丈な体軀は何者かの『はがねの剣』によって横から真つ二つにされていた。

さまようよろいは何一つ声を上げる事無く、崩れ落ちる。

敵の背後に立っていたのは、紅の線が入り混じる鋼の鎧に身を包んだ凜々しくもあどけなさを残す顔立ちの『戦乙女』だった。

剣士としてはいささか小柄で、色素の少し抜けたこげ茶色の髪をサイドポニーに束ねてサファイアブルーに映す瞳はおおよそ年相応の少女にしか見えなかった。

少年「アリアお姉ちゃん！」

アリア「ここは危ないわ。逃げ道は私が確保したから急いで校舎に走って！」

希望の笑みを浮かべながら大きく頷いた子供達。これで残る生徒はアリア自身と、続けて傍に駆けよって来た『シオン』だった。

白を基調としたみかわしの服を着込み、綺麗に肩まで整ったエメラルドグリーンの髪は流線美を思わせるくらい鮮やかである。更に水平にカットされた前髪に、くりつとした茶色の瞳は男性でありながらも、同時に女性の風格をも兼ね備えたような中性的な美を漂わせる。

アリア「シオン、他に人はいない？」

シオン「いないみたいだね、どうやら僕たちで最後かな」

周囲の安全はとりあえず確保されたと、二人がほつとしたのも束の間だった。

突然響き渡る、つんぎくような女性の悲鳴。

今の様子はただ事ではないと一瞬で判断する。

アリア「今の悲鳴はどこから？」

シオン「多分正面玄関の方からだよ。急いで向かおう！」

二人の前に飛び込んで来たのは、絶望的な光景だった。

先ほどアリアが切り伏せたモンスターとは比べものにならないくらい、高等種のモンスターの群れ。

——魔物の群れが現れた！——

キラーマシン。シャドーサタン。オークキング。マッドファルコン。どれもが一筋縄ではいかない、というか今のアリアとシオンでは全力でかかっても倒せるかどうか怪しい程の相手だ。

そこに一人、絶対に通さんと立ち塞がって身構える一人の大人の男性。アリア達も良く知る男性であった。

アリア「——ミラルド先生！」

ミラルド「アリア、何故ここに！　ここは危険だ、早く逃げろ！」

アリア「でも私達ならなんとか！」

ミラルド「ならん！　例え去年の総合武術大会で一位を獲得したお

前とて、適う相手ではない！」

ミラルドが示していたのは、その中央で統率を図るように悠然と立つ、『ライオネック』と呼ばれる最上位種のモンスターであった。

ライオウ「我が名はライオウと言う。ヒトよ、お前がこの地を治める長か？」

ミラルド「……残念だが、違うな。私はここを守る一人の教師に過ぎんさ」

ライオウ「ならば話は早い。そこを早々に退き、『セシリア様』の身柄を引き渡してもらおうか」

その場にいた全員に、疑問符が浮かんだ。それも当然、セシリアと名乗る女性は生徒はおろか、教師や警備兵にすらそのような名前は存在しなかったからだ。

ミラルド「お前達はこの施設を破壊する事が目的で来たのではないのか？」

ライオウ「いつでもできる事など取り急ぎ行う必要もない。それとも何か貴様は何か知っているとでもいうのか？」

ミラルド「さてな、仮に知っていたとしても教える義理はない」

ライオウ「……面白い事を言う。ならば気が変わった。まずは出初めに貴様を血祭りにあげ、その後じつくりとここを調べさせてもらおうではないか！」

魔物の群れがライオウの指先一つの指示で、襲い掛かる。キラーマシンとマッドファルコンがミラルドに攻撃する。

高等種に名に違わない攻撃力だった。だがそれはどちらも空を斬る結果に終わり、そのままカウンターによるミラルドの卓越した剣技『隼斬り』でいともたやすくキラーマシンが斬り捨てられる。

ミラルド「これはただの隼斬りではない。我が愛剣『隼の剣』によって更なる斬撃を可能にした超高速剣技だ」

ライオウ「ほう、やるではないか」

ミラルド「伊達に10年前の『魔天戦争』を生き延びちゃいないさ……！」

続けざまにマッドファルコンに狙いをつけると、強力な冷気を纏わ

せた剣閃『マヒヤド斬り』で素早く倒す。

もちろん今戦っているのはミラルドだけではない。後方で待機していたアリアも、このまま黙って見ているものかと勢いよく飛び出る。

ミラルド「無茶をするなアリア！」

シオン「もう、またいつもの悪い癖がっ——『スカラ』！」

——アリアの守備力が上がった！——

残る手下は二匹。シャドーサタンに狙いを定めたアリアは、自身の持つ現時点で最高の特技を惜しみもなく放つ。

アリア「私の剣技、かわせるか——『つるぎの舞』！」

縦横無尽に駆け回り、乱舞を叩き込むこの剣技は並の努力では習得できるものではない。その難度と流麗さに感嘆を漏らしていたのが、他でもない敵のライオウだった。

しかし仕留め切るには僅かに至らない。アリアがそう実感し、苦々しく舌打ちをした時だった。

幾多もの『矢』がアリアの背後を駆け抜け抜けると、寸分の狂いもなく全て目標に突き刺さる。アリアはこれが誰による援護かはもちろん知っていた。

シオン「前衛なんだから止めはきつちりしないと……！」

アリア「いつもありがとうシオン！」

瀕死だったシャドーサタンはシオンの援護が止めとなり、完全に沈黙する。

弓の中では比較的小さなショートボウといえど、一瞬の間に文字通り矢継ぎ早に攻撃するのは容易ではない。熟練した弓使いのみが繰り出せる『さみだれうち』はシオンの能力を量るには十分すぎる技であった。

残る手下も一体。攻めの勢いを殺さず、攻撃一辺倒で攻め続けるミラルドがオークキングも撃破する。

——魔物の群れを、やっつけた！——

シオン「これで残るは、アイツだけ……！」

あれだけいた強力な手下がたったの数分で仕留められてしまった。

これでヤツも諦めて撤退するだろうと、その場にいた誰もが思っていたに違いない。

……だが、違った。

目の前の現実を見せつけてなお、不敵に笑う敵軍の将。ミラルドは全身の体温が下がると同時に、歴戦をくぐり抜けて来たからこそその『本能』が警鐘を鳴らす。

ライオウ「くくつ。敵を知り、己を知ってる者は流石に判断が早い。だが——少々遅かったかな？」

歴戦を戦い抜いているであろう敵の将の鋭い眼光が、アリア達を射抜く。

——だが全て遅かったのだ。

射抜かれたと思ったその時には、既に——。

第三話 聖少女の覚醒

——ライオウが、現れた！——
ミラルド「アリア、シオン——逃げろ！」
それは一瞬だった。

ミラルドとライオウの距離はかなり空いていたはずだった。

なのにたったの一瞬。歴戦の戦士でさえ、思考する暇がなかった。捻じれるように湾曲したミラルドの肉体。ライオウの瞬速の拳によって強引に曲げられた後凄まじい衝撃を伴って吹き飛ばされる。

おびただしい砂埃と轟音と共に神殿の壁に叩き付けられたミラルド。起き上がって来る反応すらもない。

残された二人は絶句するしか、なかった。

ライオウ「……なに、特別な事はしていない。『疾風突き』という技があるだろう？ それに魔力を込めてより威力を高めただけだ。言うなれば『疾風剛拳』か」

小難しい説明を受けなくても二人とも理屈は分かる。だがいくら魔力を込めただけでは言っても、それは純粹に強靱な肉体と高度な魔力を有していなければできない芸当。

何よりアリアが絶対の信頼を置いていたあのミラルドが、たったの一撃で地に伏してしまった現実。

……それはライオウの実力が桁外れである絶対の証明となってしまうていた。

ライオウ「さて、お前達に用はない。大人しく道を開けるなら命は取らぬ」

ゆっくりと歩きだすライオウ。

その足取りがアリアはやけにゆっくりに見えた。そして死の恐怖からか、吐き気を催したひどく青ざめた顔だった。

アリアの目に映る周りの景色も歪み、捻じれる。草木も地面も建物さえも。空間の捻じれなど錯覚であるはずなのに、ひどくリアルな情景に感じる。

アリアは思った。動かなければやられる。自分もあの先生のように。

「ただ道を開けたら、他の生徒は、みんなはどうなる？」

「ならば今ここで自分がやらなければと。アリアは無我夢中だった。」

「両手をぐつと握りしめ、己がまさにライオウへ突っ込んだ。」

「だがやはり振りかざした剣撃は、無常に響いた鋼の音をまき散らすだけに留まる。それも片腕のみで。」

「ライオウ「小娘にしては中々の底力を持っているではないか。——だが」

「剣を受け止めていた右腕を強引に振り払う。信じられない怪力で吹き飛ばされたアリアは、ミラルド同様に神殿の壁へと叩き付けられる。」

「衝撃で呼吸がまともにできず、咳き込む。今まで味わった事のない痛さと力量差からか、悔し気な目じりからはうつつすらと涙が浮かんでいた。」

「ミラルド「アリア、早く逃げるんだ……ここは私が」

「必死に庇う師の声でさえ、もはやかすれていた。」

「アリアの下に駆け寄ったシオン。」

「ここは悔しいけど、逃げるしかない。」

「——そう言おうと思った時だった。」

「ライオウ「ほう、まだ立つのか小娘」

「意地だけで再度立ち上がったアリア。足取りはふらふらで、歩くのがやっとに見えるくらいだ。」

「アリア「私は、逃げたくない……」

「シオン「もういいんだよアリア！ここで逃げないと、先生だけじゃなくて僕達まで無駄に命を亡くすことになっちゃうよ！」

「もちろんシオンとて、冷血に判断を下した訳ではない。現にアリア同様悔しさに満ちた顔は彼のやるせない決断を物語っていた。」

「それでも、と。アリアは強情だった。」

「アリア「私はここで死ぬ訳にも、逃げる訳にもいかないの。戦って戦って、立ち向かって、意地でも勝ちたいの……！」

ふとシオンは気づく。ふらふらだった足がいつの間にか活気に戻っていたのだ。

同時に、アリアの周りに白い光の粒が生まれていく。触れると、柔らかくて温かい心地にシオンは包まれる。

これは癒しの光、ホイミの欠片の集まりだった。

シオン「まさか『ベホマ』……？　アリア、この光はどこから——うわっ！」

聞く間も無く、今度は激しい魔力のオーラがシオンを包んだ。あまりの膨大な量に身体ごと持っていかれる程だった。

そしてその場にいた誰もが、アリアの姿に目を奪われた。シオンも、ミラルドも、あのライオウでさえも。

アリアの全身に行き渡った白光は、眩い程の力となる。

同時に、眩い白銀に染まりきった髪と映った者全てを魅了しそうな金色の瞳が、『聖なる少女』の全てを表していた。

ミラルド「な、なんだ……。その力は一体……？」

アリア「……私にもよく分かりません。でも今言えるのは、絶対に負けたくないってだけよ……！」

瞬速で飛び出したアリアは再びライオウに一撃を繰り出す。

ライオウ「舐めるな小娘……！」

ついさつきまでとは比べものにならない魔力に、ライオウは思わぬ全力を強いられてしまうが、真に驚くべきはそこではなかった。

防御に回したはずの右腕が『なくなっていた』のだ。

答えは簡単だった。アリアの剣によって切り離されてしまったからに他ならない。

突如来る苦痛と驚愕により、ライオウはたまらず空気をも震撼させる咆哮を上げる。

アリア「あなたにもう勝ち目はないわ。お願い退いて……！」

ライオウ「……退け、だど。笑わせるな、小娘えええッ！」

残されたもう片方の腕を天高く掲げると、その手に集まるのは雷気を帯びた魔力。

瞬く間にほとばしる閃光と稲光に、強力なデイン系の呪文であろう

事は予測できる。

ライオウ「そのふざけた台詞、この『ギガデイン』を受け切つてから、もう一度言ってもらおうかあ！」

屈辱の表情から振り下ろされた手は、雷の弾ける轟音となってアリアに襲い掛かる。

シオン「アリアツ！」

ギガデインが落ちた場所は地面がすべて抉り取られ、焦げ臭い黒煙が立ち込める。

誰もがその威力にアリアがただでは済まないのを予想していた。

——だが、違った。

ライオウ「……ば、バカな！」

あちこちに傷や焦げ痕こそあるものの、盾をかざしたように左手から張られた薄桃色の半透明な魔法膜によって、アリアは頑として両の足で立っていた。

アリア「——受け切つたわ。今度はこっちの番よ……！」

魔力を最大限に放出したアリアは、深く腰を落としたまま剣の切っ先をライオウに向けると、構えた右腕から剣へと流れるように紅に染まった雷がほとぼしる。

その雷のパワーたるや、ライオウが繰り出したギガデインの比ではなかった。

アリア「この力で、悪しきを貫け——『ジゴブラスター』！」

紅き雷光は一筋の彗星の如く、ライオウの全てを飲み込む。

そしてアリアも今ので力を使い果たしたのか、魔力は完全に抜ききつてしまい膝をつく。

内心アリアは願っていた。これで倒れてほしい。そうでなければ、今度こそ自分達はなす術がなくなってしまうと。

そして、光が晴れた先にあつたのは。

ライオウ「小娘やるな……。今のは我も死を覚悟したぞ……」

片膝をつき、満身創痍になったライオウだった。

しかし、アリアには戦う力はもう残されてはいない。

アリア「ま、まだやるといふの？」

ライオウ「くくつ。今日はとてもいい収穫が得られた。セシリア様を探し出す事は適わなかったが、代わりに『貴様』というこれ以上ない好敵手を見つけられた」

アリア「好敵手って……？」

ライオウ「今日の所はこれで退こう。だが、いずれ今日の借りは必ず返す。それまでせいぜい生き延びておくのだな……！」

そう言うと、足元に幾何学模様の魔法陣が現れ仄かな光と共にライオウは消えていった。草木は倒れ、地面は荒れ、建物はあちこちと壊れたまま、激戦の跡を残して。

——ライオウは、逃げだした！——

騒乱に包まれていたダーマにようやく静寂が訪れた。アリア達の奮闘の甲斐あり多少の怪我人こそ出たものの、死人は誰一人いない。

シオン「終わった……のかな」

アリア「多分ね……」

ミラルド「……どうやらそのようだ。魔物の気配は周囲に感じられない」

勝利への喜びからか、シオンがアリアへと駆け寄る。

シオン「やったねアリア……！」

アリア「え、ええ。そうね……」

憔悴しきった微笑みをシオンに見せるが、そこがアリアの意識の限界だった。

ゆつくりと地に倒れたアリアは再び起き上がる事はなく、慌ててシオンが何度呼んでも返事は帰ってこない。

ミラルド「心配いらん。疲れて気を失っただけだろう」

シオン「あ……ほんとだ。よかったあー」

彼もまたアリア同様に相当疲れていたのだろう。地面にへたり込み、大きなため息と一緒にうな垂れる。

その後は学園長のトラマナールも無事発動し、モンスターも二度に渡って襲来してくる事はなかった。

傷ついた神殿やその周辺は後日修復され、警備兵の数も増員させる

事によって沈静化を図ると、とりあえずは体制を立て直す事に全力を
努めた。

——そして、三日が過ぎた。

第四話 旅立ちへの試練

アリア「ダーマが一時休校？」

エマリー「……そうです。中規模の魔王軍が突如押し寄せ、それがなんの目的であれトラマナールを発動させざるを得ない状況を作り、かつ今後もその脅威に晒される危険性がある以上は、少なくともひと月以上は様子を見なくてははいけません」

シオン「そんな……卒業資格まで僕もアリアも後少しだったのに……」

あの戦いから二人はすっかり傷も癒え、後日学園長から『知らせがある』と個人面談の形式で生徒と順々に対話していた。

そして今は、アリアとシオンの番であった。

多くの若者の命を抱える学園長の身としては当然でもありながら、苦渋の決断でもあったに違いない。中には直談判をしてまで学びたいと懇願する生徒もいた。

それでも一人たりとも死者なんて出す訳にはいかない。未来の礎となる者たちが志半ばで倒れては元も子もないのだ。

エマリー「貴方達は入学してから四年が経ったのね。卒業資格を得るのは本来六年前後にかかるのに、このままいけばほぼ最短卒業時期である四年目で得られるのは本当に素晴らしい事だわ」

魔法騎士学園ダーマにおいては、魔法と武道の知恵に関わる内容を修練する。

そして最終的に魔法に長けたもの、武道に長けたものと自分にあつた内容を探り兵士あるいは冒険者としての矜持や実績を育んでいく事が主とされる。

シオン「アリアに至っては、去年の総合武術大会で一位取ったんだもんね……」

アリア「や、やめてよシオン。私はたまたま運が良かっただけで」
シオン「はいはい出た。天才特有の運がヨカッター」

ジト目をくれてやるシオンと、恥ずかし気に照れるアリアを見てた

エマリー学園長は微笑ましい気分だった。

シオン「アリアは思えば僕と一緒にダーマに来る前から、戦うのすごい上手だったもんね。まだ僕たちが村にいた時も、エルフ族の僕とか周りの友達と一緒に狩りに行ってもアリアが必ず戦闘に立って突っ込んでたもんね」

アリア「あはは……。まあその所為で色々と迷惑もかけちゃったけど」

少し昔を懐かしむ二人だったが、エマリー学園長はそんな世間話をしにここに来たのではないのだろうかと思いい口を開く。

エマリー「さて、貴方達はどうするの？ 二人とも『世界樹の大陸』にあるリーフィの村から来ているのよね。休校中は帰郷も当然許可しているわ。二人ともその気なら、港町エルマータまで護衛の兵を出すように手配してあげるけどどうする？」

二人はしばし黙った。

シオンの不安げな視線の先には、アリアがいた。

その間彼女は何かを思いつめた表情をずっとしていた。

が、やがて意を決したのかゆっくりと口を開く。

アリア「エマリー学園長……。実は私達、『旅』に出たいんです」

エマリー「……詳しく聞かせてもらっていいかしら？」

アリア「はい。……私は自分の事が正直分かりません。物心ついたらリーフィの村にいて、私のお母さんは実は本当のお母さんではないんです。その意味をずっとずっと考えて、ある日この『ペンダント』に気が付いたんです」

それは見た目はごく普通のペンダントだった。だがよく見ると、アリアが円形を象っている装飾部分を掌に乗せて指差すと、エマリーは気づいた。

エマリー「これは、まさか竜の刻印？」

こくりと、アリアは小さな頷く。

アリア「シオンが私のために文献で色々調べてくれたんです。これは普通の竜じゃない、何か『重大な秘密』がきつと隠されてるんだって」

シオン「恐らくアリアのお母さんは、かの天に住むと言われた『天竜族』に関わる人物なのではないかと思いましたが。更にそれについて調べてたら偶然気づいた事もあって、アリアが僕の村に来たとされるのがおよそ10年前だったんです。そして、10年前と言えば――」

エマリー「『魔天戦争』と言いたいのかしら？」

シオン「……そうです。三日前に襲ったばかりのモンスターを初めとする、地の底に今もなお根付く『魔族』と、天に住む『天竜族』との間で行われた戦争です。世界支配を企む『大魔王ソルダート』に対し、世の秩序を保つ事が絶対とされている『天竜王ゼニス』が血肉を分けて争った……という風に文献には記されていました」

シオンが説明する間、アリアは思っていた。

自分は生まれた場所を知らない。なのに身に着けていたペンダントは竜の形を成している。

ならば何故自分は今空の上にはいないのかと、その矛盾をアリアは幼い頃からずっと感じていた。

アリア「もう一つあります。お母さんは亡くなる直前、こう言ったんです。『自分を知りたければ全ての世界をその目で確かめなさい』って……」

エマリー「……なるほどね。母からの遺言の真相を知りたいのね、アリアは」

アリアは学園長の瞳をしつかりと見据えて、確かに頷く。

と、ここで不意に部屋にノック音が三度響き渡る。

エマリー「学園長が入ってと促すと、厳格な両開きの大扉から中に入ってきたのは二人が何度も顔を見合わせた人物だった。」

アリア「ミラルド先生！ もう身体は大丈夫なんですか？」

ミラルド「それは君も言われる側の立場だろう。もう問題はないさ……ところで今君達が話していたのはアリア君の話だったのか？」

自分にも何か言いたげな事があるといった様子で聞いたです。

ミラルド「ここに学園長と当事者の二人しかいないから話すが、先日アリア君が解き放った『謎の力』についてなんだが。……単刀直入に聞こう、アリア君あれは一体なんなんだい？ 今まであんな力は見

た事も聞いた事もなかった」

ミラルドが語気を強めて言った『謎の力』とは、他でもないライオウを撃退した時の事であろう。

エマリー「それは初耳ね。私のところにはそんな情報は入ってきてないけれど？」

ミラルド「当然であろうな。私もアリアの担任教師を務めて一年は経つが、そもそもあんなのを見た事自体が生まれて初めてさ」

アリア「ごめんなさい、私もよく分かりません……。ただみんなを助けたいつて思ったら、力が不思議と湧いてきた感覚だけは覚えてて……」

それ以上は何も言わなかった。

アリアの心底困り切った顔からは、とても嘘をついているとはその場にいる誰もが思えなかった。

エマリー「……この場においてこれ以上の詮索は無意味ね。アリア、シオン。理由はともかくとして、貴方達は旅がしたいと言った。……この言葉に間違いはない？」

二人はエマリーの瞳を強く見据え、力強く頷く。

エマリー「いい顔をしているわ。……いいでしょう。ならば『ある条件』を満たしたならば二人とも旅に出る事を許可しましょう。もちろん口だけじゃなく『冒険許可証』も発行した上でね」

アリア「ほ、本当ですか！ その条件って一体？」

まさかの発言に焦るアリアとは裏腹に、エマリー学園長はゆっくりと窓際まで歩み寄る。やがて細い目を向けた視線の先には、ある『建物』が見えていた。

シオン「ここからでも見える試練の塔に何か？ って……まさかアレを登れと？」

エマリー「ご明察ね。貴方達には『試練の塔の最上階踏破』を目指して頂きます。本来ならば卒業試験に用いるのが慣例ではありますが、事情が事情です。よって今回は特別と致しましょう」

ミラルド「が、学園長危険すぎます！ 卒業試験の合格率は6割程度です。しかもその不合格の割合のほとんどはあの塔をクリアでき

なかった者が原因なのですよ！」

エマリー「もちろん存じております。ですがこれから先、冒険者として旅をするという事は、常に死と隣り合わせ。もつと言えば『命の保証』をしてくれる者が誰一人としていなくなるという事です。つまり、四六時中自分の身は自分で守らなくてはいけない。厳しい事を言いますが、あの塔程度を攻略する事ができないのであればこれから先は命がいくつあっても足りないでしょうね」

一氣にまくしたてたそれは、半分挑発ともとれる言動だった。

だが学園長は間違った事など何一つ言っていない。むしろ冒険者として捉えるなら至極正しい忠告だったのだ。

アリアもシオンも、死の恐怖を間近で感じたのはこれが初めてではない。

エルフの村で育った二人は、小さな頃からモンスターを狩りに出かける事もあったし、学園の修練の過程でモンスターと戦うのもしょっちゅうだった。

シオン「でも確かに……今までの戦いは先生であれ、エルフ族の誰かであれ、確かに誰かしらに見護られていた」

ミラルド「……そうだ。旅をするというのは多くの夢と希望が詰まっている。新たな発見が毎日あるし、旅の途中で多くの仲間も見つけられるだろう」

エマリー「でもそれはあくまで『表側』しか見ていないという事。旅というのは言ってみれば一枚のコインと同じ。希望に満ちた表側があれば、絶望に染まった『裏側』だってある。その裏にはは多くの死と悲しみで溢れ返っているのよ」

幾多の戦いを積み上げてきた『指導者』だからこそ言える、事実。決して脅しで言っている訳ではない。自分ならば、自分に限っては。この言葉の誘惑に負け、多くの屍を看取って来たからこそだ。

アリア「……それでも私は行きたいです」

ミラルド「アリア、これは訓練はおろか実習ですらない。文字通り生きるか死ぬかの戦いになるんだぞ。確かに不思議な力で私ですら及ばなかった強敵を退けた事は認める。……だが奇跡は何度も続く

ものじゃない。奇跡の後の不運に苛まれて命を落とした者だって多くいるんだぞ！」

アリア「分かっています！ あの力がただの偶然だった事くらい！ ……だからこそ私は確実な力を身に着けたい。奇跡に頼らないで、自分の力でちゃんと旅もして、現実としつかり向き合えるようになりたいんです！」

少女の剣幕に皆が飲み込まれる。例えダーマを指揮する大きな人間を前にしても、一歩たりとも退く気は見られなかった。

エマリー「……ふふつ。若いつていいわね」

ミラルド「エマリーも茶化すな！」

熱意に満ちたアリアに感化され、大人組の二人もつい本音が出てしまったのだろうか。エマリーは終始懐かしさを含んだ笑みだった。

ミラルド「やれやれ……こうなったら止めても無駄か」

エマリー「なら早速二人には赴いてもらいましょうか。試練の塔最上階にある『ダーマの証』を無事私の下に持ち帰ってみせなさい。……この右手にある『紋章』と同じように」

学園長がかざした手の甲には、ダーマそのものを表す紋章が描かれていた。無論それは、アリアの教師でもあるミラルドも同様だった。

アリア「望むところです！ さあシオン行くわよっ！」

シオン「ちよちよつと引つ張らないでアリア、せめて明日にしようよー！」

むんずとシオンの首根っこを引つ掴み、ずるずると引きずって行く様をひとしきり眺めていたミラルドとエマリー学園長もまた、当時はこんな心境だったのかも知れない。それ以上は何も言わずに、ただ黙って未来の勇者達を見送っていた。

古めかしい木製のきしんだ音を立て閉じる扉。

その後にはこのダーマを守る二人だけが取り残される。

エマリー「ところで……純真無垢なる我がダーマ学園の生徒の前で学園長たる私を呼び捨てとは、少々いただけないわねえ？」

ミラルド「お前が変にアリアを感化させるからだろう、全く」

エマリー「大丈夫よ。あの二人なら必ず帰って来る」

ミラルド「……だが若さというのは強さになれば弱さにもなる。それこそ、お前がさつき言ったコインの裏表みたいにな」

エマリー「そこを突かれると弱いわね」

ミラルド「しかし……だ。全てが裏になる事などまずない。魔天戦争をくぐり抜けて来た俺やお前がそうであるように……だろう？」

エマリー「……そうね。なら私達はただ待ちましょう。二人の帰りを——」

若き二人の先に待ち受けるのは、コインの表か裏か。

それを知っているのは、文字通り神だけなのかも知れない——。

第五話 いざ、試練の塔へ

翌朝、アリアとシオンが立っていたのはダーマ学園の入り口だった。

夜もすっかり明けると、学園の周辺に彩られた木々の合間から柔らかな朝陽が差し込んでくる。空はいたって快晴で、出発するには申し分ない天気だ。

アリア「もう。私はすぐにでも出発したかったのに」

シオン「準備もろくにしないで合格もへったくれもないでしょ。これからの僕等を試す試験でもあるんだから、万全を期さないでどうするのさ」

もはや準備運動の時間すら惜しいのか、アリアは早々に切り上げ勇み足で進む。

が、数歩歩いたところでピタリと足が止まる。

シオンはそうなる事が当然であるかのように、黙ってアリアを見ていた。

——何故ならば。

アリア「ねえシオン。……試練の塔ってどこだっけ？」

シオン「アリア。これから冒険者になろうとしてるんだったら、その『方向音痴』は早くどうにかしたほうがいいと思うよ」

アリア「方角なら知ってるわよ！ 南西の方角にあるんでしょ！」

シオン「じゃあ南西ってどっち？」

するとアリアがおもむろに視界の奥に見える森を指差した。もちろん根拠などなかったのだろうが。

シオン「そっちは港町テオニーに通じる森だよ。要するに北西」

アリア「じゃあこっち！」

シオン「そっちはグランダリオン帝国に続く道。ちなみに北東ね」

アリア「……方位磁石もないのに分かる訳ないでしょ！」

シオン「いや、ダーマに来て何年経ったと思ってるの！ 流石に自分の周辺の土地勘くらいは掴んでおこうよ！」

こっちだよと半ば呆れながらも、シオンがいつもの調子であるかの

ように振る舞うとアリアはぶつくさ文句を言いながら歩き進んでいく。

と、しばらく二人が歩いていた時だった。

——魔物の群れが、現れた！——

アルミラーズ、どろにんぎよう、スライムナイトの計三体が眼前に現れると、身構える前に襲い掛かって来た。

スライムナイトの飛び掛かり攻撃によってアリアは剣で直撃は防ぐも、いくばくかのダメージは受けてしまう。

更にどろにんぎようがいくつもの残像を残しながら不可思議に踊り狂う。

シオン「いきなり出てくるや、眩暈がするほどの踊りだねほんと……！」

見たものの魔力を吸い取ってしまう『ふしぎなおどり』は吸い取る量こそは微量ではあるが、ダンジョン攻略や長い移動時等には後に大きく響いてくる。更には集団で出てくる事もあるため、油断は決してできない相手だ。

アリア「でも——素早く倒してしまえば問題なし！」

体力の少ない敵からまずは狙った。アルミラーズを疾風突きで仕留めると、どろにんぎようの攻撃を剣で受け止め、そのままカウナーで袈裟斬りにし地に還す。

そして残る一体にシオンの鋭い矢が突き刺さると、アリアがすかさず止めに走る。

アリア「これで、おしまい！」

縦から真つ二つになったスライムナイトも倒れる。

モンスターの気配がひとまず収まったようだ。

——魔物の群れを、やっつけた！——

シオン「この周辺のモンスターも大分慣れてきたよね」

アリア「そうね……。だけどこんなのにも苦労してちゃ、学園長の期待になんか応えられないよ」

周囲の警戒を怠りなく進む内に、やがてアリア達の視界に見えたもの。

それはダーマからも見えていた、頂上まで見上げれば太陽の日差しと重なる程にまでそびえ立った『試練の塔』だった。

戦場に立ちほだかる鉄壁の城塞のような外観ながらも、悠然と挑戦者を待ち構える鉄製の大扉の存在は「さあ来い」と言わんばかりの至ってシンプルな構造である。

アリア「ここに来るのはこれで二度目だけでも……」

シオン「今度は最上階までだからね。何かあるかは分からない。気を引き締めよう」

意を決した二人は、大扉を開けるといよいよ塔の内部に入る。

内部も外から見た雰囲気と大差なく、石畳で敷き詰められたいくつかの通り道がアリア達を迷わせる。もちろん上に続く道はただ一つだ。

階層がまだ一階でもある所為なのか、出てくるモンスターも外にいた強さとはぼ変わらない。この辺りは難なく進む。

シオン「改めて見ると二階も大して一階と変わらないね。このまま一気に進もう」

アリア「ええ。でも、このまま普通に進めるとかえって不安になってくるわ」

シオン「だからといって怯えながらあちこち進んだって、いたずらに体力と精神を削るだけさ。最低限の警戒はしつつ余裕がある時に一気に駆け抜けるのも、攻略における重要点だよ」

三階へと続く階段を見つけると、モンスターに見つかる前にと足早に駆け上る。

アリア「今度は広々とした場所ね」

四階へと続くであろう階段も目の前にあり、まるで通ってくれと言わんばかりだ。

あからさまに怪しげな通路ではあるが通らない事には始まらない。足元等に細心の注意を振り払って歩くと、階段前まで何事もなく着いてしまった。

シオン「……とりあえず登ろう」

警戒をしながら階段を登るが、ここでも異変はなかった。

どうしたものかと二人でもややもやとした気持ちを抱えたまま、四階の通路を歩いていた。——その時だった。

アリア「シオン、床が！」

先に『仕掛け』に気づいたのは意外にもアリアだった。

しかし、時すでに遅し。

二人とも簡易トラップの落とし穴に嵌り、下まで一気に真つ逆さまだった。

シオン「仕方ないよ。着地に備えよう」

アリア「えーまたあの階段を登るのー？」

落下中だというのに二人ともなんと呑気なものか。

だがそれもその筈。熟練の兵士でも舌を巻きそうな程、魔力を上手く利用した受け身と着地で、二人ともほぼ無傷の状態。

ふとアリアが先ほど落ちて来た場所を見上げる。とても一階下に落ちたくらいでは済まない高さだ。

何もないと、油断させてからの落とし穴。

正に侵入者の心理を見事に捉えたまで計画的な罠に、学園長の「まだだね」ときも言いたげな表情が脳裏をよぎりいつになく悔しそうな二人。

アリア「まんまと、してやられたのね……。それにしてもこれじゃ一階まで落とされたんじゃないの？」

シオン「そうかもね。……待って一階？　一階なのにここのフロアには見覚えがない。あそこまで自力で戻るのは多分無理だから別ルートを探すしかないかな」

心底面倒そうな顔をするアリアだったが、今までの通路とは比較すると狭い通路で階段もすぐにあつたため移動自体は楽であった。

そしてあつという間に四階にまで戻った時、アリアは『あるもの』を見つける。

アリア「あ、見て見て、あそこに宝箱が！　中身なんだろうなっ！」
いよいよ最上階の五階へと続く階段も見えた所での、少し脇道にそれた場所にぽつんと置かれた宝箱。

これが通常のダンジョンであれば並の冒険者ならば喜々として向

かうであろうが、シオンはどこか違和感を覚えた。

鼻歌混じりに彼女が開けようと屈んだ時、シオンはほぼ直感で『叫んだ』。

シオン「アリア下がって！——そいつは『ひとくいばこ』だ！」

アリア「……え、うそ？——きゃああああっ！」

——ひとくいばこが、現れた！——

びよーんと怪物の口が開くように、無数の牙とにやついた眼で『エモノ』を捕えたひとくいばこはアリアを一気に一飲みしようとする。

アリア「やだあ、助けてえシオンツ！」

目を強く瞑り、大嫌いな物を遠ざけるような反応であるそれは、今までの豪胆ぶりとは違って違ったごくごく普通の少女らしい姿だったが、冒険者としてははつきり言って情けない事この上ない。

シオン「仕方ないんだから……『パライズアロー』！」

麻痺の効果を伴った矢は、ひとくいばこの口内に深く突き刺さり対象を痺れさせる。

全身をビリビリさせながら行動不能に陥ったひとくいばこは、こうなると事実上ただの箱に過ぎない。後はただ攻撃を与えるのみである。

……のだが、

アリア「やだあお化けクライ！ シオンやつつけてよー！」

シオン「ちよつと、こんな時にまで『幽霊嫌い』を発動させないでよ！ あーもう、これで終わり！ 『ニードルアロー』！」

やれやれと深くため息をつきながら放ったレーザー状の魔法の矢は、ひとくいばこを完全に貫通し息の根を止める。

——ひとくいばこを、やつつけた！——

終わった後は、なんともバツの悪そうなアリアであった。ここは説教のひとつでもしてやろうかと、ムツとした表情のままシオンは近づく。

アリア「……ごめんね、こんな時に限って役立たずで」

シオン「え、あ……アリア？」

アリア「村に来たばかりの頃の頃にゴーストに囲まれた時から、ま

るつきりお化けとか幽霊の類のモンスターにどうしても弱くて……」
それは、シオンにしてみたら思わぬ奇襲と呼ぶべきだったのだろうか。

赤く火照った顔にうるんだ瞳で弱々しく見つめるアリアは、シオンにとつて正に『年頃の少女』そのものだった。

二人の目と目が合ってしまうと、アリア同様に頬が紅潮してしまったシオンはもはや説教どころではなく、先を急ごうと促すだけで精一杯だったのである。

アリア「よし、気を取り直していくぞー！」

シオン「なのにこの切り替えの早さときたら……。やっぱアリアには勝てないや」

そうこうしている内に五階へと続く階段を駆け上り、ようやくたどり着いた試練の塔の最上階。

今までの通り抜けるための通路などとは異なり、壁や仕切りなどが一切ないホール状の作りになっていた。

その中央には台座があり、中央に刻まれていた刻印らしきものは、ダーマでエマリー学園長らが見せてくれたあの紋章と同じだった。

試練の証というのはどうやらアレを指しているようだが、二人の顔には目的をようやく見つけた喜びがない。それどころか、より一層引き締まった顔になっていた。

何故なら、ある一体の『モンスター』がそれを守るように、身丈はあろうかという大斧を握りしめ待ち構えていたからだ。

シオン「あれは竜族バトルレックス……？ どうやら、この塔の最後の番人みたいだね……」

近づいてきた二人に呼応するかのようには、部屋に響き渡る雄叫びをあげた緑のウロコに覆われたバトルレックス。内から発せられた声だけでも肉体を震わせるそのエネルギーが、目の前の驚異がいかほどかを身を以って思い知らせる。

レックス「オレの名、レックス……。お前たち、ダーマから、来たノカ？」

本来バトルレックスを初めとするこの竜種族は言葉を交わせる種

ではないのだが、その常識など軽々と打ち破って二人に問いかけてくる。

アリア「……そうよ。その後ろにあるのが試練の証なんですよ。私はそれが欲しくてやってきたの」

レックス「知ってる。ミンナ、この後ろにある『ダーマの紋章』を手に入れて、みんな帰ってく。——でも」

二足の緑竜が斧を激しく振り下ろす。穿たれた地面は凄まじい衝撃音と碎け散った無数の石が跳ね回り、タダでは通さんと物理的に知らしめる。

レックス「オレ、お前ラとシヨープ、する。勝ったら、ここアケル。負けたら、帰ってモラウ。覚悟、いいか？」

貫禄すら漂う挑戦的なレックスの眼光が、二人を捕える。

しかし今の二人には、この期に及んで物怖じする気配など微塵もなかった。

この場に言葉など不要。必要なはただ己の実力あるのみ。

アリア「——もちろんだよ。いくよ、シオンッ！」

シオン「……了解！」

——バトルレックスが、現れた！——

第六話 勝利を掴み取れ

まずは先陣を切ってアリアが飛び出す。

誰よりも先に攻撃できる『疾風突き』で先制の一撃を与える。が、いまいち効果は薄かったようだ。

レックス「そんな攻撃、キカナイ！」

豪快に薙ぎ払ったレックスの攻撃はアリアだけでなく、後方で支援しているシオンにも威力が伝わる。

アリアは本来の剣士と違い盾を装備していない分、機動力は上がるがその反面防御力はかなり落ちる。そのため一発一発が重く、かつ場所を選ばないような力任せの一撃にはかなり弱かった。

直撃こそないものの、少しずつダメージが蓄積されていくアリア。だがレックスの更なる猛追は続く。よろけた所へすかさず斧を叩きこむとアリアはガードを余儀なくされる。

レックスの攻撃はアリアの肉体に届くことはなく、我ながらなんとか耐えたとアリアは内心思っていた。

レックス「甘いッ。——もう『一発』ダー！」

なんとレックスの繰り出した攻撃はただの斬撃ではなく、二度相手を斬りつける『隼斬り』だったのだ。

アリアの担任教師でもあったミラルドの得意技でもあっただけに、見慣れこそはしていただろうが、まさか自分が直接受けるなど夢にも思わなかっただろう。

完全に予想だにできなかった技をまともに喰らったアリアは、ホール壁にまで叩き付けられてしまう。あまりのスピードに衝撃を受けた壁が破壊され、パラパラと崩れ落ちる石ころと砂ぼこりがレックスのパワーを物語る。

シオン「今のは不味いよ……！　アリア大丈夫!？」

アリア「イタタ……なんとか、ね。でもホイミじやちよつと限界あるかな……」

レックス「お前達、なかなかやる。今の一撃、よく耐えた。でも、そ

のままじゃいずれ体力も魔力もなくなって負ける。ヘタしたら、死ぬ。どうする、続けるか？」

アリア「……私が……死ぬ？」

——逃れられない死。それ以上もそれ以下もなかった。

今のアリアにとつては、最も心を抉る言葉だったのだろうか。

これが命を賭した戦いである事は二人とも分かっていた。ましてや学園長の言った通り、この程度の課題すらこなせないのであれば命がいくあつても足りないといふ。

ライオウを撃退した時のような不思議な力も、湧き上がってこないまま。

完全に自力であのレックスを倒さなければいけない現実に、アリアは一瞬ではあれど『降参』の二文字が脳裏をよぎってしまった。

レックス「そのカラダじやもう無理だ。諦めてかえ——」

しかし、だった。彼女はあくまで『不屈』だった。

レックスは最後まで言い放てなかったのだ。

現に年端もいかぬ、たかが少女の不屈なる瞳に、飲まれてしまっている。

アリアはまだ諦めていない。レックスの斧を握る手の力が未だ抜けない。

この塔から数多の戦士を送り出してきたレックスの瞳が、勝負はこれからだと告げていた。

アリア「ねえシオン。まだやれるよね……？」

シオン「僕はほとんどダメージを受けていない。アリアさえ無事なら、何も心配いらんよ」

アリア「……オツケー。なら『もう一度』よ！」

信じられない。あれだけの絶望的状况から立ち直った、とレックスは驚愕せざるを得なかった。

これまでレックスは、今のような絶望的状况から逃げ帰る生徒達を何度見て来たか分からない。

別に勝てないと思つた戦闘から逃げる事は別におかしい話ではない。むしろ勇敢と無謀をはき違える愚か者よりは何倍も優秀だ。

……だけでも、あの二人。特にアリアからは、まだやれるという明確な意志が存在していた。決してヤケになつたり自暴自棄に陥つた訳ではなく、だ。

レックス「面白い。まだ何か出来るというのならその力、見せてミロ！」

両者とも完全に居直り、アリアは再度突撃を図ろうとする。

しかし、『待った』と制止をかけたのはシオンだった。

シオン「アイツにパワーとパワーの勝負で挑んだってまた無駄な駆け引きになるだけ。かと言って中途半端な迎撃じゃ焼け石に水。だったら——『ピオリム』を使って、下手に受け身に回るよりも……！」

——アリアとシオンの素早さが上がった！——

アリア「そうね、ナイスよシオン！ なら私も……『コレ』で！」
剣と斧がぶつかり合う反動を利用し、一度大きく間合いを取ったアリアは全身から魔力を漲らせると、握りしめた『はがねの剣』が淡く白い光を纏いながら、鋭い雷気を帯び始める。

レックス「なんだ、そのヒカりは……」

アリア「私の秘技の一つ、聖と雷の刃『稲妻雷光斬』よ。悪いけど、これで一気にカタをつけさせてもらうわ！」

レックス「面白いッ！ ならオレの炎に耐えられる力！」

息を大きく吸い込んだレックスは、なんと口から『激しい炎』を吐き出した。

草木など軽く燃やし尽くしてしまいそうな襲い来る強烈な熱波に、シオンは流石に防御に回ってしまう。

だが、もう一人の少女は違った。

レックス「なんだとッ！ キサマ、オレの炎を正面から受けて、何故！」

アリア「カタをつけるって言ったでしょ。私は、こんな所で——ッ！」

竜の炎にできえたじろがない恐るべき少女、いや『聖剣士』は自身の持つ力を振り絞って、全ての試練に打ち勝たんとする。

渾身の力を込めてアリアが振り下ろした稲妻の刃。慌ててレックスが防御姿勢を取るが、ピオリムによつて俊敏さが増した故か、あと寸分かというタイミングで間に合わせられなかった。

そしてその一撃は正に『会心の一撃』となる。

連なるようにして直撃したバトルレックスの悲鳴と咆哮が、相当のダメージを負わせられた事の証明だった。

試練の塔の守護者は遂に片膝を突き、戦闘不能になる。

——バトルレックスを、やつつけた！——

アリア「や、やったあ……！」

シオン「本当に勝ちやったよ……」

自分達の勝利を噛み締めると、お互いボロボロの身体を見つめ合いながらハイタッチを交わした。

レックス「……よくやった。お前達、強い。ここ、アケル」

全てを尽くして戦った二人に対し、レックスは台座への道を譲る事で賛辞を示す。

アリアは台座に上る前に、レックスに対してとてもにこやかな笑みで「ありがとう」と、言った。レックスは何も言い返さなかったが、満足に浸った同様の笑みを見せるだけでアリアは十分だっただろう。

台座に近づくとよりダーマの紋章が鮮明に映るが、それ以外にも気になるものがあつた。

その下には誰かの名前らしき文字がびっしりと掘られていたのだ。

始めは何の事かと思つたが、すぐに答えが二人には出た。

シオン「今までここに来て、試練の塔を攻略した以前の生徒の名前が書かれてるんだね。何百人いるんだろう……。ほら、よく見ると今のダーマ学園にいる先生たちの名前もあるよ」

自分よりも遙か先に名前を連ねたものが、この名前の数だけいる。それは即ち、今の時点では自分らの実力を凌駕する人間が少なくともこの名前の数だけ存在する事実。改めて世の中の広さと、自分がどれだけ矮小だったかを痛感せずにはいられなかっただろうか。

——そんな時に、突然謎の光が紋章から放たれる。

その光は生きているかのように帯状に動き出し、やがてアリアとシ

オンの右手に紋様を描き始めた。

アリア「この紋章ってダーマにあるのと同じ……」

シオン「……そうか。これこそが、ダーマに認められた『証』なんだね」

光は役目を終えたように消えると、二人の右手にはエマリー学園長と全く同じ『ダーマの紋章』が刻まれていた。

それは二人が冒険者として解き放たれた瞬間でもあった。

先に喜びを噛み締めたのは、もちろんアリアだった。

アリア「……やったあー！ これで私も、世界に旅立ってるんだあーっ！」

余程テンションが上がり切っていたのか、一目散にホールを砂塵を巻き上げて全力疾走し、あつという間に姿を消したアリア。

部屋には終始呆気に取られたシオンとレックスが残るのみだったが、まだあれだけ体力があつたのかとこの時ばかりは敵味方関係なく思ったに違いない。

レックス「元気なヤツだ。さあ、お前も行け、少年よ」

シオン「え、ええ。でもアリアなんか何も言わずじまいでいなくなっちゃって、ホントに申し訳ないったらありやしないっていうか、ええと……」

先の戦闘で負った傷すらも忘れてしまうくらい、シオンはいつになくしどろもどろだった。

だけでもレックスは一笑に付すだけ。

レックス「戦いに始まり、戦いに終わる。それが戦士の定め。もう、ここに用はない。久しぶりに楽しめて、よかった。——さあ、行け」

二足の竜は、自らの大斧で彼の行くべき道を照らしました。

すると一瞬だけシオンは考える。

考えた後、全力を以って戦った相手に深く頭を下げると、潔く立ち去ったのだった。

第七話 グラランダリオンの王女

場所は再び学園長室に戻る。

盛大に送り出したものの、やはりどこか心配ではあったエマリーだった。

窓の外を仕切りに見たり見なかったりしては、仕事机に置かれた処理済みの書類を何度も読み返したりしてどこか落ち着かない。

時刻もそろそろ夕刻に差し掛かる頃。

日没になる前に戻ってこなければ、いくら付近の魔物はあまり強くないといえどつい先日にも魔物の襲来が起こったばかりだ。再び最悪の事態に見舞われる可能性は十分にある。

ましてやあの方向音痴のアリアだ。介護役のシオンが傍にいても心配事は尽きない。

こうなれば自分で焚き付けた責任もある。二人が返ってくるまで正門で出迎えようかと、思い始めていた。

——その頃に、二人は帰って来た。

扉から放たれた轟音に、イオ系の呪文かと思まうばかりに。

エマリー「な、何事!？」

アリア「もつどりしましたー!」

シオン「いきなりだし不躰過ぎるでしょッ! 学園長がびっくりしちゃうよ!」

エマリー「い、いえ、問題ないわ……」

正直、心臓がバクバクだったであろうが、己のプライドに天秤に架けた末に決して明かさなかった。

そこからは、今まで二人が塔に入りダーマの紋章を手に入るまでの報告を済ませるだけだった。

アリアは相変わらず方向音痴。塔に入っても落とし穴に二人仲良くまんまと引っかかる。更にはアリアが宝箱に目がくらんだ挙句まんまと騙され、シオンに助けを求める。それを見て一時は本気で帰ろうかとも思ったと。

だけでも、『試練』に真っ向から挑んだアリアの姿は、とても輝いて

いた。それまでの失態など取り戻すどころかお釣りが出るくらいだと。

そうした末に手に入れた物は、アリアなしでは成し得なかった大事な戦いの勲章だったと、シオンは誇らしげに述べた。

それを聞いていた学園長は、とても満足気だった。

自らが筆頭となって率いるこのダーマから、また新たな希望が巢立つのだ。

そう思っていたのか、エマリーはどこことなく瞳が潤んでいたようにも見えた。

エマリー「さて、これで貴方達は晴れて『冒険者』です。ダーマを出て北へ往くも、南へ往くも全ては貴方達次第……とは言っても、今のままでは何処へ行けばいいかも分からないでしょう」

そこで、と言って学園長が机の上に広げたのはなんと『世界地図』だった。

アリア達から見て西の大陸の中央付近に手を添えた学園長は、まず自分達がいる場所『ダーマ学園』に指を指す。

アリア「世界ってこんなに広がったんですね……」

エマリー「ふふ、そうよ。私達のいる『ヴェストガル大陸』なんて全体のほんの一部にしか過ぎないわ。他にも風と水が優雅に流れる『東のエトスン大陸』。氷と雪に覆われし『北のノアニエル大陸』。砂と炎が舞いし『南のスルアース大陸』。ざっと述べただけでもこれだけの地があるわ」

未だかつてダーマとシオンのシオンの産まれ育ったリーフィの村しか見ていないアリアにとっては、未知にあふれたものばかりだった。

エマリー「本題に戻るわ。いくら貴方達と言えど、これから先二人だけで冒険をするにはとてもではないでしょうが絶対的に『パーティーの頭数』が足りないでしょう」

シオン「……それは僕も思っていました。なので自分なりに考えていた事があるのですが、……どうやら学園長と『考え』は一緒のようですね？」

エマリー「そうです。シオンはやはり覚えてた様子ですね。ここ
ダーマから北東に進むと見えてくる『グランダリオン帝国』。そして
その中にある冒険者御用達の場所『ルイーダの酒場』を訪れるのです」
冒険者と一口に言っても様々な目的や用途を巡って各々旅をする
のが当たり前だが、目的こそ違えど、手段ならば他の冒険者と被る。
というのはよくある話だ。

つまり、特定のモンスターを狩りに行く者。決められた素材や物品
を要人に届ける運搬任務。人里離れた場所へ長旅をする冒険者もい
れば、隣町の商店への納品だけが目的の『おつかい』程度の簡単な任
務だってあり、正にピンキリ。

ピンキリとは言っても、本来はあくまで個人で目的を遂行できなけ
れば生活が成り立たない。

だが、怪我をした。病気にかかってしまう。モンスターが怖くて目
的地までたどり着けない。そんな様々な事情を抱えて目的が滞って
しまうケースが多いのが実情だ。

そんな救われない人達のために『依頼所』という一つの取引所を設
け、公約の下に目的を明かし、各町各国から寄せられた無数の依頼を
『クエスト』として取りまとめ、一人では無理であるならば有志を募り
『パーティ』として結成しクエストを遂行する。

その結果、無事達成できた者には『報酬を与える』事で持ちつ持た
れつの関係を生ませる。

冒険者達の憩いの場。情報交換所。旅の仲間を募るギルドシステ
ム。どれも旅をする上では欠かせない冒険のイロハを一つにまとめ
た場所が『ルイーダの酒場』なのだ。

アリア「私はたまに先生からその言葉を聞く時があったんだけど、
正直よくわかってないんだよね」

シオン「まあ、詳しい事は行ってみたら分かるんじゃないかな。ひ
とまずは最初の目的地が決まったね」

エマリー「今日の所は泊まっていきなさい。荷物をまとめる必要も
あるでしょうし、冒険許可証も明日には発行しておきます」

アリア「はい。……本当に、長い間お世話になりました」

学園長に向かつて深くお辞儀をすると、これまでの思い出を振り返りながらアリアは目元から涙を数滴零し、シオンはいつまでも瞳を閉じていた。

長年苦楽を共にしてきたこのダーマとも、いよいよ別れの時が来る。

常に勇気ある少女は何を考えていたのだろうか。

常に沈着を忘れずにいた少年は何を思っていたのだろうか。

旅に出る。それはごく単純で、簡単ではあるが難しくもある。

冒険をする。それは希望に満ち溢れているが絶望も常に蠢いている。

だけど後悔はない。今更振り返る事もないであろう。

エマリー「貴方達に、いつまでも強き心と神のご加護があらん事を

手を組み、エマリーは天に祈る。

その頃には既に二人の姿はなかった。

だけでも、祈りはしばらくの間続いていた。

清らかな心をいつまでも忘れ得ぬように、この祈りがどうか決して無駄にならぬように、神の祝福が幼き少女と少年に届くようにと。

忘却の聖少女は今、遙かなる旅路を歩み出す。

二人がこれから向かおうとしているグランダリオン帝国には、近い将来に国のしるべとして導いていかなくはならないと民から評されている、魔法の才において大陸一いや世界一ではないかとも噂されている『賢者の称号を持ちし王女』がいた。

メラゾーマ、マヒヤド、イオナズン、ベホマラーといった大体的な高等呪文は当たり前の事、ラリホーマ、バシルーラ、マヌーサ、ラナリオン等と玄人好みの呪文でさえも網羅し、彼女以上に呪文を習得している者はいないのではないかと謳われる、グランダリオンにおいて今最も有名な人物と言っても過言ではないだろう。

しかし賢者としてはこれ以上ない存在であるにも関わらず、彼女が

魔法を実際に使う所を見たものは誰一人としていないのだ。

当然『それ』に対してもまた噂が流れる。

ある街人はいつかグランダリオン帝国に本当の危機がやって来るまで、力を蓄え続けているのだと言う。

またある街人は実は王女なんて初めからいなく、まやかしの存在なのではないかとまで吹聴する。

果たしてどれが真実なのかを知る者は、残念ながら帝国内においては誰もいなかった。

——ただし、今現在国王の間にいる者を始めとする『ごく一部を除いて』だ。

「……さて愛しき我が娘よ。今日こそはワシの選りすぐりの戦士と共に、王家の洞窟に赴いてもらおうぞ」

「イヤですわっ！ こんな新調したての旅人の服と鉄の斧を装備した戦士なんて、名ばかりの冒険初心者丸出しではありませんの!」

「仕方あるまい。余りにも腕が立ちすぎる冒険者ではお前が手を抜いてしまうからな。それではまるで意味がないのだよ」

「仮にもただ一人の娘を、こんな何処の馬の骨かも分からない野蛮な人達と一緒に洞窟へと放り出しますの! 私には仮にも王家にまつわる身で、しかも王女ですよ!」

「身柄ならはつきりしている。我が国内で多大なる戦績を収め、爵位も授けた貴族としても有名なレウニー家のご子息達だ。これならば共に切磋琢磨して鍛錬に励めるであろうに、何を不満に持つと?」

本気でそう思っていると聞いたげな国王に、王女はわなわなと震えると有無を言わさぬ迫力で思いつきり怒鳴りつけたのであった。

「……話になりませんわっ！ ワタクシは部屋に戻りますッ!」

どうやら王女は国王の態度が余程腹に据えかねたようだった。ずかずかと出入り口まで歩くと扉まで怒り狂ったかのように激しい開閉音を立て、その場を後にする。

残された国王は、またかとはばかりに深い深いため息を漏らす。

二人のやりとりの所為で文字通り存在が影に隠れていたが、すぐ横には同じようにどうしたものかと思つめる初老の大臣もいる。

「これでまた振り出しか……。どうしたもののかのう」

「焦ってはなりませんぞ国王様。今は年頃の娘が故、色々な思いもありましようぞ」

「しかし大臣よ……。他の貴族にも頭を下げ、果てにはあの『酒場』にすら依頼として申し込みかれこれ丸一年は経つのだぞ。そろそろ国民にもあらぬ噂が出始めているのはとうに分かっている」

「……それも存じ上げておりますとも。ですが、ここで事を急いでは今までの我慢も全て無駄になるやも知れませぬ。どうか、草むらでじつと鳥を待つ狩人のようにその時が来るまでは耐えるしか」

「……我が娘は獲物ではないのだがな」

「い、いえ。私ともあろうものが、大変失礼を致しました」

「いやよいのだ。そなたの言い分は何一つ間違っておらぬ」

自分は親でありながら娘の気持ち一つ読み取れぬ愚か者なのかと、国王は自分の無力さを今はただ噛み締めるしかなかった。

王は怖かったのだ。愛娘の『真実』が、そう遠くない内に白日の下に晒されるのが。

故に王はただ縋るしかなかった。

誰か、誰かおらぬのか。——と。

だがしかし、悩み多き国王の問いに答える者は、いない。

王が信頼を寄せる大臣でさえもだった。

第八話 ルイーダの酒場

アリアとシオンはダーマ神殿とグランダリオン帝国を結んだ地点に流れる川の上に架けられた橋を越えようと、橋の関所に滞在する衛兵にダーマの紋章と冒険許可証を見せると、無事にグランダリオン入りを果たせた。

民家の屋根よりも高い外壁は、侵入者を防ぐ為に城下町をぐるっと取り囲むように建てられ、ネズミ一匹ですら容易に立ち入らせない高密度の頑丈な造りとなっている。

入り口から王城までの道は大きな凱旋通りにもなっており、パレードや祭事の際にも民が気軽に参観できる仕組みなのだろう。

通りには大人子供様々な街行く人や商人が「安いよお買い得だよ」などの謳い文句を声高々に上げ、活気に満ちた街全体をアリアはただ呆気に取られて見てるばかりだった。

シオン「僕は二、三度来たことがあったから少しは慣れたけど、アリアは小さい頃にダーマに向かう途中で外から見ただけだったもんね」

アリア「すごいねー。やっぱり大きい街に来るとなんか冒険の後のオアシスを見つけたって気分になるね！」

シオン「いやまだ全然冒険してないでしょ……」

はしやぐアリアを他所にシオンは『ルイーダの酒場』を目指し歩き出す。

街の入り口近辺に案内図があつたのでそれを目印に目指すと、程なくして酒の看板が架けられた建物を見つける。

流れるように中へと入ろうとするシオンだったが、ふと足音が連なつて聞こえて来ないのを感じてか振り返る。

シオン「アリア立ち止まってどうしたの？ 中に入らないと」

アリア「い、いやー。この中に沢山の旅慣れた冒険者がいるんだなーと思うと、妙に緊張が……」

相変わらずアリアの物怖じするタイミングが読めないシオンだったが、こんな所で黙つていても仕方がないと思つたのか、手を引っ張

りながら強引に酒場へと入る。

入った瞬間、全員の視線がこちらへ向いた。

戦士。武闘家。僧侶。魔法使い。盗賊などと、より取り見取りのメンツが集まっておりベテランから新米漂わせる旅人と、正に十人十色だ。

冒険者たちの憩いの場とはよくいったものだった。

煙草の煙で充満された部屋には、大型の卓上で木製のジョッキに溢れんばかりにたつぷりと酒を注ぎ、顔を火照らせガハガハと下品に笑いながらすっかり出来上がっている中年男性。トランプを用いた賭け事で盛り上がるテーブル席一同。カウンター席でそれらをうるさそうに睨み付ける、女盗賊。

その中で不運にも、タチが悪そうな酒をグビグビとあおる中年男性とアリアは目が合ってしまった。

不味いとアリアは直感したが、やはり遅かった。

中年男性「おおーう？ マスター、ひよっ子冒険者ちゃんのお出ましだぜーい！ ホラホラ初心者にはやさしくしねーとよお、ガハハハハッ！」

アリア「い、いえいえお構いなくです……」

シオン「ああいうのは無視だよ。さっさとマスターの所へ向かう」

明らかに全員が場慣れしているのに、自分だけがあの男の言う通り初心者丸出しなのがアリアにとって苦痛だったに違いない。だが、今の二人に必要なのは旅の仲間だ。

酔っぱらいの相手などしている暇などないと言わんばかりに、シオンはカウンターにまで素早く歩み寄る。

シオン「すみません、僕達まだ旅もして間もないんですが誰か一緒に同行してくれそうな仲間はいますか？」

マスター「おお、こりやまた随分若い冒険者だなー。冒険許可証はあるかい？」

二人とも懐から取り出し酒場のマスターへ渡すと、感心したように「確かに間違いない」と相槌を打った。

これでなんとか旅の仲間はなんとかなりそうだと、安心しかけた二人だった。

——だが、現実には中々に非情である。

なんと、丁度昨日でほぼ粗方のパーティが結成されたばかりで新規で募集しているパーティが無いのだとマスターは言う。

待てるのなら二人の名を登録するとマスターは言ったが、他の冒険者が名乗りを上げるのはいつになるかは全く分からないのはいくら旅慣れていない二人とはいえ、予測ぐらいはできただろう。

マスター「それにその、言いづらいんだが……。二人ともまだ見た感じ未成年だろう？ だからそれなりに経験のある冒険者からは、まづ敬遠されると思った方がいい」

アリア「そんなつ！ 私達だってそれなりに魔物との戦いは経験あるんですよ！」

前のめりになって反論しようとしたアリアだが、それを制したのはシオンだった。

我に返ったアリアがふと周りを見渡すと、くすくすと明らかに嘲笑を含んだ『笑い』があちこちから漏れていたのに気付く。

アリア「ご、ごめん……」

場所を弁えず冷静になれなかったアリア。

戦闘経験は積んでいたと少なからず自負していた。

しかしそれは所詮、自分が井の中の蛙である事を露呈させただけに過ぎない。

アリアは自分の意志で外に出て、初めて冒険者という立場になる事であろうやく、本当の意味でのひよつ子に過ぎないと痛感したのだった。

彼女が今までに無い屈辱と無力感に苛まれたのは初めてだったのか、心あらずとも握りしめた拳がわなわなと震える。

シオン「……アリア。周りの雰囲気は流されちゃダメだよ」

アリア「分かってる。……分かってるよ」

もちろん彼女とて頭では分かっていた。

しかし早くも出鼻をくじかれ、このまま何も得られないまま時だけ

が過ぎていくのかと思うとアリアはいても立ってもいられなかった。アリアは酒場のマスターに先ほどと変わらぬ勢いで再び詰め寄った。何でもいい、何か自分達に協力してくれそうな依頼はないかと。これに対し、マスターはどうしたものかと唸らせていた時だった。頭に灯りがぱつと灯ったように手を叩き、何かを思い出したのだ。

マスター「もう依頼が来てから既に丸一年は経過してるから、実はこの昔に忘れていたんだがね……」

カウンターの奥に置かれている年季の入った古めかしい戸棚をあまり、取り出したのは分厚くなつた書類の束だった。それをパラパラとめくり、一枚の書類を二人に見せたものは『依頼状』だったのだ。

内容を見ると、見た目はごく普通の『冒険者募集』と書かれた一般的な依頼状だった。

対象となる冒険者も、本人の経験向上の為腕が立ちすぎずも、ある程度経験のある冒険者を極力求むとなっており中々うってつけではないかとアリアは喜んだ。

アリア「なにに、『洗礼の儀として王家の洞窟に潜むゴーレムを倒しゴーレムの欠片を持ち帰る事』だって。目的は割と普通の洞窟探索って感じなのかな？」

普通通りの反応をしたアリアとは対照的に、書いてある内容に目を丸くしてしまったのはシオンだった。

シオン「いや……待ってくださいよ。依頼主が『キーツボルト国王』って。まさかこれは現国王から直々の依頼なんですか!？」

酒場のマスターはこくりと頷いた。アリアも当然、名だたる依頼主の名前に素っ頓狂な声を張り上げてしまう。

マスター「現国王の娘、すなわち『王女ルイ』様だね。その方が去年に13歳を迎えて初等教育期を終えた為に、洗礼の儀とやらを行わなければならんのだとよ。最初の頃はもちろんひっきりなしに『王女様となら是非』って色んな連中が名乗り出たもんさ。……だけでもんな門前払い。なんでも、王様は『強すぎる冒険者はダメ』。逆に王女様は『弱すぎる冒険者はダメ』。て感じで言い分が全く逆らしいんだ。お陰で呆れ返って帰って来る冒険者ばかりで、終いにはその噂が街中

に広まって今じや誰も依頼を受けなくなっちまった。つい最近、どつかの名うての貴族が久方ぶりに王様とルイ様の下に足を運んだらしいけども、結果は全く分からねん」

話が終わってみればなんとも神妙だった。

要は親子のすれ違いによつてもつれた結果なのだが、そこまでしてお互い譲れない一心で長い間『洗礼の儀』とやらがつまづいてしまうモノなのか、現時点の二人では詮索する事もできずロクな答えは出てこなかった。

アリア「でもこれってさ、ひよつとしてチャンスなんじゃない？」
シオン「チャンスって……まさかアリア、王女様の下へ行く気なの？」

本気かと言いたげなシオンの視線にアリアは強気に頷いた。

確かに裏を返せば、誰も名乗らない以上自分達が王女と行動を共にできる絶好の機会ではある。

——だがうまい話にはすべからく『理由』がある。

シオンが警戒しているのはその部分にあった。

マスター「例の貴族さん方ですら話が通らなかつたんなら、お嬢ちゃん達がもしかしたら最後の引受人になるかも知れねえが……。まあ、謁見するだけならタダだしな」

例え王であろうと子供であろうと、依頼を引き受けた上で何が起くるか、そこからは自己責任となる。

それが自由と引き換えに背負わされた、冒険者の業だ。

得をするか損をするか。下手をすれば生死の瀬戸際にまで追い込まれる。

中年男性「おいおい。今や名だけの賢者と言われた王女様の下に、お嬢ちゃん達本気でいくつもりかあ？ どうせ突き返されるのがオチだぜえー、ガハハツ！」

相変わらず茶化しにかかる酒喰らいの男性の言葉が耳障りで仕方なかったが、シオンには一つ気がかりな発言があった。

シオン「名だけの賢者……？」

アリア「いいじゃんこの際なんでも。このまま黙って何もしないで

いるよりは絶対マシだよ！」

考えを変える気はもはや無いようだった。シオンもこうなつては腹をくくるしかない、了承した。

不可能を可能にしてくれる。自分の信念は意地でも曲げない。

例えそれが国王という雲の上のような存在でも、揺らぎはしないだろう。

そんな神秘の力と人間らしさを秘めた少女にシオンは助けられ、何度も絶望の淵から生き延びて来たのだ。

シオン「でもそれは……アリアだからこそ、なのかな？」

アリア「……え、私？」

マスター「それなら王城に行くといいさ。入り口の兵士に冒険許可証を見せりやすぐに通してくれるだろう」

アリア「分かりました！ 行こうシオン！」

例えほんの少しの希望でも、アリアは強気な瞳を宿して歩を進める。

ならばと、シオンはその背中をただ守る。

それは今までも、これからもだった。

第九話　アリアと王女の重なる過去

外から見た王城は圧巻の一言だった。

景観をしっかりと意識した造りを見せながらも、大砲や投石器の基本的な設備は常備の上、高度な魔法を行使するための魔法台も設置され、二階のバルコニーには弓兵などの遠距離隊が壁の隙間から狙い撃つアロースリットも等間隔に施されていた。

城門や外周も敵の侵入を決して許さぬよう多くの兵士が巡回しており、万全の態勢を常に取っている軍帝国として世界に名を馳せているだけの事はある。

しかしいつまでも見とれている訳にもいかなかった。アリアはここに来た目的を思い出すと早速城門の兵士に冒険許可証を見せ、要件を伝える。

兵士「おお、ルイ様の付き添いを希望される冒険者か。ここ最近めつきり訪れる者もいなくなっていたから王様も喜ばれるであろう」
謁見を許可された二人は城内に入り鮮やかに彩られた内装にしばし目を奪われながらも、正面の階段を登るとすぐに謁見の間が見えた。

扉を守る両脇の兵士に「そそうのないように」と諫められながら、身の丈の何倍もある大きな扉の前に立つ。

ごくりと唾を飲み込んだアリアは、扉に手をかけ覚悟を決めるとシオンに「入るよ」と促す。

アリア「……失礼します！」

広大な謁見の間の奥には果たして二つの玉座があった。

そして向かって右隣の玉座に腰を掛け、厳格にこちらを見つめる初老の男性。

あの男性がこの国を治めるキーツボルト国王なのだと思信する二人の目に、間違いはなかった。

国王「ほう、格好を見るにまだ若い冒険者だと見た。して謁見を希望かな？」

シオン「はい。単刀直入に申し上げます。王様が依頼された『王女様のお供の件』で伺いにやって参りました」

国王「ほうほう、我が娘の件でか。……なんだとツ!」

その時の王の反応たるや、正に椅子にバネが仕掛けられたと思わんばかりの飛び跳ねっぷりだった。

隣にいた同じくらしいの年相応の大臣らしき人がなだめるが、興奮はなかなか収まらないようだ。

国王「いかん、こうしてはおれん。——ステラ、ステラはいるか!」
世話しない様子で国王が呼んだのはどうやら妻のようだった。

すると間もなくして扉から現れたのは妻ではなく、メイド服に身を包んだ女性だった。

メイド「ステラ様は自室にて公務をなさっている模様です。ルイ様も同じく自室にて勉強をなさっている様子かと」

国王「ううむ、二人ともこんな時に揃いも揃って……。だが仕方あるまい、ワシやステラが行ってもルイは跳ね除けるであろう。そなた達は我が依頼の内容は粗方分かっているのだったな? ——ならばだ」

理由を聞く間もなく、二人は国王から唐突な提案を告げられてしまった。

そしてその末に二人が向かった先はというと――。

シオン「なんで僕達がいきなり王女様のお迎えなんかしなくちゃ……」

アリア「まあまあシオン。王女様と直接話せるんだからこれはこれで、ね?」

仕方ないけどもと顔に描いた不満をもちや隠す事もなく、アリアはメイドから案内された部屋の入口の前に立つと、ドアを優しくも確実にノックする。

するとしばし間を置いた後、甲高い少女らしき声で「……誰?」とドア越しに聞こえて来た。

アリア「突然の無礼を失礼します。私達は国王様のご依頼により参

りましたアリアと申します。王女ルイ様でしょうか？」

隣にいたシオンはアリアがこんなにも丁寧にしやべるのが意外だったのか、少し驚いた表情を見せる。

奥からの反応はなく、静寂はしびし続いた。

やがて歩み寄る気配をアリアが感じ取ると、ドアが遠慮がちに半分だけ開く。

シオンはドアの向こう側から現れた相手を見て、すぐにある点に気づいた。

シオン「それは『賢者』として認められしものだけが着れるとされる『悟りの衣』では……？　ではやはり貴方様がグランダリオンでも功名高く、未来の大賢者とまで称されたルイ様ですね？」

ルイ「……ええ。確かに、そうですね」

アリア「うそっ?!　このちっちゃな女の子がホントに賢者なの？」

シオン「アリア……地が出るの早いよ」

——そうだったのだ。正しくアリアの言った通り、彼女はまだ『小さな女の子』なのだ。

薄桃色の髪をツインテール状に束ねて腰下まで伸ばし、さらけ出していた二の腕からは真珠のような瑞々しい素肌を輝かせ、真ん中から左右に分けた前髪から見開かれる漆黒の大きな瞳は幼さを存分に残す。全体的に発達しきっていない小ぶりの容姿からは賢者と呼ぶにはいささか早く、自分達よりも更に低い年齢なのではと二人は何っってしまう。

シオン「国王からは話は粗方存じ上げております。洗礼の儀に向かうべく僕達はやって参りました。ご同行できますでしょうか？」

二人とも酒場のマスターから王女の事情を既に周知済み。もちろんすんなり受けてくれるとは思っていなかっただろう。

しかし相手は、まだアリア達と同じくらいの年頃。

ならば同じ年齢同士でいくらか話し合う余地ならばある筈だと、この瞬間までは二人とも高を括っていたのかも知れない。

ルイ「……イヤですの。帰ってくださいませ」

しかし、現実は無理。

彼女が示した態度は、断固とした拒絶だった。

更に冷たくあしらうように、二人に背を向けてしまう。

ルイ「……私は戦うのが大嫌いなんです。小さな時からそうやって未来の大賢者だの、我が国の安寧を保つだのって、この国の為だけにずっと縛られて、自分の好きな事は何一つさせて貰えない。それだけならいざ知らず、自分の意志で満足に外にすら出られない。友達だって一人もいない。魔法だってたまたま私が興味を持ったから呪文を覚えられて、その結果賢者になれただけ。なのに戦い以外に関わる事をしようとすれば『いつまで王家の使命から逃げて我儘ばかり通すつもりか』って、お父様はそればかり。お母様もお仕事に追われて私の言葉にもロクに耳を貸してくれない。……もううんざりですわ」

アリア「……そうやって、今までの冒険者も全部断つてきたの？」

ルイはアリアの問いかけの真意が分からず、思わず頭だけ振り返ってしまう。

だがそれも束の間、すぐに頭を逸らす。

ルイ「……いいえ、全部ではありません。正直洗礼の儀は早く済ませたかったから、強い冒険者達とならば一緒について行こうとむしろ喜んで手を上げました。けれどお父様は許可しません。かといって、生きて帰れるかも分からないどこぞの知れぬ冒険者達などとは一緒に行きたくありませんでしたから、お父様がなんと云おうとほとんど門前払いしてきましたわ」

アリア「……だったらどうして、私達には門前払いしなかったの？」

それはアリアならではの实直な気持ちだった。

決して悪戯心や野次馬根性で聞いているのではない。

単純に自分よりも幼い筈のこの子が、どうしてここまで追い詰められているのかと、アリアは思わずにはいられなかったのだ。

ルイ「貴方達が一番、私と同じくらいのご年齢だったからかも知れませんわ。……さあ、これでもう話す事はありませんわね、早く——」

もう用はないと、ルイが二人を追い返そうとして再び向き直った時だった。

ルイ「なんですの、その手は……」

アリアは握手しようと、ルイに向けて差し出して差していたのだ。しかも律儀に戦闘用のグローブまで外して。

アリア「——さつき言つてたよね。友達が一人もいないって。だったら、私が『友達』になるよ。……ううん、なりたくないかな！」

シオン「な、え、アリアっ!？」

それはシオンですら驚いてしまう程だった。

孤独なる王女に対して、アリアが提示したものの。

——それは手の平と一緒に差し出した『一片の友情』だった。

ルイ「……おっしゃってる意味がよく分かりませんわ。私達は今会ったばかりの、ただのアカの他人なのですわよ?」

アリア「誰だつて最初はみんなアカの他人だよ。でもそこから何かが始まるんだったら、私が『女王様の最初』になってあげたいなって」
ルイ「だからどうしてわざわざアナタが、今出会ったばかりの私の為にそこまで致しますの!？」
何か特別な借りがある訳でもありませんのに、アナタでなければいけない理由はなんなのですかッ!？」

気付けば肩から怒ってしまう程に、感情が高ぶってしまったルイだった。

別にルイの怒りが異常なのではない。

出会ったばかりという心境を考えれば、ルイから湧き上がる感情は至極当たり前に過ぎない。

それは長年アリアに寄り添っていたシオンもまた同じ気持ちであった。

だからこそ、分からない。ルイには読めない。目の前の気高き少女の『真意』が。

アリア「それは、私も『独り』だからなんだと思う」

ルイ「……ますます意味が分かりませんわ。独りも何も、アナタのすぐ隣に相方がいるではありませんの。バカにするためだけにそんな事言いましたの?」

アリア「ううん、違うのっ! ……私って自分の事が良く分からないくて、今でも不安になる時があるし、気付けばこんな事をしてたって感じで……」

俯きながら自嘲気味に呟くアリアに誰も返事をしなかった。

いや、返事をしなかったのではない。

二人は待っているのだ。彼女の言葉の続きを。

アリア「ごめんなさい、正直なんて言ったらいいか分からない。……ただ、偶然育った場所に偶然優しいみんながいた。その中でシオンととても仲良くなれた。……でもそれとは別に、私が知ってるのはルイ王女みたいに周りの人や本から得たダーマ学園の知識だけで、肝心の『自分の内側』はさっぱり分からない。私がどこで産まれて、何者なのかは、誰も知らない。そう考えたらとても怖くて、自分って改めて『独り』なんだなって思うのかな……」

ルイ「どういう事ですの……？ 何故貴方の産まれを知る人が誰もいませんか？ ご両親がいるのでしょう？」

アリア「私、小さな頃の記憶がなくなっただけ。その所為でお母さんの顔はうっすらとしか覚えてないし、自分の産まれた場所なんて当然知らなくて、気付いたらリーファイの村って場所にいたの。けど連れて来た肝心のお母さんは村に着いたらすぐ死んじゃったし、お父さんに關しては誰も見た人もいない。だから、村の人達やシオンと出会えたのは本当に偶然だったの。じゃなかったら私もきつと……ううん絶対一人ぼっちだったと思う」

アリアは本来、天涯孤独の身で目の前の少女と似た運命を辿るはずだった。

だけでも今はこうして救われ、親友と出逢い、自分を求める旅に出ている。

いや、本人にしてみたら『出る事ができている』と思っただけだろう。だからこそ、アリアは目の前の少女に自らの過去と投影させてしまった。故にルイに懇願する。

アリア「……ねえ、一緒に行ってみない？ ダメだと思ったら、すぐに引き返せばいいんだから！」

あくまで必死だった。彼女の純粹な眼差しは、ルイの瞳から一瞬たりとも逸れる事なく、輝き続けた。

そんな彼女の熱意がようやく伝わったのか、凍てついた氷が太陽の

光を浴びて次第に溶けていくように、ルイの表情にもようやく変化が表れた。

ルイ「……私なんか知識だけの頭でつかちで、呪文を扱うだけの魔法力なんてまともありませんのよ……？　そんな足手まといでもいいと、アリアさんは本気で仰りますの？」

弱々しくどこか涙声混じりのルイにも、アリアは強気に応えた。

アリア「アリアでいいよ。ルイは賢者になれるくらいすぐく頭がいいでしょ？　だったら、弱くなんかないよ。何より私が貴方の前を絶対に護る。——だから平気っ！」

誰が何を言おうとも、アリアは太陽のような微笑みを崩す事は最早なかった。

ルイ「分かりましたわ……ついて行くだけですわよ」

小声ながらも二人はようやく手を取り合いアリアは嬉しそうに、ルイは恥ずかしそうに頬を赤らめながら視線を逸らす。

それは、ルイの長年の閉ざされた心がようやく開き始めた瞬間だった。

——ルイが仲間に加わった！——

謁見の間にルイを連れて戻って来たアリア達は、国王にこれから三人で王家の洞窟に向かうと告げた途端、なんと人目もはばからずに大泣きしてしまった。隣で聞いていた大臣も余程嬉しかったのか目尻に涙が浮かんでいる。

ルイ「……一国の長ともあろうものがやめてくださいませ。威厳も何もあつたものではありませんわよ」

国王「よい、よいのだあ……！　ようやく娘の門出を祝う事ができると思うと涙が止まらぬわあー！」

アリアもシオンもこればかりは困り果てるしかなかった。

本当にこの場所は、仮にも一国の未来を担う場所なのかと。

アリア「えっと、とりあえずここを出ようかな……」

シオン「それがいいね……」

グランダリオン王国の未来。

いや王女ルイ自身の未来を決める『洗礼の儀』が、アリア達の手

よって始まるうとしていた。

第十話 不穏なる洗礼の儀 『◆』

旅の準備を済ませてグランダリオンの入口まで戻って来た3人だが、最初に訪れた入口とは正反対の位置にある場所。つまりは王城の裏手にある裏口に来ていた。

ルイが誰からも見送られずに出発したいと言い出したのだ。ルイが王家の洞窟へ向けて出発した事を知っているのは、王を初めとする身内の者と、裏口を警備していた数名の兵士のみ。その兵士等も最初こそ驚いたもののルイの事情を察してか、「ご武運を」と敬礼するだけに留まった。

自分の身勝手な事情だというのに、手厚く送り出してくれる兵士にルイは心から感謝するばかりであった。

アリア「……よし。じゃあ出発だね！」

まずここから北西に向かった先にある『王家の洞窟』へ向かう。

そしてその奥地に潜んでいるゴーレムと戦い、ゴーレムの欠片を持ち帰る事。

目的としては比較的楽な部類には入るであろうが、当人のルイは戦闘経験が皆無。その点をどう補うかもアリアにとっては重大な課題でもある。

そんな思いを張り巡らせながら出発しようとした時であった。

シオン「……今更で悪いんだけどさ。アリアもルイ王女も、本当にこれでいいのかい？」

それは彼にしては、やや遠回しな問い掛けだった。

まだ裏口と言えど若干は人目につく街の中で、シオンは珍しく懷疑心を露わにしながら。

シオン「アリアの気持ちも分かる。ルイ王女の言い分だって間違っちゃいない。……だけど僕達がやろうとしているのは『本当の旅』なんだ。一歩間違えた判断が死に直結する事だってザラだよ。はい死にました、じゃ済まないんだ。アリアはともかく、王女様は本当にその事を分かっているのかな？」

ルイ「……なんですのそれ。ならやっぱり大人しく帰ってじつとし

てろって言いたいんですの？」

お互いに懸ける想いがあるからこそ、どちらも不快感を隠さなかった。

思えばシオンは国王に頼まれた時からずっと浮かぬ顔をしていた。それがいくら一国の主からの依頼であるとはいえ、役目と責任を丸投げされたような状況に相当な不満を抱えていたのだろう。

シオン「違うよ。確かにアリアは王女様を護るとは言った。けどもそれに甘えるつもりなら僕は反対だ。自分の弱さを誤魔化す言い訳にだつてならないし、何より貴方自身の向上には全く繋がらないよ。『自分から立ち向かう』という気持ちが生まれぬ限りはね」

それは冒険者であれば全くの正論だった。

だからこそルイは歯ぎしりから伝わる悔しさが募るばかりで、何も言い返せない。

アリア「ま、まあまあ！ それは少しずつ慣れて行けばいいじゃない！ いきなり無理に戦いに加わったってそれこそ命を粗末にしちゃうし、戦闘の流れを見て知る事だつてとても大事なんだよ！」

このままではいけないとアリアは本気で思った。三者三様の気持ちのまま戦闘に臨むのはパーティとしては致命的な弱点になるからだ。

そして弱点の原因ははつきりしている。

からこそ、ルイは先に口を開いたのだろう。

同時に、懐に収めていた『武器』を取り出しながら。

ルイ「……私だつてそれなりの覚悟は決めましたの。指を啜えて眺めているつもりありませんわ」

それは、鞭の一種である『チェーнкクロス』だった。

鞭の基本的な動かし方や手捌きなど一連の動作を見せると、決して素人の動きではないのが二人にはすぐ分かった。少なくとも見積もつても三ヶ月以上は扱ってきたと踏んでいたが、それは常人の発想であると思ひ知らされる。

アリア「すごい……！ その鞭捌きはいつから覚えたの？」

ルイ「多分一週間前だったと思いますわ。丁度一年経ちましたし、

お父様がいい加減痺れを切らして無理矢理放り出されるかも知れないと思つて、密かに練習してましたから」

シオン「い、一週間!? 流石は軍神とも称されたキーツボルト国王の血を引くだけの事はあるね……」

ルイ「……でも所詮非力な私の鞭ですし、それに私はいくら多くの呪文を習得しているとは言つても『肝心の魔法力が皆無』です。自分でも情けなくなりますけれど、精々メラを二、三発を撃てる程度ですわ。今ではもう『名だけの賢者』つて噂されてるのも、とうに知っています……」

控えめに言つても足手まといである事は当然自他共に分かつていた。

パーティとしても、彼女をサポートしつつ戦わなければいけないのは本来ならば相当の足枷になつてしまふからだ。

むしろルイがいない方が目的のみを果たす上ではスムーズに進められるのは明白であるからこそ、このハンデは戦力的にかなりの痛手となる。

シオン「そうか……。王女様の魔法を見た者が誰もいないつて言うのは、そういう意味だったんだね。いくら知識が豊富で呪文を覚えていても唱えられなきや意味がない」

ルイ「……ええ。これでも正式な賢者なのですから殊更恥ずかしくなります……」

アリア「……心配ないよ。誰でも始めは怖いし、強くなんかないんだから。……大事なものは、前に進むとうとする『勇氣と心』だよ!」

シオン「……随分と臭い台詞だけど、まあそうだね。もうここでグチグチ言つてたつてしょうがないか」

最初から結果ばかりを求めていてもそれは詮無き事。

ならば後はひたすらに前進あるのみ。

アリア「じゃあ行こう。——『王家の洞窟』へ!」

アリア達はグランダリオンからの道中も特に苦勞する事はなく、難なく目的の場所へと到達できた。

三人が見つめた先には、巨大な竜が口を開けたようにぽっかりと空いた洞穴。

穴の先には地の底へと誘うように闇が奥まで伸びる道のりが続き、王家の洞窟の入口までやって来たのだと知る。

外から見る限りは至って普通の洞窟だ。特筆する特徴もなければ、怪しげな罫や仕掛けも見当たらない。

何はともあれまず中は入らなければならぬ。アリアを先頭に後ろにはシオン。ルイを前と後ろから守る陣形を維持しつつ先を進んでいく。

いかにもモンスターがいそうな洞窟の見た目とは裏腹に、一階にはモンスターどころかスライム一匹すら影も形も見せなかった。

拍子抜けしたままに、地下二階へと降りる階段を見つけ難く降りていく。

アリア「王家って名前がついた割には随分と無骨な洞窟なんだね。もっとド派手なイメージかと私思ってた」

シオン「……いや。無骨って程でもないかもね」

月並みな意見を言うアリアに対し、シオンの反応は若干色が異なっていた。

シオン「一階部分と比べて、地下二階は通路や壁の形が妙に整っている。それこそ『誰かがこの洞窟に手を加えた』みたいだね」

ルイ「……そうです。シオンさんの言った通りですわ。私も、城の書物に書かれていたこの詳細を知るまではアリアと同じような考えでしたけれども」

アリア「……この洞窟の詳細？」

ルイ「この洞窟は、実は王家と全く無縁の場所である可能性が高いのです。それは初代からずっと手掛かりが掴めずにいる『とある場所』があるからなのです……」

ならばその『とある場所』とは何処かとアリアは聞こうとした。

——だがその先を聞く事は叶わなかった。

突如洞窟内に反響する、地の底から唸るようなおどろおどろしい叫び声によって問い掛けは遮られてしまう。

そして声の主は近い。分かれ道にもなっていた通路の曲がり角を注意深く覗いた先に『それ』はいた。

——魔物の群れが現れた!——

影そのものが実体のシャドー。泥に魂を吹き込まれた存在のドロューバ。極めつけは名うての冒険者でもできる事なら戦いたくない『ばくだんいわ』が数体。

しかしまだモンスター共はアリア達に気づいていないのが救いだった。

アリア「どうするシオン? 結構相手にしたくないのもいるからここは逃げた方がいいのかな……?」

シオン「そうだね……できるなら無用な戦闘は避けたいね」

ルイ「……ま、まさか逃げるんですの?」

そのまさかだった。

シオン「——今だ!」

モンスターの気が最大限に緩んだ隙をついて、三人は一気に通路を駆け抜けた。

運動自体に慣れていなかったルイにとっては、短距離のダッシュでさえも息が上がる行為だった。だが二人とはぐれる事は今の自分には死に直結する。意地でも離れる訳にはいかないと、必死で食らいつく。

先を走っていたアリアだが、走る事ですら不慣れであるルイの様子にはすぐに気が付いた。

心配そうに振り返りながら少しスピードを緩めると、辛そうなルイの速さに合わせながら手を取る。

モンスターも一時は追いかけて来てはいたが、距離があまりに離れ過ぎていたのか諦めは割と早かった。

——アリア達は、逃げだした!——

前途を不安とさせる逃亡から始まった洗礼の儀。

アリア達は果たして、無事にゴーレムの欠片を持ち帰る事はできるのだろうか。

第十一話 現実と非情

走っている内に地下への階段を見つけた三人は勢いのままに、階段を転げ落ちるように降りていく。

地下三階へと降り切り、完全に巻いた事を確認した後方のシオンは「ひとまず小休止をしよう」と、階段の段差を利用して腰かける。

これくらい運動などは日常茶飯事だったアリアとシオンだが、今まで引きこもり同然でもあったルイは未だに息を乱していた。

アリア「……ねえルイ、大丈夫？ 先に進めそう？」

心配そうにアリアはルイを見つめるが、彼女の呼吸が整うには今しばらく時間がかかりそうだった。

周りの風景も二階とは比べ石畳が敷き詰められたような整った通路に変わり、壁や天井にも整備が行き届いているなど更に手が加えられていた。

下へ潜る程、整った外見とは裏腹に立ちほだかる脅威が増していくのでは——と、普段は鈍感なアリアにも不穏な予感がよぎる。

一方のシオンは疲れて憔悴しているルイを見つめていた。——グランダリオンを出た時と同じ瞳で。

シオン「やっぱり危険だよ……。悪い事は言わない、引き返した方がいいよ」

ルイ「な、なんですって……？」

シオン「さっきのモンスターなんて恐らく目的のゴーレムと比べたら、全然違う強さのはずだよ。相手の数だつて一体じゃないかも知れないのに、正直僕はルイ王女を守りながら戦うのは無理だよ……」

無理と突き放されたシオンの言葉が、ルイを貫いた。

アリア「だ、大丈夫だよ。ルイは私が——」

ルイ「もう結構ですわッ！」

張り詰めたルイの金切り声のアリアを遮り、場を支配する。

——これが現実だった。

自分でも最後のチャンスだと思った。だからこそルイは多少無茶な冒険になろうとも、ゴーレムの欠片を持ち帰るつもりだったのだら

う。

しかし結果はどうだ。ゴーレムに会うなどもつての外で、道中のモンスターにすら惨めに逃げる始末。最終的には自身の弱さを完全に露呈させただけ。

出発前に指を啜えて見ているつもりはないと、どの口が言っていたのか。

その台詞は、ルイ自身が一番身に受けていたに違いなかった。

ルイ「——よく分かりましたわ」

呼吸はようやく整ったものの、無気力なままに立ち上がる。

かと思った次の瞬間、突如彼女は振り返ると、そのまま降りて来た階段を引き返し始めた。

アリア「ちよちよつと待って！ 一人でどこに行くの!?!」

ルイ「シオンさんの言う通り、私にはまだ早すぎたんですのよ。

……だから城へと帰ります」

アリア「そんな……！ 一人じゃ危険だよ、せめて私達が見送って

——」

ルイ「脱出呪文の『リレミト』を一度使うくらいの魔法力ならばありますわ。それと、アリアの心遣いには本当に感謝いたします。……だからもう、お願いですから私に構わないでください……!」

それは彼女が王家ならではの、切なる『悔しさと惨めさ』だった。これ以上恥さらしにはなりたくない。そう思ったルイの叫びに、アリアが伸ばした手も空を切るだった。

階段を駆け上がる乾いた靴の音も彼女の姿と共に遠ざかり、やがて完全に聞こえなくなってしまう。

アリア「シオン、いくらなんでも言い過ぎだよ！ ルイだってそのくらい分かってて来てるのにどうして……!」

シオン「……分かってる。でも命が掛かっているのは事実なんだ。一般人であろうと子供であろうと魔物達は『ルイ王女を殺すつもりで』こっちに攻撃してくるんだ！ ……僕達には『万が一すら許されない』んだよ!」

いくらアリアが守るとは言ってもそれは絶対ではない。ルイはお

るか、アリアもシオンも命の保証などどこにもないのだ。

だから今回とて最善手を尽くさなければならなかった。パーティの中軸として冷静な判断を常にしてきたシオンだからこそ。

結果として時期尚早だと判断した彼は、ルイの退却を促したただけの話に過ぎない。

シオン「ルイ王女がない以上、僕達もここに用はないよ。簡単な周辺の探索に留めて早い内に帰ろう」

アリア「……そう、だね」

帰って報告をしなければならぬ義務も二人にはあつた。誰も死なずに帰れるのだから、まだましな方なのであろう。二人はそう思う事にした。

いや、そう思わなければやりきれなかつたのだらう。ルイを守ると誓つたアリアならば尚更だ。

非情な現実を突きつけられた若き賢者の少女は、未だ止まない涙を拭い去りもせず走り続けていた。

やがて体力の限界が再び訪れたのか、ルイは息を切らしながらも立ち止まる。

——ここまで来ればあの二人も追つてこないだろうと、ルイは詠唱を始めると魔法陣を展開し始め、王家の洞窟の脱出を図る。

だが、魔力を込めていた手がふと止まる。

『——これで本当にいいのか?』と自問自答するルイ。

洗礼の儀は歴代の国王ならば誰でも通つて来た道。もちろん彼女の父、キーツボルトも例外ではなかつた。

皆が命を賭した苦しい戦いをしてまで掴み取つて来た王家の証を、自分だけが投げ出すのか。戦いなんて本来誰だって避けたいのに、自分は嫌だという個人的な理由で。

確かに魔法分野においては賢者という称号を獲得するにまで至つたが、肝心の戦いで何一つ振るう事は無かつた。

だがそれは当然だった。彼女がそれを拒んでいたからだ。

今の自分の状況は、それらからずつと逃げ続けて来たいわば『ツケ』

だった。

ならばここまで行動を共にしてくれた彼女達に報いるためにも、もう一度戻るべきなのではと、脳裏をよぎる。

ルイ「でも戻った所で、今の私に何が……？」

今のルイにとってアリアの純真さが痛かった。シオンの視線が辛かった。

やはり大人しく帰って、今度は父に今までの愚かさを詫びようと心から思った。

……しかし、どちらにせよ全てが遅かった。

自分を追い詰め過ぎていた所為で、背後からくる『気配』に今まで気づけなかったのだ。

慌てて彼女が振り返った先にいたのは――。

――ストーンマンが二体現れた！――

ここが洗礼の儀の場所であると同時にモンスターに住処でもある事を、ルイは完全に失念していた。

ルイ「しまった……この距離じやリレミトが間に合わない……！」
非力なルイでもこれまで野外に出て、モンスターと不意に出くわした事は何度もある。

その度に彼女は、移動用呪文の『ルーラ』を逃走に使う事で戦闘を切り抜けて来た。

だがここは仄暗い洞窟の中。天井に阻まれている所為で、緊急用として使ってきたルーラも使用不可能。リレミトもモンスターと出くわしてしまったため詠唱が間に合わず、唱えている暇がないという失態を犯す。ルイは絶体絶命だった。

最後に残された道はただ一つ。

彼女は残された力を振り絞り、今一度走り出す。

出入り口を塞ぐようにストーンマンが構えていたため、アリア達の間違った方向に進むしかなかった。

しかし今更氣にする訳にはいかない。自分の命が掛かっているのだ。

地下三階の階段が見えた所で、ルイは息を切らしながらも後ろを確

認するが、今度のモンスターはしつこかった。まだ奴らは追ってきている。

彼女の頭にはもう追っ手を振り切る事しかなかった。

奴らを振り切ったら改めてリレミトを使えばいいだけ。この場を凌げさえすれば後は何とかなる。

無我夢中で走ったルイはやがて行き止まりにぶつかると。

しまったと、最後にもう一度振り返ったが追っ手の気配はなかった。

——ルイは逃げ出した！——

ルイ「はあはあ……た、助かりましたわ……。それにしてもここは……？」

行き止まりにしては天井もこれまでよりも高く、妙に広い場所だった。

更に前方をよくよく見ると行き止まりではなく、壁の半分以上は面積を占めているかという『巨大な扉』だったのだ。

ルイ「扉に何か描かれていますわ……。これは紋章……。いえ、違いますわ。これは『大きな竜』……。まさか、ここが本当に……。？」

いつの間にか疲れを忘れフラフラと扉に近寄ったルイ。

しかしそれを阻むように、突如四方の壁から流れ行くように自然に飛び出してきた『無数の砂』。

扉の前に集まった砂は石となり、凝縮された石は巨大な岩となり、最後には『一体の巨人』となった。

ルイ「そんな……。まさか、これが『ゴーレム』ですよ!?!」

——ゴーレムが現れた!——

姿形こそルイを追ってきたストーンマンと瓜二つではあったが、大きさが三倍以上はあろうかという体躯にルイは完全に飲まれてしまう。

地面が揺れる程の大きな足音を響かせながら迫って来るゴーレムに、彼女はその場に尻もちを突いてへたり込んでしまい、最早起き上がる気力すら失せる。

だが戦意があらうとなかろうと、扉の守護者には関係なかった。

巨大な拳を振り上げ、迷わず彼女を標的にする。侵入者を排除するためだ。

ルイ「王家の身でありながら、自分の最期がこれほどまでに惨めだとは夢にも思いませんでしたわ……」

俯き瞳を閉じた彼女に一筋の涙が流れる。

果たしてこの涙の理由がいかなるものなのかは、誰にも分からない。

ただ彼女の最期となる寸前、二人の名前を嘆くように呟いていた。

一人は自らの父であるキーツボルト国王。

そして、もう一人は――。

第十二話 二人の魔法剣

ルイ「……アリア。こんな私で……ごめんなさい」

いよいよゴーレムの拳が無慈悲に振り下ろされる。

せめて痛みは少なく逝けるようにと、そうルイは願った。

やがて剛腕が唸る。大地が砕け、壊れ行く。

……しかし、ルイは不思議に思った。

何故音が聞こえると。何故この光景を肉眼で見られると。

理由は単純明快だった。

アリア「……ごめん、おまたせ。何とか間に合ったね……!」

幼き賢者を必ず守ると誓った約束は、決して嘘ではなかった。

紙一重のタイミングでゴーレムの腕に衝撃を加えたアリアが、見事に狙いを逸らしていたからだ。

ルイ「そ、そんな……、あ、アリアですの……?」

アリア「——私じゃなかったら誰だって言うの?」

顔だけルイを向き、太陽のようなはにかんだ笑顔は紛れもなく『彼女』だった。

ルイは溢れ出る感情を抑えられなかった。頭よりも先に身体が動き、これほどまでに頼もしいと思えた事はないアリアの背中に抱き着いて、ただひたすらに泣きじやくる。自分が王家だのなんだのと、今のルイには心底どうでもよかったのだ。

アリア「必死でモンスターから逃げてるのを偶然見つけたの。ルイが無事で本当によかったよ」

ルイ「アリア……本当にごめんなさい……! 私、私が馬鹿だったんですの!」

アリア「いいのいいの。無事だったんだからそれで良いじゃない」
まるで姉妹のようにじゃれ合い、ルイの頭をやさしく撫でるアリア。

最悪の事態だけは免れた事に後から到着したシオンも胸をなで下ろす。

シオン「……二人とも戦いはこれからだよ。その辺にして目の前の

『コイツ』をなんとかしないとね……!」

予想外の反撃に体勢を崩していたゴーレムも既に元通りになっている。

ここでようやく、ルイの為の『洗礼の儀』が始まったのだ。

アリア「いっくよーデカブツ!」

シオン「ルイ王女は後方でアイツの動きを監視してて! 決して前には出ない事!」

ルイ「わ、分かりましたわっ!」

まずは小手調べに、今やお得意の『疾風突き』でアリアが牽制する。頑丈そうな見た目とは裏腹に、胴体目掛けて打ち込んだ部分はパラパラと崩れ落ちる。

シオン「コイツは試練の塔のレックスと似たようなパワータイプ……。ならば『ピオリム』だ!」

——全員の素早さが上がった!——

元々盾を持たずに軽やかな動きで敵を翻弄するアリアにとって『ピオリム』は水を得た魚と同様だった。

ゴーレムに的を絞らせないように、前から後ろから。果てにはゴーレムそのものに飛び移り大胆に顔面目掛けて叩き込む。

大きすぎる図体が仇となる小回りの利かない箇所次々と攻撃を当てていく。

遠くで見守るシオンも負けじと、ゴーレムを更にかく乱させる為に矢を放つ。

視界に矢が入れば例え無機生物といえども何かしらの反応は見せるはずと、シオンは睨む。

彼の狙いは的中する。ゴーレムに飛んで行った数本の矢は薙ぎ払われ、当たることなく飛散する。

やがて大振りで払った腕は胸元を大きく晒し、アリアはここが好機と一気に踏み込み飛び出す。

アリア「これでえええ! ——岩をも砕け、『地裂斬』ッ!」

己の肉体ごと体当たりするように深く斬り込んだ『地裂斬』は豪快にゴーレムの岩片をまき散らしながら壁に激突する。

ルイ「すごい力ですの……」

風穴を空けるまでには至らなかつたものの中々のダメージを与えたと実感させる、大きく抉られた胸元。

これなら——いける。その場にいた三人がそう思った。

攻撃の手を緩めずも焦らずに追撃をしようと、アリアは一旦距離をとろうとした直後だった。

ルイ「いけないっ！ アリア離れてッ！」

その言葉の意味に気づくなら。或いはもっと早く言えたなら。

どちらにしても遅かった。

アリアがふと横を見た時には既にゴーレムの巨大な右手が眼前にまで迫り、避ける間もなく強引に鷲づかみされてしまったのだ。

振り解こうにも固く握られた拳はぴくりとも動かない。

何度暴れても結果は同じ。

やがてゴーレムは腕を上げ振りかぶると、そのまま力任せに地面へと叩き伏せる。

強靱な腕力で碎かれた床は、これまでで一番の地鳴りと共に叩き付けた手を中心に巨大なクレーターが広がる。

その中心にいたのは——アリアだった。

シオン「まさか……直撃……!?!」

ルイ「うそ……嘘ですわ！ アリア返事をしてッ！」

シオンもルイもこれが現実だと、直視できずにいる。

あんな巨大なモンスターから潰されてしまつてはひとたまりもない。別に冒険者でなくとも分かる。

それでも何とか返事をしてほしいと、ルイは力の限り叫んだ。今のルイにとってアリアは自分を認めてくれた唯一無二の存在。彼女が死んでしまうなど、万が一にも考えたくもなかった。

悲痛なルイの願いは——かくして『通じた』。

アリア「なんとか大丈夫だよルイ……! こんな……ところでえッ！」

なんと押し潰していた筈のゴーレムの手が、錆びた歯車がぎこちなく回り出すように重々しくも確実に上がっているのだ。

持ち上がった地面と手の隙間からは、白く輝く光が漏れだす。

やがてアリアの姿が見えるまでに持ち上がったゴーレムの手は、受け止めていたアリアの剣により完全に押し返され、反動によって驚いてしまったかのような動作で二歩下がる。無機生命体故に驚く感情などある訳もないが。

シオン「アリア……『その姿』はまさか、ダーマの時の……？」

アリア「……みたいだね。自分でも相変わらず分かんないけど、絶対に負けられないって思ったら勝手にね……！」

先のダーマの襲撃でも見せた、聖なるオーラを身に纏いアリアの髪が白銀色に光った不思議な状態。

ルイにとっては初めて見る姿に最初こそ少し驚いたものの、すぐに無事に生きていた喜びの方がすぐに上回り、再び泣きそうになってしまうのである。

ルイ「無茶しすぎですよ！ 命知らずにも程がありますわっ！」

アリア「ごめんごめん。でも今度はすぐに——終わらせるよ！」

これからが本当の勝負だと言わんばかりに、閃光の如く飛び出したアリア。

彼女が攻撃を繰り出すと岩が砕ける。ゴーレムの剛腕すらびくともせずに肉体のみで受け止め、厄介そうな攻撃は最小限の動作で避ける。

心技体全てが常軌を逸した今のアリアにとって目の前の敵など、ただのくの坊に過ぎない。

やがてなす術を失ったゴーレムは最後の手段を試みたのか、両腕で振りかぶり全霊を込めた一撃を放とうとしていた。

シオン「不味いね、これは魔力もかなり集まった一発だよ。下手したらこの部屋そのものが壊れかねないくらいだね……！」

ゴーレムの両腕に集う膨大な魔力の所為か、部屋中の空気が電気を帯びたかのように張り詰める。

あの拳が振りかざされれば今のアリアはともかく、残りの二人にはどれ程のダメージが及ぶかは到底計り知れない。

ならばと、アリアも剣に魔力を込め真っ向から勝負する気だった。

ルイ「アリア待って！　ならば私の『魔力』も一緒に放ってくださいませ！」

アリア「ルイの魔力も……？　どういう事？」

ルイ「あのような岩石系のモンスターは爆発のエネルギーを初めとする『イオ系』の魔力に弱いんですの。今の私ですと『イオラ程度』の魔力までしか込められませんが、力が一点に集まった『アリアと私の魔法剣』ならば、あの巨体に対しても十分な威力が得られるはずですよ！」

それはルイの頭に膨大な知識が蓄えられた彼女ならではの発想だった。

本来全体呪文であるイオを魔法剣として集束させ、物理威力と魔法力の相乗効果を生み出し、より強力な技へと発展させる。

賢者として行きついた考えであるのは確かだが、何よりこのまま自分だけが指を咥えたまま戦いを終えたくはなかったのだろう。

自分にも何かできる事が絶対ある。その結果行きついた『魔法剣』だ。

シオン「そんな無茶な！　本来無作為に敵に放つ魔法を、アリアの剣だけに遠隔魔力として集中させるなんて、どれだけの制御力が必要だと思ってるんだ！」

ルイ「……大丈夫です。任せてください……！」

シオンの反対にも応えた幼き賢者の瞳には、揺るぎない『自信』があった。

それを見ていたアリアにも不安や迷いはない。

アリア「むしろ、ナイスアイデアだよルイ……！」

ルイ「何回も攻撃してしまっただけは魔法力もすぐに薄れてしまいません。だからチャンスはあの腕を破壊する瞬間と、ヤツを仕留める最後の一撃ですわ！」

こくりとアリアは頷いた。後は敵が攻撃するタイミングを見計らって飛び出すだけ。

そしてその時は——すぐにやってくる。

ルイ「今ですわ——『イオラ』！」

ゴーレムが両腕を一気に振り下ろす。

合わせてアリアも加速的に相手の拳目掛け、剣を低く構えた姿勢で飛び出す。

拳がアリアに激突する刹那、一気に上段に薙ぎ払う。

その威力はアリアまでもが驚くものだった。

まるで柔らかな木の板を叩き割る感覚のままに放った魔法剣は、魔力が込もったゴーレムの拳を軽々と壊し、粉々にする。

完全に両の腕を失ったゴーレムは今度こそ止めの一撃となった。

アリア「これで……おしまい！ この魔法地裂斬で、砕けるおーツ！」

魔力集束された一閃は、相手がいかに巨大かつ頑丈であろうとも物ともしない。

イオの輝きで満たされたゴーレムの上半身を粉碎するに値し、やがて意志を持たぬ礫となって脆く崩れ落ちる。

——ゴーレムをやっつけた！——

ルイ「や、やりましたの……？」

勝利の余韻はすぐにはやってこない。

しばし、大波が来る前の潮の引きのように静寂に包まれる。

何度瞬きしても変わらぬ光景に、ようやく三人は勝利を実感する事ができたのだ。

アリア「……やったあああつ！」

アリアとルイは抱き合って喜び、シオンはようやく一仕事を終えられた開放感からか、ほっと一息をつく。

遂に洗礼の儀を達成する事ができた。役に立てないと思っていたルイが決め手を担ったのだから、その喜びもひとしおであろう。

シオン「これで王女様も晴れて一人前の王家の仲間入りだね。特に最後の遠隔魔法は見事だったよ。僕の頭なんかじゃ考えつかないくらいだね」

アリア「そうだよ。私でもシオンでもできない事をルイはやってのけたんだよ。だから私言っただよ？ ルイは弱くないって。その証拠に……ほら、コレ」

彼女の手に握られていたのは一つの石ころ。

しかし当然、ただの石ころではない。ついさつきまで激戦を繰り広げたモンスターの一部『ゴーレムの欠片』だ。

ルイ「そんな……。これが、本当に……？」

二人の言う全てが、目の前の真実がルイの胸に熱く沁みてたまらなかった。

真正銘己の力を出し切り、達成できる事がこれ程までに感無量になれるものなのかと。湧き上がる喜びを涙として抑えきれない。

ルイ「二人とも、本当にありがとう……。今までからっぽだった私でも、やっと大事な何かを掴めた気がしますの……！」

何をするにも引っかけりや嫌気を感じ、自分の意志ではなく他人の意志で振り回されて来たと思っただけの日々。

それが今日という日を迎えて、ルイ自身が本当の意味で『賢者』としての一步を踏み出せた瞬間だったのかも知れない。

アリア「——じゃあ王様に報告にいこっか！」

ルイ「……はいっ！ 今でもなんだか信じられません……！」

シオン「はいはい。いつまでも浮かれてないで、帰るまでが冒険だからね？」

アリア「もー。こんな時くらいは素直に喜びなさいよ！ ねえルイ、リレミトは使えるのよね？ パーツと景気よく帰りましょ！」

ルイ「あ、あのー残念ながら……。あの一発で『魔力切れ』ですの……」

まだ冒険中であるにも関わらずにぎやかなアリアとルイのお陰で、シオンは結局王都に着くまでは終始気の緩めない時間が続いたのだった。

しかし、彼の顔には旅立ち前の疑いの心はなく、ルイもまた一人の仲間として戦った『同志』としての心に満ち溢れていた。

第十三話 ルイの決意 『★』『◆』

王家の洞窟から戻った三人は、再び謁見の間に来ていた。

国王にとっては想定していたよりも早い帰りだったらしいのか、彼女らがこの場に来ると思ってもみなかった顔だった。

しかし帰りが早いという事は、やはり非力な彼女の實力では無理だったのだろうと早期断念による帰還だと国王は察し、とても残念そうに顔を下げてしまった。

ルイ「……お父様。なんだか勘違いしているようですけれど、私はちゃんと行って参りましたのよ？ ——ほら。『コレ』が見えませんか？」

国王「あい分かった。どうせその辺の石ころ……こ、コレはッ!？」

ルイが両手に持ち差し出したのは勿論ゴーレムの欠片。

食い入るように彼女の両手毎がっしり掴んだ国王はわなわなと震え、目が裂けるのではないかと周りが思う程に見開く。

国王「という事は……ほ、本当に『洗礼の儀』を済ませて来たのだな……!？」

アリア「本当です王様。ルイ王女は確かに他者に決して甘える事無く自分の力を発揮して、この欠片を手に入れたと私達が証明します！」

隣にいたシオンも力強く頷く。その瞳には嘘偽りなどなかった。

その事実には、国王も我慢の限界だったようだ。仮にも一般人だという事もはばからずルイに抱き着き泣き出してしまふ。

ルイ「お父様、恥ずかしいですわよ……。そんな事よりも私は……」

国王「よいのだあああ！ 今日という日に泣かずして、いつ泣けばよいと申すのだあああッ！」

昨日も同じような台詞を言ったばかりなのに、いつまでも泣き止まぬ国王にこれはどうしたものかと、この場にいた全員が思い始めた頃だった。不意に扉が開かれたのは。

ルイ「——お、『お母様』！」

扉から現れたのは煌びやかな装飾が施されたドレスを優雅に揺ら

し、王の妃の証でもある黄金の冠を頭につけたルイの母だった。

慈しみをもった柔らかな瑠璃色の瞳と胸元までやんわりとカールのかかった艶やかな紫の髪は、それだけでも高貴な印象を持ち合わせる。

国王「おおステラかつ！ 喜べ、今日は宴じゃ！ 遂に我が娘が！」

ステラ「そんな事はわざわざなさらずともよいでしょう？ ……それともルイは皆で集まって賑やかになる事をお望みかしら？」

ルイ「い、いえ。結構ですわ……」

貴族という言葉はこの人の為に存在するのではないかと、アリアもシオンもステラ王妃が近づくだけで自然と身が引き締まり、思わず畏まってしまふ。

ステラ「もつと楽しんでくださって結構ですよ。貴方がたはルイの……いいえ。私達の恩人でもあるのですから」

アリア「そんな！ わ、私達にはもったいないお言葉で……！」

慌てめいたアリアの言葉にも、ステラは首をゆらめくように横に振る。

そして母として長年秘めていたであろう想いを、堰を切って告白する。

ステラ「私も王も、ルイの将来につきましてずっと悩んでおりました。毎日娘の将来をと思うばかりにいつしか心を閉ざし、今日にわたってルイは戦いを忌み嫌ってしまった。このままでは帝国の将来が危ぶまれるとずっと考え、グランダリオンの先ばかりを昼夜問わずに案じました。……しかし今思えば、それこそが私が王妃である前に、彼が王である前に、『親』として成すべきことを間違えていたのでしょう。我が夫キーツは娘を思うばかりにいつしか過保護となり、私自身は娘の意志の尊重という言葉を盾に碌に顔合わせもせず、ずっと距離を空けていました。そんな娘の本音と長い間触れていなかった折に貴方達が現れ、ルイの本心と向き合っただけであげた。本当に……ただ感謝するばかりです」

長い言葉で母親としての愛を語ったステラ。最後は二人に向かって深く頭を下げる。

アリア「……どうか頭を上げてください。私はただ、一人の人間としてルイ王女と向き合っただけです。今回の結果は王女が奮起してこそ掴み取れたものですから」

国王「……いや、それこそお主らが真正面からルイの心と向き合ってくれた故の結果であろう。本当に今回ばかりは恐れ入ったよ。つい昨日まで洗礼の儀とは無縁に近かったルイがこんなに大きく成長して帰って来るとはな……。だがこれで、ようやく帝国の名に恥じず堂々と振る舞う事ができる。いや、下手すれば我が血を引くルイの事だ。軍団の訓練課程など軽々と乗り越え、近い内に真の賢者として活躍するのも夢ではないな！」

なんだかんだ言っても将来の末を考えてしまうのは最早親ならではの性なのか、気付けば先の事先の事とまた考えているのであった。しかし愉快的な国王を横目にしながら、何やらバツの悪そうな顔をするルイ。

ゴーレムの欠片を見せた辺りからずっと物言いたげではあったのだが、口を開くタイミングを見出せずにいたのだろう。

やがて場の和やかな雰囲気を通り切った口火を切ったルイは、恐る恐るではあるが自分の考えを少しずつ吐露し始める。

ルイ「……実はアリアと一緒に向かった頃からずっと考えておりましたの。洗礼の儀を終えた後、私はどうしたらよいのかと」

国王「……どういう事だ？ どうしたら何も、晴れて一人前の王女となれたのであろう？ ならば喜んで今こそ賢者として働けるではないか。今のお前にならば誰も反対する者などおるまい？」

ルイ「そうではありませんのっ！ 私は確かに生まれた時から裕福で、暮らして不自由など何一つありませんでした。……だからこそ、今回アリア達と一緒に少しではありますけども、冒険の何たるかというのを初めて知る事ができました。……だから、その」

ルイは一番伝えなくてはならない事がどうしても言えない。

父親の真意が読めない表情を見れば見るだけ、尚更いたたまれない気持ちとなり手をこまねくだけで空回りしてしまう。

だがそれも、母ともなれば娘の考えてる事などステラには全てお見

通しだった。

ステラ「——『旅に出たい』のでしょうか？　アリア達と一緒に」

国王「そうか旅か……。……な、何！　それはまことなのかッ!?」

ルイ「……その通りです。自分の手で外の世界に触れて、そして戦って、ようやく私が如何に未熟な賢者……。いえ、人間である事がよく分かりましたの。——だから、お願いです。アリア、シオン。この私もどうか旅に加えてくださいませ。今まで城に籠ってばかりで不甲斐無かった過去を、乗り越えたいのです……。！」

寝耳に水だったのは国王だけではない。ゴーレムと死闘を繰り広げたシオンも同様だった。

シオン「どうするんだいアリア……。この旅はアリアの感覚だけが頼りの、はつきり言ってアテが無いも同然だ。そんな不明瞭な旅に王女を同行させていいのかい？」

お互いの立場から不安な視線を送られたアリアは板挟み。どちらの意見もないがしろにはできない。そんな彼女が下した決断とは――。

アリア「ルイがそうしたいって言うんなら、もちろんいいに決まってるよ。……。ううん、むしろ私からお願いしたいな」

そう言つて柔らかに差し出した手は、ルイと初めて会った時と変わりがなかった。

そんな彼女に更に助け舟が渡る。

ステラ「キーツ……。ルイがここにいってもいまいと、いつ危険な目に晒されるかは誰にも分からないのです。むしろ、ここが名だたる場所だからこそ、明日にも魔界から本格的に侵攻されてもそれこそ不思議ではありません。そんな時に貴方は今のルイを必ず守れますか？　……その娘の身だけを案じてしまって、帝国を支え切れますか？　……そんな事が無理なのは分かっていますし。ならばアリアさん達と少しでも苦楽を共にして、強く逞しくなって帰って来るのを待っていただければいいのでしょうか。……。だって、私達が直接何をしなくとも、こ

うして『立派』になってくれたもの……。！」

母親としての真なる気持ちに聞かせられたルイは、またも瞳が熱く

なる想いに駆られた。

最初は己の悔しさに。

二度目はアリアの友を想う心に。

そして今は母親としての愛情をその身に受けて。

ステラ「それにこう見えても、私もキーツも若い頃に四大大陸を踏み歩いたのですよ？ だったら、ルイにもきつと。いえ必ずできる筈です。それにルイはもう一人ではないのですから……」

国王「す、ステラよ、何も今その話をせんでも……！」

流石は王を世界で一番知り尽くした人であった。

自分は世界を旅したのに、自分の娘には可愛さ故に籠の中の鳥にさせるつもりなのかと、容赦なく突くステラだった。

国王「あい分かった！ 皆がそれを望むなら、ワシはもう何も言わぬ。黙って娘を見送り、強くなる日を待ち侘びておこうではないか！

——冒険者アリアよ。ルイの事、どうかよろしく頼んだぞ！」

ルイ「お父様……本当にありがとう……！」

アリア「……勿論です！ ルイは私の友達なんですからっ！」

シオン「それを言うなら『私達』じゃないかな？ 僕も陰ながらル

イ王女をサポートしていきますよ」

アリア「あれ、いつの間にシオンも『友達』になっちゃったんだ？

ふふっ。素直じゃないんだからー」

シオン「う、うるさいなあーもう！」

三人の少年と少女が無邪気にはしゃぐ姿を遠目に見ていたキーツとステラ。

長らく娘の笑顔も泣き顔も見えていなかった親としては、冥利に尽きる瞬間だった。

これでしばらく娘を見れなくなると思うと寂しくもあるだろうが、どの子も必ずいつか親の元を離れるのだ。それは王女の肩書きを持つルイであろうとも例外ではない。

ステラ「皆さん、今日は色々な事があって疲れたでしょう。旅立ち
は明日にして、せめて今日だけでもこのグランダリオンで羽根を休めて、是非我が城にお泊まりになってください。重ねて申し上げます

が、あなた方は私達の心からの恩人です」

謁見の間の窓から漏れる陽光は、橙色が混じりつつあった。

ステラの言う通りにアリア達はここは甘える事にした。

そして自由時間となった三人の中でいち早くアリアの手を取り、外に連れ出そうと走り出したのはルイだった。

アリア「ちよちよっと、そんなに引つ張らなくてもー！」

ルイ「折角なのですから今日は楽しまなくてはいけませんもの！」

この街にあるカジノに私ずつと行ってみたかったですのよ！」

シオン「二人ともはしやぎ過ぎないでよー！」

吸い込まれるように謁見の間から消え去ってしまった三人。

残ったのは、この国を担わなくてはならない大人達だけ。騒がしい背中をずつと見つめながら扉が閉まるのを待っていた。

国王「……行ってしまったか」

ステラ「……そうですね。少々名残惜しくはありますが」

旅をしろと勧めたのはお前だろうと目が言っていたが、あえて口には出さない国王だった。子を思う親として、寂しいのはどちらも同じという事だろう。

国王「確かに先日のダーマの一件もある。ここも同じ目に遭うのは確かに時間の問題なのかも知れぬな」

ステラ「それでも私達はこの国を守らなくてはなりません。民の為に、そしてルイの帰る場所を無くさない為に……」

ルイも新たな決意を秘めたのと同様に、この二人にも守るべきものがなんなのか、ルイの旅立ちで改めて知る事ができた。

国王「しかしダーマか……ミラルドは元気にしているだろうか。あの一件で怪我を負ったとの報せも届いてはいたが……」

ステラ「あそこには頼れるエマリー学園長もいるのです。余程ではない限り心配には及ばないでしょう」

国王「そうか。旧知の仲であるお前が言うのだから、間違いないのだろう。四人で旅をしていた頃が懐かしいな……」

今をひた走る三人を見て、過去の自分が映し出されたのだろうか。

二人の目はしばしの間、どこか遠くを見つめ続けていた。

ステラ「ルイ……。どうか、いつまでも強き心を持ち続けるのですよ……」

第十四話 出発前夜

それから三人は一時の休息として、街を隅々まで堪能した。

ルイに連れられてカジノに着いた三人は手持ちの資金こそ少なかったものの、冒険とはかけ離れた別の楽しみを見つかる事で身体だけでなく、心の疲れも癒す。

カジノを目一杯楽しんだ後は大通りに立ち並ぶ露店を見て回り、アリアを筆頭に心行くまで楽しんだ。

極めつけは、すっかり夜の帳も降り切ったルイーダの酒場だった。洗礼の儀を終わらせたルイは、旅に出るという事で冒険許可証の発行を依頼しに来たのだが、ついこの前まであらぬ噂をかけられてた渦中の人物だっただけに、酒場の連中全員がルイ王女を見るなり文字通り釘づけだった。

特に年齢が近い魔法使いや僧侶からは、羨望の眼差しを送り続けられっぱなし。

そして、ある一人の魔法使いが「あの呪文はどうやって詠唱、構築するのか」と聞いてしまい、それがルイの賢者としての心に火が点けられてしまう。

実際には魔力不足で魔法は撃てなくとも、呪文を練る時の詠唱の仕方や魔法陣の構築などはかなり参考になるのだそうだ。

日常的な呪文は当たり前のこと、イオナズン、メラゾーマ、ベホマなどの詠唱もお手の物だったルイは今や完全に酒場の注目を完全にかつさらってしまった。

更に始末の負えない事に、ルイに歓声を上げる連中に混ざるアリアもいたものだから、カウンターに座りながら発行が終わるのを待っていたシオンは困り果ててしまう。

すると、シオンにとってベストタイミングで発行し終わった許可証が出された。

ルイ達を見ると、丁度ひと区切りがついた頃合いで次に見せる呪文はとルイが考えており、アリアを筆頭に心待ちにしていたのだ。

抜け目がないシオンはその隙を見逃さなかった。

盗賊の心得も持つ独特の忍び足で的確に二人の首根つこを容赦なく掴む。

ぎゃあぎゃああと騒ぐ二人を無視しながら酒場のマスターにお礼を告げると、ようやく騒ぎの場から抜け出せた。

シオン「全く……いくら自由時間だからって羽目を外し過ぎない。特にアリア！」

アリア「はあーい……」

ルイ「私も調子に乗りすぎましたわ……。もうクタクタですよ」
明日には早速ここを出るというのに、こんなノリで大丈夫なのかと心配になるシオンだった。

そして彼にはかねてからもう一つ気になっていた事もあり、心配のついでに思い出したようにしゃべりだす。

シオン「ルイ王女がこれから一緒になるのは分かったんだけど……これから何処へ向かうかの予定は決まってるの？」

誰に言うでもなく言った言葉だったが、アリアはその問いは全く予想していなかったのか、しまったと言わんばかりに大きく開けてしまふ。

ルイ「それでしたら……ここから海を越えた先にある東のエトスン大陸に上陸してはどうでしょうか？ この大陸の玄関口とも呼ばれてる『港町エルマータ』から定期船が出ていますからお金さえ用意できればいけますわよ？」

シオン「確かにあの大陸には、世界で最も活気に溢れていると言われる商業都市リュツセルや、ミステイア女王が統治するミストラル王国もある。情報不足な今の僕らにとっては、これからの手掛かりが一番掴めそうな場所かもね」

アリア「ほえーすごいねー。シオンもルイも物知りだねー！」

シオン「ダーマの授業でいくらでも習ったでしょうに……」

ルイ「シオンさんはともかく、私は書物を読んでたら頭に入ってただけの知識に過ぎませんのよ。いくら知識があっても、それをいつまでも溜め込んでいてはいつかは腐りますわ。いつまでも振るわない知識など、単に宝の持ち腐れですのに……」

自嘲するルイに、シオンは返す言葉が見つからなかった。
しかし、やはりアリアは違った。

いつの間にかルイの前に回りこんでいたアリアは、か弱き少女の漆黒に染まった瞳をただ真つ直ぐに見つめ、強く頭を横に振る。

アリア「それは絶対に違うよ。ルイ」

ルイ「アリア……？」

アリア「私はシオンやルイみたいに頭がよくないからさ、いつも頭よりカラダが先に動いちやう。その度にいつもシオンに怒られる。……怒られるって事はさ、それはやつぱり『本当は考え直さなきゃいけない』って事だと思っただよ。考えないから失敗して怒られる。でも私には先の事を考える事ができない。それが私にとっては難しい事だから。それが、ルイにはいくらでも考える事ができる。一杯知識を集めて、悩んで、悔やめてる。それだけでさ、ルイはすごい事をしてるんだなって思うの。……その証拠にルイは『賢者』なんだからね？」

ルイが何度でも自分を否定するならば、アリアは何度でも彼女を肯定する。

気付くとルイはアリアに抱きついていて。特に何をする訳でもなく。

アリア「……帰ろう？」

母親のように優しく諭したアリアの囁きに、ルイは顔をうずめたまま頷いた。

一方のシオンは、夜空を眺めていた。

真つ黒な空そのものを見ているのか、無数に光るいずれかの星を見つめていたのか、黄昏た表情からは読み取れない。

アリア「世界ってこうやって改めて見ると、広いんだね……」

シオン「そうだね。とてつもなく広いよ」

果てしなき世界を歩んだ先に見えるモノは、何なのか。

アリアはただひたすらにそれを知りたくて、歩を進めて来た。

その先にあるのが幸か不幸かなど、今の彼女にはどうでもよかった。

ただ、『知りたい』。——それだけだったのだ。
それからの三人は何も言わずに、城へと帰った。

客用の寝室へと案内された二人は、城に用意されただけあって今までに見たどれよりも豪華だと、驚き感心した。

しかし驚いたのはほんの数刻。一日の疲れも相当に溜まっていたのだろう。寝床につくと、すぐに睡魔が襲ってきた。

後少しで夢の世界へと誘われる、という時だった。

寝室のドアが静かに音を立てて開いたのは。

淡い水色の寝間着に身を包み枕を両手で抱えたルイが、やや恥ずかしそうに立っていたのだ。

アリアは今にも寝入りそうな目と声で、彼女の名前を不思議そうに呼んだ。

何をしに来たのか分からなかったルイだがアリアの寝ているベッドにまで近づくと、そのまま隣へ潜り込んでしまう。

ルイ「だめ……ですの？」

今にも消え入りそうなルイの声にアリアは優しく頭を抱きしめた。

アリアは瞳を閉じたまま、何かを考えていた。

ダーマにいた間は、今までアリアは一人で寝る事はなかった。

シオンと一緒に部屋だった彼女には、いつも話す相手がいた。

だが、今アリアの目の前にいるか弱き賢者は違う。

王女という生まれ持った身分に縛られ、周りからすると聞こえこそは良いだろうが、その裏には計り知れない将来と使命が重くのしかかっていたのだ。

相談をするに近い存在もおらず、すり寄って来る相手と言えば王女という肩書きにつられて来るものばかり。

そんな日常を送り、ふと周りを見渡せば十数年もの間、独りだった。そう思うとアリアは身震いせずにはいられなかった。

ほんの少しでも孤独になる瞬間が怖くて仕方ないのに、それを自分の何倍何十倍という時間孤独だったルイは一体どんな気持ちだったかと思ったのか、ルイを抱く力も強くなってしまうていた。

そんなアリアの腕を、ルイはゆっくりとほどき、目を合わせた。

ルイ「大丈夫……今の私にはアリアがいますの。だから今度こそ、怖くなんてありませんわ……」

もう心配はいらない。それが精一杯アリアが気持ちをぶつけてくれた、ルイの感謝だった。

これから先長い旅になる上で、背中を互いに預け守ってくれる存在というのには必要不可欠だ。

だからこそお互いに懸ける気持ちは大きく、揺らがなかった。少なくともシオンが安心できる程には。

シオン「二人とも早く寝なよ……。明日は早いんだから」
未だに寝付けない二人だとシオンは思ったようだった。

それを聞いた二人は、悪戯心に時めいた子供のようにクスクスとせせら笑いながらも、ようやく眠りについたのだった。

第十五話 これこそ王女の本領発揮

翌朝を迎えた。

アリアとシオン、それにルイも新たに加えた三人は大通りの前に立ち並び、これからの大まかな方針を決めていた。

シオン「まずは昨日も言った通り、港町エルマータに行つて、船でエトスン大陸に向かおう。その後商業都市リユツセルに向かつてミストラル王国が現状の最終目的地となる。……て感じでいいのかな、ルイ王女？」

ルイ「そうですね。外に関する情報ならあの大陸が一番有力な場所ですし、アリアに関する手掛かりも何か掴めるかも知れませんわ。……それと、シオンさんも私の事は呼び捨てでも構いませんのよ？」

シオン「……そうだね、これからは一緒に旅をする仲間だ。じゃあ僕の事も呼び捨てで言う事だろうか？」

お互いに納得し合った表情を見て、アリアも肩の荷が降りたといった所だった。

アリア「そういえば定期船っていくらお金がかかるの？」

ルイ「ええつと確か……一人あたり3、400ゴールドくらいだったかと思えますわ。もしかして手持ちが足りませんか？」

シオン「えつとどうだつて。ダーマを出てからお金がいくらあるか全然見てなかったね。……僕としたことが」

アリア「エマリー学園長から旅立つ時にもらったお金はまだあるんじゃないの？」

シオン「そりやまあ、あるけども……」

エマリー学園長から「門出を祝して」と1000ゴールドを貰っていたのは、大きな助け舟となった。これだけあれば、道具を必要最低限ならば買うのにも困らないし何より宿にありつけるのは非常に大きい。

これにアリアとシオンの手持ちを合わせて合計で1340ゴールドだった。錢袋に入った黄金色の財宝を見つめてアリアは終始うつと。

しかしルイは、アリアとは真逆の苦い顔つきだった。それもそうだろう。このままでは船代でほとんど使い切ってしまうからに他ない。

アリア「ねえねえシオン、せっかくだし何か武器防具見にいきましょう！」

シオン「……まあ見るだけならいいけど」
がつくりしても知らないよと、言いかけたのをシオンはあえて飲み込んだ。

ここは一つ、外の世界をあまり知らないアリアの為に社会勉強の一環として現実を見せてやるのも一興だと、シオンは思ったからに違いない。

アリア「うそ……『鉄の鎧』が1200ゴールド？ え、こっちの『破邪の剣』に至っては4400う!?!」

シオン「まあこうなるよね」

武具屋の主人からしたら、突然名もなき少女が鼻息荒くして突っ走ってきた少女を見てなんたるやと思っただろう。終いにはがくと膝をついたり、店主ではなく相手に対してこの値段はなんだと怒鳴り散らしたりと、最早一人芝居の境地である。

シオン「僕たちの何気なく装備してるこれだって、本来はかなり高価なものなんだよ。武術大会の優勝賞品の『鋼の剣』だって、もちろんいい値段がするよ」

アリア「そんなあー……。折角新しい剣が買えると思ったのに……」

買うつもりだったのか。と言いかけた他二名だった。

ルイ「まあまあ、武器に関してはこれから新しい街にいくんですし、それから考えればいいのですわ！ 今私は5600ゴールドありますけれど、どうしてもアリアが仰るのですしたら、お城の方からお金を引き出しても……」

シオン「いや、それはアリアが自堕落になっていくだけだからお気持ちだけで！」

未練がましく武器を見つめるアリアをシオンはとりあえず引つ

張っていった。この場にいたらいつまでたつても先に進まないだろう。

ルイ「と、とりあえず街から出たほうが良さそうですね……」

シオン「エルマータはここから東に進んだ場所だったね。ささ、行こう行こう！」

その後、街中にとつともなく少女のデカイ声が響いたとか響かなかったとかで、一日の噂を持ち切ったグランダリオンであった。

シオン「それにしても、街の人達も王女の旅立ちだって言うのに、誰も見送る人がいなかったね」

ルイ「お父様にお願ひしておいたのです。私が旅立つ事はどうか身内だけの内密にしてほしいと」

シオン「それでも誰かしら勢い余って、声援の一つでも送るものなんじゃないのかい？」

ルイ「今まで外に出る事などほとんどありませんでしたもの。外に出たとしてもお城の裏から直接ルーラで飛び立ってましたから、民衆の目に留まる事はほとんどなかったんですよ」

アリア「そうだったの……。でも、ルイは本当にそれでいいの？」

ルイ「いいのですわ。その方が正直気楽ですし、何よりアリア達がいるから寂しくはありませんの」

アリア「……そっか！　じゃあルイ、改めてよろしくねっ！」

ルイ「ええ……！　こちらこそですわ！」

街を出てからは三人は終始和やかな雰囲気で、新たに加わったルイが一人いるだけでこうも賑やかになるのかとアリアは感心していた。ルイもルイで初めての旅に疲れの色が見えるかと思えば、そんな事はなかった。

歩き始めて1時間以上は経つが今の所疲れている様子は特にない。これならばと、普段用心深いシオンにも期待を膨らませた。

そんな時に『奴ら』は早速現れた。

——魔物の群れが現れた！——

アリア「げえ、出たあッ！」

シオン「結構数が多いね……」

バブルスライム、ベビーゴイル、ギズモ、ブラウニー、とさかへび。数体ずつ現れた面々は、見るだけでも思わず逃げたくなるような数の多さだった。

シオン「今なら手こずりはしないけども、無駄に体力やら消耗するのはね……」

戦い慣れた二人は逃げるか戦うか悩んでいる所に、冷静な声を出したのは意外にもルイだった。

ルイ「——大丈夫ですの。私に任せてください」

強気な発言と共に、なんとルイは無防備にモンスターの大量と対峙する。

危ないとアリアが制止しようとしたその時、ルイの右手に魔力が集まっているのに気付く。シオンも同様だった。

まさかと思った。その『まさか』だった。

ルイ「——吹き飛びなさい。……『イオ』！」

高圧縮された魔力の塊が、破裂するように弾け飛ぶ。

威力と鋭さを伴った爆発は三人の前に立つモンスター全てに被弾すると、あつという間に完全に沈黙する。生き残りはいなかった。

——魔物の群れをやっつけた！——

ルイ「さ、これで心配ありませんわ。先を……アリア？」

ぷるぷると身体を震わせるアリアにまさか調子づいた事をとルイは勘繰るが、それはただの杞憂に終わる。

アリア「すごいよルイ！ あんなに大量のモンスターを一瞬で！」

ルイ「い、いえ。魔力に余裕がありそうでしたから使ってみただけですの」

シオン「……そうか。昨日の洗礼の儀で積まれた経験が生きてるんだね」

目をキラキラと輝かせて感動するアリアは、夢見る少女さながらだった。

誰しも己の命を賭し、立ちはだかる壁とぶつかり、そして超えられればその分に値するだけ成長する。

それはルイとて例外ではない。ゴーレムと相対し、掴み取った勝利

は確かな『経験の糧』となっていたのだ。

ルイ「といつても、相変わらず連発は厳しいですけども……。なんだか中途半端で申し訳ないですわ」

アリア「そんな事ないよ！　すごい嬉しかった！」

言葉通り余程嬉しかったのか、アリアによって羽交い締めにされるルイ。

そんな光景にすっかり慣れ切ってしまったシオンだが、不思議とアリアと同じような気持ちだった。

彼女は最早ただの王女ではない、れつきとしたパーティの一員なのだ。

そう強く感じずにはいられなかった。

三人が港町エルマータの視界に入った頃にまず感じたのは、さり気ない潮の香りだった。

近づけば近づくほど、見下ろした港の向こう側にある水平線がより鮮明に見え、太陽の光を反射して照らす大海原は圧巻の一言に尽きた。

大小様々な船が港を出ては入り、入っては出ると、この街がヴェストガル大陸の玄関口と言われるだけの事はあった。

貿易港としても機能しているであろうこの街には、ダーマはもちろんの事グランダリオンとはまた一風変わった人々が行き来する。

アリア「見て見てシオンっ！　この魚なんていう名前だろーねー！」

シオン「遊びに来たんじゃないんだから……。今の時間に船は出ているのかな？」

ルイ「朝方になってそれほど時間は経っていませんから、今なら多分大丈夫かと思えますわ」

大きな船が停泊している岸边の近くに丁度時刻表らしきものがあった。

ルイの予想通りに間もなく出港する便があったため、やや急ぎ足で受付らしき場所へと向かう。

アリア「すみませーん。三人今の便に乗りたいたんですけどー！」
受付「分かりました。三人で1500ゴールドになりますますがよろしいですか？」

1500という数字を聞いて、ルイ以外の二人がぎよつとする。当然だった。二人の額合わせても1500ゴールドには届かなかったからだ。

しかし、目の前の現実には意気消沈するそんな不幸な二人にも『女神』という存在はいたようだ。

ルイ「1500ゴールドですわね。……これで合ってますか？」

受付「……はい、丁度ですね。ご利用ありがとうございます」

なんの迷いもなく差し出したルイには、二人とも感動し涙するしかなかった。

ルイ「な、なんだか二人とも気持ち悪いですわよ……。それにしても、普段の相場よりも高い気がするのは気のせいですか？」

受付「ここ最近、海の魔物の数が増えてきております……。船に置く警備兵の数も増員せざるを得なくなつたために、今現在値上がりしているのです。どうかお気をつけて」

ルイ「そうでしたの……。分かりましたわ。ご忠告痛み入ります」

では早速船に乗り込もうとルイが振り向いたら、二人はまだ泣いていた。

流石にこればかりはただ苦笑いするしかなかった。

シオン「なんて僕達は無力なんだあ……。！」

アリア「お金の神様あールイ様あー！」

ルイ「変なコト言つてないで早く行きますわよっ！」

まさか一番旅慣れていないルイが二人の背中を無理矢理押すなどとは、本人にとっては夢にも思わなかつただろう。

ルイは七面倒な気持ちをなんとか抑えつつも、ようやく船内に入った三人だった。

第十六話 船上にて

アリア「へえー船の中も思ってたよりも広いんだねー。私とシオンがダーマに来る時に乗った船とは大違い！」

船のロビーへとやってきた三人は、グランドリオンにあつたルイーダの酒場を思わせる雰囲気ながらも、それとはまた違う乗客達の賑やかさに目を奪われていた。

シオン「僕等の住む島からなら移動時間はそこまでないし、今回目指すのはもっと遠くの大陸だからね。……多分丸一日かけて移動なんじゃないかな？」

アリア「えー。じゃあ今日は船の上でお泊りって事ー？ 退屈だなあ」

ルイ「まあまあ。私はともかくとして、お二方ならたまにはこういうのもいいのではありませんの？ これまでずっと戦い詰めだったのでしようし」

シオン「……それもそうだね。他の人達もあちこち座つてのんびりしてるし、僕等もどこか適当な席につこうか」

一日かけて移動する故の便の少なさからなのか、見渡しても空席もあまりなかったが、部屋の隅に置かれたテーブル席の人達が丁度席を立った所だった。三人は他に誰かが来ない内にと、そそくさと座り込む。

だが、座り込んだだけで三人には話題があまり浮かんでこず、それとなくだんまりするだけだった。

誰しも、いざ突然やる事がなくなると、何をしたらいいのか正直分からなくなる。それはこの三人においても同じだった。船員が飲み物はと、尋ねて来たので手ごころな飲み物を頼むと再び手持ち無沙汰になつてしまう。

シオン「……しかし、エマリー学園長から旅立ちの時にもらった『魔法の道具袋』は本当に便利だね。いくら道具を詰め込んでも膨らむ様子すら見当たらないよ。普通に買ったらいい値段がするらしいけど、この性能を知ったら納得だね」

感慨深く、渋めの色をした一見ただの中着袋をまじまじと見つめながら何度もシオンは興味深そうに呟く。

アリア「ねね、今暇だしき。ルイが前に王家の洞窟で言ってた事が気になってたんだけど、聞いてもいい？」

ルイ「王家の洞窟に関して？ ええ、構いませんが……」

アリア「あの洞窟って、洗礼の儀の目的以外に『何か』があるの？ 洞窟の詳細が何か聞こうとしたらモンスターが襲ってきちゃって、それつきりになっちゃったから」

その事だったか、とルイも今まで忘れていたのをようやく思い出した顔だった。

ルイ「私もはつきりとした事は言えないのですが……。あの洞窟にはどうやら、かの『天竜族』に関わる何かがあるらしいのですの」

シオン「天竜族が……？ 彼らって地上界に関してはよっぽどの事が無い限り、不干渉なんじゃなかったのかい？ 少なくともダーマではそう習ったけども」

ルイ「それで間違いはないでしょう。天竜族の使命はあくまで世界の秩序を均衡に保つ事。昔から続く天界と魔界の争いも、魔族達が天界まで我が物にしようとしているから戦っているだけに過ぎませんから。降りかかる火の粉は払う、といった所なのでしょう」

アリア「そこを魔族達は、天竜族の都合を利用して、地上界の人達を都合よく人質扱いにしたりダーマの時みたいに襲い掛かったりしてるだね……」

シオン「僕達にしてみたら、いい迷惑を通り越してるよね。そこまでして、魔族達は天界の『何』を手に入れたかったんだろうね。10年前の魔天戦争一時終結以来は、お互いに鳴りを潜めているらしいけれど」

ルイ「……話が逸れましたけれども、あの洞窟に関しては、以前も仰った通りお城にあった程度の書物ではあまり有力な手掛かりは得られませんでしたの。……ただ、先日ゴーレムと戦ったあの部屋には扉らしきモノがあつて、そこには大きな竜が描かれていました。そこに関しては私が読んだ書物通りだったのですの」

アリア「私もなんとなく気づいてはいたけど、特に意識はしなかったかな。シオンもだよな？」

こくりとシオンが頷く。

結局の所、『何か』という表現以上のものは今の三人には出てこなかった。

実態はおろか歴史すらも掴めないのでは、それこそ雲を掴むような話だ。

ルイ「元々は、初代のグランダリオン国王があつた洞窟の謎を調べるために、扉の下を訪れたらゴーレムがまるで番人のようにいた事がそもそも洗礼の儀の始まりだったとも、お父様から聞かされた事がありますが……」

シオン「……つまりはこういう事かな？ 謎めいた場所に、強大なモンスターが『何か』を守っている。それを倒した事はいつしか帝国にとつての大きな歴史になったけれど、肝心の扉が開きもしなければ手掛かりもない。時間だけが流れて、次第に諦めの気持ちが大きくなって、最終的に今では王家の力を示す為の習わしになってしまった。……って感じなのかな」

ルイ「恐らくはそうなのでしょう。……全く、シオンの洞察力の鋭さには私も頭が上がりませんわ。いつそシオンさんが賢者になられてはどうなんですか？」

シオン「いやいや、盗賊もかじってる僕なんかそんな柄じゃないよ！」

その後は珍しくルイがシオンと笑いながら語り合った。

根本的には二人とも博識だ。その点では通ずる話も存外多かったのだろう。

対してアリアはというと、終始呆けた顔だった。

アリア「お母さんの言つた通りに世界を見て回つたら、いつかはあの大きな扉の事も分かるのかな……」

それは誰に言うでもなく発した台詞だった。

いや、本人にしてみたら口に出した事すら気づいていなかったかも知れない。

そんな読めない表情をしたまま席から立ち上がると、どこかへと歩き出してしまふ。

ルイ「どこかに行きますの？」

アリア「……ちよつと甲板に行つて風に当たつて来るね」

シオン「僕も行こうか？」

アリア「ううん、大丈夫。ちよつと考えたい事もあるから……」

他の乗客らの笑い声を背に、アリアは静かにドアの向こう側へ消えてしまった。

残されてしまった二人はというと、文字通り取り残された気分になる。

ルイ「なんだか寂しそうでしたわね……」

シオン「……時々あるんだよ。ああして急に一人になつちやう時が。……じゃあ、一度解散にしようか。船の中だし、バラバラになつても問題ないと思うからね」

ルイ「そうですね。私は一度個室へ戻りますわ」

お互いに頷きあつた二人は各々の自由時間として別れる事になつた。

甲板に出たアリアは、ゆつたりと規則的に揺れ動く手すりに寄りかかりながらぼんやりと島一つ見当たらない海を眺めていた。

しかしその目には光が灯つておらず、曇つたままで焦点も合わない。

西に傾いた夕陽が線上になつて淡く海面に差し込むが、折角の船上ならではの景色も今の彼女には何も映つていなかった。

アリアには時々こうして一人になつては、物思いにふける時があつた。

何を思うかと言えば、それはやはり自分の閉ざされた過去なのだろう。

アリア「ラーナお母さん、元気にしてるかな」

ふとアリアが呟いたそれは、幼い頃にリーフィの村で育てられたもう一人の母親の名だつた。

ラーナと呼ばれた彼女もまた、産まれてから数年も経たない内に小さな女の子を授かり、一つの家庭を支える一児の母親だった。

それをいくら止むに止まれぬアリアの母親の事情があつたとはいえ、突然素性の知れぬ子を預かり、かつ育てるといふのは並の人にはできる事ではない。

アリアの本当の母も、その辺りを全て見抜いたからこそ、数ある村人の中でラーナに託したのだろう。

実際、結果としてアリアは不幸な境遇に捻くれる事無く、こうして今や冒険者として自分の目的に向かって邁進している。

となれば、自分を文句一つ言わずにここまで支えてくれた全ての人に感謝するしかなかったのだ。

アリア「でも、本当に何かを見つげられるのかな……」

それでも、いくら純真な彼女とて不安はある。

先が見えないからこそ終わりも見えない。

ひとたび弱音を吐けば、立ち止まりそうになり、遂には逃げ出しそうになる心をアリアは必死にこらえた。

立ち止まる事。逃げる事。それはここまで積み上げて来た努力が、

全て無意味となってしまうかも知れない恐怖だ。

いっそ、母親の遺言や自分の生い立ちなど全て忘れて、一人の人間として人生を謳歌した方がはるかに楽だろうか。

アリア「どっちがいいんだろう……」

そんな時に、不意に彼女の背にかかる『男性』の声。

アリア「……えっ!？」

まさか声をかけるとは思ってたのか、アリアのあまりの仰天さに声をかけた方が逆に驚いてしまっている。

気を取り直して改めて見つめると、若くはないが年老いた感じでもなく、お洒落にあご髭を伸ばしたそこそこに年季が入った壮年の男性だった。

自らをデリックと名乗った彼は、旅人の服に身を包んでいる事から、彼もまたアリアと同じく冒険を生業としている者なのだろうとすぐに分かった。

デリック「急に驚かせてすまないな。別に怪しいもんじゃないさ。ちやんと冒険許可証だつてある。でも、こんなかわいいお嬢ちゃんが一人で突つ立つてたら危ないぜ？ 近頃魔物も多いつて聞くしな」
アリア「ご、ごめんなさい……ついうっかりしちゃつて。すぐに戻りますね」

デリック「いや、別にいいんだ。俺も風に当たりにここに来たんだしな」

アリア「そうなんですか。あ……私はアリアって言います」

デリック「可愛らしい名だね。冒険者としてはちよつと勿体ない気がするがねえ。もちろん変な意味じゃないさ、ハハッ」

彼の冗談めいた笑いによやくアリアにも笑顔が戻った。

その後は他愛もない話をする内に、彼もまたミストラル王国を目指してこの船に乗つたのだと言う。

アリア「でもどうして一人なんかではるばる遠くまで？」

デリック「まあそこまで大した理由じゃないんだがね。オレはテオニーの村に住んで、家が鍛冶屋なんだよ。でも、最近じゃあまり客足もよくないし、親父も病気を抱えちまつてね。それで東の大陸にあるつていう、万病に効くつて噂の『神秘の草』で病気を治したり、あわよくばひと稼ぎしてみようつて思つたのさ」

彼が口に出したそれは、アリアが初めて聞く名前だった。

目的こそ単純だが、その為だけに自分一人で行動し冒険者として旅に出る。その活力はアリアと通ずるものがある。

アリア「でも東の大陸つてだけじゃ正直気が遠くなるような話なんじゃ……。もう少しはつきりした情報はないんですか？」

デリック「ああ、そりやもちろんあるよ。あの大陸の一番の名物でもある『靈峰ウインディア』にソイツは眠っているらしい」

その名前を聞いて、どこかで聞いた事のある名だとアリアは考える。仕草はしたものの、結局答えは出てこなかった。

デリック「なんだい、その様子じゃ初めて聞いたような感じだな。冒険者なら大体の人は知つてる名前だろうに」

アリア「ごめんなさい。私物覚えが悪いつて結構言われるんです。

折角教えてくれたのに……」

デリック「いやいや責めるつもりなんかこれっぽっちもないさ！
むしろあの山に関しては中途半端に知らない方がいいって噂すらも
あるんだ」

アリア「……どうしてですか？　少しでも知っておいた方が、役に
立つとは思うんですけども」

デリック「なんでも、普通に探したんじやその『神秘の草』は絶対
に見つけられないんだとよ。複数の条件が重なって、ようやく見つけ
出す事ができるらしい」

何故それが神秘と呼ばれる所以を持つのか。

理由こそは簡単だった。しかし分かった所で手に入らないからこ
そ、神秘性が増す。

そしてその手段すらも知る人ぞ知る事しかできなかった。だから
こそ、ある冒険者は貪欲に求め、またある冒険者はその途方も無さに
諦めていく。

デリック「まあ、オレはあくまで推測なんだがその複数の条件がも
しかしたら、当たってるかも知れないんだ。だからこそ、こうしてわ
ざわざ遠路はるばると足を運んでいるんだがね」

アリア「ほ、本当ですか!？」

デリック「ああ。自分で推測しといてなんだが、確かにこりや厳し
いなって思ったさ。まず第一に必要なのがパーティの総合力とチー
ムワーク。まずこれがなきや話にならんだろうな。なんせ挑む場所
が場所だからな。アリアちゃんは自信あるかい？」

アリア「わ、私は……どうなんでしようか」

ダーマで培った経験や王家の洞窟を攻略した力は、確かに本物だろ
う。

しかし世界のほんの一部しか踏んでいないと思っっているアリアに
とっては、所詮『その程度』にしか過ぎない気持ちの方が大きかった。
だからこそ彼女が積み上げて来た結果こそを思えば、卑下こそしな
いが、かと言って過信もできない。詰まる所、分からないのだ。

デリック「まあ実力なんて、後からじっくりと鍛えていけばいいの

さ。そして他の条件なんだが——」

——続きを言おうとした、その時。

いつでも『不幸』は突然にやってくる。

ある存在に先に気づいたのは、彼だった。

それは彼女が『それ』に対して背を向けていたからだだった。

デリック「——危ねえ！」

彼の頭には彼女を突き飛ばす事で満ちていた。

そうしなければ、間違いなくアリアがやられていたであろう。

二人の前に突然現れたのは、海に住む魔物『キングマーマン』だった。

そしてアリアを救った代償として、今の彼は完全に無防備。

野生の勘に満ち溢れたモンスターがそれを見逃すはずもなかった。

アリア「デリックさんッ！」

マーマンの鋭く尖った爪にデリックはまともに斬り裂かれ、アリアの瞳が鮮血に染まる。

一瞬だった。時間に見てみたら一呼吸の間にも満たない。

肉が完全に引き裂かれるまでに達した傷は、素人目で見てもほぼ致命傷だった。

びくびくと痙攣するデリックの身体が、アリアの意識を一層リアルにさせる。

アリア「……嘘でしょ？ ……しっかりしてえっ！」

悲痛なアリアの叫び声をあざ笑うかのように、次々と手下のマーマンが飛び出す。

事態をいち早く察知した同じく甲板にいた警備兵も応戦するが、一人でどうにかできる数ではない。その間にもマーマンは現れ、やがて甲板を埋め尽くす魔物の群れとなってしまった。

第十七話 生命の鼓動を再び

不幸中の幸いだったのは、この船に乗っていた乗客が比較的冒険者が多い事だった。

警備兵だけでは間違いなく壊滅に追い込まれていた船も、冒険者が戦闘に加わる事で接戦に持ち込めた。

その中にはもちろん、アリアの良く知る『二人の姿』もあった。

シオン「アリア、怪我はない!？」

急いで駆け寄ったシオンが目にしたのは、既に事切れてしまっていたデリックの無残な姿だった。

後ろから見えていたルイもシオンの制止により死体そのものを見る事はなかったが、二人の様子ですぐに事情を呑み込んだ。

アリア「デリックさんッ！ ねえ起きてよッ！」

いくら治癒呪文をかけてもデリックの目は開かず、生気も戻らない。

素人目で見たとしても手遅れなのは彼女とて分かっていた。

だが諦めたくない。自分を庇ってくれた恩を仇で返したくない、その一心だった。

アリア「目を閉じたらダメ……！」

やがて呪文を唱える事も止め、アリアの手がだらりと崩れ落ちる。

無数の涙が悲しみと共にこぼれ落ち、最後には慟哭となって空へ木霊した。

——これが『死』だった。

冒険者として逃れられない運命が誰しもある事を、無残にも見せつけられた。

決して油断していた訳ではない。だけでも、どこか夢見がちに捉えていた部分があったのも事実だった。

結果としてその代償は高くついてしまった。下手すれば、彼女の価値観を捻じ曲げてしまいかねない程に。

しかし、アリアがいくら絶望したとしても、そんな事などに同情するモンスターではない。

泣く暇も与えないと言わんばかりに、三人にも敵は押し寄せてくる。

シオン「——アリア、今は目の前の敵に集中するんだ！」

——魔物の群れが現れた！——

モンスターの種類こそはマーマンのみであれど、いくら他の冒険者が倒しても次々と海から飛び出してくる。

どうやらこの集団を統率しているキングマーマンを倒さなければ、際限なくモンスターは湧いてくるだろう。

ルイ「私の攻撃呪文も船の影響を考えると使いづらいですわ……。肝心な時に役に立たないなんて……！」

シオン「補助系統ならほとんど被害は出ないよ。ルイは敵のかく乱に努めて！」

ルイ「分かりましたわ。——『マヌーサ』！」

魔力で構成された深い霧は、モンスターを取り囲んで惑わす。

あられもない方向に向かって攻撃をするマーマンだが、中には呪文が通らなかつた個体もいる為、過信はできない呪文だ。

そしてようやくアリアも自分を取り戻したのか、立ち上がって戦線へと戻って来た。心配そうに見つめるルイには、目もくれずに。

ルイ「アリア……無茶しないでくださいませ」

アリア「大丈夫……。みんなが戦ってるのに、私だけ泣いてばかりいられないよ」

ルイ「どうしたんですの、アリア……？」

その姿に、ルイは何故か背筋に冷たいモノが走った。

普通ならば今のアリアは、怒りに身を任せて仇を討つ気概があつて当然だった。

なのに、それを全く感じさせないどころか、無気力にすら見える足取りで歩くアリア。

流れるような動作でそのまま剣を抜き取り、敵の大将を真つすぐに見つめると、なんとたった一人でモンスターの群れに切り込んでいったのだ。

シオン「な、何をするんだアリア！」

いくらマヌーサの効果でほとんどの敵が幻惑しているとはいえ、あの群れに一人で突っ込むのは無謀以外の何物でもない。

シオンやルイでも愚かすぎる行為に見えるのに、他の周りからしてみたら死に行くようなものだっただろう。現に慌てて助けに入ろうとしている冒険者もいたくらいだ。

しかし、結局誰も彼女を助ける事はなかった。

……否、できなかったのだ。

正確には『見惚れて』すらいたかも知れない。

何十匹はいようかというマーマンの群れに囲まれているのに、攻撃が一発も当たらないのだ。相手の手の内を全て見透かしているかのように。

ルイ「どうして当たらないんですの……？ 私のマヌーサなんてとうに効果が切れていても、おかしくありませんのに」

最小限の動きで攻撃をかわし、避けきれないと判断した場合は剣で弾き返す。

動きこそ単調だが、四方を囲まれた状況で一步間違えたら即死と考えれば到底並の人間にできる度胸や芸当ではない。

もちろん避けてばかりではなかった。

隙あらば的確に仕留め、船への被害も考慮しつつ威力も十分に備わった絶妙な力加減の一撃で、瞬きする間に数を減らしていく。それはいつしか、キングマーマンが呼ぶ手下の増援も追いつかない程に。

そんなアリアの表情に相変わらず色は無く、あくまで淡々と倒していく彼女の姿に、気付けば全員が目を奪われていた。

気づけば手下もたったの数体。いつしか裸の大将となっていたキングマーマンは必死の抵抗とばかりに、ヒヤダルコを何度も唱えるが今の彼女にはただの悪あがきにしか過ぎない。

アリア「……今更そんな呪文、効きもしないわ」
左手から出した魔法障壁によって全てかき消され、魔力の塵となって霧散する。

やがて隙だらけになったキングマーマンの眼前に、アリアは一気に迫った。

腰を深く落とすと剣の切っ先を正面に向け、突きของ構えに入る。アリア「これで終わりよ。雷光……一閃突き！」

雷光を纏った会心の突きは、キングマーマンに大きな風穴を空け、驚異的な突きのスピードに身体ごと吹き飛ばされる。甲板の手すりを容易く破壊しながら大海原に放り出されると、もの間に海の藻屑と化した。

残りの手下も、親分を失ってしまい一目散に海中へと逃げ出す。気づけばアリア一人で終わらせてしまった戦いだっただ。

——キングマーマンを、やつつけた！——
どよめきから一転、船上は勝利の歓声に包まれる。

そして勝利に最も邁進したであろうアリアは、他の冒険者から囲まれるままに暑苦しい称賛を浴びて、ようやく我を取り戻す。

冒険者「あの動き、『身かわしきやく』だろ？ つつてもあそこまで華麗な身のこなしなんて、正直見た事がないぜ！」

アリア「い、いえ。私はただ夢中で……。すみません道を開けてくださいっ！」

勝利の余韻に浸る間もなく、アリアは人混みをかき分けると自分を庇ってくれたデリックの下へと駆け寄る。

しかし、やはり彼は事切れたまままで動く気配など有りはしなかった。アリア「そんな……。目を開けて……。ください……。！」

失意のままにがくりと膝をつき、両手に顔を覆い隠して嗚咽するアリア。

だが、どれだけ嘆いても彼の声は二度と帰ってこない。全てはあのモンスターに気付かなかった自分の責任なのだと思ってしまう。

シオン「……自分を責めないで。運が悪ければどっちも死んでいたかも知れないんだよ……」

アリア「でも、せめて私もう少し早く気づいていれば……！」

いくら悲しんでも、彼の命は戻ってこない、目の前の事実をただ受け入れなければならぬ辛さに、アリアはただ後悔し、悲しみに暮れるばかり。

——そんな時だった。

アリアの肩に優しく添えられた手の温もりを感じて、振り返ったのは。

それは、ルイだった。アリアは彼女が何をするつもりなのか全く読めず、問い掛けるも特に返事はない。

そしてデリックの亡骸に近づくと、ルイは両手に魔力を込め始めた。

アリア「な、何をするつもりなの……？」

ルイ「本当に情けない事ですが、今の私の魔力ではこの方を完全に蘇生させる事はできません。……けれども、やるだけの事はやってみますわ」

両手に集った魔力はいつしか白き癒しの力となり、極限にまで高められた魔力の光は周りで見ている人達をもどよめかせ、包み込む。

やがてルイは、一つの『呪文』を唱えようとしていた。

ルイ「……かの者を、どうか今一度蘇らせて——『ザオラル』！」
それは現世から旅立った死者を呼び戻す、蘇生の呪文だった。

癒しの魔力は全てデリックの肉体に注ぎ込まれると、生命を司る心臓から始まり全身の細胞一つ一つにまで行き渡る。

天使が舞い降りたと思わせんばかりの高貴なるルイの光に、周りで見つめる皆は飲まれるばかり。

……だが、そこまでだった。

ルイがどれだけ魔力を注ぎ込んでも、彼の身体は指一つ動かずにいるまま。

必死に蘇生を試みるルイの額にもいくつもの汗が滲み、頬を伝う。固唾を飲んで見守るシオンも、いつしか諦めの色すら浮かんでいた。

ルイ「やつぱり、今の私ではダメなんですか……？」

誰とて諦めたくはない。しかし状況は一向に好転せず、諦めざるを得ない空気が支配しようとしていた。

それでも最後の最後まで足掻くルイに、居ても立ってもいられなくなったのか、突然ルイの隣に並ぶと果敢にも『同じ事を試みた』者が

いたのだ。

ルイ「……あ、アリア!? 何をするつもりなんですか!」

アリア「私だって、このまま黙って見たくないよ……! 絶対にこの人を救いたい……!」

ルイ「無茶言わないでくださいませ! この呪文は、ただの回復呪文とは違うのですわ! 術式を理解していない者が使っても、悪戯に魔力を消費するだけですのよ!」

しかし、アリアは頑として離れなかった。

ルイ以上に流れ落ちる汗を拭いもせず、ただがむしやらに癒しの魔力を注ぎ込む。

彼を救いたい。アリアはその一心だったのだ。

すると魔力はルイ以上に強くなり、いつしかダーマや王家の洞窟で見せた『あの状態』となっていた。白銀に染まったアリアの髪が逆立つ程にまで魔力が溢れる。

アリア「お願い……!」

瞳を閉じて聖なる少女は強く望み、ひたすらに願った。

そして——『願い』はようやく届く。

最初に異変に気付いたのはシオンだった。

シオン「指が、動いた……! 脈が戻ってるよ!」

ルイ「そ、そんな……! アリアが、一体どうして……!?!」

全ての光はデリックへと吸い込まれていった。

それは、この呪文が終わりを迎えた事を意味していた。

デリックの心臓に耳をあてたアリアは、容体を確かめる。

アリア「生き返った……。生き返ったよッ!」

感極まったアリアはルイを強く抱きしめる。

それは静まり返った船上に、今一度大きな歓声を轟かせる瞬間だった。

アリア「やったよ……。私やったよルイ……!」

ルイ「……ええ。本当にアリアはすごいですわ……」

船内にいた救護班らしき者も駆け付けたのも、同じ頃だった。

時間に見てみたらたったの数刻かも知れない。だが、アリアにとつ

てみればこの瞬間は何よりも変えがたい一時に違いなかった。

冒険者「つたく、お嬢ちゃん達すげえな。あんな強敵一人で倒したり、その若さでザオラルなんか使えたりよ。一体何者なんだい？」

アリア「……いえ、名乗る程の者じゃありません。……ね、ルイ？」

ルイ「……そうですね。ただのしがない冒険者ですわ」

シオン「あれだけの事をしておいて、それはちよつと無理がある気も……。まあいいか」

他の冒険者からも惜しみない賛辞を浴び、自分がどれだけの事をしたのか強く噛み締められた瞬間でもあったのだ。

シオン「さてと、僕達の役目は終わったよ。早く船室へ帰ろう」

アリア「うん……そうだね」

体力も魔力も使い果たし、既に満身創痍となっていたルイとアリアだったが、その瞳と顔には何かを達成しきった喜びがいつまでも浮かんでいた。

船内に戻ると外の騒ぎがまるで嘘だったかのように、綺麗なままだった。

何も言わぬままに個室のドアの前まで着いた三人。

シオンは「おやすみ」と一言だけルイとアリアに告げると、すぐに室内に入る。

残された二人もすぐに部屋に入るかと思ったが、そうではなかった。

お互いドアの前に立ったままアリアはルイを見つめ、静かに口を開く。

アリア「ルイ……ありがとう」

ルイ「……どうしたんですの？　いきなり」

アリア「ルイがいなかったら、私はずっと泣いてばかりだったと思う。ずっと一人で悲しんで、みんなに迷惑かけてた。……だから、本当にありがとう」

嬉しさや悲しさ、喜び。様々な想いが入り乱れた感情のままに告げ

ると、アリアも自分の部屋へと吸い込まれていった。

取り残されたルイは、アリアがいるであろう室内のドアに歩み寄ると、そのまま手を添えてノックしようとする。

だが、そこから先は動かなかった。

やがて諦めて完全に手を下ろしたルイは名残惜しそうにドアを見つめながら、ようやく自分の個室へと入っていった。

三人それぞれの想いが交錯するままに、東の大陸に遂に上陸する時がやって来た。

エトスン大陸編

第十八話 新たなる気持ち

船から三人は降りると、これまでに見た事のない景色を目の当たりにした。

街全体の下部分が川か湾か区別のつかない場所に、文字通り浸かってしまっているのだ。

旅慣れぬ者が目にしたら、ここは水没してしまった街なのかと、一瞬思いそうになるが、当然そうではない。

大小様々に入り乱れた運河が全体に広がり、その川の上をまるで道路のように小舟で移動し、あるいは渡ってここの人々は生活しているのだ。

ルイ「エトスン大陸の玄関口でもある『水の都アクアラ』によくやってきましたわね。……それにしても、噂に違わぬ優雅さですわ。まるで水と一つになっているみたい」

シオン「水の都とは本当によく言ったもんだね。こういうのも見られると、旅も中々にいいものだなんて思うよね」

ルイ「この街は『霊峰ウインディア』の傍に形成されている『トルレンテ湖』から流れ出ている川をそのまま利用して作られた街とも呼ばれていますの。……多分あれがそうですわね」

ルイが遠く指差した場所には、遙か上の雲と同じ高さにまでにそびえ立った大きな山があった。あれが霊峰ウインディアなのだろう。

二人が街の景色を楽しんでいる中、一人だけは違った。

船を下りてからも、浮かない顔のままのエリアはずっと物言わぬままだった。

そんなエリアの様子を察してかルイはあえて触れずにいたが、シオンはやがてこの空気に耐えられなくなったのか、おもむろにエリアの前に立つ。

シオン「全く……いつまでそうしてるつもりだい？」

エリア「シオン……？」

シオン「目の前で人が死にかけてしまった辛さはよく分かる。正直歩くのもやつとなくらい辛いんだろうね。……それでも前に進まないといけないのが、冒険者なんだよ」

いつもの立場とは逆だった。

シオンが一步後ろに下がり、アリアが前に突き進む光景が馴染み深かっただけにルイには余計印象に残った。

エルフの少年は強くアリアを見据える。しかし、彼女は俯き視線を逸らしたまま目を合わせようとしない。

だがそんなのは関係ないとばかりに、シオンは口を開く。

シオン「アリアにこの話をするのは二度目だし、自分からはこんな話したくないさ。けど、僕も小さい時に魔天戦争で魔族から『世界樹』を狙われて、エルフの民として当然護らなきゃいけないかった父親はそのまま亡くなった。アリアと違って母さんこそいるけど、もちろん最初は受け入れられなかったよ。それでも僕は父さんがいなくなった次の日から、代わりを務めなくちゃならなかった。そうしなきゃ、狩りができないのさ。……父の『代わり』は、僕以外ないからね」

アリア「私は、シオンみたいに心が強くなかないんだよ……。このまま旅をして、また自分だけが昨日みたいに助かって、誰かの犠牲の上でやつと生きていけるなんて……。そう考えたら、軽い気持ちで旅をしたって言ったり、ルイをあれだけ守るって言ってた自分がなんだか馬鹿らしくなっちゃって、私って本当に上っ面だけだったんだなって……!」

アリアは強く身体を震わせ再び目元を涙で濡らす。港から近い人の往来が多い場所だったが、人目などどうでもよかったのだろう。

ルイ「……そんな事ありませんわよ」

流れ落ちるアリアの涙を優しく拭いたのはルイだった。

ルイ「だって、洗礼の儀でいち早く私を助けてくださったのはアリアでしょう？ あの戦いでだってアリアは命を懸けた。ならば、命を懸けた戦いのどこがただの上っ面で、あまつさえ心が弱いなどと仰るんですの？ ……少なくとも私はアリアのお陰でこんなにも変われましたのよ」

どこまでも厳しいシオンに対し、ルイはどこまでも優しいままにアリアを抱きしめる。

アリア「ごめん、ごめんなさい……こんなどうしようもない私で……！」

ルイ「あんな事があつたら、悲しむのが当たり前ですよ。それに、結果的にはアリアのおかげであの方を死なせずに済んだではありませんか。……だから、もっと自分を誇って、どうかそんなに責めないでくださいませ」

シオン「……それに、ルイを守るって決めたのは他でもないアリア自身なんだよ。ルイだってそれを信じてここまで一緒にやってきたんだ。だったら、その気持ちを無駄にしちゃいけないと、僕は思うな」
お互いに漏らした本音は、苦楽を共にした仲間だからこそだった。

アリア「私……このまま旅を続けてもいいのかな？」

シオン「そんな事、今更言うまでもないでしょ。それとも、まだ何も見つけていないのに今更半端に逃げ出すのかい？」

ルイ「船であんな沢山の魔物を一人で倒したのは、他でもないアリアですよ？ ……だから、もっと自信を持ってくださいませ！」

アリア「……そうだよ。……ごめんね、本当は分かってたの！
ただ、もう少し自分が早く気づいていればって。それだけがずっと悔しくて……！」

ルイの華奢な身体を借りながら、むせび泣くアリア。

若くして残酷を突きつけられた少女の叫びは、少しの間アクアラの港に響き渡った。

アリアの様子もひとまず落ち着き、街の散策もそこそこに終えて外へと出た三人は早速商業都市リュッセルを目指す。

まずはそこを指さなければミストラル王国へ踏み入る足掛かりが掴めないからだ。

ルイ「確かあの国も入国許可証がなければ、中には入られない仕組みになってたと思いますの。だからリュッセルで発行しないといけませんの」

シオン「今日中に着く事はできる距離なのかい？」

ルイ「……余程急がないと一日ではたどり着けないと思いますわ。たしか途中に『ジャーレ』と呼ばれる小さな村があったと思いますので、まずはそこで一泊した方が無難ですわね」

シオン「そうか。じゃあ無理しないでその村を目指そうか、……ってアリア？」

振り返ると、アリアは二人からほんの少しだけ距離を空けてそわそわしていた。

アリア「……えっと。改めて謝らなくちゃって思っ、その……ごめんなさい！」

頭が地面にくっついてしまうくらいに身体を屈ませて謝るアリア。

ルイ「もう気にしなくてもよろしいですのに……昨日からずっと謝ってばかりですわ」

シオン「——全くだね。ルイ、『お願い』」

ルイ「本意ではありませんが……致し方ありませんわね」

そう言っ、アリアの後ろ側に回り込んだルイ。

何をするかとアリアは不思議に思ったが、すぐに思い知る。

ルイはアリアの臀部、要するにお尻の後ろに手を添えると、なんと一気に『引っぱたい』のだ。

突然の急展開に痛みと驚きがせめぎ合い、アリアは完全に混乱する。

アリア「ちよつと痛いよお！いきなり何するの!？」

シオン「どうせ街を出てもまだ気分が戻らないだろうと思っ、たからね。流石に僕がお尻を叩くのは不味いから、ルイにさつきお願いしたんだよ」

ルイ「しよ、正直イヤではありませんでしたが、アリアの調子が早く戻らない事には旅に支障をきたしますものねえ？」

シオン「……という事。ささ、先頭に行くのはアリアの役目でしょ」
ぐいぐいとシオンがアリアを押すと、彼女の前方には雄大な広野が広がっていた。

なだらかな傾斜や小高い丘が草原となっ、てあちこちに広がり、地平

線がかなり遠くまで眺められるのは大自然の雄大きさを自ずと感じさせ、正に絶景の一言に尽きた。

ルイ「アヌーラ大平原と呼ばれる場所ですわね。世界でも有数の平原地として名を馳せていて、草を原料とした薬は大概ここで採取できるとも言われていますのよ」

アリア「すごい……こんなに広い景色を見たのは初めて……」

迷えるアリアは、少しの間大自然の空気をその身に受けていた。

柔らかな味がする空気をゆつくりと吸い、深呼吸と共に力の抜けた表情へと変わっていく。

視界全てに広がる青空と翡翠色に染まった草木を通して、アリアの瞳が癒されていく。

瞳を閉じながら耳を澄まし、風を切る音や虫の鳴き声を静かに聞く。

やがて静かに目を開いたアリアには、決意が宿っていた。

アリア「そうだよね。……私はやるしかないんだもんね」

二歩、三歩と歩き出すと口元に手を添え、アヌーラ平原に向かって大きく息を吸い込む。

——そして。

アリア「……やってやるぞおおおーッ！」

大声を張り上げたアリアは、そのままの勢いで脇目もふらずに走り出す。

ルイ「ちよちよつと危ないですわよー！」

シオン「いいじゃないか。むしろそれでこそ、アリアだよ……！」

突然の行動に戸惑いながらも後ろを追いかける二人だが、その瞳にはようやく安心感が生まれていた。

そんな時にも、空気を読んでか読まずか、またも『奴ら』は現れる。

——魔物の群れが現れた！——

メタルライダー、ラリホーン、キメラが数体ずつといった、ヴェストガル大陸では見た事もないモンスターが目白押しだった。

しかし、先頭を行く今のアリアにはそんなものはさしたる問題ではなかったようだ。

アリア「今の私は少し暴れたい気分なのよね……！ 丁度いいくらいだわっ！」

景気づけにと言わんばかりに、秘技である『つるぎの舞』を惜しみなく繰り出す。

舞いと共に華麗に着地した彼女の瞳に迷いはなく、普段通りのアリアとなっていた。

ルイ「私も船の上では全然呪文が使えませんでしたから……少し派手にいきますわよっ！」

瞬時に紡いだ炎の詠唱は、高等呪文である『ベギラマ』となつてラリホーンの群れを飲み込む。今までは魔力不足のみが問題だったが、その唯一の問題も解消された。

中間地点の村に向かつて歩き出したばかりなのに、いきなりばててしまいそうな二人の飛ばしっぷりに早くも不安になりそうなシオンだったが、その顔は真に心配している様子ではなかった。むしろこれこそが自分達なのだろうと、彼はそう思ったのかも知れない。

アリアとルイの猛攻によって、気づけば残り一体だった。

最後に残されたメタルライダーもシオンのニードルアローによって貫かれ、完全にモンスター達は沈黙する。

——魔物の群れを、やっつけた！——

アリア「——やった！」

ガッツポーズをし、後ろにいた仲間達とお決まりのハイタッチを交わす。

エトスン大陸の旅は始まったばかり。魔物を倒すと、今度こそしっかりとした足取りで歩き始めたアリア達だった。

第十九話 ジャーレの村にて 『★』

シオン「僕等のいる大陸と比べるとモンスターもやっぱり一味違うし、それなりの強さを持つてるね」

ルイ「私が言うのもなんですが、グランダリオンはやはりそれなりの力がありますからね。屈強な魔物は優先的に駆逐されますから、結果的に弱い魔物しか残らないでしょう」

アリア「よし、日が暮れる前にどんどん先に行こう！」

少し歩くと中間地のジャーレの村までの距離を示す看板が立てかけられていた。

普通に進めば問題なく着ける場所と分かった三人は、そのまま焦らずに歩を進める。

そんな時に、ルイが何かに気づいた様子のままに、懐からごそごそと何かを取り出す。

やがて出てきたそれは、機械らしきものでできた手に軽く持てる大きさ程の『端末』だった。歩きながら聞いてほしいと、言われるままに二人はルイの説明を待つ。

ルイ「本当は船の中でお見せしようかと思ってて、今まで忘れてしまっていたのですが……、これは『魔力計測器』というお城から貰ってきたものですの」

端末の中央には何か画面のものが映し出されており、更によく見ると様々な系統の呪文の一覧が載っていた。

ルイ「本来ですと呪文書や口伝などで新しい呪文を覚えていくのですが、それに見合った力量に達していないと当然上位系統や新規の呪文は習得できません。なおかつその域に達しているかを見極めるには、自らの技量や熟練度を確かめられるダーマやグランダリオンなどか、あるいは直接視てもらえる占術師の下に訪れないといつまで経つても新しい呪文が覚えられないジレンマもあります」

シオン「確かにね。だからアリアなんかずっとホイミのままだもんね」

アリア「うっ……かなり痛い所を……！」

ルイ「同じ場所に留まらない旅をしているのだから、呪文を新たに習得する機会がなかなか訪れないのは正直仕方ありませんのよ。……でも、その問題を解消したのが『コレ』なのですわ！」

そう自信ありげに言ったルイは、アリアへ魔道計測器を渡すと、魔力を念じるように促される。アリアもとりあえず言われるままに魔力を込め始める。

すると画面に値らしきものを表すゲージが十本ほど突如横に並び、一斉に上へと伸び出す。だが一番上にまで上がり切る事はなく、ほとんどが中間付近で止まってしまう。

アリア「何か色んな種類の数字が出てきたね。『ちから』とか『賢さ』とかいっぱいあるよ？」

ルイ「それが今のアリアの強さを、数字として表したものですのよ。その強さを元に、現時点でアリアが習得できる呪文を算出し、更に直接覚える事もできるのですわ」

シオン「へえーすごい便利だね！ 僕も次使わせてよ」

ルイ「最も、この装置自体は北の大陸にある『魔法都市アウスペリア』から提供してもらったモノですので、私がそう強く自慢できる訳ではないのですが……。あまりこの装置が普及しすぎて利便性が増しすぎると魔界から目をつけられる可能性にもなりますので、一般普及の予定は今の所ないとお父様から聞かされましたわ」

シオン「そういえばあの国は自分達で造りだしたキラーマシンを、兵士代わりに使ってるって聞いた事が……。そう考えたら国王の方針も納得つちや納得だけど」

最終的に画面に表示されたのは、現時点で習得できる呪文の一覧だった。

ベホイミ、キアリー、キアリク、スカラとほとんどが補助系統だったが、表示された全てが習得できる訳ではない様だった。

シオン「覚えられる呪文と数にも、自分の能力適性っていうものがあるらしいからね。その辺は僕等もダーマで習ったからなんとなくは覚えているよ」

アリア「うーん、例えば戦士が攻撃呪文を覚えるのは、無茶って感

じみたいに？」

ルイ「極端に言えばそうなりますわね。ただアリアの場合は例外的な部分も多いでしょうから、自分に合っていると思った呪文を伸ばしていけばよろしいかと思えますわ」

ふむふむと、何かを考え込んだ末にアリアが覚えようとしたのは『ベホイミ』と『キアリー』だった。

すると、魔道計測器から翡翠色の光が放たれ、光はアリアの身体に吸い込まれるとそのまま消えていった。

アリア「おー、なんか『知識』が頭の中に入って来る感覚だね！」
ルイ「呪文の詠唱に必要な知識や魔力構成を、魔法力で直接簡略化させてその機械から送り込んでいるのですわ」

シオン「じゃあ僕はつと……。お、『スクルト』が覚えられるのは嬉しいな。……他には『ルカナン』と『マホトラ』に『ラリホーマ』。おつと、『バギマ』も候補内なのか……」

彼もアリア同様に悩んだ挙句、結果的に覚えたのはスクルトとルカナンだった。

潤滑役としてのシオンはひとまずとして、彼の指摘通りアリアの回復呪文がホイミのみだったのは新大陸に臨むにあたっては結構な不安点だった。それがいち早く解消されたのは純粹に喜ばしい結果だ。

そんなパーティーの強化がされた所で、頃合いを見計らったアリアはある疑問を二人に投げかける。

アリア「あのさ……。デリックさんが倒れる前に話してたんだけど……『神秘の草』って聞いた事ある？」

シオン「……僕も一応エルフの端くれだから聞いた事くらいはあるけど、それがどうかしたのかい？」

アリア「デリックさんがそれを求めにこの大陸に来ようとしたらしいんだけど、所在が全く不明みたいだから本当にあるのかなって……」

ルイ「万病を治す薬になると言われてましたわね。私も書物で読んだ程度でしか知りませんが、これからミステリア女王に会えれば何らかの手掛かりも掴めるのではないのでしょうか？」

アリア「あ、そうだね。じゃあ早くリュッセルに行つて、許可証貰わないとね！」

疲れ知らずのままに、再び先へと走りだしてしまふアリア。

例え今走つたとしてもリュッセルに着くのはどうせ明日以降だったのだが、彼女は何より今を走り、駆け抜けたかったのだ。それは長年連れ添ってきた親友でさえも止める権利はなかった。

アリア「ねね、見て見て！ あそこにおつきい木があるよ！ 早く見に行こうよ！」

後ろを振り向き、二人に希望にも満ちた微笑みで早く早くと急かすアリア。

そんな彼女に最初こそため息を漏らすものの、嫌悪は決してない。むしろ笑みに引つ張られるように、気付けば三人揃つて走り出していた。

結局三人がジャーレの村に到着したのは、夜の帳がすっかり降りた頃になった。

村の規模自体は至つて小さめだが、この場所が休息所的な役割も果たしているためか、宿屋や道具屋といった基本的な施設は一通り揃つていた。

だがそれよりもまずは休みたかったのが三人の本音であり、体力がないルイに至つてはようやくオアシスを見つけられた境地だっただろう。

アリア「あ、見て見て！ ここの宿屋『温泉』があるんだって！」

シオン「へえ。天然か人工かは分からないけど、この辺りの配慮がしっかりしてる感じは流石商業国って感じだね」

ルイ「とにかく私は休みたいですわ……。もうヘトヘトですの……」

シオン「僕は先にやりたい事もあるから温泉は後にするよ。なんなら先に入つたらどうだい？」

アリア「そうだね。じゃあルイ！ 二人で入りに行こうよ！」

ルイ「え、ええー私の意見は無視ですのーッ!？」

有無を言わずにルイの手をふん掴まえて走り去っていく、女子二人。

まだお代も払ってないのに、とシオンはぶつぶつと呟くままに無言でカウンターへ行くと、肅々と宿代を払ったのであった。

シオン「さてと……情報収集から始まって、道具の調達に弓の手入れ。……やる事が多いなあ」

村の人達が寝静まってからでは情報の仕入れどころではなくなってしまう。

休みたい気持ちをひとまずこらえて、シオンは村を歩き回ったのだった。

一方その頃、あつという間にバスタオルを一枚巻き付かせただけの姿になったアリアとルイは湯気が漂う浴場へと早速足を踏み入れていた。簡素に造られてるだけと思いきや、シャワーや鏡なども完備されていて、広々としたしつかりした造りに予想外の驚きを見せた。

アリア「早速入りたいて所だけど、まずは身体を洗わなくっちゃね。ねね、ルイ。先に洗ったげよっか？ ほら座って座って！」

ルイ「え、ええ？ 別にいいですわよっ！」

アリア「いいから遠慮しない遠慮しない！」

というよりは、アリアが単純にそうしかかったのだろう。

アリアになされるがままのルイだったが、彼女の押し強さには適わない事を悟ったのか、観念した様子だった。

優しくお湯を全身にかけてから、鼻歌混じりにルイの頭を洗いだすと、アリアは問いかける。

アリア「そういえばさ、ルイは賢者になった後の事は考えていたの？ もっと勉強して世界一を目指してたりとか？」

ルイ「そんな大袈裟な事は考えていませんわ。……ただ、賢者を超えた先にあると言われている『天地雷鳴士』にはいつかなってみたいと小さい頃から思っていましたの」

アリア「へえー。あれって魔法だけじゃなくて、自然すらも自分の力に変えるって言われてる伝説の職業だよね？」

泡立った髪に桶にすくったお湯を頭にかけてみると、小動物のように身

体をぶるぶると震わせて水分を弾き飛ばす。それを見たアリアはくすりと微笑んでいた。

ルイ「……別に伝説なんかではありませんわ。私の『お母様』がそうなのですから」

アリア「へえーそうなんだ。お母さ……つて、ええ！ あの人がつ!?」

一見穏やかで戦いとは無縁そうな人がまさかの生ける伝説だった事に、アリアは自分の無知さを改めて恥じるだけだった。

アリア「あ、じゃあ次は背中流してあげるねーつと」

ルイ「全くもう……そこまでしなくてもいいですよに……」

実際冒険者という意味では子供どころかひよつ子同然なのはルイとて分かつてはいたが、ここまで分かりやすく懐柔されるとだんだんと面白くない、というよりは露骨に拗ねたくなる。

アリア「お背中終わりー。じゃあ次はー」

ルイ「もう大丈夫ですわ！ だからアリアも早く洗ってくださいませっ！」

強引に背中を押し付けられたアリアはとても残念そうに去り、隣の席で不満げにぶう垂れしながらもようやく自分の身体も洗い始めたのだった。

アリア「……あれ？ そういえば学園長もそんな名前の職業だったような……」

ルイ「……え？ じよ冗談、ですわよね……?」

アリア「い、いやー私もそういうのに疎くって……」

ルイ「疎いとかそんな次元ではありませんし、流石に私も呆れましたわ……。あのお方だって『天地雷鳴土』ですわよ！ というか、自分の通っていた学園なのにエマリー様の事をご存知なかったのです!?」

アリア「いやー、あの人自身が名乗ったのって数回しかなかった気がするから……」

ルイ「いくら自分で簡単に名乗らなくたって自然と周りから声が聞

こえたり、ましてやそれを知る機会なんて沢山あったはずでしょう!?”

顔と顔が密着しそうな程に、珍しくルイが強気にアリアに迫っていた。

「どうやら魔法系統に関わる身として、アリアの発言はルイに火を点けてしまう発言だったようだ。」

ルイ「……よく分かりましたわ。アリアには魔法というものが如何に大事か、改めて教える必要がありますわね。まだ夜になったばかりですし、時間はたっぷりありますわ!」

アリア「そ、そんなー嘘でしょお?!”

ルイ「嘘じゃありませんわ! さっきの鬱憤も晴らせますし丁度いいですわ! その温泉に正座なさい!」

その後、アリアは温泉の中で無理矢理正座させられ、果てにはのぼせ上がるまで延々とルイに魔法のなんたるかを小一時間に渡って教え込まれた。

しかし頭に残っていたのは最初の三分間だけだったようだ。

アリア「……の、のぼせたあー」

ルイ「全く……仕方ないですわね」

温泉から戻ったアリアとルイは、一室型の部屋に戻って来ていた。顔が茹で上がった蝟のように紅潮させながらアリアが完全にダウンしきっていた所に、丁度シオンも戻って来る。

シオン「ふうーいいお湯加減だった……って、二人とも何してるんだい?」

ルイ「アリアが温泉でのぼせてしまったから『ヒヤド』で頭を冷やしてるんですよ」

シオン「……やれやれ、アリアはすっかり『本調子』に戻ったみたいだね」

アリア「ち、違うよおールイがずっとあんな場所で正座させるから……」

ルイ「言い訳無用ですよっ! それにこうして、ちゃんと冷やし

てあげてるではありませんか」

「どうやら下手に関わらない方が良さそうだと、シオンはすぐに二人から目を逸らす。」

シオン「しかしミストラル王国か……。正直ダーマにいた頃は、こんな場所にまで足を運ぶとは全然考えていなかったね」

弓の手入れをしながら、感慨深そうにシオンは独りごちる。

ルイ「それを言うなら私もですわ。たまに自分でも信じられない時がありますもの」

二人の視線を同時に感じたのか、のぼせる事も忘れてびくつと起き上がるアリア。

「きよろきよると交互に二人を見つめるが、微妙ににやつくだけで何も発しない。」

アリア「わ、私が何かしたの？」

シオン「そうだね。色んな事をしてくれたよ」

ルイ「……ふふっ。そうですわね」

アリア「何なのよーもうー！」

その後は他愛もない雑談話に花を咲かせたまま、眠りについた三人だった。

第二十話 ただ、孤独を救うために

翌朝を迎えた。

ジャーレの村から出発して、夕刻に差し掛かる少し前には無事にリュツセル入りを果たせた。

商業都市と謳われるだけあり、入口から眺めただけでも、その一望は見事なものだった。まず小さなテントで覆われた露店から、小規模な店舗を一つにまとめた大規模な建物までがずらりと並び、その一つ一つに店が営まれていた。

他にもこの街を心行くまで楽しむ為に豪華な宿泊施設や遊戯施設も数多く存在し、この街のみで生涯を共にする者も多いであろう事だろうかわせる。

街全体の規模だけで言えば、これまでに訪れたどれよりも間違いない群を抜いて一番に入る大きさであろう。

アリア「すつごい大きな街だねー。私だったら十秒で迷う自信あるなあ」

ルイ「全世界においても一番大きな街ですからね。だからと言って、たった十秒で迷わないでくださいませ……」

アリア「あ、見て見て。この街にも川があちこち流れてるんだね。トルレンテ湖だっけ？ やっぱりあそこから流れてるのかなのかな？」

ルイ「そうですね。リュツセルもアクアラも、川の流れに沿って街が形成されたんだと思いますわ」

シオン「ともかく、まずは入国許可証を発行しに行かないとね。この案内板から見ても、この街にも『ルイーダの酒場』はあるみたいだね」

一同は街の案内板に記された場所を手掛かりに、ルイーダの酒場を目指して歩き出す。

あちこちに目をやるアリアを心配そうに見つめたシオンをルイは見かねてか、アリアの手をがっしりと握りながら歩いていた。

アリア「街全部見て回るだけでも何日かかるのかなあ……」

ルイ「最低でも一週間程はかかるのではないでしょうか。ここは娯

楽を主にした施設も多いですから」

街に入ってからもずっと店が並ぶ景色が続く。

これだけの商いが昼夜問わず行われているのだと思うと、これだけの大きさになるのも確かに頷ける話だった。

シオン「ほらほら着いたよ。中に入らないと」

アリアとルイが話をしている内にルイーダの酒場に到着していたようだ。

相変わらず外側からの見た目こそはグランダリオンで見かけたものと遜色なかったが、一方で中の広さは単純に見ても前回訪れたそれよりも段違いを誇っていた。

アリア「雰囲気はやっぱグランダリオンと大して変わんないね。相変わらず酔っ払ったおじさんはいっぱいいるし……」

シオン「しょうがないよ。冒険者にしか馴染めない酒場となれば羽目の外し方だつてそれなりになるだろうし」

酒場のカウンターまで訪れた三人は、ミストラル王国へ入る手続きを済ませようとする。同じ目的の冒険者が多いのか、その手つきは慣れたものだった。

……が、今回はその冒険者の多さが残念ながら『仇』となつてしまつたようだ。

マスター「今結構、申請者が多くてねえ。早くても三週間から一か月は待たないといけないかも知れないがそれでもいいかい？」

アリア「ええーそんなに待つのに!？」

マスター「こればかりは仕方ないさ。まあそれに、幸いと言うかこの街を知るんだつたら、一か月あつても足りないくらいだぜ？ 丁度いい機会だと思つて気長に待つてたらどうだい？」

その提案も悪くはないのだろうが、生憎とアリア達は観光の為にこの街に来たのではない。とりあえず申請だけは済ましたが、このまま黙つて突っ立つていてもどうにもならないと思ひ、ひとまず酒場を後にした。

シオン「うーん参つたな。一か月かあ……」

ルイ「この街でそれなりに手に入る情報もありましようけど、それ

でも一週間もあればほとんど出尽くしてしまうと思えますわ……」

まさかここまで待たされるとは思っていなかった三人だけに、急に手詰まりになった感覚に囚われ、終始立ち尽くしてしまう。

アリア「ここで黙っててもしょうがないし、向こうに休める広場もあるみたいだから少し休まない？」

シオン「……それもそうだね。それじゃあ向かおうか」

三人が納得し、広場へ向かおうとした、そんな時だった。

——まず最初に『騒ぎ』に気づいたのはアリアだった。

何やら小さな少年らが五人程度で集まり、その中の一人が仕切りに叫んだりして騒いでいたのだ。

この時点であれば、よくある少年のおふぎけだろうと三人も聞き流すつもりだった。

少年「離せよ！ 母ちゃんの命がかかっているんだ！ 止めたってオレはミストラルに絶対行くんだからなッ！」

だが、叫んでいる内容や態度が明らかに切迫していて、遂には取っ組み合いの揉め事にまで発展してしまった。

ただならぬ様子に見ていられなくなったアリアは慌てて仲裁に入る。

アリア「待って待って、どうしたの？ 喧嘩はよくないよ！」

組み合いをしていた片方の少年は大人しく引き下がるが、騒ぎの張本人であるときれる、母の命がかかっていると叫んだ少年は、苛立たし気に舌打ちをしてそっぽを向くだけだった。

シオン「……どうやら訳ありみたいだね。僕達でいいなら、話くらいは聞くよ？」

二人ともダーマにいた頃から下級生とも接していたのが功を奏したか、なだめるのにはさして苦労はしなかった。

そして止めに入ったこの三人ならば信用におけると値したのか、集団の中の女の子がぼそりと呟き始める。

女の子「……カイト君が、街の下にある『地下水路』を通ってミスティア女王様に会いに行こうとしてたの」

カイト「おい、なんでしゃべるんだよ！ この人達には関係ないだ

ろッ！」

女の子「だって、こうでもしないとカイト君行っちゃうでしょ!？」

黙ってたら再び喧嘩になりそうな勢いだった。

そこまでして何を得たいのかは気になる所だったが、それ以上にシオンには重要な発言があった事に気づき、カイトに問い詰める。

シオン「……地下水路を通って『女王様に会いに行く』って言うのは、どういう事なんだい？」

カイト「そ、それは……」

本来ミストラル王国へ行くには、リュツセルとミストラルの間を流れる川を越えなければたどり着けない。

かつ川の上には関所が立っており、その場所も許可証なくしては通れず。一般人ならばそこを通る以外には方法がない筈だった。

しかしこの少年達の様子ではどう見ても関所を強行突破する風には見えない。もしくは文字通り、ミステリア女王に会うための『第二の手段』があるというのか。

カイト「この話を他の人達には絶対にしないって、約束してくれるか？」

沈黙のままにシオンは二人に目配せをする。そしてアリアもルイも領いて了承したことを確認すると、低く小さな声だが、確かにカイトに伝わるように約束した。

シオン「周りにも特に聞いてる人はいなそうだ。……話してもらっていいかい？」

カイト「……皆も知ってるとは思うけど、普通に外を通って行ったら関所で邪魔されて通れないし、おまけに外はモンスターだらけだからオレだったら丁度いいと思ったんだよ」

ルイ「で、でも……。本当に地下水路がミストラル王国へ繋がる道だとするならば、それこそ表立って噂が広がっていてもおかしいのでは？ まるで知る人ぞ知る、秘密の抜け道のようなのですわ」

カイト「そりゃそうさ。なんせこの街に流れてる『小さな下水道』をつたって行かなきゃならないからな。本来の地下水路への入口は街の兵士が全部厳重に管理してて通れないさ。……まあでも、『兵士が

見張ってる』って分かったからこそオレも気づいたんだがな」

アリア「……まさか試しにその下水道を通ってみたの？」

カイト「そうさ。そのまま通って少し歩いたら、その内地下に流れてる大きな川に着いたんだよ。あんた達がこの街にいるって事は薄々気づいてると思うけど、トルレンテ湖から流れて直接街を通ってる川は、アクアラとリュツセル。……それにミストラルの三つだ」
そこまでのカイトの説明で、シオンはすぐに閃いた。

シオン「成る程ね……。要するにこの街の下に流れてる地下水路はミストラル王国まで『ほぼ確実に繋がっている』。そう言いたいんだよね？」

彼の単刀直入な解釈にもはつきりと頷いたカイト。

ルイ「だ、だとしても、危険すぎますわ！ 人の手が行き届いていないなら、尚更モンスターの巣窟になっていると考えて間違いないでしょうし、一歩間違えてあれだけの川に飲み込まれたら二度と帰らぬ人になってしまいます！」

アリア「ルイの言う通りだね……。カイト君がそこまでして行きたい理由はなんなの？ もしかして、さつき聞こえてた『お母さんの命』ってのが関係してるのかな？」

アリアの核心を突いた質問に、カイトは最初こそ答えるのをためらった。

しかし、このままではどうしようもないとすぐに思ったのだろう。

藁にも縋る表情でカイトはアリア達に打ち明けた。

カイト「オレの母ちゃんやんが重い病気にかかっちゃまって、医者でも直しようがなくなつて……。このままじゃ長くても後一か月の命って言われて……。残された手段は女王様にでも頼むしかないって言われたら、オレが行くしかないと思っただよ……。！」

やり場のない悔しさに身体は震え、涙は何粒もこぼれ落ちる。

小さな身体一つでできる事など何もないのは、その涙が証明するように少年自身が一番理解していた。

それでも、だからこそと何かをせすにはいられなかった。それが例えモンスターの住処へ足を運ぶ事となっても。

そして、それまでずっと真剣な表情で見守りながら黙っていたアリアが、少年の肩を抱きながら振り返った。

アリア「ねえ、お願いがあるんだけど、いいかな……?」

不安そうな瞳で重々しくも、アリアはどうかして言葉を紡ごうとする。

——しかし、それを遮ったのは他でもないシオンだった。

シオン「自分達で『地下水路に行こう』って言うんでしょ?」

ルイ「なっ……! ほ、本気ですの!」

その提案は周りの少年達だけでなく、ルイすらも感情が詰まり仰天してしまふ程だった。

唯一例外だったのは、幼い頃からの付き合いであるシオンだけ。

シオン「正直、なんとなく予感はしていたよ……。ただ、何の考えもなしに行くんだとしたら、それこそ下手したら僕達は『犯罪者』で終わるだけだよ。……どうしてかは勿論分かるよね?」

アリア「そ、それは……分かってるけど……」

犯罪者と放たれた言葉がアリアの胸に突き刺さり、嫌が応にも口籠ってしまう。

当たり前と言えば当たり前だった。何しろ許可証も持たずに非正規のルートを通って、ミストラルへ入国しようとしているのだから、万が一にもばれてしまえば牢獄へ放り込まれてもなんら不思議ではない。

アリア「で、でも! 私達だってミストラルに行くのが目的だったんだし、今の事情を話せばきつと分かってくれるよ!」

シオン「それこそ甘いよ……。確かに分かってくれるかも知れない。……けど、分かって『くれない』確率の方がどう考えたって高い。理由はどうあれ、僕達は許可証を持っていないんだからね……。カイト君の事情を知ってて、尚且つ自由に動けるのが僕達しかいないんだったら、それこそ焦らず慎重に行動するべきだと思ふな」

正論過ぎる正論に、アリアは何も返す事ができなかった。

大人しく発行されるのを待つべきか否か、はたまた別の手法を模索するのか。果たしてアリアの中で一体何が最善手なのか。

皮肉にもどちらも一か月という区切りで天秤にかけられてしまい、悠長に待つ事ですら母の命という重すぎるリスクが付き纏う。

だがここまで顔を突っ込んでしまつて、今更匙を投げるのはアリアの過去が許さなかつたのだろう。

ルイ「……私が直接、女王様と話しますわ」

アリア「ルイが女王様と……？」

ルイ「ミストラル王国はグランダリオンとアウスペリアで結ばれた、三大同盟の国でもあります。それに幼い頃ではありますが、過去にミスティア女王が二度ほどグランダリオンを訪れた際に何度か話もしています。……だから、私が女王である事を明かせばきつとミスティア様は分かつてくださいますわ」

それは、彼女が王家の身であるからこそできる一筋の希望だった。

シオン「それならば可能性は十分ある……けど本当にいいのかい？ 事が公になつてしまつたら内情を知っている僕達ならともかく、表向きは自分の立場を利用した、えこ贓戻と思う輩だつて少くないと思う。何よりルイはなるべく王女である事を明かさずに、旅をしたいんじゃない？」

ルイ「……大丈夫ですわ。早かれ遅かれ私がミスティア様に会う以上、王女だと知られるのは時間の問題です。だつたら、せめて一人の人を救える為にも私は何かをしたい……！」

凜として放つたその答えに、誰が誰を見渡しても、異を唱える者はいなかつた。

となれば、決まっていたのだ。

アリア「じゃあ……地下水路を通るんだねっ！」

シオン「やれやれ……せめて出発は明日にしようよ。これからの準備もあるし、焦りは何も生まないからね。カイト君達も明朝になつたらこの場所に来てほしい」

本当は今すぐにでも助けに行つてほしかつたのが、カイトの本音だつただろう。

しかし他に助けになりそうな人などいない。

カイトは大人しくシオンの言う通り明日を待つしかなかつた。

そんな歯痒そうな少年の頭を優しく撫でたのは、アリアだった。
アリア「……大丈夫だよ。カイト君を独りになんか絶対させないから！」

孤独を何より嫌い恐れるアリアはどこまでいっても変わる事はない。

吉報を持ち帰る誓いを、互いの小指を結ばせて交わした。

第二十一話 いざ、突入！

その夜。

リュツセルの宿屋の一部屋を借りた三人は明日へ備えるべく、早い眠りにつこうとしていた。

三人という事でベッドの数も3つある部屋を借りたのだが、その内の一つは何故か誰も手をつけておらず眠っている者もいなかった。

シオン「ルイはすつかりアリアの隣で寝るのが、習慣になっちゃったみたいだね。これならベッドを借りる数も当分二人分で十分なのかな？」

アリア「もう、別にいいじゃない。私も何だか妹ができたみたいで嬉しいし」

体力の少ないルイは疲れが溜まるのも早く、一番最初に寝付くのも決まっていた。

寝息を静かに立てるルイの頭を撫でながらも、アリアはじつと一点を見つめて、何かを考えている様子だった。

アリア「……『神秘の草』なら、なんとか治せるんじゃないかな」
それには、シオンも思わず変な声を上げてしまう。

船の上で話したデリックが言い残した言葉を、アリアは忘れてはいなかった。

シオン「まさか、僕達でそれを探すって言うのかい？」
こくりと、アリアは頷く。

アリア「女王様に会って、『神秘の草』の手掛かりを少しでも教えてもらおうよ。そうすればすぐには見つからないかも知れないけど、諦めなかったらきつと……。ううん、絶対に大丈夫！」

シオンを真つすぐに見つめるその瞳には、確かなる希望が宿る。
片時も諦めなかったからこそアリアはここまで来れた。小さな頃から一緒だったシオンも、その瞳に何度も救われた。

いついかなる時でも諦めないアリアの瞳には、『未来』があり、それは今回でも同様だった。

——となれば、シオンの答えは最初から決まっていたのだ。

シオン「……分かったよ。じゃあ何としても『神秘の草』を見つけ出さないかね」

アリア「ありがとう……!」

今回は時間に限りがある。彼女の心に焦りが有るか無いかと言われると、当然あつただろう。むしろ焦りどころか、無理に終わる可能性の方が高いのではと、アリアは内心思っていたかも知れない。

だからと言ってこのまま少年を独りにさせてしまう現実を認められなかつた。何より、アリアの全てが許さなかつた。

この大陸の何処かに眠ると云われる幻の秘草を探すために、彼女は明日も歩く。

——残されたタイムリミットは、一か月。

街でも、何処でも、その場所に人が住むからには、『水』が必要になる。

だが、その水の全てが自分の喉を潤す為に使うかと言われるのも、もちろんそうではない。

捨てる水あれば、拾う水あり。人々はいついかなる時も取捨選択を迫られて、今日を生き延びていく。

そんな人々の不要になった水が一か所に集まる場所に、一同は集まっていた。

アリア「思ってたよりも、狭いし、流れも大分速いね……。水も深そう……」

シオン「これだけの人が住む排水用の下水道なんだからそりやそうでしょ。……しかし臭うね」

ルイ「中に入る前に『トラマナ』を使いますから、身体への影響はほぼ皆無ですけれども……。やはり生理的に受け付けないのは致し方ないのですわ……」

早朝から広場に集合して、カイトが通り抜ける筈だった下水道の入口まで移動した三人は、それを見つめながら突入の準備を進めていた。

カイト「中に入ったら下に真っ逆さまだから、身軽なオレとは違っ

て多分後戻りはできねえぜ。別の帰り道も探せばあるだろうけど、ちやんとした入口には多分どこも兵士が見張ってる。もちろん見つかったらおしまいだ。……だから、準備だけはしっかりな」

昨日のなりふり構わなさから一転、とても少年とは思えない冷静な視野を持ったカイトだった。だからこそ、この小さな入口の下水道を通ってミストラルへ行くという手段も見つけられたのだろうが。

アリア「じゃあ……行ってくるね!」

カイト「……必ず帰って来てくれよ。俺にはもう、あんた達だけが頼りなんだ」

心配そうに見つめるカイトにも、アリアは強気な笑みで応えて見せた。

そしていよいよ、ヘドロ色に濁った下水道に飛び出す。

ルイ「私達を守って——『トラマナ』!」

三人がジャンプすると共に、小さな結界に身を包む呪文を唱える。全身に水を浴びながら滝つぼに飲まれるように、下水道の本流部へと落ちていく。

時間に見たら十数秒にも満たなかったが、ほんの一秒とて不快なひと時だったのは間違いない。

やがて三人は、排水路の終点に激しい水しぶきを上げて到達した。

アリア「うえー。びしょびしょ」

ルイ「メラ系である程度は乾かせますけども……濡れたままって言うのは結構気持ち悪いですわね」

シオン「……とにかくまずは方角の確認からかな。ルイ、確かミストラル王国の方角は南南西で合ってるよね?」

ここから先は完全に未知のエリア。

本来通り抜ける為の場所ではないのを通るというのは、文字通り案内もなければ道標も全く存在しない。ある程度の指針こそはあれど、最終的に試されるのは己の『勘』のみだ。

懐から方位磁石を取り出したルイは、針の方向と照らし合わせておおよその進行ルートを模索する。

ルイ「ただ水の流れに沿って歩くだけですと、きつと下流へと進ん

でしまいますの。そうなるといずれはアクアラにたどり着く事かと思いますが、それでは何の意味もありませんわ。ある時は流れに乗り、またある時は逆らって進まなければミストラルへの道は見えて来ないと思いますの」

シオン「……おまけに一日で目的地に着ける距離じゃない。少なくとも三日間は見えないといけないし、そうすると途中で休息地を見つけないといけない。状況によっちゃ早めに、探索を早めに切り上げて休息を優先しないと」

アリア「でも、もたもたしてたらそれこそカイト君のお母さんの命に関わっちゃうよ！ なんとしてでもこの地下水路を早く突破して、女王様に会わないと！」

無論アリアとて、今回の冒険が今までで一番過酷である事は重々承知している。

しかしこの冒険が失敗する事は、カイトの母の命を失う事でもある。それだけではなく、相手側が事情を呑み込んでくれなかった場合は最悪アリア達は犯罪者となってしまう危険性も孕んでいるのだ。

シオン「……昨日も言っただけど、焦りはそれこそ僕等の命にまで及ぶ危険性だってある。幸か不幸か、一か月という猶予はあるんだ。それを無駄にしちゃダメだよアリア」

長年連れ添って来た親友の言葉にも、アリアはただ気持ちが空回りするばかりであった。

そんなそれぞれの気持ちを抱いたまま、いよいよ歩き出した三人。

今回はいつものアリアを先頭に進むのではなく、盗賊の心得と技術を持ち合わせるシオンを先頭に立たせる事で第一警戒役としても担わせる。

そうすれば、あらゆる目の前の不測の事態を最小限に留まらせる事ができると、シオン自身が判断した上でだった。未知のエリアを探索するにあたっては、ある意味勇者や名だたる戦士すらも差し置いた、どの役職よりも頼りになる存在といっても過言ではない。

シオン「先が全く見えない以上、既に消耗戦は始まっていると思つて。特にルイは魔力の消費を最小限に留めて、アリアはモンスターのも

戦闘にいつでも備えられるように極力体力を温存する事」

ルイ「……分かりましたわ。昨日道具屋で購入した『魔法の聖水』も三つですから、余程の緊急時以外には使わないと約束しますの」

アリア「使うタイミングはルイに任せるよ。私だといつ使えばいいか分からないし」

まずは地下を流れるであろう、下水道の合流地点でもあるトルレンテ川の本流を見つけなければならぬ。

何人もの人間が悠々と通れる大きな配管がしつかり通っており、歩き始めたこの付近はまだリュツセルの下水区域である事は容易に推測できる。

モンスターの気配こそ今はまだないものの、いつ飛び出してきてもおかしくはない。気を抜く事無く、しかし張り詰めすぎもせずシオンの感覚を頼りに一行は進む。

一定距離を進んではルイが細かく方位を確認し、小柄な街の地図をシオンが手にしながら探索呪文である『フローム』で、おおよその位置情報を予測する。地図のある一点に印が書き込まれているのは、出発地点を表した最初の地点だ。

一方でアリアは、探索に集中する二人をモンスターなどの襲来からいつでもカバーできるように、前衛タイプとしてはあまり例を見ない最高尾のポジションにつきながら、最も全滅の危険性が高い背後からの奇襲にも備える。

シオン「水の音が大きくなってきた……。本流が近いかも知れない。いつ流れが強くなるか分からないから、各自気を抜かないでね」
二人は真剣な眼差しで確かに頷く。

やがて配管の切り口部分、つまりは出口へと到達した三人の前に広がっていたのは、圧倒される光景だった。

アリア「すごい……。地下に流れてる川なのにこんな広い場所だったなんて」

ルイ「それに流れも速くて、激しく水が打ち付けられては、万が一にでも落ちたら命はありませんわ……。幸い足場は広そうですから余程でなければ、大丈夫でしょうけれども」

大きな濁流が轟音となって洞窟内に響き渡り、対岸まではかなりの距離があつた。

更に奥から流れ来る水も右から左へと何通りかに分かれて流れてきている為、果たしてどの道が正解なのかは誰にも分からない。

正に自然が作り出した天然の迷路であり、『無数の脈』となつて流れる水は先行く者を惑わし、疑心暗鬼に駆らせるには十分過ぎた。

シオン『水の脈』とは昔の人はよく言ったモノだね。これじゃ水路どころか立派な地下水脈だよ……。だけでも、立ち止まっている余裕も僕等にはない。……行こう！』

中途半端な恐れは冒険者にとっては最大の禁忌でもある。

退くか進むか。そのどちらかしか許されない三人には、今や進むしかなかったのだ。

そして、その『試練』は早くも襲い掛かる。

——魔物の群れが現れた！——

シオン「分かつてはいたけど、やっぱりここまで来るとモンスター
の巣窟になつてみたいだね！」

アリア「——任せて！ 私はこんな時くらいにしか、役に立てないから！」

くさつたしたい、デスキャンサー、しびれくらげ、メタルハンター。

どれもが三人にとっては書物で姿形こそは見ているものの、面と向かつて対峙するのはこれが初めてのモンスターばかり。

先を進むだけ脅威を増していくモンスターにも、アリアは勇敢に攻め込んでいく。

女王への道筋となつた、彼女の冒険は今始まつたばかりだ。

第二十二話 煌めく指輪 ◆

モンスターと真っ向から対峙したアリアは、敵に切り込む少し手前の所で、強く立ち止まる。

シオン「アリア！——分かってると思うけども！」

アリア「大丈夫、魔力はほとんど使わないよ……っと！」

立ち止まるという表現は少しばかり違った。彼女はそうしたのではなく、大きく『踏み込んだ』のだ。

大胆に踏み込んだステップは勢い余って、身体だけは慣性に従って前に出ようとする。

しかし、その勢いを殺す事なく身体をぐるりと捻らせ回転させる事で、やがて一つの強い遠心力となった。

本来槍などのリーチが長い武器で行使する筈の『薙ぎ払い』は全ての敵を斬り裂き、最も効率的にダメージを与える手段となった。

ルイ「攻撃範囲の広いブーメランを使ってる訳でもありませんのに、あんな最小限の魔力で一度に全ての敵を……流石ですわ」

全体に攻撃できたとは言っても、まだそのモンスターも生き残っている。攻撃の反動で大きく隙を晒したアリアを見逃す訳もない。

機敏なメタルハンターが、剣の他に併せ持つ弓矢を引き絞ってアリアを狙い撃つ。一瞬の間に放たれた矢はアリアの胸を貫こうとするが、届く事はなかった。

後方から同様に飛び出した矢が、寸分の狂いもなくお互いにぶつかり合いしつかりと相殺されていたのだ。誰が放ったかは今や言うまでもない。

そして、持ち前の素早さで間髪入れず第二撃を繰り出したシオンは、群れて固まっていたしびれくらげとデスキャンサーの急所を的確に突いて仕留める。

攻勢の手を緩めないアリアも、そのままメタルハンターに突撃。力任せに振るった一撃は鋼鉄のボディをも容易く斬り裂いて破壊した。

ルイ「これで終わらせませすわ……『メラミ』！」

最後に残った体力の高いくさった死体も、単体に特化させた炎呪文

の前には消し炭と化した。

——魔物の群れを、やっつけた！——

シオン「ほとんどが初見の敵だったけど、何とかうまくやれたね」
ルイ「できれば呪文を使わずに終わらせたかったですけれども……。私も物理面をもっと鍛えなくてはなりませんわね」

一戦だけで見ればほとんど使っていない魔力でも、長丁場の探索になればなるだけ、そのたった一回の積み重ねが後半に大きく影響する。

常に余力を残した立ち回りを求められるのも、冒険する上では必要不可欠なのだ。

アリア「いつ何処で強いモンスターに出くわすか分からないもんね。私も飛ばし過ぎないようにしないと」

モンスターの気配もひとまず収まると、立ち止まる数分の時間すらも惜しまれる一行はすぐにその場を後にする。

シオン「しかし、この感じだととても地上に出られそうな場所は見つけられないかな……。地上を探し過ぎて道に迷ったら、それこそ本末転倒だしね」

アリア「洞窟の中でどこか落ち着けそうな場所を見つけたら、そこで休んだ方がいいのかな？ 私は大丈夫だけど、ルイはそれでもいいの？」

ルイ「……正直に言いますと、やはり今まで城の中での生活だったので、不安はやっぱりありますわ。一応野営に関する本もある程度は読み漁ったので、知識だけならあるのですが……」

長旅をする以上は、野営の一つや二つなどは当たり前である。

ましてや目的地までの距離が明確にならないのであれば、なおさら無理などできずに余裕を持って探索を切り上げるのが普通なのだが、こればかりは自らの手で経験しないと、本で得た知識だけでは到底安心できるとは言えないだろう。ルイもそれを察知していたからこそその不安だった。

シオン「幸いというか、ここなら水はいくらでも確保できる。もちろんそれを見越した準備だつてしてあるから、安全な場所さえ見つけ

られればその辺はあまり心配しなくてもいいかな」

ルイ「ありがとうございます……。本当に助かりますの」

まずは方向を見失わない事を最優先にしつつ、野営地の確保に努めなければならぬ三人はできるだけ視野を広く持ちながらも川の流
れに沿って進んでいく。

——そんな時に、アリアはある何かを見つけた。

アリア「ねえねえ、よく見たらすぐ横に奥に続いてそんな道があるよ？」

シオン「……本当だ。暗くて分かりにくかったから見つけられなかったのかな」

他の分岐路の入口と比べると人が一人分入れそうな幅しかなかったが、たしかに奥へと繋がってはいた。

ルイ「どうしますの？」

シオン「一応調べてみようか。あまり目的地から逸れる様だったら引き返そう」

一同はお互いに頷きあい、奥へと進む。

アリア「く、暗いねー。ちよつと灯りが無いと辛いかも……」

ルイ「私の『レミーラ』でしたら、このくらいの場所なら灯せますけども……」

いくら簡易的な呪文でも魔力は確実に消費する。まして本道から外れているこの道は、ただの空振りで終わる可能性も考えると二つ返事でシオンが了解するのもはばかられてしまう。

シオン「でも仕方ないか……。万が一落とし穴があったり、この暗闇でモンスターから奇襲を受けたらそれこそ一大事だ。……ルイ、お願い」

ルイ「分かりましたわ。……『レミーラ』！」

真つ暗な闇に、温かい橙色の魔力を伴った灯りが染み渡る。

よく見るとすぐ途中で行き止まりになっていたのだが、最も奥には何やら『箱らしきもの』が置かれていたのだ。

ルイ「あれは……。もしかして宝箱ですか？」

所々錆びていたり、埃も完全に被ってしまったが、間違いなく

ルイが言った『それ』に違いなかった。

アリア「うそー本当?! ダーマで勉強した時は正直迷信って思ってたけど、本当にあるんだー!」

急いで開けようと、アリアは欲望に目が眩んだ状態で宝箱を開けようとする。

——が、その手はすんでの所でぴたりと止まった。

シオン「……今回はひどくいばこじやないと思うよ。安心して開けて」

アリア「よ、よかったあー……」

二人は何の話をしているのかとルイは素っ頓狂な顔をする。その間にもアリアは宝箱を開けてしまった。

そして、中に入っていたのは。

シオン「なんだいそれ。……『指輪』?」

それは一羽の鳥を象って装飾された、銀色に輝く指輪だった。

見た目こそ至ってシンプルなもの、錆び付いていた箱とは裏腹にこの指輪だけはまるで世界から切り離されたように、輝きを一切失わずにいる。

ルイ「もしかしてそれは、『疾風のリング』ではありませんの?」

アリア「なんか聞いたことあるような……身に着けると身体が軽くなるんだっけ?」

ルイ「直接的な効果という意味で言えば、そうなりますわね。その指輪に込められた魔力で肉体にかかる負担を軽減させて、より素早さを高める作用がありますのよ」

アリア「やったー本物のお宝だよー!」

シオン「……って事は、この場たとアリアが装備するのが総力面では一番いいのかな?」

アリア「そうなのかなー。どれどれ……」

煌めく疾風のリングをアリアはまじまじと見つめて、指にはめ込むかどうかしばらくの間迷っていた。

結局、最後までそれをはめる事はなかった。

そして、そのまま立ち上がるとシオンに軽々しく手渡ししてしまう。

シオン「……僕が装備しろって言うのかい？」

アリア「この場で今一番倒れちゃったら困るのはシオンだからね。私が万が一倒れても、シオンやルイだったら助けを呼べに行けるかもしれないけど、シオンがやられちゃったらどうしようもなくなっちゃうからね。……だからシオンが装備して！」

言われるがままになってしまったシオンは、強引に押し付けられるままに仕方なく受け取る。

シオンもシオンで本当に装備していいものか一瞬こそ迷いはしたが、そこは彼の切り替えの早さだった。

ルイ「やはりその合理的な所はシオンならではのですね。私もシオンが装備して正解だと思いますわ」

シオン「そ、そうかい？ まあそこまで二人が言うんなら……」
狼狽えるシオンがやけに珍しかったのか、二人は顔を見合わせてせせら笑ってしまう。

やがて紅潮したままに外に出てしまったシオンを慌てて追うように、三人は宝箱のあった部屋を後にした。

第二十三話 神速の矢

三人が今揃って感じていたのは『焦り』だった。

リュツセルを出発してからかなりの時間が経ったのだが、同じような景色が続いて、次第に自分達の位置感覚が掴めなくなって来る。

一息つけそうな場所もこれといって見当たらず、モンスターと定期的に出くわしては少しづつ体力や魔力も削られていく。

如何に屈強な冒険者と言えども、休息なくしてはいずれ力尽きる。そうなってしまえばベテランも素人も、最後に行きつく先は『死』なのだ。

シオンとアリアは旅慣れてる分まだよかったのだが、残る『一人』はそうもいかなかった。

歩き続けた足は今や疲労の色を隠せず、段々と引きずるような形で歩く羽目になってしまう。

そんな状態で歩を進めては、僅かな段差にさえ躓いてしまうのは当たり前だった。

ルイのもつれた足は小さな小石を気づかずして踏んでしまい、そのまま滑るように転んでしまう。

アリア「だ、大丈夫!?!」

最高尾を歩いていたらアリアが後ろからとつきに介抱し、患部に回復呪文を施す事で傷そのものはなんとか癒せた。しかしあくまで傷を癒す為の呪文は、蓄積されたルイの疲労までは回復させる事ができない。

アリア「ねえシオン、私達もそろそろ限界だよ……。多少危険でもどこかで休まないと……」

今、彼の頭の中は葛藤に満ちていた。

ここで最も冷静な判断を下せるのはシオンだけ。だが、その判断が結果として吉と出るか凶と出るかは誰にも分からない。

シオン「最悪ルイのリミットで、ここから無理矢理脱出するという手段はある。だから僕達がここで力尽きるという事は現時点ではほぼないと思う。……だけでもそれが何を意味するかは、アリアは分

かるよね？」

今ミストラルになんとしてもたどり着きたいのは、間違いなくアリアだった。

だが、もしここでシオンの言う通りにリレミトに戻ってしまえば、自分達の命こそは助かるが、結局振り出しに戻るだけ。それは即ち、自分達を信じてくれたカイトに最悪の報告をしなければならぬのと同義なのだ。

ルイ「私ならまだ大丈夫ですよ……。魔力ならば余裕はありますから」

シオン「それこそダメだよ。万が一ルイの身に何かあつて脱出すらできない状況に追い込まれたら、僕達は本当にお終いだ」

三人の言う事にどれも間違いはない。

それ故にどれを優先させるべきかを下せずにいる。シオンにとっては、ここが正念場だった。

シオン「……進もう」

苦渋の末に、彼は強気に洞窟の奥を見据えた。

シオン「危険な目に遭うリスクもあるけど、多少道から外れても火を焚けそうな場所を探して、見つけ次第今日は休もう。……それと、最後の手段は常に頭に入れて」

ルイ「分かりましたわ……！」

確かに頷いたルイとは比べ、『失敗』の二文字が頭によぎってしまったアリアは不安そうに頷く。

その後も残された気力を振り絞り、懸命に奥を目指す。

アリア「なんだろう……？　水の音がいつもと違うような……。高い所から落ちてる感じの音？」

そんな矢先だった。

アリアが普段とは若干音色が異なった水音を最初に感じたのは。本流を進みながら、再び音のする方向に目をやるアリア。

気付いていたのはどうやら彼女だけで、このままでは前に行く二人は歩き去ろうとしてしまう。

アリア「——待ってっ！　こっちから何か違う音が聞こえるの！」

彼女の叫びによろやく振り返った二人。アリアの何かを感じ取った様子に、シオンは迷わず駆け寄る。

シオン「……本当だ。これはもしかして『滝の音』……?」
アリア「だからといって、特段何かある訳でもなさそうなんだけどね……」

アリアの感じた通りに奥に滝があったとしても、それだけでは特に状況が好転する兆しはない。

が、そこは苦楽を共にした長年の縁だった。

アリアの直感を信じたシオンは、滝のある場所を目指して進む事にしたのだ。

ルイ「大丈夫なんですの? こつちを進むとミストラルの方角からは少し外れてしまいますが……」

シオン「分からない。……ただ、アリアが何かを感じ取ったんだ。だから僕はそれを信じて進むよ」

歩くにつれ、段々とその音は大きくなる。ここまで来ると、最早確信しかなかった。

そしてアリアの感じた『それ』は確かにあった。

三人の前方に見えたのは、円形状に広がった小さな池と、その奥から水が流れ落ちてくる滝だった。更にアリアはあるものを発見する。

アリア「ねえ見て、滝の裏側に何か小さな入口があるよ! もしかしたら、あの奥なら休めるんじゃない?」

ルイ「本当ですわ。……でもまずは中の様子を見ませんか」

口では警戒する素振りを見せながらも、よろやく休息地を見つけたと、アリアとルイが心の底から安心しきった時だった。

シオン「……待って! 中から『何か』が出てくる!」

滝が流れ落ち、大きな水たまりとなった池の中心からゴボゴボと泡が弾ける。

水泡はどんどん数を増し、遂には水面が盛り上がりつつ中から何者が飛び出そうとしているのは明白だった。

そして、豪快な水飛沫と共に出てきたのは――。

――ヘルダイバーが現れた!――

水棲モンスターの中でも凶暴な部類に入る中型モンスター『ヘルダイバー』。しかもその数は二体。

蛇のようにくねらせた長い首と剥き出しの鋭い牙をぎよろりとアリア達に向かせ、甲高い叫び声を上げる。どうやら、彼女達が縄張りを犯した事に怒りを覚えているようだった。

アリア「け、結構でかい……！ しかも相手が水の上だから、自由に戦えないのはちょっときついかも……」

地上とは違って水の上を移動しながら戦うなど、困難どころか無理に等しいレベル。

予想通りにヘルダイバーがいいようにこちらに飛びついて攻撃したり、拳句の果てには呪文やブレスをおかまいなしに撃ち込まれてしまい、防戦一方だった。

水棲種が本領を発揮できる場所で戦ってしまうと、こうまで不利に追い込まれるのかと、流石のアリアも予想外の手こずりに舌を巻く。

ルイ「攻撃呪文もあんなすぐに水中に潜られては、ダメージがほとんど通りませんわ……。せめて一体だけでしたら的をしぼりやすいですのに……！」

攻防を交互に繰り返しながらも、分が悪いと判断したら水中に一度潜る。そんな歯痒い状況に、このままでは打つ手なしだった。

そんな時でも、じつと冷静に見据えヘルダイバーの行動を把握していたシオンは、やがてルイにある一つの『提案』を持ちかける。

シオン「ねえルイ。確かルーラって根本を辿れば、浮遊力を活用した呪文だよな？」

ルイ「え、ええ。確かにそうですね、……それがどうしたんですの？」

シオン「ルイは王家の洞窟でアリアの剣に、魔法剣としてピンポイントで呪文を込められた。……だったら、アリアの身体に『浮遊する程度の魔力』を込める事も普通にできるんじゃないかな？」

それはある意味合理的な彼らしくも、何とも大胆な発想だった。

重力に負けず、かといって空中に浮きすぎない程度に浮遊魔力を発動させられれば、確かに理論上は地面だろうが水の上だろうが落ちる

事無く浮き続けられるだろう。

アリア「な、何言つてんのよ！ それってその間は、ルイが無防備になるって事じゃない！ あんなのに噛みつかれでもしたら、それこそ一発で終わりじゃない！」

シオン「僕が足止め役としてルイとアリアのサポートをするよ。ルイの詠唱が中断されたらアリアは水中にドボンだから、ルイのサポートが最優先になるけどね」

どうするかと考えあぐねている間にも、ヘルダイバーは煽る様に攻撃してくる。最早四の五の言つてられる場合でもなかった。

時間にしたら数秒。ルイはその一瞬で悩んだ末に、シオンに己の運命を託す事を決めた。

ルイ「……シオン。サポートをお願いしますわ」

シオン「……了解、任せられたよ。大丈夫、ルイを守ると決めたのはアリアだけじゃないさ——『スクルト』！」

——全員の守備力が上がった！——

互いに腹をくくつたそれぞれの瞳からは、今やヘルダイバーを仕留める事しか頭に入っていないなかった。更にシオンは二人が次の行動に出る前に、続けてもう一つの呪文を重ねる。

シオン「まだまだ——『ピオリム』！」

——全員の素早さが上がった！——

ルイ「は、早いですのね……！」

シオン「この『リング』のお陰だね。全く宝物さまさまだよ！」

アリア「本気を出したシオンは、一瞬の間に二回行動ができちゃうからね……。よし、私も負けてられないよ！」

水中からヘルダイバーが飛び出す瞬間を見計らい、アリアが飛び出し、同時にルイも浮遊呪文を施す。本来正式な呪文ではないのに関わらず簡単に応用してしまう所が、ルイの『賢者』としてのセンスの光り所だったと言えよう。

そしてここから反撃が始まる。ルイを信頼しきっていたアリアは、沈む事など眼中にないと言わんばかりに、豪快に踏み込んでヘルダイバーへ攻撃する。

モンスター側からしたら予想外の奇襲に面食らって、まともにダメージを受けてしまった。これにはたまらず水中へと避難せざるを得なくなる。

シオン「……残念だけど、水面が上昇する以上次に出てくる場所は、ほとんど予想できるんだよね！」

完全にパターンを予測したシオンのニードルアローが、なんとヘルダイバーの眼を貫通する。急所を的確に突かれてしまい、否応なく悲鳴に近い鳴き声を上げる。

シオン「今だよアリア！」

アリア「任せて！ 稲妻……雷光斬ツ！」

渾身の雷鳴の一撃が、ヘルダイバーを斬り裂く。

水棲系だけあって元々電気にも弱い体質の上、驚異的な物理ダメージをも受けたヘルダイバーはアリアの秘技によって完全に沈黙する。

ルイ「やりましたわ！ これで残り一体ですよ！」

片割れが討ち取られた事に怒りを更に強くしたのか、動きがより荒くなり、かつ機敏になる。

そして頬を大きく膨らませたヘルダイバーは、圧倒的な冷気を纏った『凍り付く息』を一気に放射した。

——この時、ルイは直感した。

呪文を止めて守るか、このまま攻めを維持するか。全員ともに受けたら、あれだけで半壊しかねない程の威力だった。

閃いた末、ルイは皆の命には代えられなかった。

ルイ「ごめんなさいアリア！ ——『フバーハ』！」

柔らかな光の膜が三人を包み込むと、凍り付く息の威力を文字通り半減させる。が、その代償としてアリアは水中へと落ちる。

アリア「うわっぷっ！」

そして、この瞬間こそが最も危険だった。

無防備になったアリアとルイは、ヘルダイバーに次の行動を取らせる隙を作らせてしまう。

となれば奴が次にどちらを狙うか。答えは簡単だった。

明らかに体力の少ないルイを狙ったヘルダイバーは、彼女の頭を食

い千切らんとするままに飛びついていく。

慌ててアリアが助けに行こうとするも、水中にいた所為で大きく出遅れてしまう。

このままでは本当に不味いと、アリアが叫びそうになる。

——しかし、

シオン「——ルイはちゃんと守るって言ったでしょ？」

素早くルイとヘルダイバーの間に割り込んだシオンは、弓を構えたまま大胆不敵に目と鼻の先まで距離を詰める。

シオン「急所を突かれて精々悶えるんだね——『ニードルラッシュ』！」

急所を狙った無数の矢は、ヘルダイバーのあらゆる箇所を貫く。

一か所貫かれただけでも致命的な痛みが、全身の至る所へととなれば、それは最早筆舌に尽くしがたいだろう。

シオン「もう一発……！……これで終わり——『シャイニングアロー』！」

魔力を十分に溜めた神速の矢は、極太のレーザーとなってヘルダイバーの全てを貫いた。

——ヘルダイバーをやっつけた！——

残された一体も息の根が止まって水中へと沈むと、後には滝の流れ落ちる音だけが三人の周囲に響く。

ルイ「や、やりましたわ……。ありがとうシオン！」

シオン「なに、たまには僕もいい所を見せないと思って思っただけだよ」

今や三人の間で恒例の儀となった、勝利のハイタッチを二人で軽快に叩き込む。一方で横目で見ていたアリアはというと、何やら面白くなさそうな表情ではあったが。

シオン「自分だって、最初の一匹目はきっちり止めを刺したじゃないのさ」

アリア「そうだけど……。なんかおいしいところ持ってたかちやっとなーって！」

自分がルイを助けられずに焦っていたのに対し、シオンは全く意に

介さず至って冷静に対処して、ヘルダイバーを討伐。

この先見性と器量深さにはどう足掻いても太刀打ち出来ない、改めて思い知らされた瞬間でもあったアリアは、ただ悔しがるだけで一杯だったのだ。

シオン「さてと、今の戦闘で僕達もかなり体力やら魔力やら消耗しちゃった。あの場所が期待通りであるといいんだけども……」

勝利の余韻に浸る事もなく、そのまま滝の裏側へと近づき中へと入る。

ルイ「……丁度いい広さの小部屋といった感じですよ。天井も穴が通っていて空気も吹き抜けていますし、絶好の場所ではないのですか？」

アリア「ほ、本当だ。や、やったあ……。これでやつと休めるよ……」

シオン「とりあえずお疲れ様だね。という事は、野営の準備は僕がするしかないんだね……」

最早使い物にならなくなったアリアはさておき、せめてルイに助けを求めようかと目を配ったが、ルイもいつの間にか座り込んでいて申し訳なさそうに「お願いしますわ」と逆に頼まれてしまう。

シオン「……やれやれ。じゃあ早速水を汲んでこないと……。ああそうだ、火もおこしとかないと……。ついでに寝床の用意も……。つて、一人じゃやる事がいっぱい過ぎだよー！」

普段抜け目がないシオンも、この時ばかりは単なる苦労人だった。結局文句を言いながらも最後までシオン一人で準備をしてしまい、唯一シオン以外がやった仕事といえば、ルイが薪に火を点けたのみ。アリア「ありがとうシオン。やっぱ頼りになるよ！」

ルイ「冒険は戦いが全てではないという事を、まざまざと見せつけられましたわ……」

シオン「と、取ってつけたように君達は……！」

ものの十分足らずで今日の食料、寝床の確保、たき火の準備、水の補給を全てやってのけたシオン。

父の代わりを幼い頃から務めたというのは、やはり伊達ではなかつ

た。

第二十四話 交錯のミストラル

エトスン大陸の高地に位置し、悠久の深き霧に覆われた国、ミストラル。

太陽の光が射す事は一日を通してほとんどなく、毎朝毎晩曇った天気が続くこの国だが、同時に東の大陸を支える場所として最も重要な拠点でもある。

そんなミストラル王国の中心街の更にまた中心に城を構えて、この一国を支える『女王』がいた。

玉座の間には、深き海をそのまま映したかのような瑠璃色の髪を腰にまで真つすぐに下ろし、可憐な王服に身を包む慎まやかな一人の女性。

しかし、女王の姿を彩る高貴なる紫の瞳は、ミストラルの空と一体となってしまうように曇りがかってしまい、現状を報告しにきた一介の兵士にも険しい顔を崩さない。

兵士「ミステイア女王。報告いたします」

ミステイア「……申し上げてください」

兵士「依然として『黄金のティアラ』の行方は知れず、何者が持ち去ったのかを特定はできません」

変わらぬ現状を知った女王は、ただ奥歯を噛み締めるだけ。

ミステイア「しかし、普通の民家ならいざ知らず、あえてこの城を狙ってくる度量と技術がある者。……ならば『あの賊達』の仕業と考えるのが妥当でしょうね」

兵士「隊長らも十中八九あのアジトラに構える盗賊の集団が起こした犯行であると睨んではいます。現にそちらの方面で捜査も進んでいる事から、確信の域に近いかと。……ただ、です」

ミステイア「……分かっています。あのアジトのすぐ近くには『バミランの街』もあります。いざとなれば連中が街そのものを人質にとってくる事も」

兵士「しかし、今回に限っては盗まれた物が物です！ 多少の犠牲はやむを得ないのではという、他の兵からの声も多数上がってきてお

りますぞ！」

焦りと苛立ちを隠す事もせず兵士は率直に意を唱える。

奪われた物は早く取り返さなくてはならない。それが女王の持ち物であるならば尚更の事だ。そうしなければ国としての沽券にも関わり、いつまでも手をこまねいては増長されていつ次の手を打ってくるか分からない。

ミスティア「それはなりませんっ！」

——しかし、女王は頑なに態度を変えなかった。

ミスティア「決して無用な争いと血は流さないのが、父と母から受け継いだ我が国の信念です。例え彼等が名だたる大盗賊であつたとしても、例外はありません……！」

兵士「しかし、女王様！」

ミスティア「道は必ずあります。私のティアラなど、例えボロボロになって帰ってこようが、後でいくらでも作り直せばよいのです。大事なのは一人の民の命と罪を犯した者に対する償い。……そうではありませんか？」

兵士「……承知いたしました。女王様の御心のままに」

ミスティア「夜から開かれる緊急会議にも、もちろん出席いたしました。報告ご苦労でした……もう下がってもよいですよ」

促されるままに兵士は一礼をして女王の間を後にする。そして、誰もいなくなった部屋でミスティアは一人俯き、悩む。

ミスティア「お父様、お母様。私は一体どうしたら……」

悩める女王の問いには誰も答えない。

窓の向こうにどよめく深い霧が、まるでそのままミストラルの未来を示しているかのように――。

ヘルダイバーとの戦いの末、安全な休息地を見つける事ができたリア達はそのまま滝の裏に隠れるように一日を終え、今では完全に回復していた。

シオン「昨日の頑張りが功を奏したみたいだね。フローミでも確認したけど、このまま道なりに進めばミストラルの領域内へと無事入ら

れそうだよ」

地下水脈を進む三人は少しずつ登り坂となつたミストラルへの通り道を歩いていた。

平坦な道とは違い、それなりに高配のある坂をひたすらに歩き続けるのは、それだけでも体力をより奪われるが、目的地は今や目前。この勢いを落とす訳にもいかなかった。

アリア「ルイ、大丈夫？ きつそうならすぐに言つてね？」

ルイ「だ、大丈夫ですの……。こんな時まで足を引つ張つてられませんか……！」

先に行くシオンも立ち止まる回数を増やし、しきりに地図と照らし合わせては次第にミストラル王国への入口を掴んでいく。

シオン「……成る程ね。確かにこのまま川の流れて沿つて進んだら、ぴつたりミストラルの中心点とぶつかるね。この構造を見抜いたカイト君が未恐ろしいな……」

やがて、見慣れた洞窟の壁と見比べると、明らかに質も形も違った『何か』が三人の視界に入り出す。

それはシオンにとっては、間違いなく地下水脈の探検がようやく終わりを迎える事を意味するものに他ならなかった。

ルイ「あれはもしかして、リュツセルでも見た排水用の配管ではありませんの？」

アリア「水もちゃんと流れて来てるね。って事は、もしかして……？」

シオン「……ああ、『当たり』だね。僕達はミストラル王国へ着いたんだ」

陰湿な空気から開放される喜びと、長い旅路を無事に終えられた嬉しさからアリアとルイは思わず大きな声を張り上げる。

シオン「さて、喜んでばかりもいられないよ。……むしろ本番はここからと言つてもいいくらいだ。ルイ、お願い」

ルイ「分かりましたわ。——『トラマナ』！」

悪しき気を中和する結界魔法をかける共に配管の中へと早速潜入し、リュツセルと同じように通つて来た下水路を息を潜めて移動す

る。

いよいよ本格的にミストラル王国の内部が見え始めると思うと、嫌でも緊張度が高まるが、ここまで来れば女王までの距離は目と鼻の先だ。

アリア「何処から街に入ったらいいんだろうね……」

シオン「入口らしい入口はダメだろうね。全部のドアの向こう側に見張りの兵士がいると思った方がいい。となると、やっぱり……」

大小様々な網目状に張り巡らされた他の配管を歩きながらも、安全そうな通路をくまなくチェックする。兵士がいなそうな場所。三人がきちんと通り抜けられる場所。抜けた先の安全も確保できる場所。その全ての条件をクリアしている場所がないか、盗賊の技術も磨いてきたシオンの眼と勘で探る。

ルイ「なんだかこうしてると、本当に泥棒になった気分ですわね……」

アリア「し、仕方ないよ……。事情が事情だし、ね？」

二人が不安そうに本音をぽつりと呟く中、シオンは不意に立ち止まった。

その視線にあったのは、アリア達ならぎりぎり通り抜けられそうな大きさをした配管で、流れる水もそれほど多くない。これならば余裕を持って通り抜けられ、街の中へと入る事ができそうだった。

シオン「近くに正規の入口もなさそうだし、ここが一番良さそうだね……」

アリア「つて事は、いよいよ……?」

こくりと、シオンは二人に向けて頷く。そして覚悟を決めたように、シオンは迷わずに更に狭くなった配管の中へ突入し、後の二人も続く。

ルイ「だんだんと奥が明るくなって来ましたわ……!」

シオン「僕が先に出口の状況を確認するよ。その後に二人も続いて!」

外と下水を繋ぐ排水口まで遂に到着した三人。

シオンが見張りやこちらを見ている人がいないか警戒しながらも、

外へと足を踏み入れる。

アリア「やつと街に出られたよー。やっぱ外の空気はおいしいなー！」

ルイ「服は相変わらずびしょびしょになってしまいました……。それにしても、ここはどの辺なんですか?」

シオン「……正直分からない。この街に来た事が無いのは当たり前にしろ、地図すらもないからね。……とにかく、同じ場所に留まり続けるのは得策じゃない。早くここから離れよう」

アリア「……そうだね。それにしても目の前にあるのって、随分おっきい建物だねー。なんだか『お城』みたいじゃない?」

まずは自分等の身の内を明かさなければ女王と話すどころか、自分等の旅の保証すらも怪しくなる。シオンの忍び足に二人とも見よう見真似でついて行きながら、建物の角にまで差し掛かった。

シオン「あれは、見張りの兵士? それも見ただ感じ一人や二人じゃなさそうだ……。ま、待ってよ……。? という事はまさか、僕達は……。?」

鼠一匹も逃がさぬ風格のままに巡回する兵士に、一人の男性らしき人物が声を掛けていた所だった。

鮮やかに装飾が施された『魔法の鎧』を身に着け、漆黒の髪と真紅の瞳をぎらつかせながら状況を確認する様からは、他の兵士と比べて明らかに一線を画していた。

兵士「ダグラス隊長。異常ありません」

ダグラス「そうか分かった。では私も念の為に一回りしてから城に入るとするか」

そう言うと、ダグラスと呼ばれた人物は再び建物の奥へと消えて行ってしまう。

後に続いた兵士も同様に奥へと歩き去り、目視で確認する限りは誰もいなくなった事にひとまずは安堵する。

が、あの状況からしてこの場所が単なる街の中でないのは今や明白だった。それどころか、最も考えたくなかった『最悪の事態』が彼らの頭をよぎる。

アリア「ね、ねえ。なんだかここ『まずくない』？ これって下手しなくても私達さ……」

事の重大さを認識し始めたのは、今やシオンだけではなかった。次第に現在地をようやく把握すると共に、早くこの場から抜け出さなければと言う焦りの気持ちはどんどん膨らむ。

——だが、それこそが彼らが犯した若き故の『失態』だった。

前方の見張りだけに気を取られ、今や三人の後ろに迫る『気配』に誰も気付けなかったのだ。

ダグラス「——三人とも動くな！」

冷たい氷に等しき声に三人が振り向いた先に見えたのは、鋭い剣の切っ先。

そしてそれを向けていたのは、なんとつい今まで前方で話していた筈の『ダグラス』だったのだ。

アリア「いつの間にかこんな近くに……！」

シオン「ごめん、僕も察知できなかったよ。只者じゃないねこの人は……」

ダグラス「……ほう？ 私の気だけですぐに見抜くとは、ただの賊紛いという訳でもなさそうだ。……だが、その『お嬢さん』。自分の身を少しでも保証したいのなら、その抜きかけている剣をすぐに納めた方がいいぞ？」

剣士の性故か、咄嗟に構えに入ってしまったアリアだったが、ここで剣を抜き暴れる事はどういう事なのかを知らぬ程、そこまで愚かではなかった。悔し気に目を細めながらも両手を解放させて、『降参』の意を図る。

ルイ「貴方はさつきまで私達の前方にいた筈では……？ どうしていつの間に後ろにまで回り込めたんですの？」

ダグラス「そうだ。私は確かに君達の視界の中にいた。……だがそれは同時に『私の視界にも入っている』という事でもある。後は君達が勘付く前に、素早く後方から気配を読まれぬように近づいただけに過ぎぬさ。さて……『衛兵』！」

彼の鋭い号令でたちまち兵士が集うと、すぐさまアリア達は取り囲

まれてしまった。

ダグラス「この者達を牢に入れよ。後に一人ずつ尋問を行う」

兵士「——はっ！」

問答無用だった。ルイとシオンが兵士によって両側から拘束され、最後にアリアも同じく拘束しようとする。

アリア「待つて！　お願いですから、私達の話聞いてください！」

シオン「アリアよすんだっ！」

必死にダグラスへ訴えかけるも、彼の耳には何も届かぬままだった。ルイは既に観念しきった様子で、抵抗どころか口一つ開く素振りすら見せない。

ダグラス「ふむ、そちらの少年が一番物分かりはよさそうだな。……何、心配せずとも話ならもちろん後で聞くと。……じっくりとね？」

鋭い眼光はそのままに、口元だけにやついた笑みを浮かべると、そのまま今度こそ悠々と歩き去るダグラスだった。

三人が下水路から抜けた場所。それは少しでも、街の中心部へと近づくあまりミストラル王国の中心地にそびえ立つ、『王城の敷地内』にまで到達してしまっていたのだ。

アリア「そんな……。ここまで来たのに、どうして……！」

がつくりと項垂れるアリアを意に介す事もなく、あくまで兵士は事務的に三人を引きずるように城の中へと誘っていく。

やがて数刻もしない内に喧噪も収まり、普段通りとなった城が幽玄に佇むだけだった。

第二十五話 ミステイアの真意

アリア「ねえ、話を聞いてっいたらあー！」

シオン「そんな事しても無駄だと思うよ……」

必死に牢の内側から格子をがしやんがしやんと揺らし、あるいは叩き付けて看守に自分等の無罪をアピールするが、無論それで動揺などする筈もない。異常がない事を確認すると、すぐに立ち去ってしまう。

そんな最中に、格子の向こう側の通路から兵に付き添われたルイがこちらに向かっくとぼとぼと歩いて来る所だった。

ダグラスの言葉通り、尋問を一人ずつ受ける予定の三人はルイが最初の一人目となって今しがた終え、帰って来たのだ。

兵士によって再び牢の中に入れられ、力なく歩くルイは備えつけの無骨なベッドに腰掛けるも、沈みきった顔のまま何れも変わる事はなかった。

アリア「ルイ大丈夫？ 何か変なコトされてない？」

ルイ「私の身でしたら何も問題ありませんわ。ここまで来るに至った経緯を説明しただけですの。……でも正直、まさか私達が一番懸念していた事態に直面してしまうとは、思ってもいませんでしたの……」

シオン「……すまない。今回は完全に僕のミスだ。もう少し周りの風景や状況からしつかりと推察して、行動に移すべきだったのに……」

アリア「それを言ったら私もだよ……。もうちよつとはしやぐのを我慢してたら、見つからずに済んだかも知れないのに……」

全員が全員を慰め合い、ひたすらに重い空気が牢の中に漂う。

そして今まで格子の前で立っていたアリアもようやくよく観念したのか、ルイ同様に力なくベッドに近寄り、腰掛ける。

アリア「どうしよう……。このままじゃ、カイト君のお母さんが助からないよ……。いつそ、力づくでここから抜け出した方が……」

シオン「そんな事したら、それこそ話し合いの機会すらなくなっ

ちやうよ。……気持ちには分かるけど、今は落ち着くんだ」

薄暗い灯りが一つだけ部屋に灯されているだけで窓は一つもなく、三人の持ち物も全て取り上げられてしまっている。

今が日中なのか夜中なのか見当すらつかず、ただ時だけが過ぎていくばかり。城の中にある牢へ閉じ込められてから、悠に数時間は過ぎていた。

その頃に、『変化』はようやく起きる。

ルイ「……何か足音がこちらへ近づいて来ておりませんか？」

最初に気付いたのは意外にもルイだった。双方ともそれぞれの理由で責任を感じている真つ最中だったからなのか、その一言でようやく我に帰れたようだ。

やがて格子の奥に現れたのは、なんと先程アリア達に剣を向けたダグラスだった。

ダグラス「女王様が君達と話がしたいそうさ」

それだけを告げると、さっさとと言わんばかりに、なんと鍵を開けて先を促したのだった。

悪夢から一転、今度は女王と直接話ができるなどという手の平を返した状況に一同はただ困惑するばかりだが、間違いなくここで無駄に過ぎすよりは有益であるのも確か。

一瞬畏の可能性も考えたのか、すぐには足を踏み出せずにいたシオンだったが、迷いを振り払うように牢の外へと出る。

ダグラス「……それと、そちらの桃色の髪をした女性。……ルイというお名前で間違いありませんか？」

ルイ「ええ……。そうですわ」

ダグラス「……左様でしたか。先程はとんだご無礼を働き、誠に申し訳ありませんでした。重ねますが女王様がお待ちです。どうぞこちらへ」

二人にとる態度とは全く別の、まるで麗人をエスコートするかのよくな振る舞いでルイを牢から出す。そんな様子にアリアはひたすらに面白くない顔をするばかりだったが、シオンは今のやりとりで全てを察した顔のままに歩く。

ダグラスに案内されるままに城の中を通り抜けると、やがて玉座の間とおぼしき場所にまで連れて来られた。

扉の両脇に立っていた兵士が扉を開けると、奥で待っていたのは――

ルイ「……ミステイア様！」

ミステイア「やはり貴方でしたか！ よくぞこんな所まで……！」
勢いのままに駆け寄ったルイはミステイアへと抱擁し合う。

そんな様子を見せられても今一つ合点のいかないアリアに、シオンは鼻でため息をついて口を開きだす。

シオン「あの方がミステイア女王でしょ。ルイの顔はやっぱりなんだかんだ言つて広いだろうから、すぐにミストラル側もある程度の事情を察したんでしょ」

アリア「へーそうなんだ、あの人……。って嘘おっ!？」

ダグラス「……玉座の間では静粛に願います」

後ろで見守っていたダグラスに咳払いをしながら釘を刺され、ペコペコと頭を下げながら縮こまるアリア。その間にも二人は再開を懐かしみながらも、話を続ける。

ミステイア「今のお話と兵からの報告で、おおよその事情は分かりました。それと……ダグラス総隊長」

ダグラス「――はい」

ミステイア「この者達に入国許可を取る手続きを、貴方自身が最優先で行ってください。それと、この地にルイ王女が訪れた事は我が城だけの内密に願います」

ダグラス「……よろしいのですか？」

ミステイア「確かに許可を得ずしてこの国に踏み入った事は、本来許される事ではありません。……しかし、私達は同盟を結んでいる国のいわば長同士でもあります。双方の国の未来を思うならば、時には神の悪戯だったとして、このまま無かった事にする選択肢もまた必要なでしょう」

ダグラス「……要は民どもの不信や相互間の亀裂を極力避ける為で

すね。そういう事でしたならば、喜んで力となりましょう。一度牢にも入れ、形式上は既に処罰をした事にもなっています」

あくまでも冷淡にミスティアに報告的に述べると、すぐさま身を翻し『女王の命を課す』べく、玉座の間から立ち去るダグラスだった。一方で残されたアリア達は、女王の破格すぎる処遇にしばし啞然とするばかり。

ルイ「み、ミスティア様……。あの方も仰っていました。本当にそれでよろしいのですか……？」

ミスティア「ここに来たのはあくまで正当な目的なのでしょう？
ましてや他でもないルイが人の命を救うためとあらば、今の決定に何か不備がありましたか？」

三人の立場で不備があるかないかを考えるならば、無いどころか諸手を上げて喜ぶべきだっただろう。

しかし一国を預かる身の立場の者が処罰を命ずるは元より、許可証の発行という寛大過ぎる処遇を受けてしまうと何か裏があるのでは
と思ってしまうのも致し方ない。

シオン「……何が『条件』なんです？」

アリア「い、いきなり何言ってるのシオン!? それはちよつと失礼じゃないの!?!」

どの口が言うのだと彼の横目で見る瞳が明らかに語っていたが、今はアリアの相手をしている場合でもなく、女王に目を据える。

ミスティア「そちらのエルフの方はダグラスの報告通り、といった所ですね。貴方達は『神秘の草』の行方を求めてここまで遠路遙々とやって来たのでしたね。……確かに霊峰ウインディアにはそれが眠っております。必要ならばある程度の情報提供もする事もお約束致しましょう」

——「ただし」。

とミスティアはその一言を強調させながら遮る。

ミスティア「……つい先日、我が王族に伝わる女王の証とされる『黄金のティアラ』が賊らしき者達によって盗まれたのです。貴方達の目的が達成された後、この件に関して率先して助力してくれると約束な

らば、喜んで力となりましょう」

シオン「……つまりは、等価交換という訳ですね。その点だけで言えば無論納得はできるのですが、どうして一介の冒険者である僕達にそれを頼むのです？ その気になれば、軍を総動員して僕達の手をわざわざ借りずとも、解決する事が十分可能だと思うのですが。それが女王様の持ち物とあれば尚、です」

お互いの腹を探るような目つきは、全くぶれない。アリアとルイが心配そうにお互いを見つめるが、今の二人には視界に入っただけでなかつた。

ミステイア「お父様とお母様が信念を持って築き上げたこの国を、今更血で汚す訳にはいかないのです。それが例えどんな相手であっても、です」

シオン「……それだけでは抽象的で、発言の意図が分かりかねます。もう少しだけ、具体的な説明をお願いします」

そうシオンが強く押すと、ミステイアは観念したようにため息をつき、そのまま窓の向こう側にある曇り空を見つめるように背を向けた。

ミステイア「遠い昔の話ですが……かつてはこの国も、貧しい国だったと私はお父様から聞かされた事があります」

静かにゆっくりと語り出したミステイアの背中。その声には怒りもなければ寂しさもなく、無垢なるままだった。

第二十六話 血塗られし歴史

——魔天戦争が始まる少し前の時代から、ミストラルの栄枯盛衰の歴史が始まる。

それまでは、地上界も人間同士でも争いが絶えず行われていて、領地等を巡っての争いも珍しくはなく、多くの血が流れた。

その中でも当時のミストラルはグランダリオンを凌ぐ軍事力を持つっており、こと戦争においては百戦錬磨を誇る国としても有名であった。

しかし積み過ぎた勝利の力に溺れた故か、いつしか独裁政治を進めて来た国としても同時に名を馳せてしまい、「弱きは捨てよ」とする国のやり方に不満を持つ民衆も少なくはなかった。

そんな折、ミストラルの情勢を大きく揺るがす事態が起こる。

業を煮やしたグランダリオンとアウスペリアが同盟を結び、悪名高きミストラル王国へ終止符を打つべくと戦を仕掛けて来たのだった。

白兵戦においてミストラルと肩を並べる力を持つグランダリオンと、こと魔法においては類まれなる技術を持つアウスペリアから織り成す二国の巧みな連携は、たちまちミストラルを窮地に追いやる。

そして止めの一撃とも言えるアウスペリアの軍が放った禁忌呪文『クラスマダンテ』は、ミストラルの王城やその周辺までもを跡形もなく粉碎してしまう程の威力を持ち、これが決定打となって長年のミストラルの独裁政治にも遂に終焉を迎える。

敗戦に伴い今まで占有していた領土も無条件解放する事で、国力はほとんど失われたものの、ようやくミストラルにも落ち着きに戻った。その当時の王でもあったのが、ミステリア女王の三世先にあたる王。つまり曾祖父にあたる存在だった。

それからは少しずつ地道な努力を重ねて、二度と悲劇と過ちを繰り返さぬと非戦争を最初に提唱した国として新たに再建され、ミステリアの父の代で魔天戦争が勃発した時には三国同盟を結ぶにまで至り、更には世界有数の商業国としてまで名を馳せられるようになった。

——しかし、『悲劇』はまだ終わっていないかった。

その多大なる功績を積んだ王と王妃が魔天戦争の犠牲となってしまおうと、残されたただ一人の娘ミスティアが泣く泣く後を継ぐ事になってしまった。

強きが弱きを踏みにじり、力が力を支配する世界はこんなにも容赦なく残酷で無慈悲なのかと、ミスティアは未だ幼い体で父と母が倒れる燃えさかる玉座の間でひたすらに泣き、嘆き、そして叫んだ。

残酷な現実を見せつけられたミスティアは、過去に自分等も多くの血を流し、現在に至っては流されたからこそ、これ以上どんな理由であれ人間同士が血で血を拭うやり方などあつてはならないと固く決意した。父と母の生前見つめていた姿を通じて、彼女はそう強く思っていたのだ。

アリア「……そんな悲しい歴史があつたんですね」

シオン「ダーマで歴史を勉強するにあたって、ミストラルの背景についてはあまり取り上げる事はありませんでした。三国同盟を結んでいる今だからこそ、昔のミストラルの姿は今や世界そのものにとつても黒歴史同然となり、せめて忌まわしき過去として封印する事が三国としての総意……だったのかも知れませんね。……あくまで僕の想像に過ぎませんが」

ミスティア「……正直、我が国の過去について他の国がどこまで取り上げていて、事情を知っているかは私の及ぶところではありません。いくら後で取り繕ったとしても歴史は歴史、罪は罪なのですから……」

そこまでミスティアが儂げに告げると、再びアリア達に改めて向き直る。

ミスティア「身勝手なのは百も承知です。我が一族の勝手たる事情なのも、痛い程に理解しております。……ですが、どうかお願いします！ この地を再び鮮血で染めない為にも、我が一族に伝わる『黄金のティアラ』を、貴方達の手で取り戻してほしいのです……!」

深々と頭を下げ、最早女王としての立場など気にも留めない。

そんな彼女に近寄ったのは、他でもないアリアだった。

アリア「……もちろんに決まっていますじゃないですか。ですから、

頭をどうか上げてください、女王様」

優しく諭されるままに、ようやく顔を上げたミスティアの目は、心なしか赤みがかっていた。

ミスティア「本当に……感謝いたします。皆様のご好意には感謝してもしきれません」

シオン「……だけでも、僕達には先にやるべき事があります。まずは先約通り、『神秘の草』を見つけ出してこなければ」

ミスティア「それに関しては先程も申し上げた通り、私が知る限りの事をお教えます。……皆様は、『神秘の草』についてはどこまでご存知なのでしょう?」

アリア「私達が船でこの大陸に上陸した時、同船していた人から少しだけそれに関する情報は知る事ができました。複数の条件を満たした上でようやく発見する事ができて、その内の一つは自分達の力が試されるも……」

ミスティア「そうですね。確かにそれが大前提となります。……ですが、それと同じくらい必須なのが『世界樹の加護を受けたエルフ』が存在する事なのです」

——最も驚いたのはシオンだった。

今この場でエルフなのは彼だけであり、かつ世界樹に最も縁ある人だったからに違いないが、それと同時にシオンだからこそ思いつける『発想』があったからだだった。

シオン「……もしかして、神秘の草とは『世界樹の葉』の事を指しているのではないですか?」

彼のまさかの一言に、決して人数は多くない玉座の間が空気がざわめく。

ルイ「そ、そんな事がある筈は……! 世界樹と言えばこの世に二つとない大いなる樹ですわ。それがいくら霊峰と呼ばれたワインディアと言えども、違う場所に芽吹く事などありますの?」

それまで黙って聞いていたルイも、反論せずにはいられなかった。彼女が賢者として培った知識と理論があったからこそ、有り得ないと思うしかないからなのだ。

だが、そんなルイの動揺にもミスティアは介する事無く説明を続ける。

ミスティア「……いえ、彼の言う通りです。そもそも木や植物というのは、風によって種子が飛ばされる事によって違う地にも新たな芽が吹くのです。それは『世界樹』でも例外ではありませんでした。……風によって運ばれた世界樹の種子は、それと等しき程に聖なる加護に包まれているウインディアだからこそ、その芽は息吹き、辛うじて存在する事ができたのでしょう。世間で名の通っている『神秘的草』とは、あくまで真実を覆い隠す為の架空の名に過ぎません」

シオン「……正にそれこそ、自然が織り成した奇跡なのでしょうね。確かに『世界樹の葉』と認識できるのは、その加護を受けたエルフだけです。でなければ、普通の人にはその辺に生えている葉っぱ程度にしか見えませんか……」

アリア「えつとつまり……。よく分かんないんだけど、要は私達なら探せるって事でいいのかな？」

シオン「まあそういう事だね。だからひとまずは安心していいよ、アリア」

アリア「ほ、本当に!? ねえ、本当だよね!」

がくんがくとシオンの肩を揺らすアリア。やめてくれと高速で揺れながら懇願するシオンの声も、今は届いてはいなかった。

するとそんな二人の様子を見て、ようやくくすりと微笑みを見せたミスティアだった。

ミスティア「ふふ、面白い方達ですね。……皆様ならば、世界樹の葉を見つける事もできるのではないのでしょうか」

そんな玉座の間らしからぬ空気の中、扉が唐突に開き戻って来たのは、ついさつき出て行ったばかりのダグラスだった。その手には何らかの書状のような物が、数枚握られている。

ミスティア「ダグラスも戻りましたか。案外早かったですのね」

ダグラス「事は急を要しますからね。国の未来とミスティア様を思えば、『許可証』の一枚や二枚、容易いものです」

ルイ「え……。『許可証』ですか? まさかそれって……」

きよとんとしたルイを筆頭に、まさかと三人が驚く中でもダグラスは淡々と一枚の書面を次々と手渡ししていく。そしてそれは、エトス大陸に来てからアリアがずっと欲していた紛れもない『入国許可証』だったのだ。

ダグラス「ここから南東に進めば、やがてウインディアの麓街である『メンディル』に着けます。では、この国の未来を頼みましたよ」
それだけを告げるとダグラスは忙しい様子で、またもや玉座の間から出て行ってしまった。

ミステイア「黄金のティアラについての現在の所在や軍が中々動かせない理由など、他の細かい部分に関しては、追々お話し致しますよ。まずは皆様の本来成すべき事を優先させて下さい」

アリア「女王様……ありがとうございます！」

ミステイア「霊峰ウインディアは先も述べたように、聖なる加護に包まれた山ですが、モンスタ―は普通に生息しております。更に、頂上までに至る道は『不思議な霧』が山全体に覆われていて、進む事はできません。帰らぬ人とならぬよう決して足を踏み入れないように……」

シオン「分かりました……という事は、山の中腹辺りに『世界樹の葉』は眠ると思っただけですか？」

ミステイア「そう捉えて頂いて間違いはないでしょう。ただ、そこから先は私も詳細は掴めていません。……どうかご容赦を」

ルイ「ミステイア様が謝る事などありませんわ。むしろここまで寛大な処置をして頂き、お礼を述べなくてはいけないのは、私達の方ですのに」

アリア「そうだね。ここまで来たら、カイト君や女王様の為にも何としても私達のやる事を成し遂げないと……！」

三人は女王の前で誓いを新たにすると、早速ウインディアへ赴く為玉座の間を後にする。

アリア「へー。ここがミストラル王国なんだー」

ミステイアが座する王城から出た三人は、改めてミストラルに広がる街並みを目にした。

トルレンテ湖から流れ出た川をそのまま利用した仕組みは最初に訪れたアクアラヤリユツセルと基盤こそは変わらないのだが、この二つと比べると山にあふれた自然をそのまま利用したかのような街づくりだった。

城のすぐ後ろには剥き出しになった灰色の山肌から滝がいくつも流れ落ち、王城と市街地を繋ぐ橋の下には豊かな池が広がる。

一方で眼下に見下ろした城下街はどんよりとした曇り空と霧がかかった天候によって遠くまで見渡す事もできず、面白みという意味では全くの無い、何処までも無機質な空だった。

ルイ「空の暗さから陽も大分傾いていると思いますし、とりあえず私は休みたいですの……。色々ありましたけれども、実の所今日も歩き詰めでしたわよね……」

シオン「確かにね……。ひと段落終えたら僕もどつと疲れが出てきたよ」

過程はどうあれ、なんだかんだで許可証を手に入れられた三人は堂々と街を歩けるのも久方ぶり。そういった重圧から解放された喜びも大きかった。

水路の上に建てつけられたあちこちで回っている水車に目を惹かれながらも、観光もそこそこに留めて宿に直行した三人。地下水脈で野営をして日を浴びない一日を過ごしたからこそ、普段のありがたみが身に沁みて分かる。

アリア「うーん、やっぱりフカフカのベッド最高！」

シオン「今度は霊峰ウインディアか……。僕は道具の買い出しに行ってくるから先に休んでて」

ルイ「いつも助かりますわ。では私はお言葉に甘えて休むと致しませすわ……」

後に残ったアリアとルイは特に何をすることもなく、純粹に身体を休めていた。

そんな時、ベッドに気だるげに寝ながら天井をぼうつと見つめていたアリアは誰に語り掛けるでもなくぽつりと何かを呟く。

アリア「……カイト君のお母さん、助かるかな」

ルイ「大丈夫ですわよ……。まだリユツセルを旅立つてから一週間も経っていませんわ。焦らず行けば必ず間に合いますのよ」

アリア「うん……。そうだね。じゃないと私達を信じてくれた女王様にも、顔向けできないもんね……。！」

今のアリアにはやらなければいけない事が多かった。

だが、彼女が頭で考えてしまえばしまう程、その目まぐるしさに自分の感覚を掴めなくなる。

そんな時は静かに目を閉じながら、無に浸る事で思考をリセットしていた。そうする事で、彼女はいつしか深い呼吸と共に自信を落ち着かせていたのだ。

そして数分と経たない内に、穏やかに眠りにつくアリア。

隣でそれを見ていたルイは、せめて今だけでも安らいでほしいと願うままに、彼女も後を追うように眠りについたのだった。

■ ■ なる存在 『★』

——誰かが、黒い夢を見ていた。

空が闇に包まれた世界で、その闇と一つになったかのような黒のドレスに身を包み、髪の本一本が滑らかな絹糸のようで、灰色に染まった、一人のあどけない小さな女の子がいた。

その少女は今、目の前のとある男をじっと見つめている。

男とは言っても、ただの男ではなかった。

耳は鋭く尖り、左右からは捻じれた角も生え、服の隙間から覗かせる肌は色素が失われており、まるで死人を思わせるような出で立ち。普通の人間とは明らかにかけ離れているのが分かる。

そんな悪魔のような姿をした男は、何故か目の前の少女に何度も許しを乞う。

地面にまで届きそうな無垢なる少女の灰の髪は、男に一歩ずつ近づく度に交互に揺れる。

「——どうしてそんなに怯えているの？」

「ど、どうか……どうかお許しをッ！ 私めに今一度ご慈悲をッ！」
完全に混乱しきった男をなだめる者は誰もいなかった。

いや、敢えているとするならば、その少女の背後に立ちながら愛でるように肩を抱く、仰々しいマントとローブを羽織った大きな初老の悪魔。

だが、目の前の男とは角の大きさや耳の鋭さを始めとした、全てにおいての『質』が違い、更に言えば全身から滲み出るとす黒い魔力からして、この男が格下な存在であるのは明らかだった。

「ねえ、どうして？ アナタはただ——『死ぬ』だけなのに」

その間にも少女は歩みを進め、気付けば男は壁にまで追いやられて逃げる術を完全に見失っていた。

少女の背後に立つ初老の悪魔はそれをととても愉快そうに楽しみ、同時に品定めするかのような目で見つめるだけ。

「……罪を犯した者は、罰を受けなくてはならないのだよ？ ……」

さあ、『おやつ』の時間だ」

そして、少女は怯える悪魔に手が届く距離にまで迫った。

「逃げちゃ……だめ」

少女の左手から放たれた魔法は男を磔にし、身動きすら取れなくする。

そして真紅に染まった爪が、純粹に。

——男の胸を貫く。

壁に血飛沫を張り付かせながらずると地面に落ちると、悪魔はすぐに絶命した。

引き抜いた指先から腕までべっとりついた血を、味わって舐める少女。それをとても満足そうに見て、頭を撫でる一人の悪魔。

「——血、おいしい」

「そうかそうか。今日は中々の絶望と苦しみに浸った男だったものな。よしよし、なら次はもっとおいしい血を持ってきてあげよう」

「……本当?」

「ああ、本当だとも。だから楽しみに待っていないさい。そして存分に『力』を蓄えるのだよ……」

少女は手についた血を何度も啜っては、美味しそうに頬を緩める。

それを見ていた悪魔は湧き上がってくる感情を抑えきれぬまま、最初こそ小さくも、やがて高らかに笑っては、暗闇の空に何度も木霊する。

第二十七話 認められたい心

朝がやって来た。

しかし朝とはいってもここは霧深きミストラル。曇った空は昨日と変わらぬままで、新鮮味などどこにもない。

覚めやらぬ表情のままにベッドから起き上がったアリアは、陽が登り切らぬ薄暗い部屋を薄着のままにふらふらと歩く。

アリア「私が最初に起きちゃったんだ……」

横を見てもルイもシオンも未だ深い眠りについたままで、しばらく起きる気配はなさそうだった。

部屋にかけられた時計を見ても、三人が出発する時間からはまだ遠く、二階の窓を開けても外を歩いている街の人も誰もいず、閑散とした景色が広がるだけ。

アリア「なんでこんな早く起きたんだろう……」

彼女の問いには誰も答えない。

そんな彼女自身も虚ろな瞳のままに、ぼんやりと窓の向こうを眺めるだけで、特に何かをするでもなかった。

シオン「……アリア？」

その一言でアリアの瞳にようやく光が灯り、声の主に向かって振り返った。

いつの間にか起き上がっていたシオンは、彼女を不思議そうに見ていたのだ。

アリア「あ……ごめんね、起こしちゃった？」

シオン「いや、そろそろ起きる時間だったからね。アリアこそ、こんな早い時間に起きるなんて珍しいね」

アリア「何よー珍しいって。私が早く起きちゃいけないって言うのー？」

二人の会話する気配に引っ張られるように、遂にはルイまでもが眠たげに起きてしまう。

ルイ「どうしたんですの二人とも……。まだ出発までには時間がありますのに」

アリア「あ、あー起こしちゃったルイちゃん？ もつと寝ててもいいのよー？」

ルイ「そうでしたか。……所で、ルイ『ちゃん』とは、なんですか？」

——しまった。

とアリアが分かりやすく口を開けるが、当然遅かった。

アリア「い、いや違うのよルイ？ 寝顔がつい可愛くて、なんだかそう呼びたくなるっていうかなんていうか」

ルイ「ふーん。そうやって温泉の時みたいに、また私の事を『子供扱い』するんですの？」

シオン「……僕はちよつと散歩してくるよ」

ルイ「あの温泉での一件、私は一瞬たりとて忘れていませんのよ……？」

いつの間にか着替えていたシオンは、逃げるように部屋を後にする。

アリア「ちよちよつとおー！ 逃げるのシオンー!？」

ルイ「私だつて好きで、こんな『小さい体』をしてるんじゃないやありませんのよーッ！」

爽やかな朝の宿に、怒号が響き渡る。

揺れんばかりの叫びに屋根に止まっていた小鳥は、全て飛び立ってしまった。

ミストラルから出た三人は、『世界樹の葉』がひつそりと眠るとされる霊峰ウインディアへ向けて出発しようとしていた。

……のだが、その内の一人はむすつとした顔を一向に変える気配がなく、不機嫌なままなのである。

アリア「ねールイ。機嫌そろそろ直してよー」

ルイ「……別にいいのですわよ。実際最初に疲れて、足を引っ張ってるのは私ですものね！ 確かに子供ですわよー!」

怒りのままにすたすたと歩いていくルイ。アリアが伸ばした手も無情に空を切るだけで、その間にもどんどんと先に行く。

シオン「……まあ、アリアが口を滑らしたのが悪いね。今のルイに無闇に話しかけても火に油だろうし、孤立させない程度に距離を空けようか」

アリア「うん……。なんだか、こめんなさい……」

これは不味いと、アリアは直感していた。

どんな形であれ早くフォローしなければ、後々戦いをする上でチームワークにも欠ける羽目になる上、どんどん厳しさを増すダンジョンの攻略にも響く。こうしている間にも時間は刻一刻と過ぎ、本来の目的であるカイトの母の命が危うくなるのだ。

年下の扱いにはある程度慣れているとはいえ、実際はほとんど変わらないであろう年齢でましてや対等である筈のパーティの一員なのに、格下のような扱いをしてしまったのは素直に悪かったと、アリアも今頃になって自覚し始めていた。

ここは素直に謝罪しなければいけないと、ルイに改めて近寄ろうとする。

——しかし、やはりここでも『奴ら』は現れる。

——魔物の群れが現れた！——

アリア「もう、こんな時に……!!」

シオン「しかもそこそこに手強そうだよ……用心して戦わないと！」

相対するモンスターは、ヘルホーネット、フェアリードラゴン、ガルーダ、マドハンドと今回もどれもが初めて見るモンスターばかりだった。

不幸にも前を歩いていたルイが先頭に立たされる事態となり、これにはアリアやシオンも焦りの色を隠せない。

しかし、そんな二人に対してルイは逃げるどころかその場から動く気配もなかった。

アリア「ルイ危ないよ！早く下がって！」

ルイ「——大丈夫ですわ」

素早く前に詰めたアリアがルイと並ぶと、両手に魔力を込めている事に気付く。

しかもそれは見る見る内に色濃くなると光も増していき、いくら魔法に疎いアリアでも『並の呪文ではない』とすぐに分かった。

シオン「ちよちよつと……。あれってまさか……」

ルイ「今の私は、少々虫の居所が悪いんですよ……」

そして、詠唱を終えたルイは迷いもなく溜まりに溜まった魔力を一気にモンスター目掛けて解き放つ。

ルイ「ですから、早く私の前から消え去りなさいッ！——『イオナズン』！」

——魔力が暴走した！——

怒りの籠った凄まじい魔力は最大級のイオ系呪文『イオナズン』と成って、今までのどの呪文よりも威力が高い爆風が吹き荒ぶと、全てのモンスターを破壊し尽す。

アリア「ま、マジでえ……。やばあ……」

同じ仲間同士であるはずのアリアが戦慄する。彼女を本気で怒らせてはいけないと、心の中で改めて誓った瞬間でもあった。

シオン「ま、まあ……。取りあえずは何事もなく終わったね。ルイ、怪我はない？」

ルイ「はい……。問題ありませんわ……」

振り返ったルイは先程の怒りようからは一転、しんなりとした態度だった。

さっきの呪文で朝からずっと溜まっていたフラストレーションも同様に吹き飛んだのか、ようやく冷静になれたようだ。

ルイ「ごめんなさい……。勝手な行動をしまして。今までの冒険でお役に立てない事は分かっていましたのに、どうしても子供扱いされる事に抵抗を感じてしまって……。駆け出しなのは間違いありませんのに、中々二人に追い付けない自分にも苛々してしまってたのは事実ですわ……」

胸に秘めていた想いを明かすと、それっきり黙りこくってしまうルイ。

思えばルイは今までも旅先や地下水脈でも先に、力尽きて休む事がほとんどだったが、それに対して何も感じなかったと言えば、当然そ

んな事はなかったのだ。

昔と違って今はパーティの一員だからこそ、無理強いこそ誰もしなかったが、だからといって自分がそれに甘える訳にはいかないと、最も強い責任感があったのも同時に彼女だった。

アリア「ルイが役に立たないだなんて、私は今まで一度も思った事はないよ。……そうだよ、シオン？」

シオン「そ、そこで僕に振るのかい？　でも、そうだね……僕の口から敢えて言うのならば」

少しだけ考える素振りを見ると、シオンはルイの瞳をただ真つすぐに見つめた。

シオン「確かに僕は最初こそ王家の洞窟でルイと一緒に戦う事を拒んだ。実際に試練の途中でもルイは途中で抜け出したり、危うく命を失いかけた。……だけでもそれ等が全部繋がった結果として、アリアや僕にもできない『賢者』としての役目を今では確立してる。だったら、それが『答え』なんじゃないかな？」

ルイ「……私が『賢者』という事が『答え』……ですか？」

アリア「うん。前にも私言ったと思うんだ。私は考える事ができないから怒られて失敗するって。でもルイは『賢者』だから考える事がちやんとできて、結果も出せてる。それに魔法使いなんだから体力が無いのはみんな当たり前だよ。……ってゆーかね？　頭がよくて魔法も使える。それで力持ちで更に体力もあります。なんてなったらさ、私の立場がないでしょー？」

ずいっと一指し指をルイの鼻先にくつつける光景に、シオンは笑いこけていた。

シオン「ははっそうだね。ルイが力まで身に着けちゃったら、それこそアリアはお役御免だね！」

アリア「ふんだっ、どーせ私はバカですよー！」

互いに罵り、はたまたふぎけ合う姿に、ルイはただ心が温まるばかりだった。

信念を持って感情を逆らせるアリアとは違って、さっきの自分はずれこそ子供のように不貞腐れるままに行動しただけ。どちらも先走

るという意味では同じだが、その根底にある『想い』が絶対的に違っていたのだ。

だからこそ、早く二人に並ばなければと息巻いてしまい、二人とも本意ではないのは分かっているのしろ子供と揶揄されればされるだけ、その現実を認めたくない自分自身に最も腹を立ててしまう。

ルイ「本当にごめんなさい……！」

ぼろぼろと涙を流すルイ。

そんな拭つても拭いきれない涙を身体ごと抱きしめ、覆い隠してくれたのは、もちろんルイだ。

アリア「ルイはもう立派な私達の仲間なんだよ。だってルイがいなかったら、私達は今ここにいないんだもん。だからさ、もつと誇つてもいいんだよ？」

シオン「……そうだね。ルイの強さを最初に見抜けなかった僕の方が、どっちかって言ったらまだまだ子供さ。もつと僕も修行しないと、だね」

二人の言葉が痛い程身に沁みるルイは、アリアの胸にうずくまりながら「ありがとう」と、ただそれだけしか返せなかった。

頭を上げてアリアの顔を覗けば、これ以上感情を抑えきれなかったのだろう。だからこそ、初めて出会った時から優しかった彼女が愛おしくて溜まらなかった。

アリア「さてと……メンディルまで早く行って、ウインディア攻略への準備をしないとね！ ほらほら、いつまでも泣いてないで行くわよルイち——」

シオン「ん”ん”ッ！」

……またもや振り出しに戻る所だった。

幸い聞こえていなかったようで、シオンがうまくフォローしながらも麓街メンディルを目指したのであった。

第二十八話 霊峰の麓街メンデイル

——水の都アクアラ。——商業都市リュツセル。——ミストラル王国。

エトスン大陸の繁栄を支えるにあたってはどれもが欠かせない街で、今やこの大陸の顔と言っても過言ではないが、それら全ての原点とも呼べるのが『霊峰ウインディア』だ。

麓に形成された街、メンデイルは様々な事情を片手に目の前のウインディアに向けて冒険者が集ういわば最終拠点であるが、生半可な覚悟と強さでは挑戦する事すら許されない。

アリア達は登山する前に必要な道具を買い揃えた後、一度英気を養つてから万全の体勢で挑むべく、宿屋のとある一室でこれからの指針を話し合っていた。

ルイ「宿屋で提供されていた資料と地図から察するに、この霊峰ウインディアはごつごつとした石などで形成された所謂『岩山』なのですが、随所に穴が空いたような構造になっていて、時には岩肌を登りながら、またある時は内部を通じながら縫うように登らなければいけませんのね」

シオン「トルレンテ湖の源流地とも呼ばれてるとも、街の人から聞いたよ。内部も恐らく水場が豊富にあるだろうから、ここで探索が長引いても安全な場所を見つければ野営する分には問題ないとは思う。ただし……『時間が許す』なら、の条件付きだけどね」

既にリュツセルを出発してから、早二週間。一か月という区切りでは丁度折り返し地点に立った今、『猶予』も次第に無くなって来たのは誰もが感じていた。

シオン「でも……焦りはダメだよアリア」

アリア「うん……大丈夫。ここまで来たら後は手に入れるだけだもんね」

睨むように地図を見ていた三人は、明日の攻略に向けて眉をひそめている真つ最中。ウインディア内部と外部の両方を事細かに描いているが、当然『世界樹の葉』の在り処など記している筈もなく、陽

が沈み夜になった今でも今一つ探索ポイントを絞れずにいた。

ルイ「頂上を目指さなくてよいだけ、いくらかは楽かと思っただけでも……。そう甘くはありませんわね……」

アリア「……でもさ世界樹っていうくらいなんだから、咲くのもっと細かい条件があったりするんじゃないの？ だったらさ、その条件を一番満たしてる場所を探したら、見つけられたりしない？」

シオン「……アリアにしては随分、的を射た意見を出すね。確かにその通りで、世界樹の芽が咲くには、純粹で穢れの無い『光と水と土の全てが交わる』場所にしか咲かないと言われてるんだ。……けども、これだけの広大過ぎる山で手探りのみははつきり言っただけ無謀過ぎる。せめて何かヒントがあれば……」

博識で知恵に富んだルイやシオンでさえも、明確な答えが出てこない。

このままでは虱潰しに探すしかなく、非効率的にも度があるのだ。バラバラになったパズルのピースを埋め合わせるかの如く模索するが、やはり誰もが浮かさない顔をするばかり。

アリア「——『分かった』！ 私分かっちゃったかも！」
しかし、突然閃いた声と共に立ち上がるのは、意外にもアリアだった。

アリア『源流』だよ！ 登って探すんじゃないで、地下にある源流の何処かに咲いてるんだよきつと！ だから色んな人が登っていくら探しても見つけられないんだよ！」

ルイ「そ、そんな事があるんですの？ だって植物というのは基本的に光がないと育たないんですよ。確かに水は澄んでるかも知れませんが、薄暗く湿った場所ではとても無理なのは……」

アリア「さつきウインディアには所々穴が空いてて、中にも入れるって言ったよね？ もし何処かの穴が一番奥深くの源流にまで届いてる場所があつて、そこから光が差し込んでたら、咲くんじやないのかな？」

理屈としては確かに合つてはいるが、そんな上手いな事がと、ルイは苦笑いするだけだった。

——が、隣で聞いていた『もう一人』は違った。

シオン「いや、案外そうなのかもね……。僕だって、ウインディアの中腹にあると思ってずっと策を巡らせていた。けど、そもそもそこからして先入観が働いてしまって、何も見出せずにいたんだ」

今度はウインディア内部の地図を注意深く見つめると、外部から照らし合わせるように条件が整っていきそうな場所をくまなく探す。

——その結果。

シオン「……もしかしたら、この『地図には載っていない場所』にも他に入口があるのかも知れない。それも、もつと頂上に近い所に」
アリア「どうして上の方にあると思ったの？」

シオン「忘れたのかい？　ここが霧が深くて、毎日が曇り空に覆われたミストラル王国だと言う事を。曇っていれば、その場所に陽は当然射さない。だったら、太陽の光を浴びるにはその『雲の上をいく場所』でなければならぬんだ」

ルイ「雲を突き抜けた所に、アリアが見出した場所がある。……。そう、言いたいですのね？」

シオン「恐らくは、ね。よくよく考えてみれば、曇った場所だとただでさえ普通の植物が育ちにくいのに、世界樹の芽がどうやって芽吹くのが僕は不思議でならなかった」

ルイ「では、目的地はほぼ決まったという事でよろしいんですの？」

シオン「今度の探索も結構なモノになりそうだけどね……。僕の推察通りならば、雲を超える高さにまで登ったらその付近に、一気に地下へと吹き抜けている入口が何処かにある筈だよ」

アリア「……よし。じゃあもう一回探索ルートをちゃんと確認しよう！」

シオン「時間がないとは言え、アリアにしては随分やる気だね。じゃあまずは——」

その後もウインディア攻略に向けて、入念にアリアとシオンは話を続ける。

先を行く程に厳しさを増すダンジョンの数々は、いわばアリア達の試練そのものだった。余裕を残すだけの力もなければ、冒険者として

の経験とて無きに等しい。

だとしても、アリアは泣き言を言いたくはなかった。無茶な自分を信じてくれている二人の為にも歩き続け、戦わなければ『自分の価値』とは、はたまた『存在意義』とは何なのかと、定期船でデリックを目の前で亡くしかけた時からずっと思っていたのだろう。

——するとルイは、今も険しい表情をするアリアを見つめながら、不意に立ち上がるのだった。

ルイ「二人はまだ攻略に向けてのお話をするのでしよう？ …… だったら私は、少し外に行つて、呪文の詠唱や構築を修練して来ますわ」

アリア「こ、こんな時間に？ 外も暗いし、今からだと危ないよー」

ルイ「大丈夫ですの。ほんの三十分くらいですから」

アリア「でも急にいきなり……！」

何か言おうと立ち上がるアリアの腕を、シオンは荒く掴んだ。

振り返ると、彼はただ首を振るだけでそれ以上干渉してはならないと、瞳で強く訴えるのだった。

ルイ「シオン……感謝いたしますの」

そして、ルイは部屋の扉を開けて、そのまま向こう側へと消えてしまった。

後に残った二人には、得も言われぬ空気が包む。

シオン「……分かってあげるんだ。今のルイは少しでも自分を鍛えたいんだよ。明日に備えて休む事も大事だけど、それ以上にルイの『足手まといになりたくない』という気持ちも分かってあげないと……」

これまでの旅先で幾度となく後ろ足を引かれて来たルイ。それが過去に墮落した自分を思えば思う程彼女はその度に後悔し、泣きだしそうになっていた。

だけでも今の彼女でなければ、アリアと出逢えていなかったのもまた事実。ルイはそんな過去と今に向き合いながらずっと思つても戦っていたのだ。

アリア「無茶しないでね、ルイ……」

心配そうなアリアの横顔は、シオンの瞳にいつまでも深く映るの
だった。

第二十九話 執念

メンディルから少し外れたの所の雑木林でようやくルイは足を止めた。

ルイ「ここならば万が一何かあってもすぐ着ける距離ですし、アア達もそこまで怒らないかと思えますわ……」

そう言うときさまにルイは瞳を閉じて強く念じ、精神を集中させる。

両手を組んで祈るように唱えると、足元には大きな護法陣が描かれる。それはたちまち七色に光る無数の属性を伴った魔力の光へと変わり、遂には浮かび始める。

ルイ「やはり、旅をしてから最近やれていませんでしたから少し展開が遅いですわ……」

彼女が今行っているのは『瞑想』なのだが、これは本来の賢者が行う呪文とは少しばかり種の異なる呪文だった。

瞑想そのものは術者の生命力や気力を活発化させて、傷ついた体を癒す事が目的なのだが、ルイの場合は本来の目的から外れる。

ルイ「お母さま曰く、『万物を我が身とさせる事が天地雷鳴の道を開く』。でしたわね。頭では分かっていますけども、やはり実践となると容易ではありませんわ……」

苦しい表情を浮かべながらも、詠唱と共に湧き出る魔力は更にその数と濃さを増していく。

やがて魔力と纏う光がピークに達するかと思った、その瞬間だった。

それまで迸っていたオーラは全て浄化されるように消えて沈黙すると、地面に描かれていた護法陣も無くなりルイはその場がくりと膝をつく。

大量の汗を垂らしながら肩で息をする程に、あの詠唱だけでルイは疲れ果ててしまっていた。

ルイ「無理ですわこんなの……！　今の私に経験が足りないのは分かっていますのに……！　けどこのままでは万物を味方につけるな

ど、到底世迷言にしか……」

彼女は魔力だけでなく、世界における万物のエネルギーすらも取り込む事で、更なる自らの糧にしようとしていた。

だが結果としては取り込む事など適わず、そればかりか一度の詠唱でほとんどの魔力を使い果たしてしまっただけに終わってしまった。

自然のエネルギーとは、取り込むものでも奪うものでもなく、それらと一つになり、天地から認められる事で共鳴を得られる。

無論ルイとて若くして賢者の道を歩んだ者で、道理だけならば十二分に承知していた。

絶対的なあらゆる経験不足とは頭では分かっているも、自らの遙か先に行く『母の背中』を追いたくなるのは、娘としては必然だったのだ。

ルイ「いいえまだですわ……！ もう一度……！」

膝を笑わせながらも、気力を振り絞って立ち上がると、『瞑想』を試みるべく今一度詠唱を開始する。

——しかしその瞬間、近くの『茂み』が不意に音を立てて騒めく。

ルイ「しまった……モンスターですの!?! 何故こんな街の近くにまで……!」

咄嗟に身構えるが、ここで万が一にでも集団に押し寄せてきたら自分の命など無いも同然。ルイは近くにあった木の陰に身を寄せて、何者が出てくるのかを探る事にした。

しばらくは音を立てるだけで肝心の姿は見せず、中々尻尾を現さなかったが辛抱強く待つ。

その結果、まさかの『意外な姿』を現したのだ。

姿は小さな球体に近く、見ようによっては愛くるしくすら思える。しきりに周りを気にしては、目まぐるしい速さで怯えながら辺りを駆け抜ける。見てくれこそ最弱の名をほしいままにする『スライム』と同系統のモンスターだが、最も括目すべきはその『色』だったのだ。

ルイ「ぎ、銀色のスライム……。まさか『メタルスライム』ですの!?!」

叫んでから「しまった」と、我も忘れて大声を張り上げそうになる

口を直接塞いで、なんとか『敵』には知られずに済んだようだ。何しろ人間の姿を見るだけでも一目散に背を向けて逃げ去るモンスターだ。大きい声で叫んだりしたら、それこそ二度と会う事などないだろう。

更に幸運は続く。なんとその数は一体ではなく、後ろから続いて3, 4, 5匹と立て続けに現れ冒険者からして見たら正に夢のような光景だった。

今ルイに足りないのは、正にこれだった。ならばこの絶好のチャンスを逃さない手はない。

覚悟を決めると、メタルスライムの群れに向かって飛び出す。

——しかし、

ルイ『メタルハンター』!? 私としたことが、迂闊でしたわ……!』
宝を狙うのは何も人間だけとは限らない。メタル系の種族を狩るためだけにこの世に生み出されたモンスターとして存在するのだ。

——魔物の群れが現れた!——

ルイ「一体だけならまだしも二体いると厄介ですわね……!」
大捕り物を眼前にして阻められてしまうのはこれ以上にならない歯痒さだった、命あつての物種。欲にまみれて、全て失っては元も子もない。

機敏に仕掛けるメタルハンターの攻撃を片手に持つチエーンクロスで上手くいなしては、呪文を放つ機会を窺う。

ルイ「コダイン系の呪文は得意ではないのですが……逃げないでくださいませ!」

メタルスライムを優先させたいのは山々だったが、まずは目の前の障害を取り除かねばならない。

元々余力がほとんど残っていなかった僅かな魔力を振り絞り、メタルハンターを標的に空から穿たれし呪文『ライデイン』を放つ。

機械系統だけあり、雷の力にはやはり弱かった。二体とも致命的なダメージを受けると、一体が黒煙を上げて沈黙する。この間にメタルスライムが二匹逃げ出す。

これで驚異はほぼ消え去った。これで目の前の『獲物』に集中でき

るとルイは確信していた。

しかし——そう決めつけていた彼女の気持ちも、『油断』に繋がってしまう。

既にメタルスライムに傾いていた神経は、紙一重で生き残っていたメタルハンターからの攻撃に全く気付かなかった。

ルイ「——え？」

何かの気配を感じて目をやった時には、既に目の前には『ソレ』があった。

そして——。

ルイ「うあああうツ!？」

高速で飛び出した『矢』はルイの腹部に完全にめり込み、湧き上がって来る激しい痛みが顔が歪む。

生まれてこの方味わった事のない焼けるような痛みは、刺さった矢を通して服から滲み出る大量の血と、苦悶に満ちた悲痛なる叫びが全てを物語っていた。

放っておけば間違いなく死に繋がる傷なのは明白で、残された魔力のできる事も少ない。それでも、ホイミだろうが焼け石に水となろうが、例えほんの少しでも傷を癒さねばならなかった『筈』だった。

ルイ「しつこい……ですのよッ！」

だが——彼女の執念は凄まじかった。

ライデインも撃ってしまった今、残った魔力はほぼ皆無。最後の絞り粕を出し切るように『メラ』を最後のメタルハンター目掛けて投げ付けると、今度こそ爆炎を上げてガラクタと化した。

そして残りの三匹の内、二匹すらも逃げ出してしまったメタルスライムはどうとう残り一匹を残すだけとなってしまった。

立ち上がろうとするも刺さった矢から来る激しい痛みで、満足に身体は動かない。何かを考えようにも、痛覚がひたすら先走ってそれ所では無くなる。

自身の武器すらもこれでは満足に操る事も不可能。ならば残された手段は、『一つ』しかなかった。

ルイ「お願い……倒れてえ！」

なんと、たどたどしい走りながらもルイは果敢に『素手』で残ったメタルスライムに殴りかかっていったのだ。

しかし、お世辞にも素早いとは言えない攻撃にあっさり避けられてしまい、自分の攻撃すらも支えきれないふらついた足は再び崩れ落ちて転んでしまう。

幸か不幸か偶然か、それでも最後のメタルスライムは逃げなかった。まるでルイの信念を試しているかのよう。

彼女の肉体の限度的にも、恐らく次の攻撃がラストチャンス。

ルイ「こん……のおおおおおッ！」

ここまで来れば恥も外聞もなかった。

歯を食いしばりながらも飛び掛かるようなルイの一撃は、なんとメタルスライムに命中した。否、『それだけ』ではなかった。

彼女の手には、今までにない完全な手応えがあった。

それは言うなれば『会心の一撃』。死力を尽くした一撃はルイに奇跡を呼んだのだ。

ぐるぐると目を回して消沈するメタルスライムは、そのまま魔力の塵を散らせながら地面へと還っていった。

——魔物の群れを、やっつけた！——

ルイ「や、やりました……わよ……アリア」

肉体は当の昔に限界に達していた。目的を果たすと役目を終えたかのように、力無く地面に倒れ伏す。倒れてもなお彼女の血は流れ続け、たちまち腹部の近くの草むらが真っ赤な色で覆われる。

譲れない『何か』の為にここまで踏ん張ったからには、泥をすすつても勝利を掴みたかったのだ。

かくして、その願いは叶えられた。その頃に、ルイもよく知る二人が駆けつけるのもほぼ同時だった。

アリア「ル、ルイ！ しっかりしてえ！」

その顔にこそ満足な笑みはあったものの気は完全に失っており、血は今もどくどくと流れ、顔色もかなり青ざめている。相当な量の出血をしているのは誰の目にも明らかだった。

急いでアリアがベホイミを施すと共に、シオンも周辺の警戒をして

モンスターの追撃がないかを確認める。

シオン「今の所はいないみたいだけど、このまま外にいるのは不味いよ。早く宿に向かおう！」

一分一秒とて今のエリアには無駄にすたくなかった。ルイを傷つけないように気づかしながらも、迅速におぶって走り出すと迷わずメンデイルの宿屋に駆け込んだのだった。

第三十話 登山前夜 『◆』

シオンの患部手当とアリアの回復呪文の甲斐あって、何とか大事には至らず、今は穏やかな寝息を立てながらぐっすりと休んでいた。

運び込んで来た当初はあまりのルイの憔悴ぶりに慌てふためくアリアに、実の所ルイの手当てよりも彼女を宥めるのに苦労したシオンだったが、なんとか双方を落ち着かせる事に成功する。

そんな彼の甲斐あって、今では何事もなく時間は過ぎて行つた。

シオン「しかし、やっぱりというかアリアの勘は大したものだね。僕だったら多分気付けずにルイを見殺しにしていた所だったよ……」

アリア「……別に確信があつた訳じゃないの。帰りが遅いなど思い始めたら、そこから妙に胸騒ぎがしたというか……。とにかく無事で本当によかつた……」

シオン「街からはそんなに離れていなかったし、特に危険そうな場所でもなかった。……だからこそ、ルイも不意打ちを喰らつたんじゃないかと思うけどね」

アリア「逃げたらダメだつて思つちやつたのかな……。そこまで無理しなくてもよかつたのに……」

二人はその後も考えられる範囲の予想をしていくが、どうしてあそこまで痛手を被る事態になつたのかが、今一つ浮かばなかつた。

ルイ「——メタルスライムに会つてしまつたんですのよ」

そんな二人の話す声につられたのか、はたまた事情を説明せねばと躍起になつて無理矢理身体を起こしたのは分らないが、そこには既に意識が覚めたルイの姿があつた。

二人からしたらまさかこんなに早くと思つた意外な声の主に、ぎよつとした顔のまま、揃つて振り返つてしまう。

彼女が運び込まれてから、時間は幾ばくも経つていない。その証拠に起き上がったばかりのルイの瞼は二重になっており、半ば夢うつつのままだった。

アリア「ダメだよちゃんと休んでないと……。まだ傷が癒えたばかりなんだから」

ルイ「いいえ、もう本当に大丈夫ですの。心配をおかけしましたわ……」

ここまで世話になってしまったからには、詳細を説明する他なかった。

二人に少しでも追い付きたくて、無茶な修行をしてしまった事。母の背中を求めるあまり焦ってしまった事。メタルスライムと出逢った末にモンスターとの乱戦になってしまった事。

そのどれもを包み隠す事無く、不甲斐無い面持ちのままに告白した。

シオン「今回はまた随分と無茶をしたね……。今回メタルスライムに会ったのは偶然とはいえ、確かに地下水脈を通った時もメタルハンターがいたから、その前兆があつたと言えばあつただけでも、まさかルイが出くわしてしまうとは想像もつかなかつたよ……」

ルイ「面目ありませんわ……。結果的に無様な姿を晒す事になってしまいましたし……」

アリア「……肝心のメタルスライムはやつつけられたの？」

ルイ「え、ええ。一匹だけですけども、なんとか意地でもと思つて……」

アリア「本当にやつつけちゃつたの!? ルイすごいじゃん! もしかしてかなりの経験を積めたんじゃないの? 雰囲気もさつきと比べたらなんだか、凛々しい感じもするし!」

ベタベタとあちこちを触つて来るアリアにやめてほしそうな顔をしていたが、何度も命の危機を救ってくれた彼女を無下に扱う訳にもいかずに、結局成すがままだった。

シオン「アリア……一応まだ怪我人なんだから扱いは優しく、ね?」

アリア「え……? ああ、ごめんね! 私つたらまたバカな事しちゃつて……!」

それほどにまで嬉しかった事の裏返しなのだろうが、『怪我人』という言葉にいち早く察してか、素早く身体を引き離すアリアだった。ルイとて勿論、アリアの気持ちは痛い程にまで理解できていたからこそ、悪戯っぽい感じでいくら触られてもその心には不満などは全くな

かったのだ。

シオン「さて、結果オーライに終わった事だし、今度こそ僕等も寝ないとね。明日からはもっと厳しい冒険が待ってるんだ」

ルイ「そうですね。早く寝ないと……ってアリア？ ……どうして『私のベッドに潜り込んでいる』んですの？」

アリア「だって、最近ルイが隣に来てくれないから横がスースーしちゃって寂しいんだもん」

そういつて強引にルイの隣に寝るアリアの顔は、実に楽しそうだった。

こんな状態になった時のアリアはシオンでも止められない。現に、彼は既に自分のベッドで早くも就寝しており、寝息を立てる背中が『諦め』を表している。

ルイ「でも……アリアの背中、あつたかいですわ」

後ろから羽交い締めにされる格好で横になっていた二人は、お互いの視線が合わないままに言葉を交わす。

アリア「私もだよ。本当に間に合つてよかった……」

後ろから抱きしめるアリアの力が増すと、ルイもその存在を確かめるように、優しくもしっかりと握り返す。

互いが互いを想うばかり、どちらにもみつともない姿など見せられない。

それでも死力を尽くさなくして、自分を乗り越える事は中々にできる物でもない。だが本当に死んでしまつては元も子もない。そんな廻りに廻つた感情の螺旋に一番悩んでいたのは、他でもないルイだった。

自分が少しでも奮起しなければという気持ちから起こつてしまつた今回の出来事だが、シオンの言う通り結果オーライに終わった事で最後は全て良しと繋がつたのだろう。

ふとルイが気付けばアリアもルイを抱くようにしながら眠りについていた。

元々カイトの母親の命が迫っていたのもあり、内心かなりの重圧を抱え込んでいたアリアは今回の一件でかなり気を遣わせてしまつた

事を心から反省するルイだった。

ルイ「心配かけてごめんなさい……。でも——この借りは必ず返しますのよ。私の、王家の名に懸けて……!」

その瞳は遙か遠くを見つめ、かつてない信念と決意にルイは満ちていた。

メンデイルで迎えた翌朝。

三人の中で最も早く目が覚めたのはルイだった。

その10分後くらいにはシオンも同様に目を覚ましたが、二人がせつせと朝の準備をする中未だに夢の世界にいたのはアリアだった。布団をめくったり、頬を軽くぺちぺちと叩いて起こそうとするが一向に状況が変わらない。

シオン「まいったねこりや……。起きる時はすぐ起きるんだけど、こりや『不味い』パターンだよ……」

ルイ「アリアが起きないんですの?」

こくと頷くシオンは困った顔をしていた。心労も崇つて疲れを少々引きずってしまったのだろうが、およそ30分後にはここを出ないといけない。だがこのままでは30分はおろか、一時間経ったとしても果たして起きられるのか怪しいすらもあった。

ルイ「でしたらならば……。私に『考え』がありますのよ?」

意外にも助け船を渡したのは他でもないルイだった。

そして自信たっぷりなままにアリアの元に近寄ると、そのまま耳元に口をあてがい、軽くすうつと息を吸い込むと——

ルイ「アリア『助けて』え!」

アリア「……えっ!? 待ってて、今助けるからねっ!」

ルイ「……『ご覧の通り』、ですわ」

——お見事です。とシオンのささやかな拍手がルイに贈られた。

そして当の本人はというと、「ふえ?」と間拔けな声を出すばかり。名だたる聖地に挑戦しようかという前振りには、とてもお粗末な幕開けとなってしまうのだった。

シオン「さあほら、いつまでも寝ぼけてないで早く出発するよ!」

カイト君のお母さんを助けるんでしょ！」

アリア「はい……頑張る。ここが勝負所だもんね……」

いよいよ、かの霊峰ウインディアへ挑戦する瞬間がやって来る。

その先に何が待ち受けていたのは、三人にとってどれもが予想もつかない数々の『試練』だった。

第三十一話 いざ、靈峰ウインディアへ

遂に靈峰ウインディアの登山口にまでやって来た三人。

宿屋では寝ぼけた状態のアリアだったが、流石にここまで来ると気持ちをしつかりと切り替えており、準備も整っていた。

上を見上げれば振り返った山肌とおぼろげな霧が立ち込め、広く見渡す事はできそうにもない。万が一にでも道に迷えば、忽ち大自然の餌食となってしまうだろう。

シオン「さてと……ここが勝負の分かれ目と言った所だね。……ルイ、リュツセルを出発して何日経ったかな？」

ルイ「恐らくは20日前後は経っているかと思いましたが。1か月という単位だけで見るならば余裕はありますけれども、症状が悪化している事も考えればもつと早く見なくては……」

予断を許さない状況なのは変わらなかつた。しかしここで目的を急ぐばかり闇雲に歩き回っても、肝心の自分達が危機に瀕するだけ。

だからこそ、アリアは努めて冷静にいた。あくまで表面上は、だが。アリア「……行こう二人とも！ 何としても世界樹の葉を見つけ出すよ！」

芯の通ったアリアの掛け声が二人の心臓に響くと、希望が灯った瞳で頷く。

山の面積そのものはエトスン大陸のかなりを占めているためか、その分勾配は割と緩く体力が著しく奪われる心配は現時点ではなさそうではあつた。

だが、あちこちに石が散乱したごつごつとした岩山を歩くのは、例え旅慣れた冒険者であっても容易ではない。歩く足に注視すればそれだけで集中力が削がれる原因にもなり、気力の低下はやがて体力の低下へと繋がっていく。

そんな心配をしていた矢先だったのか、最後列にいたシオンは前を歩くルイを見つめる。

シオン「ルイ、大丈夫？ きつそうならすぐに言うんだよ？」

ルイ「——はい！」

言葉でこそ了承はしたものの、しつかりとした足取りは地下水脈で見た姿とはまるで『別人』のようだった。決して痩せ我慢や見栄などではない、彼女の『新たな強さ』がそこにはあったのだ。

そんなルイの変わりっぷりに、シオンは最初こそ考えるがすぐに心当たりが浮かんだ表情をする。

シオン「やはり、幾千もの経験と叡智が蓄えられているという『メタル種族』の恩恵は偉大だね。そんな運の良さも、ルイならではの強み……なのかな？」

アリア「ちよつとシオンー！ 一人で何ぶつぶつとしやべってるのー？ 口数減らさないとぼてて困るのはシオンなんだからね!？」

シオン「はいはいつと……。つて、早速『来た』みたいだよ？」

ジャストタイミングで後ろを振り返っていたアリアは、シオンの言葉の意味に気付けなかった。

しかし、その意味はすぐに理解する羽目になる。

——魔物の群れが現れた!——

いばらドラゴン、マージマタンゴ、浮遊樹、マッドオックス。どれも偉大なるウィンディアの加護を受けているに相応しい顔ぶれのモンスターばかりだった。ならばその強さも一筋縄ではいかないだろうと、アリア達の武器を握る手にも力が入る。

シオン「——仕掛けるよっ!」

アリア「おっけー! まずはあるの『いばらだらけ』のアイツから——!」

天高く飛び出したアリアはいばらドラゴンへ斬りかかると、竜族種へかなりの有効打となる特技『ドラゴン斬り』を惜しみなく浴びせた。斬った瞬間の魔力の奔流が竜が駆け昇る姿になぞらえている事から名がついたこの技は、決してその名に見劣りする事無く『いばらドラゴン』を一撃で地に沈める。

ルイ「物理面に関しては本当に多彩ですね。では私も……!」

アリア「今だよルイ! 得意のじゅも——えっ?」

ルイ「ふふつ、私とて何も呪文だけが能ではありませんのよ? 引き裂かれなさい——『双竜打ち』!」

不敵な笑みを浮かべたルイは、素早く二連の動作でチェーнкクロスを薙ぎ払った。双竜打ちと名付けた鞭の特技は、マジマタンゴとマッドオックスの二体を確実に捕えると、二人にも負けず劣らずのダメージを与えていた。

ルイ「シオン今ですよ！」

シオン「驚いたね。まさかここまでとは——『ニードルアロー！』貫通力の伴った矢がマッドオックスを貫くと、残るは一体だけとなる。」

最後の一体とて油断はせず、流れるように一人一人が放つ号令にアリアは呼応し、止めの一撃をマジマタンゴに放つ。

——魔物の群れをやっつけた！——

アリア「凄いよルイ！　なんだか最近凄いつてしか言っていないくらい凄いよ！」

ルイ「そ、そうですか？　そう言われるとちよつと照れますわ……」
シオン「メタルスライムで一気に経験を得たからね。ほらほら、先は長いんだから行くよ！」

もう少しくらい余韻に浸らせても、と不満気なアリアの顔を視界に入れる事もなくシオンは颯爽と歩き出す。

そんな彼の態度にルイも同様に不満を持つかと思いきや、存外に誇らしく、または嬉しそうだつた。

「——もう心配は掛けなくても大丈夫そうだね」と、そう告げる彼の背中と気持ちを、ルイはいち早く察していたのだ。

彼女にとってシオンに真の意味で認められるのは、アリアにそう思ってもらうよりも、かねてからずつと気にしていた事なのだろう。

それがこの聖なる地にまで来て、ようやく達成する事ができた。この瞬間にようやくルイはパーティの一員なのだ、はつきり認識できたのかも知れない。

その後もペースを崩さずに歩を進めると、やがて三人の目の前に広がったのはぼつかりと空いた内部に通じる洞穴だつた。

ルイ「ウインディアの内部はこんな風になっていますね。外とは違ってひんやりとしていますし、狭いかと思いましたが想像以上に広

いのですのね」

シオン「モンスターと戦う分には申し分無いね。勿論戦わないに越した事はないんだけど、……とおや？　ここで『分かれ道』か……」
そう言っただけで立ち止まるのだが、何故か二人は不思議そうな顔をす
る。

分岐点に差し加かってどちらを選ぶかの余地くらいはあつて当たり前なのだが、どうやら二人はその心配をしている様子でもないのだ。

そしてシオンにとっては驚愕の事実がアリアの口から告げられる。

アリア「分かれ道っていうか、そこには『壁しかない』気がするんだけど……？」

シオン「……なんだって？」

ルイ「私も地図上で確認をしましたが、この場所は一本道となつて
いますわ。シオンには道が見えていますの？」

シオン「勿論だよ。だって……ほら『通れる』じゃないの」

地図上にない道をシオンが通り抜けると、二人の目からはなんと『壁をすり抜けている』ように見えていたのだ。

アリア「えええ!! 私って今何を見てるの!？」

シオン「……現実じゃないかな」

元の場所に戻つて来たシオンは、アリアからしたら今度は壁からシオンが滲み出て来たように見える。その光景にルイは考える様子をするがアリアは目が点になるばかり。

ルイ「恐らくこれは『隠し通路』の類かと思うのですが……。古代からの種族達が何らかの理由で残したにしてもどうしてこんなカラクリが……？」

シオン「成る程ね。僕にはある程度読めたけども、果たして……」

アリア「ほんと?! 勿体ぶつてないで早く私にも教えてよー!」

がくがくと肩を揺らす、半狂乱に陥っているアリアにはシオンの制止の声も届かない。ルイがなだめる事でようやく落ち着きを取り戻す。

シオン「この仕掛けはワインディアが織り成した自然の神秘……で

は当然なくて、明らかに誰かが『人的に施した仕掛け』だよ。それもエルフである僕だけにはその仕掛けが通じない『極めて特異な』、ね。……となれば答えは簡単、僕と同じ種族の誰かがウインディアを護る為にした事なんだろうね」

ルイ「ならばその理由を知りたい……と言いたいのですが詮索は今は無用ですわね。恐らく他にも同じような『仕掛け』があると思つて間違いないと思いますわ。……当然、『世界樹の葉に繋がる道』もですわね」

シオン「だろうね。……なんだかこの大陸に来てから僕は重大な役目ばかりしてるのは気のせいなのかなあ……。考えても仕方ないか、まずはこの隠された道を行こう」

先を歩くと、間もない内に行き止まりにぶつかってしまった。

世界樹の葉を指す上では外れは外れなのだが、三人の目の前には地下水脈で見たような『宝箱』があった。それを見て誰が最初に飛びついたかは、今や言うまでもない。

アリア「ねえシオン！ 『アレ』の確認は!?」

シオン「はいはい大丈夫だよ。早く開けてごらん」

わくわくしながら宝箱を開けたアリアは、中に入っていた『何か』を早速取り上げる。

ルイ「これは……『弓』ですわね。私の頭に入っている弓の一覧ですと、『狩人の弓』と呼ばれる弓と一番似ていますわね」

弓の両端には風切りの羽根を象った装飾が施され、大きさもシオンが持っているショートボウと比べても一回り大きい。かなり良質な弓である事には間違いなかった。

アリア「やったじゃんシオン！ これならもつと頼りにできるよ！」

まるで自分の事のように喜びながら手渡すアリアに、シオンは少々照れながらも受け取るのだった。

今まで扱っていたショートボウは『袋』の中に入れると、『狩人の弓』をじっくりと眺めるように手に取り、引き絞る感覚や照準の確認をして新たな弓の感触を確かめる。

シオン「うん、状態も極めて良好だね。これならすぐに使えそうだ。
……思わぬ収穫もした事だし、先を急ごう」

ウィンディア「攻略への大きな手助けとなってくれる新たな武器を
手にした一同は、幸先のいいスタートとなってくれる事を期待して、
再び歩き出す。」

行く手を阻む大いなる聖地の数々の苦難は、これからの三人を更に
苦しめる事となる。

第三十二話 暗躍する者

——魔物の群れが、現れた!——

息つく間も与えんとばかりに、シャーマン二体、フラワーゾンビ一体、ガメゴン一体の混成型の群れが三人の前に立ちはだかる。

外部とは系統の異なるモンスターに、最初こそ少し戸惑いを見せるがすぐに気持ちを切り替えてアリアを突撃を皮切りに戦闘を開始した。

アリア「この剣で焼き斬る! —— 『火炎斬り!』」

シオン「——射貫け、『五月雨打ち!』」

先手必勝とばかりに間髪入れずに放った二人の特技がフラワーゾンビとガメゴンの肉体を貫き、あるいは斬り裂く。

フラワーゾンビは完全に倒したが、ガメゴンは虫の息ではあったものの生きてはいた。——そこをシャーマンによって救われてしまう。

アリア「な……! あいつ『ベホイミ』をガメゴンに!?!」

始末の悪い事に、シャーマンの妙技はそれだけでは終わらなかった。

もう一体いるシャーマンがなんと、どこからか『くさった死体』を呼び寄せたのだ。

体勢を立て直されてしまったアリア達にも、流石にこの連携には敵ながらあっぱれと舌を巻く。

シオン「こりや面倒だね……ルイ!」

ルイ「分かつていますわ。厄介な行動をする相手なら、それをさせなければいいだけの話ですよ——『ラリホーマ!』」

ラリホーよりも更に催眠性の強く伴わせた呪文で、シャーマンを眠りの世界へと誘う。直接倒すだけなら威力の高い攻撃呪文で一掃すればいいのだが、長いダンジョン内での攻略だと、そう毎回魔力消費の激しい呪文を連発する訳にもいかない。

そんな時は搦め手を用いた間接呪文で相手の行動を封じつつ、かつ魔力効率のいい呪文を唱えて節約を心掛ける。

アリア「これならいけるよ……! 私は面倒なのが嫌いなものよね。

……だからシオンにはちよつと悪いけど！」

勢いよく飛び出したアリアはシャーマンの群れへ向かうと、高速の剣撃を繰り出す。それはアリアの中でも指折りの得意とする特技『剣の舞』だった。瞬く間に全身を斬り裂かれたシャーマン二体は、それだけでかなりのダメージを負う。

何度も放つ得意手でもあるが故に、必要とする魔力や動きもほぼ最小限で済ませる。今となつては理想の効率と威力が合わさつた最良の技と呼んでもいいだろう。

ルイ「くさつた死体には……残念ですけど再び私の『メラミ』で、灰燼と化してもらいますのよ！」

紅蓮の炎纏いし呪文は中程の大ききさをした火球となつてくさつた死体を燃やし尽くす。唯一狙われなかつたガメゴンはアリアへと攻撃し、一矢報いようとする。

後方へ受け身を取る事で浅い傷で済んだが、後退を余儀なくされたアリアは再度シャーマンをフリーにするきつかけを作ってしまう。

アリア「不味いよ！ アイツらまた『ベホイミ』を——」

シオン「——任せて。悪いけど二度同じ手は効かないよ……！」

『敵』の行動パターンを最初の一手で読み切つたシオンは、いつの間にか『二体を巻き込める斜線軸』に入っていた。その理由は至極簡単である。

シオン「アリアに得意技があるように、僕だつて得意なものくらいはあるつて事さ——『ニードルアロー』！」

脳天目掛けて放つたシオンのニードルアローが二体のシャーマンを完膚なきまでに貫くと、今度こそ完全に地に沈む。これで残りは一体。

ルイ「あのガメゴンは物理と魔法どちらの耐久も高い敵ですが、電撃系には唯一致命的な程に弱いんですの。ですから——」

アリア「分かつた任せて……！ 受ける——『稲妻斬り』ッ！」

電撃を纏わせた一閃はアリアの秘技である『稲妻雷光斬』を小規模にしたような技だった。

しかし小規模とはいえど、その威力は確たるもの。鋭い斬撃と直流

で流れ込む電気の魔力はガメゴンの全機能を停止させて、たった一撃でウインディアの地に沈む事となる。

——魔物の群れを、やっつけた!——

アリア「なんとか片付いたね……。中のモンスターも厄介そうだし、落ち着いて上を目指していかない」と

ルイ「……そうですね。いくら初見だったとは言え、道半ばでこれだけ苦労してしまうと先が辛い事になると思いますの……」

シオン「とはいえ、ここで立ち止まってもしょうがないよ。幸いというか、地下水脈の時よりも道具の手持ちは多く持ってきているから、多少の無茶はなんとかなる」

立ち止まる事が許されない理由はシオンだけではなく、誰しもが分かっている事。如何に障害が立ちはだかろうと、三人はここまで来たからには最早目指すしかないのだ。

いつになくアリアが冷静なのも、魔物の強さ故に油断できないのもあるが、『失敗は許されない』というプレッシャーに立たされている所為もあつた。

アリア「行こう、先へ……!」

引き締まった端正な顔と強い意志で前を見据えるアリアは。今やただの冒険者ではなく歴戦の勘を積んだ貫禄ある一人の剣士となっていた。

二人もアリアの号令に強く頷くと、迷う事無くウインディアの大地を踏みしめて、ただひたすらに突き進む。

アリア達が霊峰ウインディアを攻略する最中に、暗躍する一つの影があつた。

リュツセルを東に進んだ地にある『貧困の街バミラン』から今度は南下して進んだ先に、ミストラル王国が目下の問題としている『例のアジト』は在る。

元はバミランから南に広がる深い森を切り抜けた先にある、小さな天然の洞窟だった。その場所を丁度いい潜伏場所だと目を付けた、とある『一人の大盗賊』は最初こそ数人から始まった小さなアジトが、今

では数十人規模となるにまで至る大きな根城と化してしまっただのである。

そしてそのアジトの最も奥に位置する所に、『ボス』の部屋はある。乱雑に物が置かれた部屋には、人によって用途が全く異なる嗜好品や骨董品。どうしても良さそうな子供の玩具らしき物から、一見したら誰が何に使うのかすら全く分からない謎めいた珍品までもがあちこちに散らばっていたのだ。

その中心にどっかりと座り込んでいるのは、緑を基調とした服を始めとして、同色の頭巾をすっぽりとかぶり、目だけをぎよろりと覗かせる屈強な肉体をした大柄の男。

手に持ち嬉しそうに、あるいははじつくりと品定めするように眺めているのは、ミストラル王国で盗んだばかりの『黄金のティアアラ』だった。

すると、入口の方から入ってくるのは『エリミネーター』と呼ばれる目の前の男とほとんど雰囲気が変わらないモンスターのだが、モンスターにしてはやけに落ち着きを払っていて、更にあるうことか普通に目の前の大柄な男に対して『カンダタ』と呼ぶと、普通に接する様に話しかけたのだ。

カンダタ「遅かったじゃねえか『エミリー』。バミランの様子は怎么样了？」

エミリー「へい。特に王国の連中も今んところは攻め込んで来る様子もなさそうですぜ。まずは一安心ってとこですかねえ？」

カンダタ「どうだかな。だんまりをこいてるのも今の内だけで、いつ大規模な襲撃をしてくるかなんて分からねえ。今回は『それくらいのモン』を盗んじまったからな」

エミリー「……しかし、親分の作戦も見事でしたよ。親方が少し前に『ジェリーマン』を三体程ふん捕まえてこいつて言った時は何するんかと思いやしたが、まさか真夜中にモシヤスを唱えて兵士に扮して城に侵入するなんてね。……まあ『聖水』を振りかけるって分かった時のジェリーマンの嫌がりっぷりったら、そりゃ大変でしたがね」

カンダタ「仕方ねえだろ。ただモシヤスで変身しただけじゃ『臭い』

とやらでばれちまうからな。それを欺くためにも、どうしてもあしなきやなんかつたんだよ」

エミリー「いやいや、むしろその程度でこうして見事に『黄金のティアラ』を盗みだせたんでしたから、良しとしましょうや。……所でですが、ソイツの使い道はもう決めてるんで?」

カンダタ「まずは一番高く買い取ってくれそうな金のある商人や貴族連中を片っ端から交渉しに回らせてる所だ。んで、一番ばれにくそうでかつ金を最もふんだくれそうな連中を見つけたら、このアジトからもさつさとトンスラするつもりよ」

エミリー「売ったりして手元に無いって分かったら、奴ら今度こそウチラの事殺すつもりで攻めて来るでしょうしね。それにしても……いや全く、親分の考えにはいつも頭が上がりませんわ」

カンダタ「オレはただ最善の手段を尽くしてるだけに過ぎねえさ。……ところで『サイモン』と『ジョニー』はどうした?」

エミリー「あの二人ならジェリーマンを連れてリユツセルに新たな冒険者リストを見に行ってる事かと思いやすぜ」

カンダタ「へっそうか。ならば城の兵士の代わりに冒険者がここへやって来てもすぐに顔が割れるって事だな。これで万が一ミストラルの息がかかった冒険者だとしても、速攻でバミランの連中を複数人質にとつて、解放の身代金として多額の金を要求する。そうすりやどつちに転んでも金は得られるって寸法さ。くくっ、我ながら抜かりねえぜ……!」

エミリー「大したお手並みですぜ。という事は近い内ここからおさらばする日も近いって事すね?」

カンダタ「ああ、このまま問題なく事が運べばな。全く今日ばかりは笑いが止まらねえぜ……! 今日飲むとするか」

エミリー「お、ソイツはつい最近どつかの貴族の屋敷から盗んだっていう例のお酒ですね? アツシでよければ付き合いますぜ!」

その後もカンダタの計画案を酒を豪快に煽りながら夜通し語り合うと、盗賊としての有望な将来に夢を膨らませ続けていた。

第三十三話 更に暗躍する者

——魔物の群れが、現れた!——

シャーマン二体、フラワーゾンビ一体、ガメゴン一体の混成型の群れが三人の前に立ちはだかる。

外部とは系統の異なるモンスターに、最初こそ少し戸惑いを見せるがすぐに気持ちを切り替えてアリアを突撃を皮切りに戦闘を開始した。

アリア「この剣で焼き斬る! —— 『火炎斬り!』」

シオン「——射貫け、『五月雨打ち!』」

先手必勝とばかりに間髪入れずに放った二人の特技がフラワーゾンビとガメゴンの肉体を貫き、あるいは斬り裂く。

フラワーゾンビは完全に倒したが、ガメゴンは虫の息ではあったものの生きてはいた。——そこをシャーマンによって救われてしまう。

アリア「な……! あいつ『ベホイミ』をガメゴンに!?!」

始末の悪い事に、シャーマンの妙技はそれだけでは終わらなかった。

もう一体いるシャーマンがなんと、どこからか『くさった死体』を呼び寄せたのだ。

体勢を立て直されてしまったアリア達にも、流石にこの連携には敵ながらあつぱれと舌を巻く。

シオン「こりゃ面倒だね……ルイ!」

ルイ「分かつていますわ。厄介な行動をする相手なら、それをさせなければいいだけの話ですよ——『ラリホーマ!』」

ラリホーよりも更に催眠性の強く伴わせた呪文で、シャーマンを眠りの世界へと誘う。直接倒すだけなら威力の高い攻撃呪文で一掃すればいいのだが、長いダンジョン内での攻略だと、そう毎回魔力消費の激しい呪文を連発する訳にもいかない。

そんな時は搦め手を用いた間接呪文で相手の行動を封じつつ、かつ魔力効率のいい呪文を唱えて節約を心掛ける。

アリア「おっけー。これならいけるよ……!」

私は面倒なのが嫌い

なのよね。……だからシオンにはちよつと悪いけど！」

勢いよく飛び出したアリアはシャーマンの群れへ向かうと、高速の剣撃を繰り出す。それはアリアの中でも指折りの得意とする特技『剣の舞』だった。瞬く間に全身を斬り裂かれたシャーマン二体は、それだけでかなりのダメージを負う。

何度も放つ得意手でもあるが故に、必要とする魔力や動きもほぼ最小限で済ませる。今となっては理想の効率と威力が合わさった最良の技と呼んでもいいだろう。

ルイ「くさつた死体には……残念ですけど前回同様、再び私の『メラミ』で、灰燼と化してもらいますのよ！」

紅蓮の炎纏いし呪文は中程の大ききさをした火球となつてくさつた死体を燃やし尽くす。唯一狙われなかったガメゴンはアリアへと攻撃し、一矢報いようとする。

後方へ受け身を取る事で浅い傷で済んだが、後退を余儀なくされたアリアは再度シャーマンをフリーにするきつかけを作ってしまう。

アリア「不味いよ！ アイツらまた『ベホイミ』を——！」

シオン「——任せて。悪いけど二度同じ手は効かないよ！」

敵の行動パターンを最初の一手で読み切ったシオンは、いつの間にか『二体を巻き込める斜線軸』に入っていた。その理由は至極簡単である。

シオン「アリアに得意技があるように、僕だつて得意な分野くらいはあるつて事さ——『ニードルアロー』！」

脳天目掛けて放ったシオンのニードルアローが二体のシャーマンを完膚なきまでに貫くと、今度こそ完全に地に沈む。これで残りは一体。

ルイ「あのガメゴンは物理と魔法どちらの耐久も高い敵ですが、電撃系には唯一致命的な程に弱いんですの。ですから——！」

アリア「分かった任せて……！ これで——『稲妻斬り』ッ！」

電撃を纏わせた一閃はアリアの秘技である『稲妻雷光斬』を小規模にしたような技だった。しかし小規模とはいえど、その威力は確たるものだった。

鋭い斬撃と直流で流れ込む電気の魔力はガメゴンの全機能を停止させて、たった一撃でウィンディアの地に沈む事となる。

——魔物の群れを、やっつけた!——

アリア「なんとか片付いたね……。中のモンスターも厄介そうだし、落ち着いて上を目指していかない」と

ルイ「……そうですね。いくら初見だったとは言え、道半ばでこれだけ苦労してしまうと先が辛い事になると思いますの……」

シオン「とはいえ、ここで立ち止まってもしょうがないよ。幸いというか、地下水脈の時よりも道具の手持ちは多く持ってきているから、多少の無茶はなんとかなるかな」

立ち止まる事が許されない理由はシオンだけではなく、誰しもが分かっている事。如何に障害が立ちはだかろうと、三人はここまで来たからには最早目指すしかなかった。

いつになくアリアが冷静なものも、魔物の強さ故に油断できないものもあるが、『失敗は許されない』というプレッシャーに立たされている所為もあった。

アリア「行こう、先へ……!」

引き締まった端正な顔と強い意志で前を見据えるアリアは。今やただの冒険者ではなく歴戦の勘を積んだ貫禄ある一人の剣士となっていた。

二人もアリアの号令に強く頷くと、迷う事無くウィンディアの大地を踏みしめて、ただひたすらに突き進む。

カンダタのいるアジトから、更に遠く離れた場所へと再び変わる。強力な邪気と魔力が渦巻きながら、世界の北東の片隅にひっそりと佇む、閉ざされた一つの大きな島があった。

その島のほとんどには無数の遥か高い岩山が突き並び、果てには極寒の冷気と吹き荒ぶ雪が永久に舞う中で、その頂上とされる場所には、元は遥か昔に建てられたとされるいわば聖地として扱われた神殿があった。

何故『元』が付くのかと言えば、魔天戦争が始まる頃に突如魔族が

押し寄せてしまうと、たちまち邪悪なモンスターによって占領され、そのまま魔物の根城とされてしまったからなのだ。

神殿へ続く道は突き立った無数の岩山に阻まれてまともに通るなどできず、浜辺から上陸した麓に唯一存在する『とてつもなく長い洞窟』を通り抜け、上を目指す事でようやく神殿に通じた外界へ抜ける事ができるのだが、洞窟を抜けた先も吹雪と冷気で包まれた世界となっていて、長い道を経て『神殿』にたどり着けた冒険者は一握りとされていた。

そんな来るもの全てを拒むかのような地形は、地上界を支配する魔族側からしたら、とても便利な拠点だったのだ。

人間などが攻め込もうにも魔物の巣窟となっている麓の洞窟を抜けなくてはいけなく、かつ自然の脅威も並大抵ではない。よしんば神殿にまで到達する者がいても、その頃にはほとんどが満身創痍であろうと睨んだ『大魔王』は、魔天戦争が終結する間近に直近の部下である『ダラム将軍』に対し魔界へと続く『ガガンの大穴』の封印と管理を命じた。

後に『ダラム城』と名付けられたこの神殿は、今でも極寒の吹雪が舞う遥か高い山中の上に幽玄と構え、何物をも寄せ付けん難攻不落の城として存在し続けている。

そんな邪悪な城の最も最奥に位置する『将軍の間』には、大仰な魔導士のローブを羽織った一人の魔族が立っていたのだが、その魔族は四人の人らしきモノから囲まれるように話を受けており、その四人らの剣幕にどこか狼狽しているようにも見えた。

一人は魔力で形成された小さな雲に跨ってふわふわと浮かぶ、『ランプの魔王』と呼ばれるモンスター。

一人は黄金の肉体を持ち、魔物の身でありながら強力な雷の力を操るとされる、『ライオネック』と呼ばれるモンスター。

一人は真っ赤な体躯と強靱な筋肉を隆起させ、四つの足と二本の腕を持ち、その手には斬り裂かれた者全てを冥府へと誘う大鎌を持つモンスター。

一人は色素が失われた青ずんだ肌を覗かせる、モンスターと呼ぶよ

りは魔族と呼んだ方が相応しい、四人の中では唯一人型に近い存在であり、かつ着ている服装もゴシックを基調とした漆黒のドレスを纏いながら、やんわりとウエーブのかかった灰色の髪をなびかせる、妖艶な美貌を持ち合わせた『女性』だった。

誰もが内から放つオーラや威圧感が尋常ではなく、目の前で相対している『ダラム』とてかなりの実力の持ち主である筈なのだが、その彼ですらこの四人の前には完全に委縮してしまい対等に話せる間柄ではないのは確かだった。

そんな中、ゴシックドレスを纏った『女性』がダラムに対し『例の計画に近い』と言う話題を持ち掛ける事で、対話が始まる。

ダラム「は……あの計画に関しては問題ありません『アンフェイス』様。もう間もなく例の『ダークエルフの村』へ侵攻できる準備は整うかと……」

アンフェイス「あら、そうなの？ あんまりモタモタしてたら、アタシ達でいつそ仕掛けてやろうかと思っていたトコなのよ。ねえ『アスタロト』？」

アスタロト「……吾輩には真の主は違えど、仮にも『大魔王ソルダート』様の城を護るといふ役目がある。冗談も程々にしてほしいと会う度に言っているとは思うのだがな」

アンフェイス「んもう、つれないわねえ？ ま、どちらにしても『ライオウ』、アナタは参加するつもりだったのでしょうか？」

ライオウ「地上の者どもが集うとするならば、我に深い傷を負わせた『あの娘』とも会える可能性は高そうだからな。顔くらいは出すつもりだ」

三人が話を弾ませる中で、一人だけつまらなそうにしているのが『ランプの魔王』だった。

ライオウ「お前もつくづく『損な役目』を負ったものだな。『カタブウ』よ」

カタブウ「当たり前じゃないか！ 寄りによってオレ様の役目が地上の監視だと？ いくら『あの方』の命とはいえ、地上を監視するのは本来『キサマの仕事』である筈がどうして監視役の監視などという

不毛な役割をせねばならんのだ！」

ドラム「も、申し訳ございませんッ！」

眼光だけで殺されそうな勢いのカタブウにドラムはただただ畏まるしかなかった。

そしてアスタロトもこれ以上は話す事がないと言わんばかりに背を向けると、無言で転移魔法を発動させてしまい、そのまま將軍の間を後にする。

アンフィス「節操がないわねえ。折角久しぶりに『四柱』が揃ったつていうのに」

ドラム「ではワタクシ目も侵攻の手筈を今一度整えて参りますので、一旦ここを後にしますぞ」

ライオウ「……我も『その時』まで傷を癒さねばな。あれから大分時間は過ぎたが、まだ体の疼きが消えぬわ」

カタブウ「オレ様も早く暴れたくて仕方ないんだ。退屈すぎてしょうがないからな。アンフィスもドラムも、くれぐれも抜かりはないように頼むぜ」

思い思いにそれぞれ言いたい事を言うと、まるで蜘蛛の子を散らすように、アンフィス以外今や誰もいなくなってしまった。アンフィスは誰もいなくなった部屋で、一人呆れ返って鼻からため息を漏らす。

アンフィス「全くもう……みんな勝手ねえ。ま……アタシも人の事をとやかく言えた柄でもないけども、ね」

用がなくなつた『將軍の間』の扉に向けて歩き出すと、紅く艶めいたパンプスを踏み鳴らす音が広い部屋に反響する。

アンフィス「でも、全ては『あの方』と『セシリア』様の為。私が愛してやまないお二方の為ならば——」

やがて扉の前までやってきたアンフィスはゆっくりと開けると、奥に吸い込まれて行き、その姿も闇となつて消え行く。

アンフィス「このアンフィス。例え『神』であろうが『悪魔』であろうが……全てに背く一心ですわ」

第三十四話 火に油

アリア達が霊峰ウインディアを登り始めてから、かなりの時間が経っていた。

上を目指す程に勾配もきつくなり、険しさもより増していくがそれは三人が目指す場所に近づいて来ている証拠でもあった。ルイも二人に負けじと弱音や疲れもほとんど見せる事無く、しっかりと二人のペースについて行っている。

やがてウインディアの外観から何度目か分からない洞窟の内部に入ると、周辺にモンスターの気配がない事を確認して、シオンが小休止を促す。

アリア「流石に疲れて来たけど、結構『宝箱』あったねー。えつと……700ゴールドに、力の種に命の木の実。薬草二つに、鉄の盾。それに、最初に見つけた狩人の弓」

ルイ「狩人の弓を除けば次に大きな収穫だったのは『鉄の盾』ですが、現状特に装備する人もいないでしょうし、後で売ってしまった方が宜しいかと思えますわ。アリアも普段から盾は装備していないのでしょう?」

アリア「そうだね。できるだけ身軽に動きたいし、両手で剣を持つたりする事もできなくなるから私は剣一本の方がいいかなー」

シオン「お金はあるに越した事はないしね。必要ないものは整理がてら売ってしまつて、他に必要なものの資金源にしとくのがベストだろうね」

洞窟の壁の隙間から瑞々しく流れ出る湧き水にルイが近づき、手にすくって飲むとすっきりとした顔と共に喉の渇きを潤す。

ルイ「こうして全身を酷使すると、改めて一杯のお水の大切さが身に沁みて分かりますし、何より生き返りますわね……。今はどの辺まで到達できたのでしょうか?」

シオン「地図通りだったら、今は全体の三分の二は過ぎたくらいかな。だからもうすぐで、僕等の『予想している場所』に到達できるかもね」

アリア「よし……じゃあここまで来たら最後まで突っ走って行こうよ！ もうゴールは目前なんだからさ！」

シオン「やれやれ……。本当、アリアは土壇場になれば成る程元気が増していくね。正直僕ですらもう少し休みたいって気持ちなんだけども……」

そんな元気なアリアに振り回されながらもついて行くと、また外へと通じる出口が見え始めてきた。

——しかし、それを見ていた三人はいつもの出口とは違う『雰囲気』を目の当たりにする。

洞窟の出口から差し込む光が、今まで出口から漏れていた光と比べ、明るいのだ。

ようやく待ち侘びた光景に一同は心思わずとも歩く足も速さを増す。

——そして、

アリア「すごい……私達、『霧』を抜けたんだ！」

三人の目の前に広がるは、絶景だった。

視界に広がる全てに雲が下一面に広がり、まるで生きているかのように風に運ばれて雲が動き、西に傾いた陽が徐々に雲の下へと沈んでいく光景は、正に空に浮かぶ『海』そのものだった。

ルイ「信じられませんわ……。こんな景色が私の住む世界にあっただなんて……」

シオン「僕もここまで見事な景色を見るのは初めてだよ。この素晴らしい景色を見に来るだけでも、この地に足を運ぶ価値はあるのかも知れないね……」

名残は尽きぬが、三人の目的はあくまでも世界樹の葉を見つけ出す事。

雲海を背に歩き出すと周辺の探索を開始する。

アリア「上に見えている紫のモヤモヤって、もしかしてアレがミスティア女王の言った『不思議な霧』なのかな？」

シオン「恐らくはね。触らぬ神になんとやら、だよ。今は上の心配よりも、付近に怪しい場所がないか探らないとね」

山の頂をぐるりと一周するようにして探索するも、これといった手掛かりは無くエルフのシオンならば見破れる筈の隠された入口も全く見つからない。

まさか、予想が外れたのでは——。と場にいた誰もが感じ始めていた。

だがここまで来て諦める訳にもいかなかった。三人はもう一度外周の細かな部分も念入りに調べながら、隠されていると確信している秘密の入口を探す。

——しかし。

ルイ「ダメですわ……これだけ探しても見つからないなんて……。シオンは見えていますの?」

シオン「いや……僕も全然だよ。ここまで来て、どうしても見えないんだ……?ここには絶対何かある筈なのに」

打つ手無く立ち尽くす三人に、眩い西の空が皮肉にも対比させるかのように暗雲が立ち込める。しかも陽の色は大分朱に染まっており、下手をすれば日没になりかねない。それだけではなく、気候がはつきりしないこれだけのだだっ広い場所だといつモンスター等の襲撃を受けるか分からなく、そんな危険地帯で野宿をする事だけはなんとしても避けたかった。

アリア「ちよつとだけ、その大きい岩で休もうかな……。今のところはモンスターもいないみたいだし……」

とぼとぼと歩くアリアの後ろ姿は寂しかった。そして、ここまですペースをほとんど崩さずに歩き続けて来た『反動』が、気持ちの切れたタイミングで襲い掛かって来てしまったのか、もつれ気味の足で小石に躓いてしまったアリアは前に転びそうになる。咄嗟に目の前にあった大きな岩に手を掛けようとした。

アリア「おつとと……」

——が、何故かその岩に手を掛ける事はなく『虚空を切る』だけに終わった。そして支えきれなかったアリアの身体はそのまま——。

アリア「きやあああああッ!」

ルイ「アリアっ!」

シオン「姿が、『消えた』!？」

誰もが何が起こったのか理解できなかった。

二人の目の前から忽然と姿を消したアリアに、二人が駆け寄り思いがけない『偶然』を発見する。

シオン「まさか……この大きな岩そのものが『幻影に見せた呪文』なのか？ だとすると……ルイ！」

ルイ「任せてくださいですの……！ 魔を破りなさい——『マジヤステイス』！」

白き光はルイの唱えと共に、ボールに包まれた魔は全て浄化され、真実の姿をさらけ出す。

マジヤステイスによって放たれた光もやがて晴れると、そこにあったモノは——。

シオン「こ、こんな所に『大きな穴』があつたなんて……！」

ルイ「シオンさんでも見破れないかなり大掛かりな仕掛けだったようですが……それよりも今は！」

いくら身のこなしが軽いアリアとて、不意を突かれて深さが分からない穴に落ちてしまえばひとたまりもない。

急いで穴の下を注意しつつも覗くと——彼女は無事だった。

アリア「な、なんとか大丈夫……。段差があつたからそこに引っかけかけて落ちずには済んだよ……」

シオン「そうか……まずは一安心したよ」

ルイ「それにしても、本当にこんな底が見えない穴がありましたねなんて……。アリアの予想は見事に的中していたんですね」

アリア「あはは……私も正直ここまでだとは思つてもなかったけどね……。それよりもシオン『フック付きロープ』を道具屋で買ったよね？ ソレ使つて早く降りようよー！」

シオン「はいはいつと……じゃあ下ろすよー」

袋から取り出したかき爪が付いたロープをしつかりと固定できそうな足場に引っ掛けると、それを伝つて下へ下へと降りていく、のだが。

ルイ「わ、私も降りなくては……ならないんですのよね……」

慣れた動作でロープに捕まってシオンはするすると降りていくが、もう一人は当然そうもいかない。並の人ならばロープに捕まるだけでも精一杯で、下をひとたび見れば底知れぬ穴の深さに足が竦みそうになるのが普通なのだ。

ルイ「あ、ああアリア……。万が一落ちても必ず、絶対に、天地がひっくり返ったとしても受け止めるのですよ!?!」

アリア「そこまで怯えなくても……。大丈夫だよーちゃんと見てるからー」

よたよたとした手つきながらもなんとかアリア達の並ぶ所まで降りて来たルイ。が、その呼吸はかなり荒く、この調子で降り続けても果たして大丈夫なのかと二人も若干不安になる。

ルイ「だ、大丈夫ですわ!。こんな場所で足を引つ張る訳にいきませんもの!」

震えた声でしゃべる言動など、ただの強がりである事は百も承知だった。

しかし、たとえ強がりであれど弱気であれどこんな中途半端な場所で手をこまねいてもいられない。

シオン「うーん。こんな時はやっぱりアリアが気の利いた言葉でリラックスさせてあげないと」

アリア「わ、私がー? ええっと、そうだねえ……」

腕を組み、うーんうーんと考える。ルイからしてみたらそこまで気を遣わせてもらうのもやはり嫌だった様だが、引き止める前にアリアの方が先に何やら『妙案』が浮かんでしまったようだ。

アリア「あ、そうそう。ルイが下に降りる時に見えたんだけど、今日の『ルイのおパンツ』可愛かったねー! ピンク色しててレースが綺麗だったし、随分と高級なイメーヅあったし。あ、太ももに『紐』も見えたからもしかして『ガーターベルト』ってやつだったのかな?」

——場が凍り付いた。もつと言うならば、やらかした。

シオン「……えっと。……お先してもいいかな」

アリア「え? え? そういう事じゃなかったのもしかして?」

ルイ「……当たり前ですわ」

——時既に遅し。

内から放たれるルイの『禍々しい気』にアリアが気付いたのは、彼女が両手をわなわなと震えさせている時だった。

慌てて取り繕おうとした所で、火に油なのは言うまでもない。

ルイ「よりによってシオンがいる前でなんて事をいいますのツ!?

いいえそれ以前にデリカシーというか空気の読めなさと言いますか、ああもう！ とにかくこの際なんでも構いませんわッ！ そここに正座なさいっ！」

アリア「ええそんなあ!? まずは安全な場所を探さないっ！」

シオン「……僕が探してくるから大丈夫だよ」

アリア「あ、シオン逃げないでよ私も探すのー！」

——アリアは逃げ出した！——

——しかし、まわりこまれてしまった！——

ルイ「——どこへ行きますの？」

右手には鞭。左手には炎。

絶体絶命だった。シオン顔負けのその素早さは一体どこから捻出したのか、それ以前にこんな狭い場所でどうやったら目の前に回り込めるのかと、とアリアは泣きそうな顔で必死に考える。

アリア「ねえー許してよルイー！ そのガーターベルト冗談抜きで可愛いんだからさー！」

ルイ「だからそれが『火に油』だという事が、まだ分かりませんのーッ!？」

……結局アリアはウィンディアの真つただ中で、正座させられる運命にあった。

自分で蒔いた種とはいえ、ダンジョンの途中でこんな異様な光景を晒しているのは、世界中で見ても、恐らく彼女だけかも知れない。

丁度その頃に戻って来たシオンだったが、良い場所が見つかったと伝えようとしてもまだ説教をしていた。余計な口を挟んで飛び火するのも避けたい所ではあっただろうが、流星にこの場所で一晩明かすのはどう考えても得策ではない。

意を決したシオンはなんとかルイを宥める事に成功すると、少し降

りた先にあつた横穴で今日の疲れを癒すのであつた。

異端の妖精族

地上には人間族の他にもエルフ族、ダークエルフ族、ドワーフ族、ホビット族などと言った姿形が異なった多数の種族が各地に住んでいると云われる。

その中でもとりわけ絶対数が少ないと言われているのが『妖精族』だった。

住んでいる場所もごく一部の人しか知らず、知っているからといって気軽に踏み入れる事ができる安易な場所にある訳でもない。

争いを好まず、一たび人間を初めとする他の種族を見れば一目散に逃げだす程に臆病で、その性格さ故に作りあげた魔法の結界は見知らぬ旅人を全て拒み、迂闊に踏み込んだ者は下手すればその場所を探すだけでも帰らぬ人となってしまう程に秘匿な辺境の地にしか住んでいないと、冒険者の間でも実しやかに囁かれていた。

そんな辺境の地に住まう『とある妖精族の少女』から、一人の数奇な物語は始まる。

少女は、黄緑を基調とした薄手の衣に身を纏いながら背中に生えた半透明に透けた妖精の羽根を光が反射する度に虹色に輝かせ、木々の合間を縫って緑溢れる森林を飛んでいた。

おかつぱ調に切り揃えられた真紅色の髪は、風に運ばれて舞い踊る一片の花弁のように鮮やかな色彩を放ち続け、少女らしいくりつとした橙色の瞳は何かを探すかのように上下左右に忙しなく動き続ける。やがて目的の対象を捉えたのか、スピードを徐々に緩めながら地表に着地した少女。そして迎えて相対したのは『モンスター』だった。

「多分と思って来てみたらマジでいるし。はーだるー」

——魔物の群れが、現れた！——

「おっとー。この先は通せんぼなんだよねー」

焦りや高揚を微塵も感じさせないのんびりとした口調ながらも、モンスターと面と向かって対峙する。

相対するはレッサーデーモン、悪魔神官、グレムリン、エビルホーク。単純な強さで言えばどれもが油断ならないのは当然の事、一人で

相手をするには並の冒険者ならば歯が立たない強さを持つモンスターもいる。

しかし、そんな多勢に無勢の状況下でも一切の怯みも見せる事無く、少女はなんと果敢に攻めていったのだった。

「悪いけどちやちやつと終わらせちやうね」

手始めに、純白のグローブを装着した指先から小さな魔力の渦を練り出すと、それをグレムリンに向かって放出する。放たれた魔力は『かまいたち』と呼ばれる真空の刃となって対象を切り刻むと、たった一撃で仕留める。

少女の攻撃が一旦終わると、その隙を逃さずにエビルホークとレッサーデーモンが襲い掛かる。レッサーデーモンの攻撃はかわせたが、もう一体の攻撃までは防ぎきれずにとっさに庇った腕ごと、身体が吹き飛ぶ。

更に魔物の猛攻はそれに留まらなかった。後方で詠唱をしていた悪魔神官は、両手に持つメイスに強い魔力を込めると、放ったのは――

「げ、イオナズン？　ちよつと不味いかな……！」

少女が防御に回るとほぼ同時に、容赦なく『イオナズン』は放たれた。

吹き荒ぶ魔力の大爆発に少女の周辺の草むらや木々までもが根こそぎ吹き飛ばされ、ものの一瞬でその場は荒地と化した。

中心にいた少女は――なんとか無事だった。しかし、身に纏う服は爆発の威力でボロボロになり、全身のあちこちにも傷ができてしまっている。

「いっつー。この辺のモンスターがあんまり強くないのもあって、ちよつと油断しちったかな……」

更に少女の劣勢に追い打ちがかかる。悪魔神官は再び詠唱を開始すると、次の瞬間には今しがた倒した筈のグレムリンが淡い光と共に蘇り、再び現世に舞い戻ったのだ。

「げえ、今度は『ザオリク』？　マジでー？　うーんこのままじゃラチが明かない……」

すると何故か今の爆発で吹き飛んだ木々を見渡す。まるで目の前のモンスターよりも周りの景色が気になるかのよう。

「……ふめんね。ちよつとこの一帯がボロボロになっちゃうけど、めんどいから仕方ないよ……ね？」

すると、そんな気楽な少女の顔とは裏腹に、目を瞑りながら念じる少女の両手には夥しいまでの魔力が急速に集っていく。悪魔神官が放った『イオナズン』の比などではなく、次第に大地が魔力の激しい鼓動に合わせて脈動するかのよう。

「早く帰りたいからとつと吹っ飛んじやってね? ——『ビッグバン』!」

それはイオナズンを遥かに凌駕する魔力の超波動。究極呪文の一つとして前方に射出された強大な一撃に、全てが飲み込まれ、唸りくる轟音と共に中心にいたモンスターを跡形もなく消滅させる。

——魔物の群れを、やっつけた!——

ビッグバンの爆発が冷める頃には、シンとした景色が残るだけで何も残らなかった。あえて言うとするならば少女の唱えた呪文が如何に強大であったかを物語る、大地までもが大きく抉り取られた、超爆発の爪痕だった。

「あちやーやりすぎちゃったかな……。ま、いいか。もし侵入させちゃったら『これ所』じゃなくなっちゃうしね。おけーおけー」

満足気な笑みを浮かべてモンスターと戦った場から背を向けると、まるで何事もなかったかのように平然と飛び立ち、その場を後にするのだった。

少女が帰って来た妖精族が集う村には、蛍が舞うような柔らかな魔力の粒子はふわふわと風に流れてはたまた揺れ、幻想的な雰囲気は漂う湖に浮かんだ天井の無い開放感溢れる小さな城が存在する。

その中の『妖精族の長』が座する場所には、深緑に髪を艶めかせ見目麗しい大きな妖精の羽根をはためかせた『女性』が立ち、更にその反対側には向かい合うようにその女性を見つめる、今しがたモンスターと一戦交えたばかりの『先程の少女』がいた。

しかし厳かな雰囲気を纏う女性とは裏腹に、とても退屈するような態度で両腕を頭の後ろに回し、やる気の無さに満ちた倦怠感漂う少女は、誰が見てもまともに女性と取り合うつもりなど無かった。

「随分と今回もしてかしてくれた様ですね。確かに魔物を撃退してくれた事には感謝は尽きませんが、もう少しやり様があったのでは？」

「だってさー、『戦争が始まってる』って言うから早く終わらせたかったし」

「やはり、そのつもりだったのですね……。今一度聞きますが、どうしても『あの争い』に手を貸すつもりなのですか？」

「しようがないじゃーん。天竜教のしかも大聖堂ロマルの一番偉い人から直々に頼まれたりしたらさー？　つか200年も生きててさー、ずっとここに居たってぶっっちゃけ身体が退屈で死にそうになるだけだし」

「妖精族が物言わぬ獣以外と争う事はもとより、一切の手を出してはならぬという不変の掟があるのは当然知っての事なのですな？」

「だってさ、今までにない軍勢で争ってる魔界と天界の戦争だよ？」

「ここだって、明日にはどうなってるか分からないよ？」

「……それでも掟は掟です。向こうからこちらに攻めてくる明確な行動がない限り、手を出す事は許されないのです」

「またそれー？　……ていうか、聞き飽きたそれ。大体、女王様だって自分が『こんな性格』なのは——知ってるよね？」

そう言うと、少女は近くにあった柱に拳を構える。——そして、こつんと軽く柱に触れただけの少女の柔らかな拳は根元から粉碎されると、——そのまま倒れた。

「き、貴様！　女王様の御前でなんとという狼藉を！　それでも妖精族か！」

女王の側近とされる近くにいた近衛兵がこれ以上は我慢がならぬとばかりに、駆け寄ろうとするが女王が遮った手で踏み止まる。

「ごめんね、大事な城の一部を壊しちゃって。——でもこれが、『リコの答え』だよ？」

鋭く細めた目は、側近ですらも少女ながらに放たれる威圧感に一瞬飲まれかける。

だが女王はそれでも眉一つ動かさず、ただ冷静に少女を見つめていた。

「——アナタの答え。しかと受け止めました」

「おー？　女王様にしちや随分と今回は物分かりがいいんじゃないの？」

「アナタのその類まれなる力を認め、人々の為に戦う事を許しましょう。——但しその場合、二度とこの妖精の国に帰って来る事は一切許しません」

「……ふーん。それだけ？」

「……ただ、住む場所が無いのではあまりにも不便でしょう。戦争が終わり、生き延びる事ができたならば、ロマールで修道女として新たな道を切り開けばよろしいのではないですか？」

「そうだねー。ロマールで修道女……って、ま……マジ？」

その発言に、自らを『リコ』と呼んだ少女は目を丸くさせる。

自分が面食らわせるつもりが、まさか逆に喰らわせられる羽目になるとは予想もつかなかったようだった。

「あの場所は様々な理由で行き場を失ったありとあらゆるな種族が、神に仕える者として新たに人生を歩む為に、住み込みで働いていと聞きます。ならば妖精族のアナタとて例外ではないでしょう。ああでも、あの場所には腕の立つ者がいなくて何者かから襲撃を受けた際の不安があるとも昔聞きましたね。……ならば『用心棒』として赴くのも一興かも知れませんか？」

「へ……今度はヨージンボウ？　さつきから全部マジで言ってるの？」

「私は至って冷静ですよ。なんならロマール宛に書状の一つでも、書いて差し上げましょうか？」

自分で言い出した事とはいえ、まさか逆に頭痛の種に悩まされるとは思っていなかったのか少しばかり考える仕草をする。

だがそこは、飄々とした少女の性格と度胸が僅かばかり勝ったよう

だった。

すぐに元の表情に戻ると晴々とした顔つきで目の前の女性にはつきりと口を開く。

「いや別にいいよ……。じゃあ戦いも近いみたいだし、もう行くね。今までありがと——『お姉ちゃん』」

少女はそう言うと、なんとも軽はずみな態度で後ろを振り返るとそのまま悠悠自適に歩き出し、背中越しに手をふりふりとさせて素っ気ない別れを告げてしまう。

「……女王様。これでよろしかったのですか？」

「良いか悪いかで決めるならば、良かったでしょう。……あの子は昔から好奇心が旺盛で外の世界をずっと知りたがっていました。同じ妖精族としては私とてにわかには信じがたいですが、魔物から襲撃を受ける度にあの子が戦いと勝利の味を知り、そこに『更なる悦び』も見出していた事も……」

「……左様でございましたようか。何百年、何千年と歴史を繰り返せば、『あのような方』がいつか現れても不思議ではない、という事なのでしょう。数少ない妖精の守り手がいなくなってしまうのは、少々心許ない気は致しますが……」

「心配には及びません、隣にいるアナタがこの地を護ってくれと分かっているからこそ、私も快くあの子を送り出せたのです。……これからも頼りにしていますよ?」

「——は。我がビオラの命、偉大なるカトレア様の為ならばいつでも捧げる思いにございます」

ビオラと名乗った側近の女性は、カトレアと呼んだ女性に改めて正面から向き直ると腰に携えていた剣を地面に置きながら跪く。

一方でカトレアは跪いたビオラの頭をに手を添えると、柔らかな笑みと共にひと撫でする。

「どうかご無事でいるのですよ。『リコリス』……」

あくまで妖精族の長として少女と向き合ったカトレアが最後に見せたのは、純粹に一人の家族として思った慈しみの心だった。

第三十五話 もう一つの世界樹

霊峰ウィンディアで一夜を過ごし、早速下へ下へと降りていく三人。

最下層へ近づけば近づく程、より神秘的な空気が増していくのがルイやアリアにも分かっていったのか、モンスターの気配が全くと言っていくらいに無いのが幸いだった。

フック付きロープを何度も取り付けては外し、外しては取り付ける。そんな地道な作業を幾度となく繰り返す事で、ようやく底が見えて来たのだ。

そして三人が降りた先にあつたものは、まさしくアリアが予想していた光景そのものだった。

アリア「すごい！ ほらほら岩の隙間から水が流れて来てるよ！」

シオン「上から僅かに差し込んで来る光でなんとか周辺も見渡せるね。……うん？ もしかして……『コレ』かな？」

上からスポットライトのように照らし出された地面の場所には、一つの『芽』が出ていた。

しかし、その芽は今にも干からびてしまいそうなくらいにしわがれ、元気であるとは言いがたい。このまま放っておけば数時間と経たずにその生命力は枯れ果ててしまうだろう。

シオン「これだけの小さな芽から感じられる凄まじいまでの『生命力』……。間違いないね、これは世界樹の芽だと思う。……けども」

ルイ「こんなに萎れてしまつては、例え摘み取つたとしても効力などあるのでしょうか……？」

シオン「多分上から漏れてくる陽の光が弱すぎる所為で、世界樹に必要な分を満たしていかないんだと思う。今はまだ朝方になつたばかりだし、当然と言えば当然なんだけども……」

アリア「じゃあどうしたらいいの？」

ルイ「シオンの考えでいけば、光さえ足りていればこの芽は必ず力を取り戻す筈ですわ。……ならばその光が『最も強くなる時間』。そ

れはつまり——」

シオン「……『正午』だね。太陽が最も高く昇れば、それだけ奥深くにあるこの場所にもより光が届くという事になる。……ただ時間にしたら、下手すれば10分にも満たない時間しか猶予はないかも知れないけどね」

ルイ「僅かにしか入ってこない光を頼りに、なんとかこの世界樹は生きていますのね。そんなぎりぎりで繋ぎ止めている命をもぎ取ろうとしていると思うと、正直気が引けてしまいますけど……」

シオン「根を取ってしまわない限り、この芽は生き続けるよ。ここまで来たのも何かの縁だと思って、『葉』は頂いていくしかないね」

アリア「そつか……。なんか可哀想な気もするけど、カイト君のお母さんを助けるためだもんね。『世界樹』さん、どうか許してね……」

世界樹の芽にちよこんとしゃがみ込み、触ろうかと悩んでいたアリアだが、結局最後まで触れる事はなかった。

そんな時、アリアは肝心な問題にふと気付く。

アリア「そう言えば……今ここに太陽の光を当てるの？ 正午まではまだ時間があるから結構待たないといけないと思うんだけど……」

ルイ「時間が差し迫っている中なのに、そんな悠長に待つのも酷いというものですわ。……ですから、『こうする』のです——！」

言葉に力を込めたルイは詠唱を始めると、すぐさま彼女の足元に魔法陣が展開される。そして、天にぽっかりと空いた穴に向けて両手をかざすと、ルイは呪文の詠唱を始めだす。

シオン「おお、流石だね。僕も同じ事を考えてはいたけども、まさか『これ』も使いこなせるなんてね」

ルイ「——大いなる神が創りし空よ。その御名の下に、我に天の摂理を変える力を——『ラナルータ』！」

魔力を乗せたその名を紡ぐと、それまで淡く射していた光が、突如として急激に色の濃さを増し始める。

消費する魔力も多く、何より自然の摂理を捻じ曲げてまで行使する呪文の『ラナルータ』は魔法使いは当然の事、並の賢者でも修得が難しいとされる上位呪文の一種であったが、彼女はやはりそれすらも

のの見事に使いこなしていた。

その強い光に呼応するように、今までしな垂れていた世界樹の芽も潤いを取り戻すと、瞬く間に完全に苗木となって復活した『もう一つの世界樹』が姿を現したのだ。

ルイ「世界樹には、死者をも蘇らせる力があるとと言うのは有名な話ですけれども、正直この目でみるまではにわかには信じられませんでしたの。けど、これだけの魔力と生命力に溢れている姿を見れば、確かに納得できますわ……！」

シオン「……そうだね、ここまで瓜二つな世界樹が存在するなんてね。……よし、アリア。『出番』だよ」

アリア「で、出番？ 折角二人がここまで準備してくれたのに、私が取っっちゃっていいの？」

シオン「世界樹はただ使うだけじゃ、その効果を十分に発揮しないんだ。真に必要なと願う心が強ければ強い程、純粹で清らかである程、世界樹はその心に応えてくれる。……だったら、今それに一番相応しいのはアリアしかいないと、僕は思うな」

右を見ても、左を見ても、どちらも頷くだけしかしなかった。

この目的をなんとしても達成しようとして最初に言いだし、その後もずっと信じて止まなかったのも他でもないアリアだった。

——ならば、彼女にとつての選択肢は最初から一つしかなかった。

今こそ真っ向から向き合う事で、世界樹が共鳴し満たされるのならばと、アリアは意を決する。

アリア「私には、今どうしても救いたい命があるの……！ だから、お願い……！」

小さな世界樹に手を伸ばし、ゆっくりと葉を掴み引き抜く。

すると——あっさりする程綺麗に取れた。引つ張られる感触などもアリアは全く感じず、むしろ世界樹の方から自然と抜け落ちたのではと、錯覚するくらいに。

指先でつまみながら『世界樹の葉』と目を合わせるアリアの顔は、とても不思議そうだった。一見ごく普通の葉にしか見えないこれに、果たしてどれだけの力が眠っているのかが想像もできないのだ。

アリア「これが、『世界樹の葉』……」

ルイ「やりましたわね、アリア……！」

横には満面の笑みで迎えてくれるルイがいた。後ろにいたシオンも、とても満足気な表情で頷き返す。

シオン「感傷に浸るのもこれくらいにして、と。……目的も達成した事だし、早速リユツセルにとんぼ返りしないとね！」

アリア「うん、そうだね。急がないと折角の努力も無駄になっちゃう！ ルイ、——お願い！」

ルイ「分かりましたわ。脱出しますので集まってください！」

両手に魔力を込め、中央に魔法陣を展開させたルイを中心に三人が集まる。

そして魔法陣が光り輝き、無数の光が魔力の粒子となって拡散し強くフラッシュされる。

アリア「ありがとう……」

霊峰ウインディアから別れを告げるその寸前、小さく紡いだアリアの言葉は、とても名残惜しそうだった。

そして次の瞬間にはアリア達は完全に転送されると、誰もいなくなった秘密の場所には、再びひっそりと根を下ろす『名も無き世界樹』がそこに在るだけだった。

次にこの地に訪れるのは別の冒険者なのか、再び彼女達なのか、はたまた全く別の人間なのか。

それを知る事は、例え神だったとしても不可能なのかも知れない――

第三十六話 救われた命

三人がリュツセルを出発した『あの日』から、今日で丁度三週間と一日。

アリア達と最初に出会った広場のベンチに腰掛けて、今日も今日とて彼女らの帰りを待つ一人の小さな少年がそこにはいた。

——が、母親の容体も日を追うごとに目に見えて悪化していき、街の医師から手渡された申し訳程度の薬では既に回復が追い付かず、三日ほど前から焦りの色を隠せなくなっていた。

元々カイトはリュツセルで生まれた身ではなく、リュツセルから東に進んだ貧困の街バミランで生まれ育った出自を持っていた。

しかし、そのバミランから少し離れた場所にある『盗賊団』の息にかかっている所為で街の治安はお世辞にも良いとは言えず、更に町全体が貧困に窮している事にも輪がかり、迂闊にミストラル側も手を出しにくいのが現状だった。

盗賊団がせしめた盗品を売りさばいては自らの資金源とし、それを街の人らが生活の為に泣く泣く闇に染まったお金に手を出し、それをとんでもない暴利で返金を要求する。当然ほとんどの街の者は返す事などでできず、半奴隷となつて虐げられる生活を送る日々。

そんな荒れ放題の地と化した、地獄のような環境から抜け出すべくバミランから決死の覚悟で離れ、命からがらリュツセルへとやってきたのが、カイトとその母親だった。

勿論このような行動に及ぶ者はカイト以外にも少なくはないが、ただでさえ弱った体に鞭打ちながら街まで歩かなければいけないのに、道中にはモンスターが群れをなしてそこら中に出没し、一たび見つかれば冒険者でもないのに太刀打ちする事などもつての外で、逃げる事すら叶わない。運悪く出会ってしまったからには、大人しくモンスターの養分となつて人生を終えるしかないのだ。

カイト「やつと母ちゃん生きてここまで来られたんだ……。今更死なせるなんて、したくねえよ……！」

もはや彼女らに頼る以外に救いの道がなかったカイトは、膝に乗せ

た拳を力一杯に握りしめて、ひたすらに祈る。

お願いだから無事であってほしい。なんとか母親を助けてほしい。一分一秒でも早く来てほしい。自分にできる事があれば、魔物にだって立ち向かう。

いくつもの感情が自分の内から湧き上がって心に何度も反響する言葉は、いつしかカイト自身を蝕むんでいった。

毎日張り裂けそうな気持ちを抱えながら母親の看病もこなし、睡眠もろくにとらず自らの体調を疎かにしては心も体も不安定になり、『もたなくなる』のは当然だった。

カイト「……こんな事で、倒れてたまるかよ……」

目は二重になって、立つ事もままならない。ふらふらと振り子のように動く頭は、やがて糸が切れたようにベンチの横にぱたりと倒れ——カイトの意識はそこで途絶えた。

——それからアリア達が到着したのは、カイトが倒れてから十分も経たない頃だった。

リレミトで霊峰ウィンディアから脱出したアリア達は、その足でルーラでリュツセルまでひとつ飛びすると、すぐさま宿屋を借りてシオンが世界樹の葉をすり潰した特効薬を作った。

逸る気持ちをアリアは抑えながらも広場に向かうと、ベンチにぐつたりと横たわるカイトの異変にいち早く察し、すぐさま駆け寄ると応急処置の回復呪文を施す。

ひとまず意識が回復したカイトだったが、「自分の事はいいから早く母親の下へと急いでほしい」と、擦れた声で必死に訴えかけられてしまい、どちらの身を優先させるべきか三人は迷った。

やはり命の危機に瀕している母親を優先させるべきとアリアは強く発すると、カイトを背負って行き先を教えて貰う事で、ようやく家に到着できたのだった。

リュツセルの片隅に小さく構えるボロボロの家屋を見るだけで、二人がどれだけ水ぼらしい生活を送っているかなど、想像に難くなかった。

しかし今はそんな同情の余地を考慮する時間も惜しい。ベッドに

横たわっている母親の姿を見つけると、すぐにシオンは治療を始める。居間の床にひとまず寝かしつけたカイトも、三人がやつと来てくれた安心勘からか、後を託すようにそのまま気を失った。

シオン「意識はほぼ無く、呼吸も不規則な上にかかなり弱い……。熱も相当ある。なのに手足だけは妙に冷たい……。目立った外傷も特にないし、やつぱり何らかの病原体に感染してるみたいだね」

アリア「なんとかかなりそうなの……?」

シオン「これくらい感染症だったら、世界樹の葉の力なら十分に治せるよ。薬師の経験もある程度持っているのが、まさかこんな場面で役に立つとはね……」

ルイ「シオン、私はどうすればいいんですの?」

シオン「取りあえず念には念を入れよう。世界樹の効力を少しでも浸透させる為に、ルイが使えるだけの『解毒呪文』を使って、できる限りの毒素や病原体を身体から取り除こう。今すぐどうこうなる状態でもなさそうだから、落ち着いて唱えてほしい」

アリア「ねえ、私は?」

シオン「アリアは冷たく濡らした手拭いを用意したら、何か食べ物を買って来て。なるべく胃にやさしそうなものにして頂戴」

冷静かつ的確に指示を飛ばすシオンに二人とも素直に頷き、余計な口を挟む事もせずに必死に取り掛かる。

手拭いを用意したアリアはすぐさま、その足で素早く買い物に出かける。一方でルイはシオンの指示した通り、まずはキアリーから唱え始める。そしてシオンはその様子を注意深く観察し、手応えの程を探る。

ルイ「やはり『キアリー』程度では駄目ですわね……。でしたら――『キアリク』ではどうですか……!」

目を閉じながら手をかざして唱え続けるルイは、緑の光を放つキアリーから黄色に光るキアリクへと呪文を転じさせて、別の方向性で回復を試みる。

すると、身体の熱そのものは大分下がり、呼吸も幾ばくかの落ち着きを取り戻して見せた。――が、肝心の意識は未だに戻らず、予断を

許さない状況なのは変わらないまま。

シオン「やっぱり並の解毒呪文だとこの辺が限界みたいだね……。ありがたいルイ、後は僕がやるよ」

ルイ「ごめんなさい、お役に立てなくて……」

シオン「そんな事はないさ。万全を期すという意味ではこれ以上ない初期治療だったよ。……さて、と」

袋に手を入れて何かを探すようにまさぐると、中から取り出したのは緑色の液体が詰まった指一本分程度の大きさしかない、硝子の小瓶だった。

ルイ「それがさつき宿屋で調合していた薬ですか？」

シオン「そうだね。使い方的には薬草とほぼ変わらない筈だから、『世界樹の葉』をそのまますり潰してこの小瓶に入れたんだ。他にも『きつけ草』や『いやし草』を配合して作ってあるから『万能薬』とほぼ変わらない効果を持つてるよ」

コルクで封じられた蓋がスポンと小気味いい音たてて取り外されると、そのままカイトの母親の口元にまで運ぶ。

シオン「後はこれを、流し込むだけ……失礼しますね」

指先でそつと口を開け、むせたり体に負担がかからないように配慮しながら一度に流し込まず、何度にも分けて慎重に喉元を通らせていく。

薬の量自体はごく少量しかなかったからか、数分もしない内に全て飲み切る事ができた。

そして世界樹の葉が加えられた薬の効果は、すぐさま表れる。

ルイ「身体全体が緑色にうつすらと光っていますわ……」

シオン『世界樹の葉』の効果だね。身体を蝕んでいる病原体や毒素をその力で全部打ち消しているんだ」

緑の光は徐々に擦れていくと、やがてその役目を終えたかのように完全に消えてしまった。

薬を与えるまで熱していた身体や弱かった呼吸なども全て正常に戻ると、最後には閉ざされていた意識も——取り戻した。

長い眠りから覚めた心地なのか、瞳がまだ微睡みの中だったが、向

けられている視線に気づくと、自身の身体を不思議そうに触りながらもゆっくり上半身を起こす。

ルイ「……よかった！ お気づきになりましたのね！」

母親「……ここは。私は一体……。それに、貴方達は……？」

ルイ「私達はカイト君に頼まれてここまで来たんですよ。お身体も調子を取り戻したようでよかったですわ」

それから二人はリュツセルに来てから、ここまでに至る経緯と事情をかいつままで説明した。

母親は自らの名を『ミランダ』と名乗り、始めこそは何を言っているのか分からない表情のままに聞いていたが、次第に真実味を帯びていく説明を聞けば聞くほど、決死の想いで『世界樹の葉』を入手したであろう苦労を想ったのか、とでもありがたくもそれ以上に申し訳なさそうな顔をするばかりであった。

ミランダ「正直今でも夢のようですが、事情はひとまずお察ししました。本当に何とお礼を申し上げたらいいのか……。こんな私の為にここまで尽くしてくれて……」

シオン「いえ、僕達はある人について行っただけの付き添いみたいなものですから。それに、お礼を言うならば僕達よりも……」

アリア「ただいまー！ 帰り道を一本間違えて帰るのが遅れちゃったよー！」

ルイ「ふふ……そうですわね。『この方』に言うのがごもつともかも知れませんか」

アリア「——ふえ？」

遅れてやってきた『救世主』は、皆の境地など知る由もないまま突然自然に指し向けられる指に、頭上に疑問符をいくつも浮かばせて呆ける顔を覗かせるだけだった。

第三十七話 妙案

アリアも丁度戻って来た所で、一堂に会したタイミングで改めて自己紹介をする事にした。カイトの母親であるミランダはシオンが調合した薬を飲んでから以後、元気な姿を完全に取り戻し、今度は未だ度重なる疲労で眠っているカイトをベッドに寝かせる事にしたのだった。

ルイは流石にこれ以上畏まられても居辛くなるのを予想してか、王家の出自である事は隠したが、アリア達と同じヴェストガル大陸からやって来た事を明かす。

アリア「いやーでも、まさかここまでの大冒険になるとは思ってたよ。この街でカイト君に出会って、ホントに色々な事経験したなあ……」

ミランダ「あなた方には本当に感謝してもし切れません。私で何か役に立ってる事があるならば、一生をかけて誠心誠意尽くす事をお約束しますわ」

ルイ「そんな……。私達はいわば目の前で倒れている人を助けようとしただけの、人としてごく普通の事をしたまですのに……」

シオン「ミランダさんの気が収まらないというのも分かるけどね……。では、一つお聞きしたいのですが、ミランダさんかかっていた病気は恐らく酷く環境の悪い場所で生活していた為にかかってしまった病気かと思われるんですが、何か心当たりはあるのですか？」

ミランダ「私が病にかかった心当たりですか……」
ベッドの横にあった椅子に座っていたミランダは顔を俯きながらも、恐る恐るといった口調で語り出す。

ミランダ「元々私達はこのリュツセルで過ごしていたのではなく、ここより東に進んだ地にある『バミラン』という比較的小さな村から半年ほど前にやって来たのですが……」

それから彼女は村が今どれだけ治安が悪く過酷な目に合っているか。生活すらもまままならなく村を抜け出したいと思う村人が後を絶たないか等、全て包み隠さずにアリア達に打ち明けた。

盗賊団の事を他の者に妄りに告げ口した場合、村人の命は保証しないなど脅されてはいたが流石にこの家までには盗賊団の手は差し迫っていないかった事に安堵したのかそれも同様に三人に明かす。

アリア「ひどい……！　自分達の都合の為にお金を巻き上げるだけじゃなくて、奴隷みたいな扱いを毎日しているなんて……！」

ルイ「うまく逃げおおせる事はできたにしても、劣悪な環境に蝕まれた身体まではなんともありませんでしたのね……！」

シオン「村一帯の命運が本当にその『盗賊団』の手中にあるとするなら、中々の規模を持った連中なんだろうね……。ミストラルの軍が手を出しづらいのも、村そのものが人質になつていてと考えたら、思い切った行動に踏み切れないのも分かる」

ルイ「軍が駄目ならば、腕の立つ冒険者を雇えばいいのではありませんの？」

シオン「……どうだかね。盗賊団だつてその辺くらいまでは考えられると思うよ。となれば、少なくともリユツセルに登録されている冒険者はほぼ連中に顔を割られてると踏むべきだろうね」

アリア「じゃあ私服で村に入って潜入捜査！」

シオン「うーん地道にやるとしたらそれくらいしかないだろうけど、どちらにせよ身バレした時のリスクが怖いし、何より連中の幹部やボスをピンポイントで倒せるだけの強さや手際を持つている人がいるのかどうか……」

三人が考えを張り巡らせてもどれも有効打になる決め手が思い浮かばない。結局どの作戦を立てるにしても、最終的には村人を盾に取られる前に少人数で素早くボスを叩く実力の持ち主でなければ成立しないからだ。

シオン「それに潜入するつて言つても、見知らぬ人が突然来たら街の入口で結局手下か門番がチェックするだろうし結局思うようには行動できないだろうね……」

ミランダ「——いえ、それに関しては案外そうでもありません」

ここで意外な答えを返したのは、ミランダだった。そしてそれは、思わぬ所で希望が舞い降りる。

ミランダ「村のそばに流れている小さな川があるのですが、実はその川は村の下水道と繋がっているのです。何を隠そう私とカイトも、その下水道を通ってここまでやって来たのですから……」

それは、万全かと思われた盗賊団の布陣にもわずかな綻びが見えた瞬間だった。そうなる、曇りがちだった三人の瞳にも自然と光が戻る。

ルイ「でもまた下水道ですよ……」

アリア「し、仕方ないよ……。盗賊団の目から逃れるだけ良しとしない……」

ともあれ、これで最初の足掛かりは掴む事ができた三人。

後は内部の実態を探り、黄金のティアアラを初めとした盗品の在処も極力早く見つけ出さなくてはいけない。

シオン「じゃあ早速今度はミストラル城に行つて、アジト潜入の細かい打ち合わせもしないとね」

アリア「うん、そうだね。ミランダさん、元気になって本当によかったです。また縁があればお会いしましょう……!」

ミランダ「も、もう行つてしまわれるのですか？ 大したお礼もできずに……」

ルイ「アリアが行くと言つたら、私達の役目も終わりましたのよ。どうかこれからもお身体を大事になさってくださいませ」

ミランダ「本当に何から何まで有り難うございます。アリアさん達の事は、一生忘れません。機会がありましたら大したおもてなしはできませんが、どうか是非……またいらしてください」

アリア「はい、また必ず来ます。約束します!」

長居する余裕もなかった三人は、少々忙しくも未だ深い眠りにつくカイトを横目にミランダの家から立ち去る。『また逢う』というほんの小さな契りを交わして。

そして、街からルーラでアリア達が飛び去ると、その後ろ姿が見えなくなるまでミランダは微笑んだ顔のまま見続けているのだった。

ミステイアの下へ戻つた三人は、彼女の驚いた顔にアリアが少し誇

らしく思いながらも早速アジトへ突入する為の作戦を練り始める。例によってミステイアの右腕とも呼べるダグラスも同席する事になる。

軍に関しては予めシオンが予想した通り、盗賊の連中がバミランの人々を人質として悪用する事は容易に予測がつく事から、街へ突入するのはあくまで最終手段という形を取っていた。冒険者を介した陽動作戦もこれまたリュッセルにあった冒険者リストが何者かによって盗まれていたが、その『何者か』はこの期に及んで誰もが言うまでもなかった。

ダグラス「奴らの情報に関してはこんな所だな。今の所は人数を最小にまで抑えた潜入で直接頭を叩くのが最良という判断になっている」

ルイ「迂闊に手下どもに手をつけたら上が何を次にしでかすか分かりませんものね。……『やられる前にやる』の典型ですわね」

アリア「力押しなら大得意だよ！ 私に任せて！」

シオン「……そういうのとは違うと思うな」

妙にやる気に満ちたアリアはさておき、今回の戦いは今までのダンジョン攻略などとはまったく種が異なる戦いである。ただ単に敵を倒せばそれでいい、という訳にもいかない、ある意味かなり気づかいが求められる繊細な作戦だった。

シオン「街に巣くつているであろう盗賊団は、相当の確率で外部からの者に敏感になっていると思われます。幸いミランダさんから下水道から街へ侵入する事ができる情報を得る事ができて、バミラン内部に入る事そのものは簡単でしょう。……でも問題は街に入った『後』です」

ミステイア「街のあちこちにも見張りはいらっしゃると思つた方がよろしいでしょうからね。それに関しての打開案は浮かんでいるのですか？」

シオン「——はい」

誤魔化しや見栄などではない、確かな心でシオンは強くミステイアを見つめた。

——そして次に放った言葉は、

シオン「簡単な事です。僕達が、『モンスター』になればいいんですよ——」

第三十八話 問われし覚悟

アリア「も、もんすたあ?」

流石のアリアも開いた口が塞がらなかつた。アリアはともかくとして、ルイやダグラスといった面々までもが発言の意図を理解できていない様子に、シオンが逆に『どうして?』という顔になってしまう。ダグラス「……まさか、街を徘徊しているモンスターになりすまして様子を探ろうと言うのかね?」

シオン「盗賊団とは言つても、モンスターもそれなりに率いて街を監視している筈です。ならばその盲点を突けばいずればばれるでしょうが、一定時間街を探るだけの隙は十分にあると思います」

ミステイア「し、しかし戦術としてはかなりの効果を発揮できそうですが、あの『モシヤス』はかなりの魔法経験を持った人でなければ扱えないと聞きます。お恥ずかしい話ですがこの城にはそんな呪文を扱える人はいないのです……」

シオン「心配はいりませんよ。その為の『彼女』なんですからね?」

ミステイア「まさか……」

満面の笑みでくるつとシオンが振り返った先には、ルイがいた。

当の本人もシオンが奇妙な発案をした時から、きつと頭のどこかで予想はしていたのだろう。逆に予想が的中しすぎて、少々受け入れがたくあつたかも知れない。

シオン「もちろんアレ、唱えられるよね、ルイ?」

ルイ「はあ……シオンも最近人使いが荒くなってきましたわね……。確かに『モシヤス』も修得していますけども……」

シオン「よし、なら決まりだね!」

——即答だった。彼女への配慮はないのかと、アリアはおろか、ミステイア等までもが思わず心の中で突っ込みたくなるまでに。

アリア「大丈夫大丈夫! 今までなんとかなって来たんだから、今回もきつとうまくいくよ!」

ルイ「そんな行き当たりばつたりな戦略のメインになる、私の立場

にもなつてくださいませー！」

悲痛な叫びを他所に、アリアとシオンは既にそれ前提での攻略の話
を淡々と進めるばかり。頼りにされているのか、道具扱いされている
のか分からない二人になんだか泣きそうになるルイなのであった。

シオン「ところで……、『黄金のティアアラ』を探し出すのが第一なのは
まず間違いないのですが、盗賊団そのものはどうするんです？
取り返す事に成功したら即座に撤退なのか、或いはこれをきっかけ
に奴らを一網打尽にするのか……です」

ダグラス「当然、バミランの解放を最終目的として動くつもりだ。
よって、今回の作戦は私らも少数ではあるが君達のバックについて参
加する。タイミングを掴み次第、バミランを盗賊団の手から解放させ
るべく我等も突入するつもりだ」

アリア「タイミングってどういうタイミング？」

ルイ「……普通に考えるならば、ボスを倒して統率が崩れた瞬間か、
街の人の安全が確保された時だと思えますわ。最も、仮にボスを倒し
たとしても、それでヤケになった手下達が余計な行動を起こさないよ
うに気を付ける必要がありますけれども……」

盗賊団の目論見を根絶やしにするのは大事だが、それ以上にミス
ティアが心掛けていたのは誰一人として犠牲を出さない事。これが
国の——いや彼女の全ての礎となつてる以上は、それを念頭に置いて
動かなければならないのだ。

その後も綿密な作戦を立てていく内に、粗方の方針が決まった。

まずはアリア達がミランダから教えて貰った下水道を通つて、三人
だけでバミラン内部に潜入する。

そして『モシヤス』でモンスターに扮したアリア達で、街の現在の
様子や『黄金のティアアラ』を初めとした盗品の行方を探りつつ、街の
人々の安全が確保され次第ダグラス率いる少数の軍も突入させて盗
賊団の手に堕ちた街を制圧する。

ダグラス達が制圧している一方でアリア達は彼らのアジトに踏み
込み、街の異変を察知される前にシオンの忍び足を活用して一気にボ
スの懐にまで潜り込み、直接大元を叩くという作戦となつた。

ダグラス「リュツセルの冒険者一覧からは一時的に君達の名は抹消してある。だから向こうの連中も仮に顔を見られたとしても、すぐには冒険者だとは分からないだろう」

アリア「ありがとうございます！ 街の人達を都合よく利用して、居座り続けるなんて許せない……！ 必ず『黄金のティアアラ』を取り戻して見せます！」

ミステイア「盗賊団を束ねるボスの名は『カンダタ』と言います。街の南にある森を抜ければすぐにアジトは見えてきます。いくら元は盗賊といえども、首領ともなればそれなりに相手の腕も立ちましよう。どうかお気をつけて……」

ダグラス「では今日はこれで解散にして、明朝の夜明けと共にリュツセルの東入口の現地で落ち合うとしよう。そこで作戦前の最終確認だ。くれぐれも遅刻はしないように」

そしてダグラスは振り返る事なく、堂々とした足取りで玉座の間から立ち去る。

次第に現実味を帯び始めた事を認識するアリア達の顔も、当初と比べてかなり緊張度が高まっていた。

シオン「よし、僕等も後れを取らないように準備だけはきっちり済ませないとね。そうと決まったら、早速道具の調達だ」

アリア「女王様、今まで待たせてしまつてすみませんでした。行つてきます……！」

先に部屋を出たダグラスに続き、シオン、アリア。そして最後にルイと、皆が出て行こうとした。

——『そんな時』だった。
ミステイア「——待ってください」

ぴしやりとした声で呼び止めるミステイアに、思わず出て行こうとした三人の足が止まる。

ミステイア「少しだけ、ルイと話させてください。……長い時間は決して取りませんので」

ルイ「ミステイア様のお願いに、私が断る理由などございませんわ。……ごめんなさい、二人とも先に行つててくださいますか？ お話が

済みましたら、そのまま宿屋で待っていますので」

アリア「うん、分かった。じゃあまた後でね」

その言葉のままに二人も出ていくと、やがて玉座の間に残ったのはルイとミステイアの二人だけになった。

正面から向き合ったミステイアは、真つすぐにルイの瞳を見続ける。

ミステイア「……きつと私なんかには想像もつかない、沢山の経験をしてきたんですね。ルイがまだ小さかったあの頃と比べて、とても『強い瞳』になりましたわ。昔あれほど外に出るのを嫌って、戦いはしたくないと言い張っていたアナタがまるで嘘のようですね」

ルイ「あ、あの頃は私もまだまだ子供だったのですわ……。それに自分がまだ強くなれたとも思っていないし、お母様の背中に追い付くにはもつと経験を積まなければいけないと、『あの二人』を見れば見る程思うんですの」

ミステイア「ステラ様に至っては、世界でも数少ない『天地雷鳴士』ですものね。ふふ、強いご両親や友人を持つと大変ですよ」

ルイ「全くですわ……。所詮私なんて他のヒトより若干知識を蓄えているだけの話ですのに……」

ミステイア「ヒト、ですか……」

和やかに見ていたミステイアは、ルイの言葉をきっかけに再び真剣な表情に戻ると更に一步ルイへと詰め寄り、重々しく口を開いた。

ミステイア「ルイ。貴方は怖くないのですか？」

ルイ「……え？」

ミステイア「貴方が数多くのモンスターと戦い、色々な挫折を繰り返してはそれを何度も乗り越えて来たのでしょう。——だけでも、今貴方が戦おうとしている相手は同じ『ヒト』なのです。本能のままに暴れ狂うモンスターとは全く違います。それぞれ持っている信念が違うのは当たり前、皆その背後には止むに止まれない事情があったて戦い、私達に抗っているのです。同じ血を持つ者同士で戦った果てに、多くの血が流れた時、貴方はその現実と真に正面から向き合う『覚悟』がありますか？」

片時も目を逸らさず、ミステイアはルイに問い掛けた。
それは半端な覚悟で戦いに臨む事は許さない、厳しくも強い心を
持った『女王』としての顔だった――。

第三十九話 バミラン潜入 『◆』

少しだけ、ルイは目線を落とした。

何か考えているようでも、その顔にほとんど変化は見られない。

そしてすぐに顔を上げて目線を再び合わせると、ルイははつきりと『女王』に向けて己が答えを出した。

ルイ「……覚悟があるかないのかと言われると、今の私では正直答えを出す事はできません。……でも、不思議とそこに『怖さ』はないのです」

ミステイア「——どうしてですか？」

ルイ「……とても簡単な話ですわ。私の前には『アリア』がいてくれるから、です」

面と向かって答えたルイの顔は、とても晴々としていた。

本当に心からアリアを信頼していなければ表現できない、その顔や声。それこそが、迷いの無い『ルイの覚悟』だった。

ミステイア「信頼しきっているのですね。あの方を」

ルイ「私をここまで変えてくれたのは、アリアですから……。あの人がなくて、今の私はここにいません。だからこそ、アリアが前に居続けてくれる限り、私は安心してついていく事ができるのです」

ミステイア「……成る程。要は、ルイは私に無いものを既に沢山手に入れていたという事ですね。少々悔しくもありますが」

ルイ「そ、それはどうかは分かりませんが……」

悪戯っぽい笑みでチクリと皮肉を言ってくるミステイアに、さしものルイもただ苦笑いで返すしかなかったが、どちらにも悪意などはなかった。ただ純粹に友として、先を行かれた気分はどこか寂しさも感じてしまったのだろう。

ミステイア「分かりました——アナタの『覚悟』。女王として、そしてルイの『友』としてしかと受け止めました」

威厳が込められたミステイアの答えには裏も表もなかった。そして、ルイに歩み寄るとそのまま強く抱きしめたのだった。

ミステイア「どうか無事で帰って来るのですよ……」

ルイ「……当然ですわ。私はこんな所で果てる訳にはいきませんもの……！」

最期に抱擁を交わしたルイは、玉座の間を後にする。

そして去りゆく友の姿を、ミスティアはただじっと見つめるのだった。

東から太陽が昇り始めてまだ間もないリュツセルの早朝。

いよいよ『黄金のティアラ』を奪還すべく動き出したアリア達は、リュツセル東の正門前に集まっていた。

早く出発したくて仕方ないのか、アリアはそわそわしながら準備体操を中途半端にしたりやめたりを繰り返して気分を紛らわせていた。

自分達だけで動く冒険や作戦ならまだしも、他の者達と、しかも軍の幹部を交えて行うのはこれが初めて。シオンやルイとて心落ち着かないのは仕方のない事でもある。

ルイ「……来たようですわ」

その一言にアリアもルイの視線の先に目をやると、市街地の奥から数にして若干十数名程の隊を引き連れたダグラスの姿があつた。何れも威風堂々とした歩きで、物怖じすら感じさせない風貌にはアリアも圧倒される。

ダグラス「君達が先に来ていたか。遅刻しないかと少々ハラハラしていたよ。……特に『君』はね」

アリア『アリア』です！ ていうか、馬鹿にしないで下さい！ 私だって大事な戦いがあるなら、今日ぐらいしやきつとします！」

シオン「その言い方だと普段はだらしがないみたいですけど、他の目は……。ところで、街中を堂々と歩いてきたみたいですけど、他の目は気にしなくてもいいのですか？ 万が一にでも誰かが監視していたら……」

ダグラス「その心配は必要ない。この隊は今『レムオル』が掛けられている状態だからな。効果はほんの二、三分程度だが、解除の呪文を持つ余程の曲者でない限り、君達以外に認識される事はない」

ルイ「その周到さは流石と言うべきですわね。とりあえず滑り出し

は順調にいけそうですが……」

ダグラス「さて……どうかね。全ては君達の働きにかかっているからな。さあ、無駄口もここまでにして早速出発しよう。私等は少し離れた後方から着いて行く。——それと、『コレ』を受け取りたまえ」
芯と覇気が宿った声でアリアにまで歩み寄ると、手渡したのは鈍く黒光りした小柄な『石』だった。

ダグラス「それは『通魔石』と言って、声が届かない場所でもその石を介して会話を可能にする魔法石の一種だ。有事の際にはその石に軽く魔力を込める感覚で、そのまま頭から直接語り掛けるのだ」

アリア「……分かりました。使わせていただきます」

ダグラス「では行こうか。盗賊団鎮圧兼、バミラン奪還作戦——『開始』だ」

遂にバミランの街へ向けてアリア達は歩き出した。

ダンジョン攻略とはまた違った緊張感を背に、少し顔を強張らせながらも、確実に一歩一歩前へと進める。

シオン「ここから先、極力無用な戦闘は避けたいね。『聖水』を振りまいておこう」

袋から取り出したシオンは、小瓶に入った透明な液体の水を自分や二人の身体に振りかけて、魔を払う空間を作り出す。

その後東に進んでから、早二時間程経った頃だった。

川のせせらぎの音が三人の右手から遠く聞こえて来ると、誰もが頭によぎったのは『ミランダの言葉』だった。

彼女曰く「村のそばに流れている小さな川は、村の下水道と繋がっている」との事。となれば、村に大分近づいて来ているこの川の音は、彼女が言っていた川にほぼ間違いはなかった。

アリアは袋に入れていた『通魔石』を取り出すとそのまま軽く握りしめて、頭の中から直接語り掛けるように念じる。

アリア『——ダグラスさん、聞こえますか?』

ダグラス『——ああ。特に問題はない、交信を続けてくれ』

アリア『例の川が見えました。このまま川沿いに進めば例の下水道が見えると思いますので、作戦通り私達が先行しますね』

ダグラス『——了解した。後は君達の判断で私に指示を送るんだ。くれぐれも早まった真似だけはしないようにな』

アリア『——はい!』

振り返ったアリアは二人に目だけで合図すると、互いに頷きあい侵入を始める。

アリア「街の門も見えて来たね……。あの入口に立っている『二体のモンスター』がもしかして門番なの?」

シオン「あれは『トロール』かな。割と上位種に当たるモンスターが門番を務めてるなんてね。『盗賊だから戦闘が苦手』なんて先入観は捨てた方がよさそうだ……」

どれだけ慎重に進んだとしても、歩く音や茂みの音を完全にかき消す事はできない。気配を悟られないように、川の音で誤魔化しつつも慎重にバミランへと近づいていく。

そして川を上りながら街がほぼ真横に差し掛かった頃、目的のルートラしき場所を見つける事に成功した。

アリア「濁った水が街の方向から流れて来てるね。……ここが例の入口に繋がってるのかな?」

シオン「淀んだ水の色からして、間違いなく下水だね」

川から横に曲がり、今度は街を正面に見据えながら進んでいく。

やがて三人の目に飛び込んで来たのは、大人一人がやと通り抜けられそうな程の大きさしかない『水が流れている土管』だった。

ルイ「こ、ここを通るんですの? うう……、また服が濡れてしまいますわ……」

シオン「ここまで来たからには、何かの縁だと思って割り切るしかないね……。こんな汚れた場所を通ってたら、弱ったミランダさんが病気になるのも無理ないか……」

光が一切差し込まない闇のトンネルを、ルイの『レミーラ』でなんとか照らしつつ通り抜ける三人。途中、ドブネズミが数匹頬を掠めるように横切り、元々暗い場所を得意としないルイはそれだけで小さな悲鳴を上げてしまう。途中にも所々腕の大きさ程の配管があり、この場所は街の人々が使う水が一つに集まったメインの排水路である事

も次第に分かって来た。

アリア「見て、向こうが明るいよ！　終わりなんじゃないかな！」
その言葉通りに、今度は縦一直線に伸びた空洞らしき場所にたどり着いた。そして地面と壁を一通り見渡したシオンは、ある一つの解答を導き出す。

シオン「どうやらこの場所は元は『井戸』だったみたいだね。足元を見ても水は全く湧いてないから、大分前に井戸としての機能を果たせなくなつて、やむなく排水路と連結させたって感じかな……」

ルイ「という事は、この上がもうバミランの街ですのね……」

シオン「街の外をモンスターが見張つてたように、きっと中もモンスターが徘徊してると思う。僕が最初に周りの様子を見るから、その後二人も登つて来てほしい」

アリア「分かった。……今度は慎重にね、シオン！」

シオン「はいはいっと。二度も同じミスは繰り返しませんよ——つと！」

上から垂れてくるロープに捕まると、器用かつ軽快に登つて行き、あつという間に井戸のてっぺんまで登り切ると、もぐらのように頭だけをひよっこりと出して慎重に周りを見渡しながら、安全だと判断したシオンは街の地面に足をつける。

幸運にも街の片隅に備え付けられていたこの古井戸は街にある建物の陰に存在していて、今回のような潜入から始まる作戦には打つてつけのポイントだった。

しかしあくまで前回の経験も踏まえて油断をする事はせず、周囲に最大限の注意を配りながらも二人にも上つて来るように合図をする。最初にルイ、最後にアリアも上り切ると、遂に三人が街の内部に足を踏み入れた。

アリア『——街の内部に入りました。このまま作戦通りに、まずは周囲の様子を確認しながら『黄金のティアラ』の場所も探りますね』
ダグラス『——分かった。私達は入口に立つあのトロールがぎりぎり見える位置で待機している。また何か動きがあったら教えてくれ』

交信を終えたアリアはダグラスも待機している事を二人に伝える

と、いよいよ本格的に動き出す。